
契約の代価 2 インモラルティコントロール -

織田撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約の代価2 インモラルティコントロール

【Nコード】

N8837W

【作者名】

織田撫子

【あらすじ】

契約の代価 続編

”オペレーション・ヴァルプルギス” 終結後、インドへ渡ったその後のお話。

辛い経験を乗り越えようとするエルメス、そしてそれを支えるシュヴァリエたちの奮闘と日常を描く、カイの綴る報告書。

FILE 1 Comte 「伯爵」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カル

ロ・ジエズアルド改め

カイ・ペンドラゴン

報告

戦後におけるシュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

2

カ。
アンタは今どこで何やってんですか。さっさと帰ってきやがれば

ああ、とりあえず、伯爵の新しい名前アーサーってことになったから。ミナ・・・ていうか、ミナも今はエルメスって名乗ってるけど、まあ、兎に角アイツが勝手に決めた。

その件に関してはおいおい言及していくとして、とりあえずアーサーが消えてからの事をこれから書いて行こうと思う。

アーサーが帰って来た時に、それまでの事を口頭で説明すんのが面倒くせえからな。

つつても、もしかしたらその時になって「やっぱ見せるのやめよ」とか思うかもしれないけど、まあその時にならなきゃわかんねーし、書いときゃよかったって後悔するのも嫌だからとりあえず書くことにする。

アーサーが消滅した後、エルメスは戦ったよ、ジュリオ様と。裏切りは許さないって、アーサーとみんなの為に。

アイツ凄かったよ。ちゃんとアーサーの眷属としての矜持を保って、アーサーの能力を踏襲して、エルメスなりのラグナロクを発動させた。

エルメスが言うには、ラグナロクというか、アーサーの能力の根源はサイコネシスと元素を操る能力だって言って、めちゃくちゃ化学戦だった。正直俺にはわけわからん現象だったけど、とにかく壮絶だった。まさか中性子爆弾作るとは思わなかったからな。少なくとも今のエルメスには全く勝てる気がしない。

だからついた二つ名。何個があったけど、なんだっけ。

“蒼い錬金術師” “不死王の愛娘” “アンフィニサージュ” “無限の賢者”

俺的には“不死王の愛娘”って響きがいい。ぴったりじゃん。“蒼い錬金術師”ってのもあいつにはぴったりだと思っ。まさしく錬金術だったしな。“アンフィニサージュ”これはアイツにしては尊大すぎだ。どんなネーミングセンスしてんだ。フランス語なのを見

ると名付けの犯人はアレクだな。

で、まあ話を戻すけど、戦ってジュリオ様を圧倒して瀕死にまで追い込んでただけど、とどめを刺そうとしたエルメスを止めて、俺がジュリオ様を殺した。アーサーにしてみたら喜ばしい事だろ。感謝しろ。

なんでかっていうと、教皇からの命令があつたつーのが1つ。それと、エルメスにジュリオ様を殺してほしくなかったから。それに、どうしてもエルメスを殺したくなかつたし、死んでほしくなかった。まあ、俺の都合が8割だけだ。

この2人が殺し合いをしても、結局呪いの連鎖って消えねえんじやねえかと思つた。エルメスにジュリオ様を殺されたら、俺がエルメスを殺さなきゃいけないなるだろ。それに、あの時仮に形勢が逆でジュリオ様がエルメスを殺しても、俺はジュリオ様を恨むと思うし。だから俺が殺した。

それでかえってエルメスは心配してたけど、それはまあ、いい。

で、戦いは終わったけど、エルメスはアーサーもみんなも、誰も守れなかつたつてすげえ後悔してた。強くなつてみんなを守るつてクリシユナさんと約束したのにつて。もう生きていたくない、死にたい、殺してくれとか言い出した。だから、引き留めた。

そりゃ引き留めるよな。アイツに死んでほしくなくてジュリオ様を殺したのに、アイツが死んだら意味ねえし。引き留めるために、俺と死神の奴らとみんなと一緒に生きると決めた。つーか実は決めた。で、今一緒にいるわけ。

とりあえず、ミラーカさんの砂を集めて、棺に入れて城の裏庭に埋葬した。本当はオーストリアに連れて行ってあげたいつてエルメ

スは言つてたけど、今はフィレンツェで我慢してもらつて、落ち着いたら国に返してあげようつてことになった。

エルメスはミラーカさんの墓の前でずっと泣きながら謝つてた。守つてくれてありがとう、守れなくてごめんなさいつて。ミラーカさんだけじゃなくて、エルメスはクリシュナさんも北都も失つて、ボニーさんとクライドさんは行方不明で、さらにはアーサーまでいなくなつて、本当に一人ぼっちになってしまった。一夜にして大切にしていたものを全て、失つた。アイツの絶望は俺の想像もつかない程なんだと思う。

アイツ前に言つてたんだ。俺が「お前が心まで化け物になつてるようには見えない」つて言つたら、なんだかしょんぼりしてさ。

「今のままで、また大事な人を失うようなことがあつたら、その時は耐えられるのかな」

そう言つてた。一時は耐える気力すらなかつたけど、でも今は耐えてる。心も化け物にせず。すげえよな、アイツ。

状況は違つし、自分で決めて実行したことだけど、俺だつてジュリオ様を手にかけてた罪悪感で死にたいと思つた。でも、それ以上の絶望を味わつてなお、アイツは耐えてる。

そんなエルメスの姿を見て、俺が死にたいなんて言えるわけねえし、むしろダメだよな、そんなの。だから、俺がアイツの傍にいて一緒に生きてつてやりたいと思つた。なんか、俺がすっかりしないと、とか思つた。あれ、なんか俺アイツの保護者みたいじゃね？

まあ、兎に角そう言う事だ。

で、レミは地下室に隠れさせてただけど、出してやったら行くって聞かねえから一緒に連れて、偽造パスポート作って、アーサーに言われていた通り、インドに逃げた。アーサーの棺も一緒に。で、今インドでシャンティの屋敷に世話になってる。

その逃避行で何が一番面倒くさかったってパスポートだよ、パスポート。偽造するくらいなら大した作業じゃねえんだけど、まあ俺らは慣れてるしな。

どうせ作るなら名前変えようぜってことになって、エルメスが提案した。

「みんなもう死神じゃないんだから、レミと一緒にシュヴァリエになればいいじゃん」

なんかそんなこと言い出して。で、騎士と言えば円卓の騎士だろってことになって、みんな円卓の騎士から名前を取ったわけだ。偶然にもエルメス以外のメンバーはレミ入れて丁度12人だったしな。で、やっぱりアンタは王だからアーサーになったわけ。エルメスには最初王妃の名前がいいんじゃないかねーかつつたら、

「王妃は王を裏切るからダメ！」

とか言って、伝説の錬金術師の名前をシュヴァリエに倣ってフラ

ンス語読みにパクってエルメスになった。だったら、王の補佐役やつてた魔術師のマーリンでいいんじゃないかねーのとも思ってたけど、なんか知らねえけど却下された。ヘルメスをリスペクトしてるとか言つて。どうでもいいけど。

ちなみにレミはランスロットになった。まあ、ランスロットは王妃さえいなけりゃ裏切らなかつただろうからな。

ただ、納得いかないのがなんで俺がカイなのかって事なんだけど。それもエルメスが勝手に決めやがった。

「永遠の毒舌家」とか言われてるカイ卿はカルロにぴったりじゃん！」

とかなんとか言いやがって、マジあのバカ女シバキ回したい。で、他の奴らはこんな感じ。

クリステイアーノ ガウエイン

レオナルド キルシュ

クラウディオ ペレアス

ヨハン ベドウィル

エドワード パーシヴァル

アレクサンドル ライオネル

オリバー ユーウェン

ルカ デイナダン

ジョヴァンニ ガラード

ミゲル トリスタン

ついでに姓は

「私は娘でしょ？ みんなは言ってみれば孫みたいなものじゃない。

家族みたいなもんだし、同じでいいよね」

結局考えるのも面倒だったから、もうそれでいいやってなった。

とりあえずそれで全員名前が決まって、いざ作業に取り掛かろうと思ったら一大事だよ。

俺達はさっきも言ったけど慣れてるから写真とか用意してあるわけ。問題はエルメスだよ。今更写真撮れねーしどーすんのかな

結局あいつが1枚だけ写真持ってて、それで何とかしたけど。でもその写真、家族写真だったんだぞ。しかも高校の卒業式。

まあ、吸血鬼だし別に老けたりしねーけど、パスポートの写真にそれはちよつとどうかと思うよ、俺は。正直加工がめちゃくちゃ大変だった。

つくづくエルメスには手を焼かされる。

まあ、そんな感じで紆余曲折あって、パスポートの偽造は完了した。

で、城に火を放ってすべてを燃やし尽くした。もうフィレンツェっていうかイタリアにもヴァチカンにも戻ってくることはないと思うし、あの城での思い出は、良い事以上に悪い事の方が強く残ってしまったから。過去には執着しない、もう、後戻りしないって言う覚悟も含めて。

そこで、アーサーが前に買ったって言ってた飛行機で、アーサーの棺も一緒にインドに行った。

で、すぐにまた一大事だよ。屋敷に着いてシャンティの顔見た瞬間エルメス号泣。で、シャンティはシャンティでアーサーたちがいないって知って号泣。俺ら呆然。ていうか、早く屋敷に入れるみないな。

二人とも全然泣き止む気配がなくて、俺らも正直困ったつつーか、ぶっちゃけ俺はキレそうでした。

そしたらスニルが気イきかせてくれて、とりあえず屋敷に入れたんだけど、またこいつらが本当にアーサーを崇拜してたんだな。

アンタの部屋そのまま残してるんだよ、誰も手を付けずに、アーサーだけの部屋だからとか言っつて。それでまたエルメス号泣だよ。泣かせてくれるじゃねーの。いい加減俺はウンザリだけどな。

その後もウンザリの連続だよ。アーサーの部屋にとりあえずアーサーの棺を置いて、エルメスもアーサーの部屋がiiiiっつて言っつて、まあ、そこまではいい。

アーサーの傍でアーサーの帰りを待ちたいって気持ち俺にもわかるしな。インドに行く前だっつてアイツ自分の棺に寝ないで、泣きながらアーサーの棺の前で過ごしてたんだ。

アーサーの棺に伏して、アーサーの紅い結晶を握りしめながらポロポロ泣零して

「会いたいよ、早く帰ってきて」

何度も何度もそう言いながら。吸血鬼じゃなかったら病気になるんじゃないかって思う。

本当にエルメスにとってはアーサーが全てなんだよ。もし、あの時アーサーが

「必ず帰ってくるから待っていてくれ」

この一言を言わなければアイツは死んでたと思う。
その一言だけでエルメスは生きてるんだよ。パンドラの箱に残った小せえ希望に縋り付いてるみたいに。

エルメスは言ってた。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬんだって。そう言う契約をしたんだって。アーサーは約束は絶対破らないから、自分が破っちゃダメなんだって。

それを言えるようになるまで、アイツもかなり悩んでただけ。最初はさ、仲間も全員居なくなっただって、こんな思いを抱えながら、帰ってくるかもわからないマスターを一人で待ち続ける事なんかできないって、そう言っただけのうとしたくらいだったしな。

それでも、アイツはアーサーの為に待つことを決めたんだよ。もし、アーサーが生きてて、帰って来た時に自分が居なかったらアーサーが辛い思いをするからって。もう、アーサーを一人ぼっちにはさせないんだって。

俺だって、いつまでもあんな風に泣いてるエルメスを見ていたい

わけじゃないし、アーサーが帰ってきてくれたらどんなにいいかって思う。

でもな、それを踏まえてもあり得ねーんだよ。あのバカ女の我儘炸裂だよ。

「一人じゃ寂しいから、みんな一緒の部屋でいいじゃん」

もう、ちよつと俺は本当に眩暈がしたよ。あんな面倒くせえ女とそこまで、24時間いるなんて耐えられない。俺は基本自由人だから無理。できる事なら23時間一人でいたい。俺には無理。つーかどうやったら12台もベッドが入るんだよ。野戦病院じゃあるまいし。

勿論、全員大反対だよ。シャンティ達ですら反対した位だ。当然だよな。そしたらまさかのご指名だよ。

「ランスとカイは一緒じゃなきゃ絶対イヤ！」

もう本当アイツ殴っていいか？ このメンバーの中で俺が一番嫌がってるの。一目瞭然なの、それは。それを無視しての我儘放題だよ。これは正直アーサーの監督責任だと思う。甘やかしすぎだ。

そっからはまあ想像つくと思うけど、いつもどおりの大喧嘩だ。

「いいじゃん！　なんでダメなの？」

「お前がウザいから」

「ウザくないよ！」

「いや蜘蛛の巣よりウザい。ていうか、逆になんでだよ！」

「だって、一人は寂しいし怖いもん」

「じゃあランスだけでいいじゃねーか！」

「ダメだよ！　ランスは癒し系でカイは励まし系なんだから！」

「意味わかんねえよ！　面倒くせーんだよてめーは！　ガキじゃね

ーんだから寝れるだろ！」

「無理！　もう！　なんで我儘言うの！？」

「おま・・・ちよつと待て、俺が我儘なのか？」

「そうだよ！　私に忠誠を誓うって言ったのカイじゃん！」

「いや、言っただけどよ、そう言う事じゃなくてだな。物事には限度
つてもんがあんだろつが」

「忠誠を誓うってことは絶対服従って事だよ？」

「それは違う！　それはお前間違っただ認識だ！　その暴拳が許され
るのはアーサーだけだ！」

「暴拳なの！？　なんで私はダメなの？」

「お前がダメじゃなくてアーサーが特殊なんだよ！　わかつたら諦
める！」

このやり取りでわかってもらえるとと思うが、アーサー、アンタの
せいだ。妙な親の背中を見て育つからこういうアホな子供に成長す
るわけだ。

以前ジュリオ様に部下の教育がどうのこうの言ってたけど、エル
メスを見る限り、アーサーの教育方針にも十分問題があったことは
明白だ。

で、何がム力つくってこれでも諦めなかったアイツの無駄な執念深さ。ずっとガキみてえにヤダ！ つつてゴネて鬱陶しいことこの上ない。しかも涙目で、段々泣きそうな顔になってくるし。え、なにこれ。俺が虐めてるみてーじゃん、みたいな。

もつさ、今がこんな状況じゃなかったらブツ叩いてるところなんだけど、状況が状況なわけじゃん。俺ら的にはこれ以上エルメスを余計なことで泣かせたくないわけじゃん。もはや今の俺はエルメスに対しては聖人の域に達してるわけじゃん。

だからアイツに泣かれるとスゲエ困るわけよ。アイツ泣かせたら犯罪者扱いなわけよ。うわー、カイ、エルメス泣かせた、みたいな視線が俺にとつては毒劇物なわけよ。今の俺にとつてはエルメスの「涙ながらの訴え」は最終兵器に等しいわけよ。頼むから泣くな！ 何でも言う事聞くから！ くらいな勢いなわけよ、実に不本意ながら！

そついうわけで、この件に関しては、こいつは折れることはないんだらうなって渋々俺の方が諦めた。

「あー！ もういいよ！ わかったよ！ そこまで言うなら一緒に部屋にしてやる！ でも、俺の眠りを妨げたり俺の生活の邪魔したら有無を言わさずお置きだからな！」
「うん！ わかった！ ありがとう！」

俺が諦めて話がまとまった瞬間、アイツお礼言つて笑ったんだけど、久しぶりにアイツの笑顔を見て、なんかすげえホツとした。

アイツあれからあんまり笑わなくなつて、まあ当然なんだけどさ。笑う事があつても愛想笑いつつーか、営業スマイル。いかにも、な笑顔。

「みんな心配しないで、私は大丈夫だから」

つてかんじの。なんか自分に言い聞かせて、俺らに氣イ遣つてるみたいな取つてつけたような笑顔だったんだけど、その時エルメスは前みたいにちゃんと感情のある顔で笑つた。

だから、まあこの決定が本意には違いなかつたけど、それに釣り合う代価かなとは思つた。

とりあえず話がまとまつたから、俺はアーサーの部屋の寢室のベッドで寝ることにした。俺達棺持ってねえし、あつたとしても生まれた土地の土なんて無いどころか、それがどこかも覚えてねえしな。寢室が無駄に広がつたおかげで、ランスのベッドも運び込めだし、エルメスとアーサーの棺も運んだ。

で、こつからちよつと面白いんだけど、またエルメスの我儘が炸裂。

「ランス、一緒に寝よつか！」

「え？ エルメス様は棺でお休みになつた方がよろしいんじゃないですか？」

「いーの！ 私と一緒に寝るのイヤ？」

「い、イヤじゃないですけど、でも……」

「じゃあいいでしょ？」

「ダメですー！」

「どうして？ 私の事キライ？」

「好きです！ だからダメなんです！」

「意味わかんないよ！ ホラもう我儘言わないの！」

結局、エルメスは勝手にランスのベッドに潜り込んで、暴れるランスを押さえつけて一緒に寝てる。

多分ランス的には

「エルメス様と一緒に寝るなんてドキドキして眠れません！」

て事なんだと思う。アイツ残酷だよな。ランスが今まだ10歳だからいいものの、15歳とかだったら気の毒すぎる。

ていうか正直すげえウケるんだけど。アイツのああいっつ男の気持ちを理解しないところは、見る分には最高に面白い。

さすがはバカの象徴だ。やっぱりアイツのバカなところは長所だ
と思う。

で、それが数時間前までの話。もうそろそろ朝になるから、イン
ド逃亡生活1日目が終わるところ。

とりあえず、今日までの流れをざっと書いてみたけど、もっと詳しく知りたいならエルメスに聞け。俺は話すの面倒くさいし、俺の主観でしか語れないからな。

今日の所はこれで終わり。これから毎日書くかはわかんねえけど、
なんかあったら書くことと思う。

でも、できればこの報告書の数が増えないことを祈る。

さっさと帰ってこい。じゃねーと、その内愛想尽かされて本当にランスに横取りされるかしんねえぞ。

以上

FILE 1 Comte 「伯爵」(後書き)

登場人物紹介

カイ「俺」

本編の主人公。エルメスのシュヴァリエ筆頭で親友。
エルメスを心底バカだと思っっているが、心底大事にも思ってる。
博学多才、頭脳明晰、眉目秀麗、品行方正、完璧と優秀の体現者、
それが俺！と思いつ込む、人格の破綻した自由人。
好きな言葉 独立自尊

エルメス

今のところペンドラゴン一族のトップ。先の戦争で家族を失って傷
心中。

アーサーを見て育ったせい、傷心中なせい、我儘が加速中。

アーサーの帰りを待たため、カイ達と行動を共にする。

好きな言葉 日進月歩

アーサー

エルメスの主人。ペンドラゴン一族本来のトップ。現在消滅中。

必ず帰ってくるかと約束したものの、いつ帰ってくるかはわからない。

本当に帰ってくるのかもわからない。どこにいるのかもわからない。

アーサーの愛がどこに行くのかもわからない。

何を考えているのかもよくわからない。

作者ももてあます謎の男。

好きな言葉 難攻不落

FILE 2 Charisma 「カリスマ」

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日も俺は寝起き早々ウンザリさせられました。むしろ泣かされました。助ける。

いや、冗談抜きで泣いた。マジでアーサー、アンタどんな駄してんだ。本当にどうという教育をしたんだ！俺は腹が立って仕方がない！

何がそんなに悲しいって、目が覚めたらエルメスが「おはよう」ニッコリだよ。普通だって？普通じゃねーよ。俺寝起きね。エルメス眼の前ね。おかしいだろ。目開けて速攻ギョツとしたぞ。昨夜ランスと仲良くネンネしてたやつが目の前にいるっておかしいだろ。どういうことだ。

「いや、ていうかお前なんでいの」

「だってランス朝になったらいなかったから・・・」

ランスは人間だし普通に朝起きてベッドから出たようで、途中でランスがいないと気付いたエルメスは寂しくなって俺のベッドに潜り込んできたらしい。運悪く昼間はシャンティ達は仕事でほとんど

出払ってるらしいし。さっそく俺の生活は崩壊だよ。マジ勘弁してほしい。

まさか寝起き早々涙で枕を濡らす羽目になるとは思わなかった。マジ俺可哀想。昨日の俺を拷問の末殺してやりたい。

「ああもう！ だから嫌だって言ったんだよ！ 超うぜえ！ 邪魔すんなって言っただろーが！」

「邪魔なんてしてないよ！ じつとしてたよ！」

「そういうことじゃねーよ！ 勝手に人のベッドに入ってくるな！」

「だってランスがいないんだもん！ 目が覚めた時誰もいないと怖いんだもん！」

エルメスのその言葉を聞いてようやく理解できた。あいつは自分が一人ぼっちになったことが怖くて、それを体感したくなかったんだとわかった。

まあ、それを差し引いてもあり得ないけどな。

「いや、わかる。わかるけどな、お前はわかってねえみたいだけど、俺一応男ね。わかるか？」

「バカにしすぎだよ！ そのくらいわかってるよ！」

「全然わかってねーじゃねーか！ 仮にこのタイミングでアーサーが帰ってきたら俺が殺されるんだけど！ その辺わかってるか！？」

「え？ なんで？」

「・・・いや、もういい」

もうさ、本当さ、昨夜ランスで笑って申し訳なく思ったよ。マジでアーサー怒らないでよ、俺は全然悪くないから！ 全く持って悪

くないから、むしろ被害者だから！

ていうかその後も、エルメスは俺がいるのに普通に着替えるわけよ。そりゃ前にアイツとストリップ剣劇で立ち回りにしたけど、だからって気を抜きすぎだと思う。多分アイツの中で俺の性別は存在してないんだな。

こんなに他人に気を遣ったのは初めてだ。多分俺ハゲるぞ。もしくは精神分裂症とかになる。

頼むから俺が発狂する前に帰ってきてくれ。今すぐ帰ってこい、頼むから。土下座するから。マジアイツうぜえ。前からウザかったけど一層ウザさに拍車がかかっている。俺の手に負えるようなレベルじゃねえ、なんとかしろ。誰か変わってほしい。

寝起き早々地獄に突き落とされた可哀想な俺だったわけだけど、唯一の救い。

「カイとランスがいてくれたから怖くなかったよ！　ありがとう！」

まあ、アイツの素直な性格は財産だと思う。正直金輪際こういう事は御免だけど、エルメスがちょっとでも元気になるなら同室からは許してやってもいいかなーとか思ってみたりした。

エルメスは強い奴だけど、だからってなにもかも一人で我慢させるのは可哀想だ。一生エルメスの傍にいて誓った以上は、アイツが辛さとか恐怖とかを克服する手伝いをするのも俺の仕事だ。あんなんでも一応俺たちの「ご主人様」なわけだし、おもりぐらいはしてやんねえと。

「あ！　良い事思いついた！　今日から3人川の字で寝ればいいん

だ！」

前言撤回。やっぱ無理。俺程度の才覚じゃ面倒見きれませんよご主人様。アイツの笑顔に騙された。アイツがバカだつてことを一瞬忘れてた俺が憎い。

とりあえず、その後エルメスをシカトしてシャンティ達に俺とエルメスとガロード達とで事の顛末を説明した。

アーサーの事やジュリオ様の事、スパイ活動の事なんかはそれぞれ俺たちも知らない事実もあつたわけだし、説明は分担しながらだつただけだ。

正直俺も“オペレーション・ヴァルプルギス”の事は直前まで知らされてなかったから、ガロードから話を聞いてやっぱりちよつと辛かったな。

最初ジュリオ様からその作戦を聞いたときは、裏切られたつて言う思いと、裏切らなければならぬって言う罪悪と、ジュリオ様への忠誠と、エルメスへの友情とで八方塞がりになって結局止めることが出来なかつたし。

なんといつてもこのインドの屋敷はスレシユの屋敷だし、俺の両親を殺して俺を誘拐した犯人の家だと思うとなんとも複雑だ。まあ、今の住人は無関係だつてわかつてるけど。

フィレンツェにいた時は、俺は本当にジュリオ様がエルメスを愛していて、呪いから解放されたがってるんだつて信じて疑わなかつ

た。だから、あの戦争は正に寝耳に水だったんだけど、ジュリオ様の気持ちもわからなくはない。

確かにあの時ジュリオ様の言っていた通り、ジュリオ様の復讐は正当性があると思う。どう考えたって呪いの種を蒔いたのはアーサーであって、襲撃されてもしょうがないと思う。だけど、ジュリオ様のやり方は、ダメだ。

アーサーを絶望の底で殺す為に、羊のふりをしてエルメスやみんなを、俺達をも騙して、もしジュリオ様の計画通りになったとしても、その後俺はそれまでのようにジュリオ様を信頼して着いて行けたかと考えると、答えはNOだ。

俺は心底ジュリオ様を信頼していたし、だからこそエルメスまで騙していたことが悲しかった。ジュリオ様はわかっていたはずだ。俺がどれほどエルメスを大事な友達だと思っていたか。それをわかっている、その事を利用されたことがとても悲しかった。その事を無下にされたことが辛かった。俺はあの人を父親のように思っていたから、余計に。

あの方は、アーサーに裏切られて相当辛い思いをして来たんだ。だから、化け物になった。なってしまった。

あの人を化け物にしたのはアンタだ。アンタが招いた事態だ。だけど、呪いの種を蒔いたのはアンタだけど、それを育てて呪いの花を咲かせたのはジュリオ様だ。結局ジュリオ様も弱い化け物だったって事だな。

俺やガードからジュリオ様の話を聞いてシャンティ達は当然怒ってたよ。昔の事なのにつて、エルメスやミラーカさん達は関係ないのにつて。クリシユナさんを殺した黒幕だったなんて許せないつて。まあ、その感想は当然だと思う。けど、それを聞いたエルメス

は驚くべきことを言った。

「それはそうなんだけど、でもジュリオさんは可哀想な人なんだよ。本当のジュリオさんとはとてもいい人なの。心の底から“ミナ”を愛してただけなんだよ。悪いのはアーサーさんと私なの。ジュリオさんに呪いの種を植え付けて、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなくて、より一層ジュリオさんを苦しめた、私にも罪があるの」

それを聞いてさすがに全員絶句した。アイツはあれほどの目に遭っていながらジュリオ様を許そうとしてるんだ。そんな心情を持つことが信じられなかった。アイツが自分の愛する夫や家族を失ったのはジュリオ様のせいなのに。アイツもジュリオ様と同じように裏切られて、愛する人を殺されてしまったのに。

エルメスはアーサーやジュリオ様とは違う。いや、もしかしたら一緒ではいけないと思ったのかもしれない。きっとジュリオ様を許しても、その理不尽を許すことはないだろうとは思う。でも、それでもアイツは罪だけを憎んで人を憎んではいけないと思ったんだろう。

ジュリオ様を憎み続けても、それに囚われるだけってのは目に見えるから。8年前に復讐をしないと決めたということもあるんだろう。アーサーやジュリオ様って言う前例があればなおのこと。それで苦しむ姿を見てきたのなら尚更。

エルメスはきつと苦しむのは自分で最後にしたいと思ったんだろう。もしエルメスがジュリオ様を憎んで、ずっとずっと憎み続けたら、呪いの種を蒔いたアーサーも、今でもジュリオ様を嫌いになれ

ない俺たちも、ジュリオ様を憎むエルメスを見て苦しむとわかってるから。

アイツは今生きている奴らの為に、前に進む努力をしているんだ。死んだ人達に後ろ髪引かれながら、必死に。自分一人で全部を背負って。アーサーが種を蒔いてジュリオ様が育てた呪いの花を摘んだのは俺だったけど、摘んだだけならまた蕾をつけたかもしれないそれを、呪いの樹ごと切り倒して枯らせようとしている。

エルメスは本当に強いよなあ。エルメスの力になってやりてえけど、呪いの樹がデカすぎて、俺程度の才覚じゃ力になれないんじゃないかって自信失くす位だったのに。

でも、やっぱりアーサーが帰ってくるまでは、なんとかエルメスが立っていられるくらいには力になってやりたいと思う。できるかはわかんねえけど。多分そう思ったのはシャンティ達も同じだな。

「ミナ様、アンタがそう言うならあたし達はもう何も言わねえよ。でも、無理すんなよ、一人で我慢すんな。ミナ様がインドを出る時に言っただろ。復讐はしない方がいい、後悔するよって。よかったじゃねえかよ、カイがいて。カイがいたから、復讐せずに済んだんだろ。呪いの連鎖を止めてくれたんだろ。」

「それに、こうも言ってたよな。シャンティはもう一人じゃないんだから、みんなで幸せになることを考えてって。それはミナ様だって同じなんだぞ。ミナ様の為に一緒に生きようって言うってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様をそれほどまでに大事に思ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様が我慢して周りの奴らだけ幸せになっても意味ねえよ。ミナ様だって幸せになれる様に、あたし達も傍にいるから。ミナ様は一人じゃないから、だから一人で泣くなよ」

それを聞いたエルメスはありがとっつて言いながら泣き出して、シャンティはそんなエルメスを抱きしめながら一緒に泣いていた。俺達だけなら正直不安だけど、シャンティ達もいるなら大丈夫そう
だ。
アイツいい奴だな。エルメスの事が本当に好きなんだな。シャンティの言葉から察するにシャンティも色々あつて乗り越えてきたんだろ
うな。多分、エルメスの存在もあるんだろう。

今のエルメスに必要なのは、同情してくれる偽善者じゃなくて共闘してくれる戦友だ。その点シャンティはいい相棒なんだと思う。

インドに行くようにあらかじめ指示してたアーサーの采配は大当たりだったわけだ。つーかアンタまさかここまで予測してたのか？
自分が消えることも？ だとしたらやっぱりアンタは恐るべき策略家だな。敵わねえはずだ。

とりあえず説明を終えた後、エルメスとシャンティは話したいことがあるっつって二人でシャンティの部屋に入って行ったもんだから、残された男どもでアーサーたちの思い出話でもすることにした。

どうでもいいけど、この屋敷における男女比率って異常だな。2
5対2ってあり得ねえ比率だよな。どうにかなんねえの？ まあ、
いいんだけど。

アイツらはアーサーたちと出会ってからどういっいきさつでアーサーたちに仕えることになったのか、エルメスの結婚式とか、テロ

騒動とか、イスラムの襲撃とか色々教えてくれた。

聞けば聞くほどエルメスってバカだな。とりあえず、アーサーも苦労したんだな。同情する。んで、これからは俺らが苦労するんだろうなと思うと、もう既に面倒くせえ。つーか既に苦労してる。同情しろ。

そういえば、こいつらとアーサーが出会ったいきさつを聞いて思ったんだけど、さすがだな。こいつらはみんなアーサーの事を英雄視してる節があるけど、実際違うだろ。

こいつらを雇用した理由は4つ。

1. 化け物に仕えさせるのに不可触の民、いわゆる無戸籍の孤児の方が都合が良かった。
2. 不可触の民は常に救いを求めているから、救ってくれる人間を裏切ることはない。
3. 仮に裏切りを働かれても殺してしまえばいい。不可触の民なら家族も戸籍もないから周りから不審に思われることもない。
4. なによりシャンティを気に入った。

正解だろ？　なんでわかったって？　そりゃわかるよ。ジュリオ様と似たようなもんだからな。ただジュリオ様と違う点は、アーサーに家族がいたことだな。仮にアーサーがジュリオ様と同じようにこいつらを駒としか思っていなかったとしても、エルメスや他の人たちは違っただろ。

こいつらが言ってたぜ。根気よく自分たちに教育を施してくれたミラーカさん、禁を犯したと知っても、それを隠して真実を教えてください。ボニーさんとクライドさん、いつも自分たちを世話して労ってくれたクリシュナさん、いつも優しくしてくれたエルメス、そして何より、自分たちを拾ってくれたアーサーに心から感謝してるって。

アーサーはさ、本当はこいつらに吸血鬼ってバレた時点で殺そうとでも思ってたんだろ。でも家族がそれを許さない。こいつらに関わって、こいつらから信頼を得て、みんなもこいつらを信頼したから。特にエルメスあたりが猛反対しそうだしな。だろ？

それにアンタ自身も感化されたはずだ。レヴィが言ってた。イスラムが襲って来た時、一緒に戦いたいって申し出たシャンティにアーサーが言った言葉が忘れられないって。

「私に恩を返したいと思うなら、生きてここから逃げろ」

お前たちに死なれたら辛いからって言ってもらったような気がして、すげえ嬉しかったってさ。

こいつらとアーサーたちとの関係を聞いて思ったよ。もしジュリオ様にも家族がいたら、俺達も違っていたのかなーって。誰かがあの人の心を支えてやってたら、化け物になってなかったんじゃないかって。

もしかしたら、ジュリオ様はヴァチカンに来たのは間違いだっただけかもしれない。あのまま、イギリスでヘルシング卿に仕えてた方が良かったのかもしれない。まあ今更考えてもしょうがねえけどな。

でもアーサー、アンタはやっぱりスゲエな。さすがに王様だよアンタは。アーサーにエルメスや家族がいたのはたまたまじゃねえな。アーサーはあんなに傍若無人で自己中でヤな奴なのに、アンタに関わった人間はみんなアンタに着いて行きたくなる。

まさにカリスマだな。

こいつらも、シュヴァリエの奴らも、エルメスも、クリシュナさんも、ミラーカさんも、ボニーさんも、クライドさんも・・・あ、でもアンタ北都とは異常に仲悪かったよな。まあ、北都はシスコンだったからしょうがねえか。北都にしてみりゃクリシュナさん以外エルメスに近づく奴は許せねえんだろ。

そういえば、クリシュナさんはここで亡くなったんだってな。エルメスを庇って死んだって前にエルメスから聞いたな、そういえば。女の為に自分の命を懸けて守るってスゲエよなあ。クリシュナさんこそ正にシュヴァリエじゃねえか。クリシュナさんも吸血鬼だったみてえだけど、あの人に限っては名前の前に“聖”がついてもいい気がする。

クリシュナさんとエルメスはそりゃもう仲が良くて、クリシュナさんはエルメスをすっげえ大事にしてたってこいつらも言ってたし、俺の見る限りもそうだったな。アンタ、クリシュナさんに勝てねえんじゃないの。あの人を超えるのは相当苦労しそうだぞ。

まあ、帰ってきたら目一杯エルメスを大事にしてやれ。せいぜい頑張れ。って俺は何者だよ。

とりあえず、さつきから

「カイ、何してんの？ 何書いてんの？」

ってエルメスがうぜえから、今日の所はこのへんで報告を終わる。

以上

FILE 2 Charisma 「カリスマ」(後書き)

登場人物紹介

ジュリオ

故人。カイの育ての親であり、元主人。エルメスの為にカイが殺害した。

エルメスやアーサーを裏切り、先の戦争を引き起こした張本人。

ランス(ランスロット)旧:レミ

シュヴァリエ幹部の一人。現在10歳。ペンドラゴン一族において唯一の人間。

いずれはエルメスに吸血鬼化してもらう予定。

エルメスを慕いついてきて、次期旦那の座を虎視眈々と狙う腹黒美少年。

好きな言葉 私利私欲

ガラード 旧:ジョヴァンニ

シュヴァリエ幹部の一人。エルメスの唯一の支配下の吸血鬼。エルメスに命を助けてもらった為に忠誠を誓った。

最近まで人間だったのでまだ20歳と若く、世間知らずで青臭いところがある。

好きな言葉 雪中松柏

シャンティ

インドの屋敷の女主人。かつてアーサーに拾われてそのことをとても感謝している。

エルメスとも仲良し。元盗賊団のリーダーだった為、若干ガラが悪い。

好きな言葉 臥薪嘗胆

クリシュナ

故人。アーサーの兄であり、エルメスの夫。先の戦争にて戦死。

人格者で博識で愛妻家というスーパーマン。

彼の思想はエルメスに多大な影響を与えた。

エルメスにとっては幸福の象徴そのものであり、尊敬の対象でもある。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

なあ、なんで俺の周りにはムカつく奴しかいねえんだ。俺が一体何をした！

発端は昨夜だよ。昨夜は結局エルメスとシャンティは夜中まで話してて、それから飯食って風呂入ってだから、部屋に戻ってきたのはもう夜中の4時を回ってたわけだ。

暇だったのか構って欲しかったのか、報告書を書く俺に付きまわって鬱陶しかつたんだけど、シカトしたらその内諦めたように寝ると言い出した。でも、その時にはすでにランスは寝てて、エルメスは困惑した。

「カイ、一緒に寝ていい？」

「ざけんなバカ！ それはもうやめろって言ったじゃねーか！」

「静かにしてよ、ランス起きちゃうじゃない」

「・・・とにかくダメだ。絶対許さん。そこまで面倒見られるか。そこまでの位なら死んだ方がマシだ」

「死ぬとか言わないでよ！ バカア！」

「お前が一番うるせえよバカ」

エルメスが見当違いなところで大声を上げるもんだから、案の定ランスが起きてきた。

「うー・・・二人とも、どうなさったんですか？　こんな夜中にケンカですか？」

「ああ、ワリーな。ホラ、ランス起きたんだから一緒に寝ればいいだろ。つーか、よく考えたらランスが寝てても一緒に寝ればいいじゃないか！」

「やだよ！　寝てる人の隣で一人起きてるのは寂しいの！　一緒に寝付きたいの！　何のために二人と同室にしたと思ってるの！？」

「おま・・・計算済みかよ！　つーか交代制！？」

「そーだよ。夜はランスで、昼はカイだよ」

「ちょ、ちよつと待ってください！　どういうことですか！？」

会話が飲み込めないらしいランスに昼間のことを話してやると、ランスは顔色を変えた。まあ当然だ。

「つーわけでランス、お前エルメスが目覚めるまでベッドから出るな」

「そうですね、そうします。エルメス様ダメじゃないですか。男は狼なんですよ？」

「待て待て、ランス？　お前どこでそんな言葉覚えてきやがったんだ？　つーか迷惑してるのは俺の方なんだよ！」

「エルメス様、カイ様は前科者なんですからちゃんと気を付けましようね？」

「え？　うん、わかった」

「わかったじゃねーよ！　つーかなに前科者呼ばわりしてんだ！

つーかシカトすんな！」

「何をおっしゃるんですか。前科者なのは事実じゃないですか」

「昔の事じゃねーか！ すっかり忘れてただけだ！」

「加害者が忘れても被害者は心に傷を負っているものですよ。カイ様は一応シュヴアリエ筆頭なんですから、ちゃんと騎士らしくしてください。さ、エルメス様寝ましようか」

「うん。カイおやすみー」

結果的には俺の望むとおりになったんだけど、全然釈然としねえ。つーか超ムカつく。あのクソガキ、シバキ回した上に吸血してブチ殺してやりてえ。

大体エルメスもその話題が出る度に「そういえば」みたいな顔してんじゃねーか。アイツも忘れてんじゃねーか。なんで俺ばっかり文句言われるわけ？ スゲー腹立つ。なんなの？ つーかなんでランスが知ってたんだよ。マジ怖ええ。何者だよアイツ。

え？ ていうか俺が悪いの？ 俺が悪いの？ いや、俺は悪くない！ 仮に俺が悪かったとしたらそれは昔の俺だ！ 今の俺は悪くない！ だろ？ 頼むからそつだと言ってくれ。今の俺にはアーサーしか頼りにならない。絶対俺は悪くない。と思う。

で、今日目が覚めたらもうエルメスもランスも起きたようで部屋にはいなかった。やっぱり素晴らしいな、一人って。最高だな。昨日が最悪だったからより幸福を感じる。孤独を愛する男、俺。そんな俺にとって今の環境は地獄と同義語なわけだ。

でも、ランスがいるなら俺は別室でもいいだろ。そう思ってシャントイに別室を賜ろうと相談したら、なんでか知らんが白い目を向

けられた。

「ああ、そーだな。アンタみたいな危険人物をミナ様と同室にするのは危ねーからな」

ランス！？ てめえ何喋ってんだコノヤロー！ よく見たらほぼ全員から白い目線を感じる。なにこれ、俺はこんな孤独は望んでねえぞ。

リオ 「はーあ、なんだかんだ言ってさあ、副長も結局はその程度の男なんだよね」

ガルフ 「セクハラどころか犯罪者じゃねーか。それでも聖職者？ 生殖者の間違いだろ」

ディナ 「副長最低！。2次元の趣味を3次元に持ち込むなよ」

ランス 「カイ様は本当にヒドいお方ですね」

トリス 「ていうか、副長だけズルい」

ユアン 「お前それは違うね？」

もうあり得ない。なにこれ。俺可哀想すぎじゃね？ もうこれはイジメだよ。迫害とも言う。アーサー、アンタになら俺の悲壮が分かるはずだ。

俺が何かしましたか。いや、してねーよ。うん、しようとしただけで実際は何もしてねえ。俺は何もしてねえ！ なんになんだこの扱いは！ 俺が何をしたって言うんだ！ 冗談じゃねえぞ！

俺 「うるせえよてめーらは！ 俺はまだ何もしてねーの！

ふざけんな！」

パーシー 「まだつてなんだよ！ これからすんのか！」

気の毒な俺「しねーよ！ つーかお前ら面倒くせえ！ 黙れ！」

キルシユ 「被告からは反省の色が窺えませんね。有罪」

可哀想な俺「誰が被告だ！ 何様だてめーは！」

ベディ 「検事、求刑の弁論を」

ガラード 「裁判長、極刑を望みます」

何故かバカどもが裁判を始めやがって、いい加減イラついて銃を取り出そうかと思っていたところで、エルメスが間に割って入って来た。

「異議あり！ もういいじゃない。面倒くさいし。私別に怒ってないし、カイはカイなりに反省してるんだから、ねえ？」

「そーだぞお前ら！ いい加減にしるよ！ 俺は無罪だ！」

「反省してる素振り位見せようよ・・・まあいいけど。部屋はランズがいてくれるならカイの好きにしていよいよ」

「やった！ さすがだなお前！ さすがにこの俺様が主と認めただけはあるな」

「結局自分を褒めるんだね・・・」

「いやいや、もう本当忠誠を誓いますよ、エルメス姫」

「誰が姫・・・まあいいや」

もうさすがだな。エルメスの博愛主義は賞賛に値する。アイツがここまで寛容なのは多分アーサーの躰が行き届いていたおかげだな。アーサーが普段からエルメスに無茶ブリかましていたおかげで、ちよっとやそつとではコイツは怒ったりしない。よく調教されてる。さすがアーサーはやることが違う。

ガルフ 「ていうかエルメス原告じゃん。なんで弁護してんの？」
ディナ 「エルちゃんあまーい！」
ベディ 「性犯罪は再犯率高いんだぞ！」

バカどもが何か言ってるけど、エルメスが俺に着いたならただの野次に過ぎない。

従僕な俺「諸君、黙りたまえ。姫はやめろと言っておられる。姫の命令に逆らうな」

ペレアス「副長がそれ言う！？ ていうか誰だお前！」

忠臣な俺「黙れ。エルメスには絶・対・服・従だ。金輪際この話題を出すな。出したら殺す。それと俺はもう副長じゃねえ。筆頭と呼べ」

ペレアス「急に忠臣ぶりやがって・・・」

アホどもはまだブーブー言ってたけど、俺圧勝。見事なまでの起死回生。さすが俺。

落ち着いたところでソファに座ったら、エルメスの隣でシャンテイとレヴィが大きく溜息を吐いていた。

「まあ、このお姫様にその手の話題が尽きないのは今に始まったことじゃねえしな」

「そうだな・・・」

「は？ なに？ どういうこと？」

俺も含めてシュヴァリエ全員がシャンティ達に振り向いて、なんかエルメスが慌てた。もう俺はこの時点で半分くらい読めた。消去法で行けば簡単なことだ。

「あーハイハイ、俺わかった。アーサーだろ」

「おお、正解。あの不倫騒動はびっくりしたよ。しかも結婚式当日に発覚してるし」

「不倫・・・エルメスお前スゲエな。大体アーサーとクリシュナさん兄弟じゃねえか。お前どんだけビッチだよ」

「誰がビッチよ！　ていうか違うし！　誤解だつて言ったじゃない！」

「でもアルカード様は認めてたし、事実があるのに誤解っておかしくねーか？」

「うっそれは・・・でも違うの！　えーと、えーと、そう！　騙されたの！　畏よ！」

どういうことがよくわからんけど、さすがアーサーはやることが違うな。兄貴の女に手を出すとはさすがだ。伊達にエロオヤジの称号をほしいままにしてねえな。敬意をもって呼んでやろう。このエロオヤジめ。

ていうか、畏ってなんだよ。童話に出てくるバカな小娘か？　いや、普通に普段からエルメスはバカな小娘だな。

ついでに、クリシュナさんが言っていたことも納得できた。

「っーかお前さあ、前にクリシュナさんも言つてたけど防御力低いんだよ」

「どういうこと？」

「隙だらけってことだよ。言つてたじゃねーか。付け入る隙を提供してるって」

「え？　私が悪いの？　私のせいなの？」

「そーだな。お前バカだから」

「そ、そんなバカな・・・いや、バカじゃないよ！　まあ、でもいいや」

「いいのかよ！」

一瞬落ち込んだものの、すぐにエルメスは開き直った。ていうか開き直るとはどういう事だ。いいやってなんだよ。いいんなら遠慮しねえぞ。と思ってたらエルメスに睨まれた。

「だって、仮にこれから何かされても、私に触れた時点で燃やすなり凍らすなりするもん」

普段バカだからすっかり忘れてたけど、コイツ強いんだった。俺らなんかよりも圧倒的に。エルメスに手を出せば間違いなく死ぬ。下手したら爆死する。それだけは勘弁だ。

「ハハハ、心配すんな。そんなことする奴ここには一人もいねーよ」

「カイ様がおっしゃっても説得力ありませんね」

「ああ？ うるせえ。フーカランス、ためえ覚えてろよ」

「なにがですか？」

「クソガキが・・・まあいい。後3年もすれば苦悩に喘ぐのはお前だ。ざまあみる」

「カイ様と一緒にしないでください。僕はカイ様と違って騎士で紳士ですから」

あーもうマジ腹立つんだけど、この腹黒のクソガキ。ジュリオ様と同じようなこと言いやがって。こいつも撃ち殺してやるーかな、マジで。

自称紳士な奴が一番厄介でムカつく。アーサーもクリシュナさんと喧嘩した時そう思っただろ。紳士なんて絶滅すればいいと思わねえ？ 好きに生きて何が悪いんだっつーの。

その後しばらくゴチャゴチャ話してたら、エルメスは部屋に戻っていった。それを見届けていたらレヴィが話しかけてきた。

「ミナ様、思ってたより元気そうではあったな」

確かに、普通に喧嘩もするし元気そうではある。でも、それは多分人前だからだ。元気そうなだけで元気なはずがない。

クリシュナさんの時も似たような感じではあったけど、あの時は違う。本当にいなくなってしまうんだから。それも全部一度に

「きつとアイツは今頃アーサーの棺の前で泣いてるよ」

そう言うレヴィたちは悲しそうな顔をしてた。心配、だよな。当然だ。でも、どうすることもできない。どうしたらいいのかが分からない。俺達はただ普通に今までどおりにエルメスと接してやることしかできない。

少なくとも、俺らがエルメスの前で悲しそうな顔をしちゃいけない。でも、それしか方法は見当たらないし、今は終戦直後だし何をしてもエルメスを元気づけてやることなんか出来ない。

無力だな、俺は。

柄にもなくちよつと落ち込んでたら、急にシャンティが立ち上がって俺を呼んだ。

「カイ、何ぼさつとしてんだよ。いくぞ」

「は？ 行くつて？」

「ミナ様のとこだよ。友達が泣いてんなら、一緒に泣いてやんのが友達だ。一人で泣かせてんじゃねえよ」

やっぱりシャンティはいい奴だ。どういう風に育てばこんなアツい奴になれるんだ。こいつもスゲエ。何でもない時に出会ってたら鬱陶しい女だろうけど、今は相当頼りになる。つっても別に俺は泣か
ねえけど。

シャンティと一緒にエルメスの所に行くと、エルメスは泣いてるどころか読書中だった。俺達の入室に気付かない程熟読中だ。なんで普通に本読んでんだよ。なんで泣いてねえんだよ。俺の発言と立場をどうしてくれんだ。

「カイ？ どういうことだ？」

「俺に聞くな」

「アンタがミナ様が泣いてるつつたんだろ！」

「そう思っただけだ！ そこまで責任持てるか！」

「アンタよくそれでシュヴアリ工筆頭とか言えるな！」

「なんでそこまで言われなきやいけねえんだよ！ このバカ女！」

「なんだと！ このエロメガネ！」

「んだとテメエ！」

ダメだ。俺こういう気の強い女は好きじゃねえ。俺は一見淑女っぽく見えて、でも打算的で高潔そうな女が好きなの。ミラーカさんがどストライクだったの！ 情熱的で気が強いバカ女って対極じゃねえか。アーサー、アンタこいつのどこが気に入ったわけ？

シャンティとケンカを始めたらすすがのエルメスも気づいて止め

に入ってきた。しつかりと会話の内容も聞こえてたみたいで、泣いてなくてゴメンとか言う始末。アホか。

「心配して来てくれたの？ ごめんね、ありがとう」
「別に」

「プツ！ カイ照れてんじゃねーよ」

「は？ んなわけねーだろ！ そもそもお前が行くって言ったんじやねーか！」

「アンタがミナ様が泣いてるって言うからだろ！」

「はああ！？ 俺のせいだよ！ エルメスが泣いてないならソレでいいだろ！」

「二人ともやめてよー！」

申し訳ない事に傷心のエルメスにケンカを仲裁させてしまった。この時はなんも思わなかったけど、後でちょっと反省した。それもこれも全てシャンテイのせいだ。俺のせいじゃねえ。

「ていうか、お前何読んでたんだ？」

少し落ちついてエルメスに尋ねたら、本を掲げてニコツと笑った。

「ダンテの神曲！ クリシュナのお気に入りだったの！ テロの時クリシュナに面白いから読んでみてって言われたけどそのまま忘れちゃってて、今思い出したの！」

「ふーん、そうか。俺も好きだぞ、神曲」

「意外・・・」

「うるせえ。イタリア人で元聖職者なら当然だ」

「あ、そっか」

そっからなんとなく本を読む流れになって、エルメスと二人で神曲を読んでたらシャンティも覗き込んできた。

「お前読んだことあるか？」

「いや、ない」

「っーか読めんのか？」

「読めるよ！ バカにしすぎだろ！」

「あーワリーワリー」

再びケンカが勃発しそうになって面倒くさくて適当に謝ったら、エルメスが笑い出した。

「二人とも仲良しだねー！」

このバカ！ どの辺が仲良しだ！ てめーの目と耳はちゃんと機能してんのか！ もう本当俺疲れるよ・・・何とかしろよこのバカを。まあ、笑ってるならいいけどよ。

「ちよつとミナ様、冗談キツイよ」

「はああ！？ ざけんな！ お前が言うなよ！ 俺のセリフなんだけどー！」

「いや、あたしのセリフだっつもの！ アンタこそふざけんな！」

「本当仲良しだねー。知り合ったばっかなのに。なんか嫉妬しちゃう」

「はあ！？ バカじゃねーの！？ ちげーつってんだろーが！ バカ！」

もう本当ヤダ。なんでエルメスわかってくんねーの？ なんでアイツはあんなにバカなの？ もう本っ当疲れる。マジでインド来てから以前より溜息倍増なんだけど。エルメスと出会っ前に比べて4倍なんだけど。どうしよう俺。

もー！ アーサー！ アーサー頼むよ、助けてくれ。俺溜息つきすぎて酸欠で死んじゃう。

以上

FILE - 3 Chat 「お喋り」(後書き)

登場人物紹介

ガルフ(ガウエイン) 旧：クリステイアーノ

シュヴァリエ幹部の一人。カイの副官的存在な人。

対人格闘が得意で、それにおいてはカイよりも強い。
頭も性格も割といいのに苦勞人。

好きな言葉 初志貫徹

ペレアス 旧：クラウディオ

シュヴァリエ幹部の一人。ガウエインに続く常識人。

ぶつちやけシュヴァリエ達の中でまともなのはこの二人しかない。
手先が器用で、化学と工学が得意な為エルメスと趣味が合う。

エルメスが核爆弾を作るきっかけを作ったのはコイツ。

リオ(ライオネル) 旧：アレクサンドル

シュヴァリエの一人で、チャラ男3兄弟の一人。

とにかくチャライ。ウソや詐欺が得意な人を騙すプロ。
好きな言葉 自由闊達

ベデイ(ベドウィル) 旧：ヨハン

シュヴァリエの一人。チャラ男3兄弟を抑止する人。

止められた試しはない。結構真面目な奴。武器萌えで制服萌え。
好きな言葉 質実剛健

キルシュ 旧レオナルド

シュヴァリエ幹部の一人でチャラ男3兄弟の一人。

エルメスに「ヴァチカンのゴルゴ」と称される狙撃の名医。

仕事中はなかなかイイ男だが普段が残念。

パーシー（パーシヴァル）旧：エドワード

シュヴァリエの一人でチャラ男3兄弟の一人。

武器マニア。一番好きなのは日本刀。

なので以前は剣術使いのエルメスに相当萌えていた。

ユアン（ユーウエン）旧：オリバー

シュヴァリエの一人。乗り物好き。

彼に操縦できない乗り物は女性くらいなもの。

人知れず悩みを抱えている。

ディナ（ディナダン）旧：ルカ

シュヴァリエの一人。ある意味紳士。

誰よりも女性に優しいが一步間違えればチャラ男3兄弟の仲間入り。
トラップを仕掛けるのが得意&趣味で、子供のころはよくいたずら
していた。

でも逃げ足が速く、めったにカイに怒られない。

FILE - 4 Cemetery 「墓地」

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

女二人に騙されるわ、何もできないわで今日の俺は散々だ。

確かにエルメスは言ったんだよ。部屋は俺の自由にしていって。シャンティも確かに言ったんだよ。別室を用意するって。なのにもだ同室だよ。

「あ、カイ悪いな。満室だ。ウツカリしてた」

8合目まで登って突き落とされた気分だよ。ていうか本当は満室どころか俺とランスがエルメスと同室でギリギリなんだと。

「ていうか、一応一部屋空いてはいるけど使い物にならねえんだよ」
「あ？ なんでだよ？」

「その部屋からランスのベッド持ってきたし、まあそれだけならベッド買えば済むんだけど、ガラスは割れてるし壁も穴だらけで外壁にまで穴が開いてるからな」

「なんだそれ」

シャンティにとりあえずその部屋を見せてもらったら、マジでヒドイ有様だった。片付けすらしてねえし、なんだこれ。

「修理しろよ」

「いや、記念に取っところと思って」

「記念つてなんだよ！ 意味わかんねえんだけど！」

シャンティが訳わかんねえこと言うと思って突っかかったら、シャンティはエルメスに視線を流した。

つられてエルメスを見ると、何か知らんけど涙目。

「・・・どした？」

「ここ、クリシュナが使ってた部屋なの」

なるほど、それはわかったけど、なんでこんな荒れてんだか。でもその理由はすぐに分かった。

「実は結婚式の後にクリシュナ様の部屋で二次会したんだけどさー。そんな時に不倫疑惑が発覚して、ミナ様とアルカード様が大ゲンカ始めちゃったんだよ。で、この有様ってわけ」

ああ、なるほど。何やってんだよアーサー。手加減しろよ。いい加減にしろよ。アンタのせいで俺までとばっちり受けてんじゃねーか！ 勘弁しろよマジで！

「カイ、ごめんね。本当はカイにこの部屋を使ってもらったらいいいんだけど、残しておいてほしいの。だから同室で我慢してくれる？」

出た、リーサルウェポン。たーのーむーかーらー、泣きそうな顔するな。なんだよこれは。新手の脅迫か？ 「YES」としか言いようがねえだろうが！ さてはコレもアーサーの躰の賜物だな！？
あまりにもアーサーが自己中すぎてエルメスは泣き落として言

うスキルを得たわけだな！ いい迷惑だ、チクショー！

渋々OKの返事をして、というかどの道そうするしかねーし。結局同室のままってわけだ。

とりあえず寝起きドッキリの件に関しては、ランスが頑張ってくれているので俺は安心だ。アーサーも安心したろ。まあ3年も経てばわかんねーけどな。3年経ってランスが助けを求めてきても絶対助けてやんねえ。せいぜい苦しめばいい。大人の階段なめんなよ。ざまあみろ。

つーか3年経ったらエルメス30歳かよ。アラサーじゃねーか。なんて頼りねえアラサーだよ。まあ見た目はその半分くらいにしか見えねえけど。つーかアイツ19で吸血鬼化したって聞いたときはびっくりしたな。やっぱ東洋人つてのは幼く見えるもんだ。

それにしてもランスの趣味が良くわからん。もつと成長したら熟女萌えになるんじゃないか。いや、もしかしてアイツ未亡人萌え？ まあどうでもいいや。

そんな未亡人は今日もアーサーの棺の前で神曲を読んでる。もうそろそろ終わりそくだ。多分今頃ダンテはベアトリーチェに再会してるところだろう。

エルメスも、今まさにダンテと同じように地獄を旅してる。ダンテと違って水先案内人のヴィルギリウスもいない、広大で忌々しい地獄と煉獄をさまよってる。悪魔と亡者に追いつめられながら、アーサーと再会できる日を心待ちにしてるんだ。それがいつかもわか

らずに。それがどれほどの道のりかもわからずに。それがどれほどの苦悩かだけを知りながら。

そう思うと、本当にエルメスは辛い選択をしたと思う。いや、違うな。その選択をさせたのは俺だ。俺が引き留めてアーサーを待たせて言ったせいだ。アーサー、頼むから帰ってきてくれ。この選択が正しかったんだと、安心させてくれ。

じゃなきゃ、エルメスが可哀想だ。もしアーサーが帰ってこなかったら、エルメスは死ぬかもしれない。そうなったら俺も生きていく意味はない。エルメスはどれくらいなら待てるんだろう。時間がたつにつれて悲しみは薄れるかもしれないけど、それに比例して焦燥は大きくなると思う。

もしエルメスが待つことを挫折しそうになっても、何とか引き留めようとは思う。でも、10年とかあまりにも時間がかかるようなら、さすがに俺も引き留め切れねえかもしれない。その時は・・・どうするんだろうな、わかんねえ。

でも、俺はアイツと一緒に生きるって決めたから、もしアイツがどうしても待てなくて死にたいって言ったら、本当にどうしてもダメだっていうなら、その時は、許せ。

許してくれ、許してやってくれ。

それほどまでにエルメスが追いつめられてしまったら、待ち続けることを正しいと言える自信はなくなってしまうから。その時は、神に謀反を企てた罪人が凍りつく地獄の最下層・コキュートスの更に奥、イスカリオテのユダが堕ちた、第4圏ジュデッカで待つことに

する。つーか結局待つんじゃないか。

けど、そこならジュリオ様もいそいだな。3人で氷漬けになりつつルシフェルに食われつつ待つとくわ。つーかダンテは恐ろしい世界を考えるもんだ。冷凍された上に悪魔に食われるってなんだよ。どんだけ裏切り者が嫌いなんだ、ダンテは。

ま、一応今の所信じてるけどな。エルメスが待ってるんだし。きつとエルメスはアーサーを裏切ることはないし、俺はエルメスを裏切らないから、待つことにする。

しかし、俺はいつの間になんか忠臣キャラになったんだ。正直なところ不思議で仕方がない。だって俺たちはさ、ジュリオ様にこっぴどく裏切られてるわけじゃん。ぶっちゃけ人間不信つーの？ハイハイどうせ裏切るんでしょ、みたいな。信用？なにそれ美味しいの？みたいな。

でも、不思議とエルメスが俺たちを裏切ることにはありえない気がする。アイツは別格だ。

まあ、そんな奴じゃなきゃ一緒に生きようなんて言わないわけだけど。多分、死神として活動している間に、エルメスに何度も助けられたからだろうな。エルメスがいつも身を挺して俺たちを守ってくれて、ガロードの命を救ってくれたから。信頼、依存と言ってもいい。ジュリオ様だってさすがにそこまではしなかった、いや違うな、できなかつたのかもな。

エルメス、アイツは俺たちの“アイコン”だ。

アイツには言うなよ。調子乗るから。本当もうガライドに至っては女神の様に崇めてるからな。まあ命の恩人だし当然かもしれない。ちなみに俺はバカの象徴として崇めてるけど。崇めてることに変わりはない。そう言う事にしておけ。

今夜の空模様は大荒れだ。さつき停電になった。一時保存しといてよかったぜ。また書き直すのとか超面倒くせえしな。マメな俺、さすがだ。そんな天気なのに、俺がちょっと部屋から出た間にエルメスはいなくなっていた。

屋敷の中を探してみても見当たらないし、まさかと思って外に出てみたら、案の定いやがった。

屋敷の裏庭でバケツひっくり返したみてえな土砂降りの中、傘も差さずに座り込んでた。何してんのかと思って近づいてみたらエルメスの前に小さな石碑があって、摘んだばかりのような花が添えてあった。

エルメスがインドで祈りを捧げるような石碑の持ち主と言ったらクリシュナさんしかいない。そうか、これはクリシュナさんの墓なんだな。そうか、だからアーサーはインドに行けと言ったのか。

この雨の中じゃ傘なんてクソの役にも立たねえ。足元はずぶ濡れ

だ。でも、エルメスに歩み寄って後ろから傘をさすと、エルメスは振り返らずに呟くように言った。

「クリシュナの、お墓なの」

「そうか」

「インドを出てから、今日初めてお墓参りなの」

「そうか」

「今まで、必要なかったから」

「・・・そうだな」

「でも、これからはお墓参り、しなくちゃいけない。ここで、クリシュナが眠ってるから。私が・・・来なかったら、クリシュナ、寂しがるから」

なんて言っていていいか、わからなかった。エルメスの頬を伝うのが雨なのか涙なのかも、俺にはわからない。

「エルメス・・・」

「違うよ」

泣いてるのか？ そう尋ねようと思ったら遮られて、またエルメスは呟くように震える声で言った。

「・・・雨だよ」

肩と声を震わせながらそう呟くエルメスを見て、猛烈に、憎いと思った。なんで、なんで神はエルメスにこんな酷い仕打ちをするんだ。エルメスは何も悪くないのに。エルメスが何をしたらって言うんだ。あんまりだ。エルメスが可哀想だ。なんでエルメスにこんな泣

き方をさせるんだ！ 頼むから、声を上げて泣かせてやれよ！ 泣くことくらい許してやってくれよ！

吸血鬼よりも、悪魔よりも、神の方が余程酷い。神はエルメスを救わない。神はエルメスに辛い試練しか与えない。神なんか死んだ方がマシだ。アーサー、アンタもそう思うだろ？ でも、それ以上に酷いのは俺かもしれない。泣いているエルメスを前にしても、どうしたらいいのかわからなくて、ただ、立ち尽くしている俺の方が酷いかもしれない。

「友達が泣いているなら一緒に泣いてやるのが友達だ」

シャンティはそう言った。でも、俺は泣けない、泣き方なんか知らない。じゃあ、エルメスが泣けるようにするしかない。せめて、素直に泣けるようにしてやりたい。

最早、無用の長物になった傘はその場に捨てた。エルメスの隣に跪いて、頭を抱えて撫でてやると、少ししたら声を上げて泣きはじめた。

今は、これしかできない。でも、これでいいんだと思いたい。土砂降りの雨が鬱陶しい。早く晴れて欲しい。

早く以前のような、晴れた日の、太陽のようなエルメスの笑顔を見たい。それまで、俺はエルメスの泣ける場所になってやりたい、

いや、ならなきゃいけない。

辛いなあ。俺は何回エルメスの泣き顔を見ればいいんだろう。

でも、一人では泣かせたくない。その方が辛い。エルメスも、俺も。せめて、泣きたい時に泣けるようにしてやりたい。そうすれば、笑いたい時に笑ってくれるかもしれないから。

エルメスが泣きたい時に泣かないのは、自分を責めているのかもしれない。自分のせいでみんなを失ったと思い込んで、だから自分が泣いちゃいけないと思っているのかもしれない。

それに、ここにはエルメスが安心して泣ける場所がないのかもしれない。そんな場所があるとしたら、アーサーだけだと思う。でも、アーサーはいない。

エルメスにとって、アーサーは師であり、父であり、主君であり、神であり、すべてだ。アーサーが居なければ、エルメスは生きてはいけない。

エルメスはそう思ってるし、事実そうだと思う。

俺には、アーサーの代理は勤まらない。それはわかってるけど、でも俺が代わりにならなきゃいけない、そう決めた。

でも、俺は無力だ。何もできない、してやれない。どうしたらいいかが分からない。なんで俺にはわからないんだろう。今まで俺は何を見て、何を感じて生きてきたんだろう。こういう時に役に立たないことしか、俺は知らない。

いつそ、ジユリオ様が憎い。結局俺は人殺ししか知らない。俺はただの兵器だ。今までの事が、エルメスにとつては微塵も役に立たない。俺のこれまでの人生は、この一瞬で、すべてが無駄なんだとわかった。

だって、そうだろ？ エルメスを救つてやれない。俺はエルメスに忠誠を誓った。エルメスの役に立たないなら、価値はない。その考えは極端かもしれない、でも、そうなんだよ。

ああ、悔しい、悔しい。

もつと前からエルメスをちゃんと見ていればよかった。エルメスを取り巻く人たちをよく見ておくべきだった。もつとエルメスの話を聞いてやればよかった。俺は知らなさすぎる。

アーサー、アンタならこういう時はどうするんだろう。エルメスの為に何をすればいいんだ。俺にはかけてやる言葉も見つからない。なんて言えばエルメスが救われるのかが分からない。

俺には、エルメスが泣き止むのを待つことしかできない。何もできない自分が悔しい。俺は一体何のために傍にいるんだろう。

アーサー、俺はどうしたらいいんだ。教えてくれ。

エルメスを救えるのはアーサーしかないんだ。俺じゃダメなんだよ。

アーサー、お願いだ。早く帰ってきてくれよ。エルメスを、助けてくれ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連日愚痴で悪いと思ってたが、今日はちょっと良い報告だ。

この前の墓参りの日から、エルメスは少しだけ弱音を吐くようになった。今までアイツは辛いとか苦しいとか俺たちに直接言う事はなかったから、多分良い事なんだと思う。

あの墓参りの後、俺も考えてみた。俺はいつも文句はポンポン言うのに、よく考えてみたらそれ以外の事をほとんど言わない。だから、言った方がいいのかなって。例えそれが見当違いの事でも、エルメスを思っただけで味方になる奴がちゃんといてるんだってわかってくれるならそれでいいと思った。

前にエルメスは言った。

「私自分のこととか話したのカルロが初めてだし、何でも言い合える人に出会えることってそんなにないと思うから、カルロの事大事な友達だっと思ってるよ」

そう言ってもらった時にスゲー嬉しかったのを覚えてる。アイツは良くも悪くも思ったことを何でも口にする。でも、今は言わない。それなら、俺が話せばアイツも話すんじゃないかって言う安直な発想だけだ。

今のエルメスはまさにダイヤだ。研磨されて擦り減っていく比重と比例して、輝きを増していく。でも、その輝きはなんとというか、儂い。刹那。それが俺は、悲しい。その悲しい輝きにみんな惹きつけられて、エルメスを心配せずにはいられない。

前はアイツの周りはなんだか明るくて、温かい感じがしたけど、今は違う。目を刺すような冷たい光だ。前のアイツが太陽であったなら、今は月。吸血鬼なのに太陽と揶揄すのはどうかと思うけど、でも俺はそう思った。

今のアイツは月のようで、自分で光ることが出来ない。光が当たらないと輝かないダイヤも同じだ。当然だけど、まだエルメスの心は上手く歩けない。月みてえにグルグル回ってる。当然だけど、仕方ないけど、なんとかかしてやりたい。一刻も早く。

墓参りの時、泣き止んだエルメスが言った。

「カイ、ごめんね。いつも心配顔させちゃうね。ごめんね。もう大丈夫だよ」

俺は謝ってほしいわけじゃない。俺に気を遣って欲しくなんかな

い。俺の心配なんかしてほしくない。自分のことだけ考えていてくれたらいい。なのにエルメスは自分が悪いと思った。そんな風に思わせたかったわけじゃないのに。

きつと俺が何も言わなかったからだ。お前は何も悪くないよって言うてあげればよかったのに、言えなかった。俺が言うていいのかわからなかった。

俺ともあろうものがこんな後悔をするとは思わなかった。カイ卿は“永遠の毒舌家”なのに口を開くの躊躇うなんて、とんだお笑い草だ。らしくねえ。自分に腹が立ったつーのもあるけど、なんかいてもたってもいられなくて速攻エルメスのところに行った。

エルメスはシュヴァリエの奴らとシャンティファミリーの奴らととにかくみんなでリビングでテレビを見てた。本当は二人の方が話しやすいけど、みんながいた方が俺がしくじった時にフォローが入るだろうと思って、そのままテレビを消してやったらすぐ振り向いて怒り出した。

「ああー！ 私のマハラジャ・ナイト24！ この司会の人が面白いのに！ 楽しみにしてるのに！」

エルメスの楽しみを奪ってしまったことにちよつとだけ躊躇したけど、そのままりモコンを握り潰した。

「ミナ、テレビよりも俺の話を聞け」

「ええ？ なに？ ていうか今はエルメスだよ」

「俺は作られたエルメスと話をしたいんじゃない。本当のミナと話をしたい」

「・・・どうしたの？」

「ミナ、お前は自分のせいだと思ってんのか？」

俺の言葉にエルメスは困ったようにして俯いた。どうやら正解だったらしい。

「クライドさんとボニーさんが行方不明なことも、ミラーカさんとクリシュナさんと北都とアーサーが消滅したことも、お前は自分のせいだと思ってるのか？ ジュリオ様が裏切って攻撃してきたことも、俺がジュリオ様を殺したことも、自分のせいだと思ってるのか？」

畳み掛けるように質問しても、エルメスは俯いたまま答えようとしない。

「ミナ、答えろ」

ちょっと厳しいかと思っただけど、逆に普段通りの方がいいと思っただ。むしろ怒らせた方が饒舌になるかもしれないって言う目論見もあったけど。すると、俺の作戦は功を奏した。

「だって、私が誘拐されたせいでジュリオさんを城に入れちゃったんだよ。私がすっかりしてなかったから、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなかったから、戦いをさせちゃったんだよ。私が強くなかったから北都も消えちゃったんだよ。私が・・・私のせい

で！ 私を守ってミラーカさんとクリシユナは死んじゃったの！
アーサーさんは消えちゃったの！ 私のせいでカイにジュリオさんを殺させちゃったんじゃない！ ジュリオさんはカイのお父さんなの！ 私か・・・全部私の・・・なんで、なんで私が生きてるの！」

一息に叫んで、エルメスは泣き出した。あーあ、俺泣かしちゃった。アーサー怒らないでよ、わざとじゃねえから。必要悪だから。一つ溜息を吐いて、エルメスの涙を拭いた。

「ミナ、俺を見る」

エルメスはゆっくり顔を上げて、目が合ったのを確認して、作戦を実行に移した。

「お前はどうしようもねえバカだな。お前は激しく勘違いしてる。それを俺が正してやるからよく聞け。いいか、まず誘拐についてだけど、誘拐されたのはお前だ。お前は被害者だ。自分で言っただろ、とばっちりだつて。お前は被害者だ。お前は何も悪くねえ」

「でも、私が・・・」

「でもじゃねえ。悪いのはジュリオ様だ。お前は何も悪くない。大体、ジュリオ様が城に行くって言った時、お前反対しただろ。ちなみに俺も反対したしな。アーサーの気持ちを利用して、それを押し通したのはジュリオ様だ。お前は悪くない。お前が悪いなら銀行強盗に遭った銀行も悪いってことになる。それは違うだろ？」

「・・・うん」

「お前は悪くない。わかったか？」
「うん」

「じゃ次。お前がジュリオ様の気持ちに気付かなかつたから戦争が起きたんじゃない。あの人はお前と出会ったその日には既に襲撃を計画してた。ジュリオ様がずっと“ミナ”を忘れられなかつたから戦争が起きた。お前は“ミナ”じゃねえだろ。別人だ。違うか？」
「・・・違うない」

「コレも悪いのはジュリオ様だ。あの人が弱かつたから悪いんだ。あの人が“ミナ”を忘れられなかつたせいだ。忘れようとしなかつたせいだ。あの人は死ぬ間際まで“ミナ”に囚われた。それほどの妄執を他人がどうこうできるはずがない。あの人自身にできないんだから当然だ。お前の意志も誰の意志も届かない次元にあつたんだ。お前がしっかりしてようがしてなからうが関係ねえ。あの戦争は、ジュリオ様の妄執が引き起こした。わかるな？」
「うん」

「それと、これが一番大事だけど、クライドさんとポニーさんが行方不明なのと、みんなが死んだのはお前のせいじゃねえ」

「でも、私が弱かつたからだよ」

「なんでお前が弱いとお前のせいなんだよ」

「私が弱かつたから、守つてあげられなくて殺されたんだもん」

「殺したのは誰だよ」

「・・・ジュリオさん」

「じゃあ悪いのはジュリオ様だな」

「・・・でも」

「でもじゃねーの！　じゃあお前が殺したのかよ」

「違うけど・・・」

「じゃあお前は何も悪くねえよな」

「・・・」

「お前のせいじゃねえ。ミラーカさんが言っただけだ。それが自分の使命なんだって。彼女は自分の使命を果たしただけだ。クリシユナさんと北都はお前を守って責任を全うしただけだ。愛する人を守りたいと思うのは当たり前だ。それをお前が讃えてやらなくてどーすんだよ。お前が自分の責任だと思ってる内は、ミラーカさんもクリシユナさんも北都も浮かばねえだろ。お前を守って死んでいった人たちに感謝こそしても、懺悔や謝罪をするな。わかったな」

「わかった」

「それと、まあ正直俺の事はどうでもいいんだけど」

「よくないよ！ カイはジュリオさんの事大好きだったじゃない！」

「まーな。俺はあの人を信頼してたし、尊敬もしてたけど」

「なのに、私のせいで・・・」

「あんなー、お前のせいじゃねえよ。お前の為ではあるけどな。つかそもそも、教皇の命令だったし。でもそれ以上に俺の為に」

「カイの為？」

「そーだよ。単純なことだ。お前とジュリオ様を天秤にかけて、どつちが俺にとって重要だったのか、それだけだ」

「でも・・・」

「でもじゃねえつつつてんだろ！ これに関してでもは許さねえぞ！俺がそうだって言うんだからそうなんだよ！」

「でも、だって！ カイがジュリオさんを殺したのは呪いの連鎖を止める為でしょ！」

「言い方変えてんじゃねえよ。まあ勿論それもあるけど、それは正直記録だ」

「じゃあ、なに？」

「お前を殺したくなかった。死なれんのがヤだったから」

「なんで？」

「なんで！？　なんで・・・なんで？」

予期せぬ質問に思わずシャンティに振り向くと溜息を吐かれた。こいつに溜息つかれると異常にムカつく。

「友達だからだろ」

「あ、そうだな、それだ。友達だからに決まってるんだろ！ わかったか！」

「・・・なんか釈然としないんだけど」

「なんでだよ！ 俺がそうだったついたらそうなんだよ！」

「シャンティが言ったんじゃない」

「うるせえ！ 意見としては同じだ！ 要するに、俺の都合なの！

お前に生きててほしかったからジュリオ様を殺したつてのが実は8割くらい占めてんの！ だからお前は何も気負う必要はねえ！

わかったか！」

「・・・わかった」

「えーと、後はなんでお前が生きてんのか。バカじゃねーの。なんだそれ」

「バカじゃないもん！ だって、みんないなくなったのに私だけのうのうと生きてるなんて許されない気がするんだもん」

「ハア、バカ。お前はのうのうとは生きてない。あの日からずっとお前は悩んで苦しんで生きてる。ずっとアーサーを待ってる。お前が一番苦しいのに、俺達にまで気を遣ってる。それでのうのうと生きてるってんなら、世の中の大半の奴は生きる価値はねえ」

「でも、クリシュナも北都もミラーカさんも、アーサーさんもいなくなっただのに・・・」

「そうだな。で、誰か一人でもお前に死ねつつあったか？」

「言わない」

「てことは生きてるって事だろ。大体消えた人達はみんなお前に生きてほしかつたから、その身を賭してでもお前を守ったんだぞ。それなのに生きてるのが許されないなんて、じゃあ何のためにお前を守ったのかってことになるだろ。それは逆に申し訳ないと思わねえか？」

「・・・」

「お前は何も悪くない。お前は十分苦しんだ。お前は生きていい。生きる価値がある。それはここに居る全員が保証する。俺たちはお前と一生一緒に生きてるって誓っただろ。その誓いをお前は破るのか？」

「そうじゃないけど・・・」

「ハア。お前はさ、アーサーと約束したんだろ。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬって。その誓いも破る気か？」

「破らないよ！」

「じゃあ生きろよ。お前が前に言ってただろ。誰かが生きててほしいと願っているうちは死んじやだめなんだって。俺も、コイツらも死んでいった人たちも、大勢の奴らがお前に生きててほしいと願ってる。生きてるのが許されないなんて二度と考えるな」

「・・・うん」

「要するに、総合するとお前は一つも悪くねえって事だ。わかったな？」

「わかった」

「本当に？」

「うん」

「ミナ、お前は何にも悪くねえよ。お前のせいじゃねえ。お前が辛

いって言っても泣いても笑っても誰も怒ったりしねえよ。ここにはお前の味方しかいない。もう我慢すんなよ。誰にでもいくらでも頼っていい、甘えていいんだぞ。大抵の事なら我儘も聞いてやるし、ずっと傍にいてやるから。だからお前一人で何でも背負い込むな。みんな、お前を本当に大事に思ってたんだから。その事をちゃんとわかってくれ。俺らを信じてくれ。頼ってくれよ、な？」

「・・・うん、カイ、ありがとう」

またしても泣き出したエルメスは、ちよつとだけ前のエルメスに戻った気がした。とりあえず、理詰め&洗脳作戦第一段階はクリアだ。この調子で毎日言ってるだろう。

「ミナ、俺たちがお前を心配するのをお前が気にする必要はねえんだからな。俺らが勝手に心配したくてしてんだから。俺らは好きでやってんの。だから謝んな」

「う、うん」

「なんかあつたら誰でもいいから捕まえて話せ。その為に俺らは傍にいるんだからな」

「うん」

「俺たちは絶対にお前を裏切らないから、信用してくれ」

「うん」

「ミナ、俺たちはみんなお前の味方だから。お前と一緒に生きるって誓っただろ。俺は・・・いや。とにかく、わかったな」

「う？ うん。俺は、なに？」

「なんでもねえ」

「気になるよ」

「気にすんな」

「気になる!」

「うるせえ」

「きーになーるー！」

「うるせえつつつてんだろ！」

うつかり口を滑らせたせいでエライ食いつきようだ。どうしよう、うぜえ、叩きてえ。でも今は我慢だ。耐えろ、俺。

しかし、どうしよう。言いたくねえ。でも言った方がいいんだろ
うか、いや言いたくねえ。俺絶対恥かくし。でも、もし言ったらエル
メスが元気になるならちよっとくらい恥かいてもいいか、そう思っ
た。

「ハア、いいか。一回しか言わねえ。二度と言わねえからな」
「うん」

「俺はお前が大好きだよ。お前を大事な友達だと思ってる。大事な
家族だと思ってる。お前が居ななきゃ俺は生きていたくない。お前に
とってのアーサーがそうであるように、俺に、俺たちにとってお前
がすべてだ。俺は、世界で一番お前が大事だ。だから、えーと、あ
ー……まあそういうことだ」

なんとか頑張ってた言ったら、エルメスはキョトン顔してる。周りの
の奴らがクスクス笑ってる。キルシュに至っては指さして笑ってる。
チクシヨ、アイツ後で撃つ。

クソ、やっぱ恥かいた。頼むから俺のこの恥に見合うリアクシヨ
ンをしてくれ、と思ってたなら、エルメスは突然泣き出した。

アレ、なんで？　なんで泣くの？　って内心パニックに近いくら

い慌ててたらエルメスが抱き着いてきた。

「ありがとう、すごく嬉しい。私もカイが大好きだよ。私もカイは大事な家族だつて思ってるよ。カイ達が居なかつたら生きてたくない、生きてられないよ。傍にいてくれて、本当にありがとう」

どうやら喜んで頂けたようだ。なんとか俺の恥に見合う反応を戴けて超安心した。エルメスの頭を撫でてたら、思った。俺はスゲー頑張つて言つたけど、コイツは普通に言えるんだなつて。

俺は嬉しかったし、エルメスも嬉しいつて言ってくれた。エルメスが喜んでくれるなら、俺ももうちょっと頑張つて、普通に言える努力を試してみようと思つた。

でも、もう二度と人前で言わねえ。アイツらのリアクションが心底ムカつく。あークソ、リオの奴いつまで笑つてんだコノヤロー。アイツも撃つ。

どうでもいいけど、コイツ腕力強ええ。さすがアーサーの眷属だ。苦しい。え、プロレスじゃねえよな。どうしよう、突き飛ばしていい？ いやでも我慢だ、耐えろ、俺。とか思つてたら、急にエルメスが離れるもんだから何故か知らんがむせた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「・・・なんでもねえ。つかまあ、兎に角そう言う事だ。家族なんだから言いたいこと言つていいんだぞ。それが普通だろ。もう一

人で悩むなよ。わかったな」

「うん、わかった！　ありがと！」

そう言っただけで笑ったエルメスの顔は太陽みたいだった。少しだけ状況は好転したようだ。話が終わった後にガードが話しかけてきた。

「何となく今まで副長とエルメスの関係をうまく形容する言葉って見つからなかったんだけど、今日の話聞いてじっくりくるのを見つけたよ」

「あ？　なに？」

「兄妹、これが一番合ってる気がする。確実に友達以上で恋人以上に信頼してる関係なんて、兄妹しかないじゃん」

それを聞いた全員が「それだ！」って満場一致で納得してた。なんか、俺的にもしっくりきた。エルメスは俺の家族、妹。思わず納得。道理で手間がかかる。道理で保護者のような気分にもなるわけだ。でも、妹なら手間をかけて、保護して当然。

このままエルメスが元気を取り戻して、穏やかにアーサーを待てるようになればいいと思う。アーサーが帰って来た時に、前のエルメスみたいな笑顔で迎えてやれたらいい。そうなるように、俺も頑張ります。

以上

FILE - 5 Crybaby 「泣き虫」(後書き)

登場人物紹介

ミラーカ

故人。アーサーの親友。先の戦争にて戦死。
アーサーとエルメスを守るため魂を引き替えに二人を守った。
最後まで二人を愛し死んでいった非業の美女。
エルメス以上にアーサーの理解者で、苦楽を共にした竹馬の友。

北都

故人。エルメスの弟。先の戦争にて戦死。
極度のシスコンでアーサーにすら牙をむくほどの狂犬。
クリシュナだけは仲良し。
最後まで姉と共に戦い、励まし奮起させた強い子。

ボニー&クライド

アーサーの支配下の吸血鬼カップル。眷属ではない。
先の戦争から行方不明。戦争当日に拳式予定だった。
ボニーの好きな言葉 永世中立
クライドの好きな言葉 行雲流水

LETTER 1 Cai 「カイ」

拝啓 アーサーさん

初めてお手紙書きます。なんだかわからないけど、急にアーサーさんにお手紙を書きたくなりました。

アーサーさん、あなたが消えた後、今日まで色々ありました。今はカイ達とシャンティの所にいます。あ、カイっていうのはカルコの事です。今は私もエルメスって名乗ってるんですけど。あ、ていうか勝手にアーサーって名前変えてごめんなさい。

アーサーさんが居なくなっただ後、私はジュリオさんを殺そうとしました。ジュリオさんが心の底から憎くて、彼をこの世から欠片も残さず消滅させてやろうと思いました。

でも、カイがジュリオさんを殺しました。私がジュリオさんを殺したら、カイが私を殺さなきゃいけないからって。今になって思うと本当にその通りで、“ミナ”の呪いの連鎖を止めようと思っただのに、また自分で新しく呪いの連鎖を繋げようとしてたって気付いて悲しくなりました。

私は本当にバカです。どうしようもないくらいです。今日カイに言われました。お前は悪くないって。そう言われるまで、私は全部自分が悪いんだって思っていました。今でもちよっと自責の念はあり

ます。でも、私に味方してくれる人がいっぱいいるんだってわかって、早く元気にならなきゃって思いました。

今日、カイに言ってもらったことを思い出してたら、クリシユナが殺された時の事を思い出しました。今日カイが言ってくれたようなことを、私はアーサーさんに言ったなあって。シャンティの時もそうだったなあって。

どうしてでしょうね。人にはそういう風に言えるのに自分の身にそう言うことが降りかかってくると、言われるまで気付きもしないんです。本当バカみたいですよ。

だけど、そう言ってもらわなかったら今こんな風に思えませんでした。本当にカイやランスやガラード、シャンティ、みんなのお陰です。私本当にみんなが居なきゃ生きていけません。みんなのお陰で生きてます。みんなのお陰でアーサーさんを待てます。

あの日、私は全てを失いました。でも、その代り新しく家族が出来ました。すごく悲しいけど、でも私は幸せ者です。

だけど、すべてを失ったのは私だけじゃありません。カイだって大事なものをたくさん失いました。カイはジュリオさんを殺してしまいました。自分の都合だって言ってたけど、きつと今でも後悔してるんじゃないかなって思います。

だって、カイは本当にジュリオさんが大好きだったんですよ。ジュリオさんを撃った時のカイの顔が忘れられません。凄く苦しそうで、今にも泣きそうで、このまま自殺しちゃうんじゃないかって思

うくらい、辛そうでした。

ジュリオさんが砂になって死んだ後、ごめんなさい、ごめんなさいって何度も謝ってたんです。

それなのに、俺の事はどうでもいいっていうんです。私の為にカイはいつも一生懸命です。カイにはいつもたくさん迷惑かけて、すごく気を遣わせてしまいます。私はもう今は前みたいにできません。もう少し時間が経たなきゃ無理です。

カイはジュリオさんを失いました。ヴァチカンを失いました。今までの人生を壊されました。信頼を裏切られました。大事にしていたものをたくさん失いました。

だからでしょうか。今カイが取り戻せるものは何もありません。だから私だけでも元に戻そうって頑張ってくれてるのかもしれない。それは私にとってすごく嬉しいけど、同時にとても悲しい。

カイはあの時、ジュリオさんを撃った後、死んでしまったかっただと思います。カイにとってジュリオさんは全てでした。私がアーサーさんを殺すようなものです。もし、私がカイと同じだったら、誰がなんて言っても絶対死んでいると思います。カイみたいに踏みとどまって、私まで引き留めるようなことは、私にはできません。とてもじゃないけど、できません。

カイはすごく強い人だと思います。きつとすごく罪悪に苛まれてると思うんです。きつとすごく苦しいはずなんです。それなのに、

私とアーサーさんの為に、私に生きると言いました。私とアーサーさんの為に一緒に生きるって言いました。

アーサーさんが待ってって言うんだからちゃんと待ってるって言いました。一緒に待っててやるからって言うてくれました。お前を一人にはしないからって言うてくれました。

カイがそう言うてくれるから、私は待つことが出来ます。でも、カイはカイですごく苦しいはずなのに、いつも私の為に気を遣って私の為に苦しそうな顔をしています。今のカイは私の為に生きてます。私のせいで、生きてます。

それが良い事なのか、悪い事なのか、よくわかりません。

アーサーさん、私は災厄のような女でしょうか。今、私は決して幸せだとは言えません。私の周りの人たちも、幸せだとは思えません。カイはただでさえ苦しいのに、私のせいで余計に苦しんでいます。私は災厄なのでしょうか。

今私の周りにいる人たちは、みんな私を心配してくれています。心配させてしまっています。カイは好きでやってるんだから気にするなって言います。そんなこと言われても気にしちやいます。そうですよ？

だけど、心配かけるのが嫌ならしつかりしろよって話ですよ。まあ、そう言う風に思えるのもカイ達のお陰なんですけど。

今日の事で、クリシュナの言葉を思い出しました。何もかも背負っていつまでも苦しいって言うてちゃだめだよって。理不尽は存在して当然だって、できることを考えなさいって。

本当にその通りだなんて思います。こんな酷い理不尽がこの世に存在するのかと、今でも恐ろしく思います。だけど、アーサーさんは怒るかもしれないけど、私はジュリオさんを許してあげられたらいいなって思ってます。

ジュリオさんを恨んでしまったら、100年の呪いは更に100年続くでしょう。それだけは、避けたいんです。呪いを絶とうとしてくれたカイの為に、呪いを生んだことを後悔していたアーサーさんの為に、自分の為に。

私、前にクリシュナに言われて思ったんです。クリシュナの様になりたいなって。彼は現実主義者でした。強く優しい人でした。どうしようもないことを、いつまでもクヨクヨ考えているような人ではありませんでした。自分の為に、自分が大事に思う人の為に、いつまでできることを考えて、できることをする人でした。

今の私にできることは、みんなの思いに応えられるようにすることだと思います。カイもみんなも、私の為に一生懸命になって励ましてくれたり心配してくれたりしてます。でも、いつまでも心配がけたくないし、これ以上カイに苦しんでほしくないから。

だからって、無理に明るくふるまうのも違うかなって思いました。多分それも見抜かれちゃってるんでしょうし。だから、泣きたい時

に泣く努力をしてみます。

アーサーさんに前に言いましたよね。泣きたい時に泣けるのも強さだって。自分で言っというて忘れてるんだから本当私バカです。

とりあえず、あんまり考えないように頑張ろうって思います。ミラーカさんとクリシユナと北都はもう、戻って来ません。その事を考えるだけで、胸が苦しいです。だけど、今更どうしようもありません。後悔しても仕方がないんです。後悔して戻ってくるわけじゃないから。

カイに言われました。私を守って死んでいった人たちの為に、感謝はしても謝罪や懺悔をするなって。本当、そうだって思いました。私のしていたことは彼らに対する冒涇でした。自分を恥ずかしく思いました。

だから、これからは彼らの死を悼んで、彼らに出会えたことを感謝して生きて行けるように頑張るつもりです。本当はすごく辛いけど、自信ないけど、でもその方がやっぱりいいと思うし、そうすれば彼らはずっと私の心の中で笑ってくれると思うんです。

今、私がこんな風に思えるようになったのは、カイやみんなが支えてくれるおかげです。本当に頭が上がりません。

カイは言いました。私が世界で一番大事だと。大事な家族だと。

その言葉で、私の苦しみの世界は一気に壊れました。

あれほど自分を責めていたのに、誰かに必要とされていることがわかっただけで、赦されたような気がしました。本当に心の底から嬉しかった。そう言う風に思ってくれる人がこの世に存在することが死ぬほど嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。ていうか、泣きましたけど。そりゃ泣きますよ。泣くでしょ、普通に。

カイはまるでヴィルギリウスのように私を地獄から導いてくれます。

私は地獄をさまようダンテです。地獄の悪魔と亡者に怯えて、迷って、泣きながら出口を探す憐れな吸血鬼です。今日の事がなかったら、地獄の恐ろしさに目を閉じて耳を塞いで、隣で導いてくれるヴィルギリウスの存在にさえ気づかなかったかもしれない。

カイは私の道標です。彼が居なかったら生きていきません。きっと、ずっと地獄から出ることが出来ないでしょう。だけど、カイがいてくれるなら、いつか地獄から抜け出して、煉獄を上って、ベアトリーチェに会えると思うんです。

アーサーさん、早くあなたに会いたい。アーサーさんのいない世界はとても怖くて寂しいです。アーサーさんに会って、その声を聴きたい。色んなことを話して、笑って、怒ってほしいです。

でも、その時に私も前の私に戻っていられるように頑張ります。今のままの私でアーサーさんに会うのは、アーサーさんに申し訳が

立ちません。

アーサーさんはきつと、私が生きているかどうかも分からずに不安だと思います。状況もわからずに今頃苦しんでいるんじゃないかと心配です。だから、帰って来た時に安心できるように、あなたの居場所はここにちゃんとあるんだとわかってもらえるように、私とみんなで、笑顔でお帰りって言います。

ずっと、ずっと、待ってます。あなたが約束を破ったことはないから、ずっと信じて待ってます。

だから、私が笑顔でお帰りって言ったら、ただいまって笑ってください。

また、何かあったらお手紙書きます。でも、デスクの引き出しがいっぱいになる前に帰ってきてくださいね。待ってますから。

敬具

FILE 6 Change 「気分転換」

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

明けましておめでとう。今年もよろしく。つかランスに言われるまで忘れてた。もう正月じゃん。ていうか、コイツら正月らしいこと一切しねえの。

「あたしらスラム育ちだし？」

「どうでもいいよな」

「わかんねえし」

「ていうか、仕事忙しいし」

こういうところは共感できるな。実をいうと俺もイベントとか大嫌い。面倒くせえもん。実は世の中で一番嫌いなイベントがクリスマスだったりする。あの浮かれっぷりが腹立つ。

去年戦争まで起きたせいでより嫌いになった。クリスマス死ぬ。キリストもう起きてくんない。てめえの誕生日なんざどーでもいいんだ。知ったこっちゃねえ。

正月なんてどうでもよくて、仕事が忙しいシャンティ達は今日も仕事だったみてえだ。つーか、言うの忘れてただけけど、シャンティあれで社長だ。部下はほんとこ身内だけらしいけど。何やってるかっつーと人材派遣会社なんだと。

なんで人材派遣かって言うと、ここでまたアーサーが絡んできやがる。

アーサーは自分たちを拾って人並みの仕事を与えてくれた。誰だってその機会さえあれば、才能のある奴だっているし、誰かの役に立てる。特にスラムの奴らなんてその最たる例だ。仕事ができないわけじゃない。機会がないからできない。仕事がないからできない。

だからいずれもつと会社をデカくして、そういう奴らに働く場所と、能力とやる気を生かせる場所を提供したいんだと。アーサーがそうしてくれたようにな。

そう言うのを考えると、アーサーってさあ、蒔いたのって呪いの種だけじゃないんじゃないかねえの。良い方の奴も蒔いてんじゃない。まあ、それをシャンティたちがこれからどう育てるかっつのが課題だけど、なんとかなんだろ。

シャンティからその話聞いてエルメスは嬉しそうにしてたぞ。いねえのに喜ばせられるってなんだよ。もう、なんなんだよ。なんか腹立つ。別にいいけどよ。

そっからまた話が正月の事に戻ったんだけど、正月だったのに実

は俺らは密かに頭を抱えてた。

血のストックが底を尽きかけてた。以前は餌なんて喰いきれない程に手に入ってたから、ぶっちゃけ余裕ぶっこいてたっつーか、現実ナメてた。

その辺の奴殺して持ってこようかとも考えたが、それじゃシャンテイ達に迷惑がかかるだろうし、今妙な騒ぎを起こしたら逃げた意味ねえしな。

本来なら心配かけんのが嫌だったんだけど、手に詰まったもんだから、エルメスに相談することにした。

「うーん、私達が前にインドにいた時の入手先って、病院か大学の医学部から輸血用とかを盗んでただけだ」

「大学？」

「そう。クリシュナが大学にいたから」

「吸血鬼なのに大学生!？」

「ううん、博士。准教授」

「マジか」

吸血鬼に戸籍がある意味もよくわかんなかったけど、人格者でしかもインテリってクリシュナさんはどんだけスーパーマンだよ。よくエルメス相手にしてこれたな。

いや、もしかすると、だからこそバカなエルメスに惹かれたのか？ 想像を絶するバカっぷりが面白かったとかならまだ納得できるけど。

いや、今はそれはいいとして、病院は盲点だったな。

「なるほどな。じゃあ今夜あたり盗みに行くわ」

「私も行く!」

「いや、お前は留守番してる」

「なんで?」

「お前連れて行くと必ずと言っていいほど不測の事態が起きるから。最早そのこと自体は不測じゃねえ」

エルメスはブーブー言ってたけど、シュヴァリエ全員が俺に着いたもんだから諦めたようだ。

シャンティにデケエ病院の場所を聞いて、俺とガルフとリオとベディとで行くことになった。他の奴はエルメスと留守番だ。

「カイ、誰かに見つかったても殺しちゃダメだよ?」

「言われなくてもわかってますが」

「隠密行動の時は慎重にね?」

「だから言われなくてもわかってますが」

「好き嫌いしちゃダメだよ? でもA B型は数が少ないから取っに来ちゃだめだからね?」

「だから言われなくてもわかってるっつってんだろーが!」

「もう、すぐ怒るんだから。ベディ、ナースさん見つけてもついでつちやダメだからね?」

「な! ちょっと待って! なんでエルメスが知ってるの!?!」

「あ、ワリ、俺が教えた」

「なんで副長は変なところで口が軽いんだよ!」

「ハハハハハハ」

「また笑って誤魔化す！」

そう言うわけで、俺ら4人でプラプラ歩きながら病院に向かった。車で行ってナンバー控えられたりしたらダラーし。走りや車よりはええし。

ガルフ「なんかこういうの久しぶりじゃね？」

ベディ「しかも盗みに入るだけって超平和じゃね？」

リオ「つか手ブラとか初じゃね？」

ガルフ「つかクーラーボックスとか持ってこなくてよかったわけ？」

俺「あ、忘れてた。戻んの面倒くせえから途中で買ってたか」

ベディ「はあ？ 今何時だと思ってるんだよ」

俺「知らね。じゃあそれも病院で盗みゃいいだろ」

正月ボケしてるだのなんだの文句を言われたが、帰りの短時間で腐るわけねえだろつつつて結局そのまま病院に着いた。で、やっぱり病院に潜入ついたらコレだろ。

俺「俺超カッコよくな？ 超似合ってるね？」

リオ「似合いますぎて逆に怖ええ」

ガルフ「マッドサイエンティストにしか見えねえ」

ベディ「コレ持って帰っていいかな」

俺「実用の機会ねえだろ。つか、どんだけお医者さんゴッコやりてえんだ、てめーは。いっそ引くわ」

ベディ「うるせーな！」

俺「てめーがな」

素敵に白衣を着こなした俺らは、無線を繋いで散開してそれぞれ血を探しに行った。しばらくウロチヨロしてそれっぽい部屋を見つけたらビンゴ。早速血を持って部屋から出ようとしたら、ガルフから無線が入った。

ガルフ「お、俺どうしよう」

俺「あ？ どした？ 今どこだ？」

ガルフ「西棟の壁に掴まってる」

俺「は？」

勿論無線はみんな聞こえてたから、ソッコー外に出て西棟に行ったら4階の壁にガルフがぶら下がってた。なにやってんのアイツ。つかウケるんだけど。

俺「ギャハハハ！ お前何やってんの！」

リオ「何それ？ 楽しい？」

ガルフ「笑い事じゃねえんだって。助けるよ！」

ベディ「飛び降りりやいいじゃん」

ガルフ「・・・それもそうだな」

結局ガルフだけ成果を得られなかったんだけど、結構収穫はあったからそのまま帰りながら何があったのか聞いてみた。

「入った部屋自体は良かったんだよ。準備室みてーなさ。で、血を探してたら人が入って来たから、慌てて外に出て隠れてたわけよ。で、いつまで待っても出ていかねえから何してんだろと思ったら、医者とナースがイチャついてやがった」

白衣4人組が深夜のスラムで大爆笑だよ。そしてそれを羨ましが
るベディ。だからお前どんだけだよ。つーか、エルメスいなくても
不測の事態起きてんじゃねえか。もしかしてトラブルメーカーって
感染症か？

ヒーハー笑いながら屋敷に着いたら、そのままの格好で帰ったの
忘れててコスプレだのなんだの笑われた。

「似合うだろ？」

「似合ってるけど、金髪メガネで白衣つて3つもクリシュナと共通
点あるのに、どうしてカイはそんなに邪悪なの？」

「てめー、クリシュナさんと比較してんじゃねえよ。あの人と比較
されたら大概の奴は邪悪だろ」

「他の3人はカイほど邪悪じゃないよ」

「うるせえ」

結局屋敷に帰ってからマッドサイエンティスト呼ばわりされた
んだが、思いついてエルメスに白衣を着せてみた。

「似合わなさすぎだろ」

「そんなことないよ。保健室の先生くらいには見えるよ」

「どのへんが？ 袖余ってるし、なんか親父のシャツ着たガキみてえ」

「せめて大人にしてよ！」

「じゃあスゲエ間抜けな助手」

「間抜けは余計！」

「いや、不可欠」

エルメスはキーキー言ってたが、他の奴らは「あー」つつて納得してた。コレとっついてアーサー帰って来た時にも見せてやる。

あーでも、なんか今日は久々笑ったなー。結構楽に血も手に入っ
たし、ずっとこんな感じで毎日楽しけりやな。なんかいい気分転換
になった。俺だけ気分転換するのも悪いし、次はエルメスも連れて
行ってやるか。っーかたまには外に連れ出してやんねーとな。

「じゃあ、その時私はナースさんだね！」

「お前にだけは看護されたくねえな」

言いながら思わずベディを見たら、なんか打ちのめされてた。何を想像してんだ、何を。なんかバカばかりだな。まさかバカも感染症か？

いかにも間抜けそうなナースエルメスはアーサーに献上してやる。楽しみにしてる。

以上

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日早速エルメスを外に連れてってやったんだが、なんかスゲー疲れた。今度は別の奴に付き合わせる。もう俺は一緒に出歩きたくなえ。

「なあエルメス、今日どっか行かねえ？」

「どこかって？」

「どこかだよ」

「……行かない」

序盤からエルメスにフラれた俺にみんなは大爆笑だよ。いきなり可哀想な俺。まあ、ノープランな俺も悪いけど。つーか本当はどこかなんてどうでもいいんだけど。

「うるせえ。俺が行くつつたら行くんだよ。さっさと支度しろ」

「横暴！ ていうか、カイが行きたいところあるんでしょ？ どこに行きたいの？」

「別に」

「別につて……意味わかんないよ。行きたいの？ 行きたくない

の？ どっち？」

「むしろお前一人でいいから出かけてこい」

「全然意味わかんないよ!？」

「うるせえ、さっさと支度しろ・・・ああ、もうそのままでもいいや、面倒くせえ」

「え!？ ちよ、うあ!」

で、無理やりエルメスを連れ出したんだが、さすがにノープランだ。さて、どうしようと考えてたら、気付いたら後ろからついてきてたはずのエルメスがいねえ。早速迷子。

あーマジかよ。屋敷出てまだ10分だぞ、ありえねー。渋々来た道に戻ったら、アイツ、スラムの孤児に捕まってた。

「ごめんね、お金持ってる人とはぐれちゃって何も持ってないの」

俺は金ヅルか。飛び蹴りしたい衝動を何とか抑えて、エルメス引き摺ってスラムを抜けたところでアイツが離せって暴れるから離してやった。

「もう！ 扱いがヒドイ!」

「じゃあはぐれんな」

「カイが歩くの早いんだよ！ 勝手に連れ出しといて一人で行っちゃうから!」

「お前が遅いんだよ。ダックスみてえに足短えから」

「ヒド・・・それでもシユヴァリエなの？ 紳士なの？」
「役職は一応シユヴァリエだが、残念ながら紳士じゃねえ」
「それを偉そうに言う人初めて見たよ」
「っーかどこ行こっかなー。どこ行きてえんだ？」
「こっちのセリフだよ！」

キャンキャン吠えるエルメス無視して、適当にプラプラしてたらなんか大通りに出て、そしたら急に目の前にあるシヨッピングモールに行きたいとエルメスが言い出した。

「ここテロ現場！ 今どうなってるのか見たい！」

ああ、例の。エルメスが一人で乗り込むと言う暴挙を犯したって噂の。まあいいかと思って中に入れてしばらくウロついてたら、またしてもエルメスがいねえ。もう俺、帰っていいかな。アイツ置いて帰っていいかな。

探すのが心底面倒くさかったから、企業の良心に頼ることにした。

ピンポンパンポーン

「ナリマン・ポイントからお越しのエルメス・ペンドラゴン様、エルメス・ペンドラゴン様。お連れ様がお待ちです。サービスカウンターまでお越しく下さい」

アナウンスを流して貰ったら、アイツ顔真つ赤にしてソッコ走
ってきやがった。マジ面白れえ。アイツ最高。

「もー！ もー！ ヒドイよ！ 恥ずかしいでしょ！」

「アハハハ！ お前最高！」

「最悪だよ！ もー！」

顔を真つ赤にして怒るエルメスに俺は腹抱えて笑っただけど。
しかし、コイツの迷子癖は本当に何とかなんねえのか。アーサー、
本当に苦労したんだな。なんかしみじみと同情する。

さて、どうしたもんかと考えてたら良い事を思いついた。

「エルメス、ペットショップ行くぞ」

「え？ 蛇買うの？」

「どっから蛇が湧いて出た？」

「だってカイ蛇っばい」

もうコイツの思考は意味わかんねえよ。何？ 蛇っばいって。最
早ツッコむ気力も起きねえよ。アーサー始終こういうのに晒されて
たの？ 本当気の毒だな。本当心底同情する。だから今は俺に同情
しろ。

「わけわかんねえ事言ってるな。動物なんていらねえよ」

「じゃあ何？ 見たいの？」

「いや、買い物」

「なにを？ ペットなんていないじゃん」

「いや、うるせえ犬が一匹いる」

そう言ったらエルメスは少し考え込んで、すぐにハツとした顔をした。

「まさかと思うけど私のこと言ってるの？」

「そーだけど？」

「私犬じゃないもん！ 犬嫌いなのに！」

「キャンキャンうるせえよ。室内犬かてめーは。オラ、二度と迷子なんねえように首輪買ってやつからさっさと来い」

「ヤダよ！ バカじゃないの！」

「お前がな。何度も迷子になりやがって。わざわざこの俺が買ってやるんだから有難く受け取れ」

「有難迷惑だよ！」

「迷惑はお前な」

あまりにもエルメスがキャンキャンうるせえから首輪は諦めた。まあ折角デケエとこ来たんだし買い物でもさせてやるうと思つて聞いてみた。

「お前はどっか行きてえとことか見てえとことかねーの？」

「えー？ うーん、うーんとねー・・・」

「あ、俺煙草吸いてえ。バルコニー行くぞ」

「結局カイの都合なんだ・・・」

不服そうにするエルメスを迷子にならねえように引き摺ってバルコニーのベンチに座った。煙草吸ってたらなんかエルメスがじーつと見てる。

「なんだよ？」

「何歳から吸ってるの？」

「12」

「不良・・・ていうか、カイって本当は何歳なの？」

「ヒミツ」

「ケチ！ でも、アーサーさんが私より一回りは上って言ってたっけ・・・ん？ じゃあ40歳くらい！？ なんて落ち着きのないアラフォー・・・」

「黙れ小娘、生意気だ。お前もアラサーにしてはガキみてえじゃねーか」

「アラサー言うな！」

そーいや、俺が同い年だったからこいつは馴れ馴れしくなっただった。なのに、年上だと判明したのにいつまでも馴れ馴れしいのはどういうことだ。そっちはいいのかよ。エルメスは本当に意味わからん。つーか一日に何回意味わからんって感想を述べさせる気だ。いい加減しつけーぞ。

「そっいえばミラーカさんが割った窓ガラスとか全部綺麗になつたなあ。従業員通路とかどうなってるんだろう？」

「従業員通路？」

「そう、そこで私爆破されちゃって。アーサーさんが助けてくれたんだけど、クリシュナとアーサーさんに怒られちゃった!」
「……………だろうな」

アーサー……………かける言葉も見つからねえよ。本当に苦労したんだなあ。俺もそんな苦労をするんだろうか。あーヤダヤダ。

「でも、私もまた血も力もなくなっちゃったから本当に気をつけなきゃなあ」

しみじみと日が暮れた街を見下ろしながら呟くエルメス。紫色の空はあの日の夜明けみてえだ。

あの日大事な仲間も何もかも失ったエルメスは能力こそ覚醒したけど、血と共に力は失ってしまった。教訓は最高の教師だと言うが、教訓と呼ぶにはあまりにも酷だ。

でも、だからこそわかってもらう必要がある。

「そーだぞ、お前。今またお前が単独で戦うようなことしたら、今はアーサー程の奴はいねえんだから、俺らの命と引き換えにお前助けなきゃいけねーんだからな」

アーサーとの再会を果たす前にエルメスを死なせるわけにはいかねえし、それに俺らが誰か一人でも死んじまったら、エルメスは再び地獄の底に突き落とされる。

勿論死ぬ気はねえし俺らも気を付けるけど、エルメスにも気を付

けてもらわねえと、思ってたんだが。

「いや、お前何笑ってんの」

「だって、カイがそんなこと言うなんて意外過ぎる」

「あ？・・・いやバカ、そういうことじゃなくてだな」

「命かけて私を守るなんてアーサーさんかクリシユナみたい！」

「喜ぶな！　ちげーつつってんだろ！　俺がそんな気持ちワリー宣言するか！」

「気持ち悪い？　ちよつと、それはあの二人に失礼じゃない？」

「あの二人はいいんだよ！　俺的に気持ちワリーの！　つーか、ちげーつつってんだろ！　面倒くせえ！　もういい、絶対え助けてやんねえ」

「えー！　ケチ！」

「ケチじゃねえ。甘えんな」

激しく勘違いしてやがる。いくつになっても甘えん坊なこのバカには、多少厳しく躰しとかねえと後が面倒くせえな。

「何でもいう事聞いてくれるって言ったのにー！　ウソつき！」

「そんなこと言った覚えはねーよ！　多少の我儘は聞いてやるつつたの！　勝手に俺の発言を捏造するな！」

「一緒じゃない」

「何でもと多少じゃ大違いだ、バカ！」

どうやらエルメスの脳と耳には自分に都合よく変換する、悪魔のようなフィルターがついているらしい。こっちが気を付けねえとウ

ソつき呼ばわりだ。

イヤ待て。それはおかしい。それは違うだろ。なんで俺がそこま
で気をつけなきゃいけないんだよ、腹立つ。

アーサー、ウマイ事エルメスを飼い馴らす方法を教えてくれ。俺
の手には負えない。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

クリシユナさんにはもちろん、アーサーにも謝罪させてください。本当にすいません。エルメスに対してそういう感情を持つことはあってはならないと思います。本当にすいません。全ては俺の責任です。

「ピーピー」

「へへ、キロちゃん可愛い！」

先日連れまわした先でエルメスはカナリアを買って帰ってきた。キロって名前は日本語の「黄色」から来ているらしい。微妙にネーミングセンスねえ。でもまあ気晴らしにはなつたみてえだし、本来の目的が達成できたならいい。俺は疲れたけど。

ガラードと二人でキロを愛でてたんだけど、ポツリとエルメスが言った。

「私の羽根ね、北都が作ってたんだけど、カナリアの羽根なんだっ

て。北都が学校で飼育係してたからって」

それを聞いてなるほどな、と思ってたんだけど、突然横で別の声が聞こえた。

「カナリアと戯れるエルメス。超萌える」

「あ？」

「どうしよう、俺エルメスの事好きかも」

そう言ってきたキルシュを思わずブン殴ってやりました。褒める。

「ウソウソ！ 冗談！ 冗談だつて！」

「てめえ、冗談でも言つて良い事と悪い事があるだよ。つかそもそんな事を冗談で言うな」

「ていうか、何も殴ることねーじゃん！」

「殴るだろ。そりゃ殴るだろ。一応あれでもエルメスは主人だぞ。

それはあつてはいけないことだ。許されん」

「副長、相変わらず厳しい・・・」

「当たり前だ」

「夢くらい見させてよ」

「夢を見るのは許すが、二度と起きてこれなくすんぞ」

「・・・すみません」

俺的には、エルメスが跪くべきはアーサーで、隣にはクリシュナさんが居るべきだ。ベきつつつても今は不可能なわけだけど、俺的にはいずれ隣もアーサーに占領して戴きたい。理由は単純。落ち着

くだろ。やっぱそうこなくっちゃんーみたいな。

今の所エルメスは隣の席をクリシユナさん以外に譲る気はねえみてーだけど。まあ正直その方があのバカどもの暴走を抑制できるから、それはそれでいい。

前にも言ったがこの屋敷の男女比率を考えると、それも心配の一つだ。ちなみに俺の心配は無用だ。俺には全っ然理解できねえからエルメスがとか他人がどうこっじゃなくて、そう言う感情が理解出来ねえ。むしろ邪魔。

そう言うわけで、キルシユの件もあつたしちよつとだけ目を光らせてたわけだ。まーそしたら、叩きゃあ埃つてのは出てくるもんだな。

この際もうランスはいい。ある意味アイツは公認だ。ガライドもいいだろ。ガライドの場合はその域スツ飛ばして崇拜まで行ってる位だ。

基本的にはほとんどの奴らは元聖職者なだけあってしっかりしてる。微妙にわかりづれえのがあのチャラ男ども。パーシーとリオ。キルシユはもうブン殴ったからいい。

アイツらは昔からチャラかつたし、隙あらばエルメスを口説こうとしてたから微妙にわからん。ある意味そっう性格なんだろうか

ら、ほつといて平気な気もするけど念のため見張ってた。そしたらまずパーシーが網にかかりやがった。

「エルっち、デートしよっか」

「ヤダ」

「いーじゃん、副長とはデートしたじゃん。今度は俺」

「強制連行されて引きずり回されるのをデートって言わないよ」

「・・・言わないな」

確かに言わねえ。引きこもりの室内犬を無理やり散歩に連れてった、の方が正解だ。つーか俺的には俺以外の誰かがエルメスの相手してくれんなら楽だから、それはそれでいいんだけど。でもパーシーは明らかに動機が不純だ。

「じゃあ俺が本当のデートしたげるよ」

「えー、いいよ」

「楽しいって」

「やだ！ 私にはクリシユナがいるからダメ！」

「俺がクリシユナさんのかわブツ！」

なんとなくそれ以上喋らせちゃマズイ気がして、パーシーに飛び蹴りをお見舞いした。褒める。

「テメエ今何言おうとした？ ああ？」

「聞くくらいなら遮んなよ！ ていうか痛いし！」

「痛みを伴わない教訓に価値はない」

「だからってそんな渾身の力で蹴ることねーじゃん！」

「渾身の一撃を食らうような真似をするお前が悪い。お前ごときがクリシユナさんの代理なんざ笑止千万。身の程を知れ」

「ご、ごとき……」

とりあえず、これでパーシーはちったあ大人しくなった。目の前で急に俺に蹴られたパーシー見てエルメスはびっくりしてたが、まあいい。どうせやるなら徹底だ。出る杭は打ち込みまくって叩き潰す。そんぐれえしねえと、バカには通用しねえ。

一方のリオは意外となかなか網にかからねえ。チャライにはチャライが、いつも微妙なところで引き下がる。さすがに以前潜入とかやらせてたせいとか、引き際が分かってるのか。

もしくは、パーシーとキルシユに俺に殴られるから気をつけるって警告を受けて警戒してるのかもしれない。まあ、それならそれでいい。むしろそれでこそ、だ。

が、アイツは人を騙すプロだ。完全に俺は油断してた。今日はエルメスとリオと二人で出かけてた。まあその時は特になんも言うてなくて、キロの餌を買いに行くつつつただけだったから放つてたんだが。帰ってきたエルメスが言った。

「カイ、どうしよう。なんか私、リオの彼女になっちゃったみたいなんだけど」

「……は？」

事の顛末はこうだ。買い物しながらリオが言った。

「エルちゃん、最近ほラーな夢とか見たりしない？」

「まだ時々。でも大丈夫だよ」

「それならよかった。なんかあったら俺にすぐ言っただよ」

「うん、ありがとう」

「俺はエルちゃんの味方だからね」

「うん」

「ずっと傍にいるからね」

「うん」

「何かあったら頼ってね」

「うん」

「些細なことでも何でも言っただよ」

「うん」

「俺の女になりなよ」

「うん……ん？」

「うん、て言っただよ」

「え」

どうもその会話の流れに騙されたらしい。エルメスはバカだからその流れでうっかり肯定の返事をしてしまったわけだ。で、困って泣きついてきた。

ある程度はわかってたけど、そんな手管に騙されるとはどんだけバカなんだアイツは。エルメスの防御力の低さには改めて落胆させられる。

でも、それを一緒に聞いてたランスとガロードは速攻リオン所言

って文句言い始めた。

「この詐欺師！ 卑怯者！」

「ライオネル様には心底失望しました」

「なにになにー？ 二人ともヤキモチ？」

「誰が！ 恐れ多いっつもの！ 俺は絶対認めない！ 絶対許さないぞ！」

「ガラーダの許可とか必要ないしー」

「なんだとおおお！？」

「まあまあガラーダ様、落ち着きましよう。ライオネル様はこんな手段でもとらないと一生相手にされないんですから。必死なんですよ」

「え、ちょ、ランス、それはヒドクね？」

「ランス良い事言うな！ その通りだ！ リオなんかエルメスから見たら使用済みティッシュだ！」

あの二人、意外に使える。エルメスの近衛に任命してやろう。しかし、リオはしぶとかった。

「ムカつくなー。でも二人が何言ってもエルメスはうんって言ったもんね。その事は事実じゃん」

バン！

「ぎゃあああ！！ 痛ええ！」

「不届き者が。恥を知れ」

「ちよ、副長！ 普通撃つか！？」

「撃つ。もしくは撃ち殺す」

いい加減しつけれから撃った。褒める。厚顔無恥な奴には近衛長官、俺が直々に説教だ。

「いいかお前らよく聞け。どうしてもエルメスを手に入れたいなら、越えなきゃいけねえ壁が3つある。まずは近衛のランスとガライド。次に長官、俺。最後に帝王アーサーだ。この壁を超えるのはまず不可能だ。どうしても越えたいなら死ぬ覚悟をするんだな」

俺の話を聞きながら、撃たれたリオに視線を注いだバカどもは大
人しく頷いた。さすが俺、超かつけえ。

ユアン 「リオ、諦める。見ろよあの番犬」

ディナ 「メチャクチャおつかねえ。ケルベロスかよ」

俺 「地獄の番犬、ケルベロス。いーねえ、良い響きだ」

ガライド 「ちようど3人だしね」

ランス 「エルメス様に近づいたら噛み殺しますよ」

エルメスの近衛部隊「ケルベロス」ここに結成。王族の親衛警備隊である近衛隊と近衛長官、もはや俺らには天職だな。

しかし、あのバカエルメスのせいで近衛長官から一気に転落する羽目になった。

「3人ともありがと。助かった」

「っーか、お前ももうちよっとしっかりしろ。アーサー泣くぞ」

「アーサーさんが？ 泣かないよお。ていうか、なんか3人とも北都みたいだねー」

言われて見れば、北都はアーサーにすら牙をむく狂犬だったな。実は北都ってケルベロスの再来？

トリス 「そういえば、ガラードは副長とエルメス兄妹みたいだったたな」

パーシー 「あれ？ てことは」

キルシュ 「副長って単なるシスコンじゃね？」

リオ 「ガラードとランスはマザコンじゃね？」

キルシュ 「やーい！ シスコン！」

パーシー 「やーい！ マザコン！」

俺 「誰がシスコンだゴルア！ ざけんな！」

キルシュ 「副長がだよ」

俺 「んな訳ねーだろ！ ブツ殺すぞゴルア！」

パーシー 「怖！ このシスコン兄貴めっちゃ怖ええ！」

俺 「テメエら・・・つかガラード、ランス！ お前らもなんとか言え！」

ガラード 「・・・うーん、別にいいかな」

ランス 「そうですね」

俺 「ナニイイイ！？」

近衛部隊「ケルベロス」は「エルメス・コンプレックス」に改名だよ。もうあり得ない。俺泣きたい。

「なんか嬉しい！ これからは3人がシスコンやってくれるんだね！」

「シスコンやるっておかしいだろ！ 職業みてえに言ってるんじゃないよ！」

「意外と天職だと思うよ」

「んな訳ねーだろ！ バカ！ もう・・・バカ！」

「んもー、すぐ怒るんだから。私にまで噛みつかないですよ。狂犬病の予防接種受ける？」

「受けるか！」

本当信じられん。あり得ねえ。なんでエルメスがノリノリなんだよ。意味わかんねえよ。天職とか言われても意味わかんねえよ。職業じゃねえだろ。

つーか何でランスとガライドは容認してんだよ。意味わかんねえよ。もう本当意味わかんねえ。

以上

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行

檻の中で餌をついばむキロを見て、泣いていた。

「私は北都から人間としての死を奪って、最後にはあんな可哀想な死に方をさせてしまった」

カナリアの羽根は北都の羽根。キロを見て北都を思い出したエルメスは、そう言って涙を零す。

エルメスは二度も北都に死なれてしまった。一度目は目の前で、二度目は自分の中で。エルメスも北都をとても大事にしていた。本当に仲のいい兄弟で、大事な弟だった。

あの日、北都は最後の一片で、エルメスの最後の砦だった。最後の拠り所だった。アーサーを失って自暴自棄になりかけたエルメス

を救ったのは北都だった。

北都が一生懸命エルメスに語りかけた。立て、戦え、みんなの思いを無駄にするな、そう言って。その言葉にエルメスは涙を拭いて立ち上がった。

あの時北都がそう言わなければ、エルメスはきっとそのまま殺されてた。アーサーを失ったという絶望、地獄にもたらされた蜘蛛の糸。

細く光るその糸は、何よりも強い兄弟の絆。北都が地獄からエルメスを引き上げた。その北都も、もういない。

再び地獄に突き落とされたエルメスに、蜘蛛の糸を垂らしてくれる者はもう、いない。エルメスはこれから自力で這い上がってこなければならぬ。俺が手を伸ばしても、届かない。地獄が、深くて深淵、底が見えない程に。

「私、お父さんとお母さんに合わせる顔がない。あの日お父さんは北都を助けられなかったことを、自分をすごく責めてた。だけど、私の中で生きてるってわかって救われたって言ってた。それなのに、私はまた北都を、本当に死なせちゃった。私はお父さんとお母さんに、なんて謝ればいいの？」

答えが、見つからない。どうしたらいい、なんて言えばいい、どうすればエルメスが救われるのか。わからない、わからない。

困惑してエルメスを見つめる事しかできない俺に、エルメスは尋ねる。

「こんなこと聞いて怒るかもしれないけど、カイは家族を失った時、どうやって乗り越えたの？」

俺にとってはもうずいぶん昔の話だ。あの頃俺はまだガキで、目の前で繰り広げられた惨劇が何なのかもよくわかっていなかった。自分の足元まで流れてきた母さんの血が恐ろしくて、ただ、泣いていた。

あの日以来、俺は泣かなくなった。泣けなくなった。それ以上に悲しい事など、今までなかったから。今こんなことになって、エルメスを見てとても悲しく思うのに、泣き方すら忘れて一緒に泣いてやることもできない。

少なくとも今こうなるまでは、それでいいと思っていた。必要のない事だと。俺はもうただ泣いていた頃のガキじゃない、強くなったんだ。そう、思ってた。

あの日、両親を目の前で殺されて殴られて気絶した。気が付いたらジュリオ様の屋敷にいて、頭が痛くて、両親がいないことが怖くて、そこがどこかもわからなくて、恐怖した。

「大丈夫だよ。ここはヴァチカン」

「ヴァチカン？」

「神様のいるところだよ」

「神様が住んでるの？」

「そうだよ。これからは君をずっと神様が守ってくれる。だから、大丈夫。怖くないよ」

「だいじょうぶ・・・」

大丈夫、そう言ったジュリオ様の言葉に安堵した。その言葉はガキの俺に、お守りの様に響いた。

夢を見る。あの日の夢、怖い夢。飛び起きる度に呟く。

大丈夫、大丈夫、ここには神様がいるから、大丈夫。神様が守ってくれるから、大丈夫。

まじないのように、呟く言葉。

しばらくして、ガルフやペレアス達も屋敷にやってきた。それからも少しずつ増える、同族。自分の身に起きたことを知らない奴も、知っている奴も、理解していない奴も、支え合った。同じ苦しみを分かち合う、兄弟のように。

その中で俺は一番年上で、誕生日も一番早かったから自然と長兄のような立場になっていく。

しっかりしなきゃ、コイツらを守ってやらなきゃ、俺は兄ちゃんなんだから。大丈夫、神様が見守ってくれてる。大丈夫、神様が頑張れって言ってくれる。大丈夫、俺には神様がついてる。

自分に、言い聞かせた。

「カルロがいつもみんなを引っ張ってくれているから助かるよ。カルロはえらいね」

「はい、ジュリオ様。ありがとうございます」

ジュリオ様に褒められるのが、嬉しかった。

10歳になって、初めて銃を握った。構えて、標的に照準を定めて引き金を引いた。衝撃、硝煙の匂い、破裂音。初めてだったのに、弾は標的に命中した。

「すごいね。カルロは才能あるね」

甘い響き。もっとジュリオ様に褒められたい。それから俺は銃の訓練に没頭するようになる。

連続して撃てるようになったら褒めてくれるかな。命中率を上げたら、早撃ちができる様になったら、色んな銃を使いこなせたら、褒めてくれるかな。

ただ、ただ、ジュリオ様に褒められなくて、それだけの為に銃の腕を磨いた。そんな幸福な少年時代は、終わりを告げる。

14歳の誕生日を迎えたその日に、ジュリオ様は言った。

「カルロ、君は本当に優秀だ。俺の仕事を手伝わない？」

「仕事、ですか？」

「そう、エクソシスト。カルロがいてくれたらきつとみんな助かるよ。カルロは才能あるから、困っている人の役に立てる。俺を助けると思つて、ね？」

ジュリオ様を助ける、俺が、ジュリオ様の助けになる。大人になったみたいで、認めてもらえたような気がして、嬉しかった。

初めて出陣した戦場で、殺すべき相手は人間だった。エクソシストは悪魔を祓う仕事なのに、なぜ、人間を？ 疑問に思う。俺の質問にジュリオ様は笑って答えた。

「いいんだよ、大丈夫。異教徒は人間じゃないから、殺していいんだよ」

大丈夫という言葉に、初めて違和感を感じた。震える手で、引き金を引いた。初めて、人を殺した。殺した女が死にゆくさまを見て、母さんを思い出した。

俺のしたことは、母さんを殺した人間と同じことなんじゃないか。父さんと母さんはカトリックだったけど殺された。宗派の違いに何の意味があるのか。

神を、疑った。

でも、次第に麻痺していく「正常」な感覚。破裂音と硝煙の匂い。それは人の感覚を麻痺させるものだ、後から知った。

その後、精鋭部隊「死神」が組織され、その隊長に就任し、以前よりも圧倒的に活動の機会は増える。今まで何人殺したかなんて、数える必要もない。数なんて、意味はない。ただ、ジュリオ様の為に、ただ、仲間を守るために、敵が邪魔だから、殺す。

大丈夫、俺のしていることは悪じゃない。大丈夫、俺は、隊長なんだから。大丈夫、俺はなんだってやれる。

子供の頃から変わらない、大丈夫、の祈り。その祈りが、ある日突然、嫌いになった。

「ラルフ！ しっかりしろ！」

「隊長、すいません・・・」

「大丈夫だ、すぐ助けが来るから！」

仲間の一人が撃たれて重傷を負った。

「狻下！ 救援の要請をお願いします！ ラルフが撃たれました！」

「カル口、今からでは間に合わない。諦めるんだ」

「諦める！？ このままではラルフが・・・」

「大丈夫、神に召されるんだよ。ラルフは天国に行ける」

ジュリオ様の言った通り、ラルフは天に召された。

大丈夫、大丈夫、大丈夫って、どういう意味だったっけ。助かるから、大丈夫？ 死ぬから、大丈夫？ 天国に行けたら、大丈夫？

死んじまえば、同じじゃねえか。なにもなくなる。全然、大丈夫じゃねえ。

祈りを、やめた。

そして運命は変わる。

「ラルフみたいなことが今後起きないように、洗礼を受けてもらう。大丈夫、ちゃんと人間には戻してあげるよ。約束する」

神を疑った報いか、俺は吸血鬼になった。いつかは人間に戻れる、その約束にすがって。

ラルフが死んでしばらくして、ジュリオ様は赤ん坊を連れて来た。

「カルロ、新しい兄弟だよ。この子の名前はジョヴァンニ。カルロ

が面倒見てあげて」

手渡された赤ん坊は俺を見て笑った。血に濡れた、人でなくなつた人殺しの腕の中で。

兄弟と言つても俺にとつては子供と言つてもいいほどの年齢差。俺も普通の人生を歩んでいたら、子供がいてもおかしくねえよな。そう思つて腕の中のガライドの笑顔を見て実感した。

これが、命。

可愛いな。この子も、人殺しになるのか。人殺しなんかさせたくねえな。

俺の願いを、運命は聞き入れない。呪われた存在の祈りを、神は聞いてくれない。

俺の指導でメキメキと銃の腕を上げたガライドは、やはり戦線に投入される。初戦を終えたガライドは、俺と同じ人殺しの目をしていた。

この子も、あの小さくて可愛かつた子も、人殺しになつちまつた。けど、せめて俺と同じ呪われた存在にはしたくねえ。

ガラードの吸血鬼化は、まだ未熟だと言う理由をつけて待ってもらっていた。

そして出会う、俺の神。エルメスによってガラードは吸血鬼化された。

エルメスを恨んだ。俺の希望を、殺した。

だが、神は言う。生きていてほしい、大事だから。生きていくれるなら、なんだっていい。それが私の願いだから。死んでほしくないから。ジョヴァンニの心は、私が守るから。

それを聞いて知る。それが、それこそが愛。

エルメスはガラードを守ると、俺に約束した。言葉の通り、愛を注ぐ。聖母のように。

ジョヴァンニは俺と同じにならずに済みそうだ。母親がいるから。

ガラードが言った。

「伯爵にすぐ泣くのはミナの遺伝か？　って言われた！」

この子には、未だ感情がある。まだ若い、世間知らずな子供。ミラーカさんの墓の前で泣くエルメスをみて、涙をこぼすガラードに羨望すら覚えた。

よかった、この子にエルメスがいて。よかった、この子に母親がいて。俺の母親は死んでしまったけど、俺が育てた子に母親ができて、運命の呪いに苦しまずに済んで、本当に良かった。

俺の祈りは、初めて神に聞き届けられた。俺の願いを、俺の神が叶えてくれた。この時になってようやく俺は、救われた。

俺のクソ暗い昔話を聞いて、エルメスは涙をこぼした。

「何泣いてんだよ」

「カイが、泣かないから」

「同情するなつつつたる」

「カイが泣かないから、私が代わりに泣くの。同情なんかじゃないよ。私はガラードのお母さんで、カイがガラードを育てたお父さんなら、私達は同じ気持ちのはずだよ」

「・・・バカな奴」

俺の代わりだと言って泣くエルメスの涙を拭いたら、俺の手を取

ってエルメスは言った。

「カイにはみんながいたから、ガラードがいたから、乗り越えられたんだね。じゃあ、私もきつと乗り越えられる。みんなが、ガラードが、カイがいるから。家族がいるから。きつと、大丈夫。みんなが私を大事にしてくれるから、大丈夫」

俺が嫌いになっってしまった大丈夫という言葉を使って、泣きながら微笑んだエルメスは続けてこう言った。

「みんなは私の大事な家族。私の愛する家族。お父さんとお母さんがどれほど私と北都を愛してくれていたか、今ならわかる。きつとこの世界に生まれたこと、それだけで幸せだと思えるほどに愛は深かった。カイのご両親もきつとそう。」

「カイがガラードやみんなを大事にして愛していたから、ガラードやみんなは苦しまなくて済んだんだね。そして今は私を大事にして守ってくれる。カイが大事にした人たちに、今私は大事にされてる。愛は、繋がっていくんだね」

エルメスのその言葉に、俺の神の愛に、あの日以来忘れてたはずの涙が、頬を伝った。

何度でも俺を救う神は、俺の涙を見て嬉しそうに笑う。

「カイの心も、愛も、ちゃんと生きてる。よかった」

こういう時、つくづく思う。アーサーは大した王様だったが、その娘も大した女だ。

親の存在というのは、偉大だ。

以上

LETTER 2 Clan 「一族」

拝啓 アーサーさん

とても悲しくて、とても驚いて、とても嬉しい事がありました。

この前、カイとお出かけして、ていうか連れまわされたんですけど。その時に金糸雀を買ってもらったんです。お店で見かけた時に北都を思い出して。

その後も、カイとランスとガロードはシスコン呼ばわりされたりして、なんだか北都を思い出さずにはいられませんでした。

金糸雀にキロちゃんって言う名前を付けて、籠の中で餌を食べているのを見ていたら、北都を思い出してどうしようもなく悲しくなりました。大好きだったのに、大好きでいてくれたのに、2回も死の恐怖を味わわせてしまって、本当に可哀想なことをしてしまいました。

それに、アーサーさんも一緒だったからわかると思うけど、お父さんとお母さんの事を思うと、胸が張り裂けそうになりました。あと7年で時効が成立したら日本に帰れるかもしれないのに、帰った時に両親になんて謝罪したらいいんだろって。

そう考えると、帰りたいけど、帰るのが怖いと思ったりしてどう

しよつもなく辛くなりました。

そしたらカイが来て、だからそのことを話したんだけど、さすがに困ったような顔をして。だけど、よく考えてみたら私だけじゃないだって思つて。シャンティも、カイ達も、みんな家族を奪われている。家族から奪われている。

でも、みんな頑張つて乗り越えている。その事に気付いて、怒られるかなつて思つたけど、カイに聞いたんです。そしたら、カイは怒らずに昔話をしてくれました。

カイの過去は、とても悲しいものでした。とても辛いものでした。とても辛い運命でした。それでも生きていられたのは、信仰とジュリオさんとシュヴァリエのみんなの存在だったみたいです。

その中でも、特にガライドの存在が大きかった。私は知らなかったんですけど、ガライドはカイが面倒を見て育てたそうです。それを聞いて納得がいきました。

私がガライドを吸血鬼化した時に、カイはすごく怒りました。本当に私を本気で殺そうとするくらいに。本当に怒っていました。

その時はジュリオさんへの忠誠とか誓いだと言つてたんです。それが嘘だとも思えませんが。多分、ジュリオさんは吸血鬼化を今のところはしないつて約束してくれてたのにつて、そう言う意味だ

ったのになって思います。

あの時言われたんです。ガードには神はいなくなったから、お前が祈りも懺悔も呪いも何もかも引き受けると約束しろって。だから、絶対にガードの心は守るって、それがマスターの責任だからって言ったなら許してくれたんです。

あの時のカイは本当に怒ってて、少し疑問に思うくらいでした。だけど、カイの話聞いてようやくわかりました。カイがガードに自分と同じような辛い思いをしてほしくなかったんだって。自分が大事に育てた子に、辛い運命を歩ませたくなかったんだって。

カイは神様を信仰してたから、吸血鬼になったことがすごく嫌だったんだと思います。辛かったんだと思います。それを私に隠していたのも、そのせい。私が友達だから、自分の本心を知られたら私が傷つくと思ったのかもしれない。相変わらず、カイは自分が辛くてもいつつ後回しです。

でも、カイの昔話を聞く限り昔からそうだったみたいです。みんなの為に頑張って、ジュリオさんの為に頑張って、ガードの為に頑張って、今は私の為に。

カイの過去はとても辛く悲しいものだったけど、カイは救われたんだと言ってました。ガードが今、苦しんでないから。私がガードに愛を注いで心を守ったからって。私もそれを聞いて凄く嬉し

かったです。

カイの話聞いて思いました。連鎖は呪いだけじゃないって。愛も連鎖するんだって思いました。カイが愛した兄弟たちが、今は私を大事にしてくれます。アーサーさんの愛した娘は、今みんなを大事に思っています。アーサーさんの救った孤児たちは、別の孤児たちを救おうとしています。

本当に辛い事があって、理不尽しかないと思っていたこの世界にも、こんなに素晴らしい事があるんですね。私はそれがとても嬉しくて、今生きていることを、今周りにいる人たちの事をとっても愛しく思いました。その事に、とても、とても、救われました。

カイは、泣かないんじゃないって泣けなかったんだって言ってました。ご両親を殺された時以上の悲しみを感じることはなかったからって。ジュリオさんを殺した時でさえ、凄く辛そうにしていたけど、泣かなかった。みんなは泣いていたけど、カイだけは泣かなかった。

だから私がカイの代わりになって泣いたら、バカな奴って言われたんですけど、話の最後に愛も繋がっていくんだねって言ったら、カイは一筋だけ涙を零しました。

カイの涙を見て思いました。カイはガードやみんなを本当に大事に思ってるんだなって。だから、カイの与えた愛が連鎖して、私の救いになってることが嬉しかったのかなって。自分の与えた愛が連鎖して、今誰かを救っていることが嬉しかったのかなって。

カイのガロードに対する思いを聞いて、カイが私をガロードの母親だつて言うのを聞いて、お父さんとお母さんの事を思いました。その時に思い出しました。この世に存在するもので一番美しいものは、親から子供への無償の愛だと。

それはきつと空よりも広くて、海よりも深いものなのでしょう。きつと我が子がこの世に生を受けたことが、至上の喜びであるほどに。それほど深く強い愛情、絆。

ガロードがいることで、今になってわかるようになりました。ただ、ただ、存在することが、嬉しい。些細なことでも、笑ってくれることが嬉しい。例え本当の親子じゃなくても、本当の兄弟じゃなくても、血縁を凌駕するほどの、それほどの、愛情。

それほどの愛情を抱く私の両親が、北都を死なせてしまった私を責める事なんてないだろうし、悲しむと思うけど、きつと一緒に泣いてくれるんだろつって、私と同じ気持ちで泣いてくれるんだろつって、そう思いました。

私、本当に今日カイとこの話をする事が出来て良かったです。カイは救われたつって言ったけど、私も本当に救われました。とてもとても嬉しかった。

アーサーさんが私に向ける愛情も、きっとそれに近いものなんじゃないかって思います。アーサーさんはいつも私が笑っていられるように、いつも私の事を考えていてくれました。

有償の愛ならできないことでさえ、苦しい決断も、悲しい別れも、辛い選択も、アーサーさんは私の為にしてくれた。それはきっと無償の愛なのですね。

これを言ったらアーサーさんは怒るかもしれないけど、やっぱり私にはアーサーさんは偉大なる父です。畏怖すべき、敬愛すべき、偉大なる父です。

私達だけでなく、シャンティ達や、トリン、ツァン達の上にも愛情の連鎖を振りまいたあなたは、私達みんなにとって、偉大なる父です。私達の愛の連鎖の生みの親です。あなたが私の、私達ペンドラゴン一族の父であることを、心から誇りに思います。

敬具

P・S

カイが泣いたって書いてあったこと内緒にしててくださいね。喋
ったらブツ殺すって言われてるから。後が怖いので。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

ちよつとちよつと。それはないんじゃないの。それはないんじゃないの！

さて寝るか、と思って寝室入ったらエルメスに先に寝られてた。俺のベッドで。あれ、なんで？ なんでランスのところに寝ないの？ 疑問と共に怒りがこみあげてきて、文字通り叩き起こした。

「うや・・・いたい・・・」

「おはよう、エルメス。てめえ何してんだコラ」

「寝てたの」

「ランスんとこ行け」

「やーだ」

瞬間的に相当イラついたぞ。なんって我儘な娘だ。マジどんな騷
したんだよ。腹立つ！ と思ったんだが、話を聞いてみると意外な

事実が発覚。

「エルメス様、今夜はカイ様とお休みください」

「どうして？」

「色々諸事情がありました」

「ふーん？ わかった」

先日11歳を迎えたランスはとうとう大人の階段を上り始めたようだ。つーか諦め早っ！ 騎士で紳士なんじゃなかったのかよ。もうちょっと頑張れや。

「そういうことなら棺で寝ろ」

「やーだ」

「ヤダじゃねえ。お前の本来の寝床は棺だろ」

「まだ怖いからヤダ」

「じゃあ勝手にランスんとこいけ」

「カイは私の事嫌い？」

「いや、別に嫌いとかじゃなくて」

「嫌いなんだ・・・」

「い、いや、そうじゃなくて」

「私嫌われちゃったんだ・・・しくしく」

「ご、ゴメン！ 嫌いじゃねえから！ うん、いいから。ここで寝ていいから！」

「本当？ ありがとう！」

しょうがねえから渋々許可した。だって泣かれたんだぞ！ なに

も泣く事ねえのに！

「つーか俺、騙されたのか。もしかして騙されたのか。あれはワザとなんじゃねえか、後からそう思い至ってイラついた。本当は蹴っ飛ばしてでも追い出したいところなんだが、そうもいかない。」

「カイと一緒に寝てるとクリシユナ思い出す」

「オイオイ、恐ろしい事言ってるじゃねえよ」

「カイ、腕枕」

「ざけんな。俺はクリシユナさんじゃねーし」

「ちえっ、ケチ」

「ケチじゃねえ」

俺はエルメスに背中向けてたんだけど、少ししたら後ろからシクシク聞こえてきて、ビックリしてエルメスの方向いたら泣きつかれた。キヤー！俺貞操の危機！

「背中向けないでよ。寂しい」

「うん、わかった。わかりました。だからちょっと離れてもらえませんか。お兄ちゃんからお願い」

「ねえ、どうしてカイはいつも自分のことを後回しにするの？」

「シカトかよ・・・つーかしてねーし。俺はいつも自分最優先だけ」

「してるよ。カイだって辛いのにいつもどうでもいって言って後回しにするじゃん」

「いや、してねえ。するはずがねえ」

「でもジユリオさんの話した時はそう言った。ガラードの話の時もそう」

「まあ、それは・・・ていうかお前は何に泣いてるわけ？」
「だって、私はいつぱいカイに助けてもらってるのに、私はカイを助けてあげられないの？」

正直、何言っただこの小娘は、と思った。正直なところ、イタリアにまだいた頃から俺はエルメスにかなり助けてもらってた。コイツが気付いてないだけで、色々と救われたことは沢山あった。

それこそ、ガードの件にしても、ジュリオ様の件にしても。むしろ、エルメスを救ってやれないのは俺の方だ。エルメスを救えるのはアーサーしかいねえから、俺の存在はその場凌ぎでしかない。俺はエルメスの助けにはならない。アーサーの代理すらも勤まらないんだから。エルメスを助けてやれないのは、俺の方。

「俺はもう既にお前に助けられてるよ。たくさん」

「ウソ、私には何もできないもん」

「んなことねえ。お前はいつも俺が欲しい時に欲しい言葉をくれるし、俺の為に泣いてくれるだろ。ガードの件にしてもそうだし、ランスも大事にしてくれるし、ジュリオ様の時だって安らかに死なせてくれて、俺の話を聞いて慰めてくれたし。それ以外にも、それ以前からたくさん」

「でも、カイは苦しそうにしてる」

「・・・そうだな。警沢言うなら否定はしない」

「今は何が辛いなの？」

「アーサーがいなくてお前が泣いてるから」

「アーサーさんが居ないのはカイのせいじゃないよ」

「ああ、俺のせいじゃねえし、俺にはどうしようもねえ。お前が泣くのを止められるのはアーサーしかいねえし、俺にはそれはできな

い。俺にはどうしようもない事が、俺にお前を救えないことが、今は辛いかな」

「そんなことない。私いっぱいカイに救われたよ」

「でも、お前は泣いてる」

「けど、それは・・・」

「いつも救われてるのは俺の方だ。俺は救われてるのに、お前を救ってやれない。ゴメンな。ただ、傍にいる事しかできなくて、ゴメン」

自分で言いながら、自分の無力さにいつそ泣けてくる。アーサーが帰ってきてくれたら、エルメスを閉じ込めてる悲しみの繭は一瞬で燃え落ちるのに。俺には北都の様に蜘蛛の糸を垂らしてあげることも、クリシユナさんの様に存在するだけで幸せの象徴になれる力もない。俺には何も無い、何もしてやれない。ただ、傍にいる事しかできない自分が悔しい。

俺がエルメスを救わなきゃいけないのに、いつも救われるのは俺の方で、俺だけが救われる。誰もエルメスを救ってあげられない。俺はエルメスを救ってあげられない。その事が、辛くて悲しくて仕方がない。

アイツが自力で地獄から這い上がって、悲しみの繭を突き破って出てくるのを見守ることしかできない、自分の無力さが悲しい。

もういつそ、エルメスに俺を救ってほしくない。いつそ、傍にいるのが辛い。俺の無力さが、浮き彫りになるから。エルメスを置いて、俺だけが幸せになるような気がして、嫌なんだ。

「カイのバカ」

「は？」

「カイはいつも私の事考えてくれてるけど、全然私の事見てくれてない」

「・・・ん？」

「私、本当にカイにたくさん助けられたよ。カイが私を世界で一番大事にしてくれるから、すごく救われてるよ。カイの存在が、救い。いつも傍にいてくれて、ありがとう」

「まただ。また、救われる。俺が救われる。何度でも、俺は救われる。俺だけが救われる。俺は、何もしてやれないのに。この心に同時に発生する悲壮と歓喜を、なんと呼ぶんだろつか。」

「エルメス、ゴメンな、ゴメンな。傍にいてやることしかできなくて、ゴメン。お前が元気になれるなら、俺はアーサーの代わりに、クリシュナさんの代わりに、北都の代わりに、なんにだってなる。お前が幸せになれるなら、俺は何にでもなるから」

「ありがとう。でも、カイは、カイだよ」

俺はアーサーになりたい。クリシュナさんになりたい。北都になりたい。エルメスを救う事の出来る誰かになりたい。

俺は、俺でいたくない。エルメスを救えない無力な自分が、大嫌いだ。

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

金。 一日10万な。で、今日で300万だ。キッチリ払えよ、延滞料

「マジあり得ねえ」

「もう1か月だよお」

アーサーを待つこと既に今日で1か月経過。ふざけんな。ていうかさあ、せめていつ帰ってくるかわかんないわけ？ 自分の事だろ？ ああ？

「ねえ、カイ、そろそろ一回イタリアに戻らない？」

「ミラーカさんか？」

「うん」

「うーん、まだ少し早い気がするな。ヴァチカンの調査がまだ入ってるかもしれないし、それにオーストリアつつつてもそのどこかもわかんねえからな」

「そっか、そっだよな」

「まあ、ミラーカさんの出生地に関してはトリスに調べさせるから」
「うん、ありがとう」

あれからちょうど一か月経って、その間にエルメスも少しだけ落ち着いたようだ。悲しみに時間は最高の薬だと聞いたことがあるが、全くその通りだ。

けど、それと比例して色々なことに目が行くようになった分、新しく悲しみの種を拾ってくることもある。みんながないという事を実感して、死んだという事を改めて実感して、アイツは時折泣いてる。拾って来た種を一粒ずつ潰していつてる。隠れて、独りで。

本来なら一人で泣かせたくねえけど、アイツの方が俺から逃げってしまう。この前エルメスが泣いていることが辛いつて言ってしまったせいかもしれねえ。俺を苦しめたくないと思って、隠れて一人で泣くんだ、アイツは。

俺はアイツを助けてやりてえのに、支えになりてえのに、余計な苦しみを背負わせてしまった。最悪だ。俺は一体どこまで役立たずなんだ。

アーサーは笑ってるエルメスが好きで、エルメスの笑顔を守る為にエルメスを大事にしたのに、その為に俺に仲良くしてやれつて言ったのに、俺はアイツを苦しめる事しかできねえ。いつも、泣か

せてしまう。

俺だつてエルメスの笑顔を取り戻してえし、大事に思つてんのに。

アーサーに当たり前にできることが、俺には全然できねえ。アーサーと俺にはきつと決定的な違いがあるんだろうけど、それがなんなのかわかんねえ。

わかれば、俺にもアーサーの代わりが務まるかもしれないと思つてんだけど。

まあ、仮にそれが愛情と友情の差だと言われたら、正直俺にはお手上げだ。さすがにそこまで模倣してやる事はできん。無理だし、あり得ねえし、ぶつちやけ嫌だし。断固拒否。

まあ、愚痴はこの辺にしておこう。最近愚痴つてばっかだな。ちよつと反省。

知らない間に俺に一方的にフラれたエルメスは、トリスの部屋でミラーカさんの事を調べてる。けど、中々それらしい情報が出てこなくて、かなり苦戦してる。

エルメスの話ではミラーカさんも300歳超えてたらしいし、貴族と言つても何かやらかした人か英雄でもない限りは、そんな昔の人の情報なんか出てこなくても仕方ねえんだけど。

「ていうかそもそもさあ、ミラーカさんって本名なの？」

「・・・あ」

トリスに言われるまで俺も気づかなかった。そうだよな、アーサーだって偽名なんだし、ミラーカさんだって本名とは限らねえじゃねえか。本名がわかんねえ以上、完全に迷宮入りだ。

「しまったあ、ミラーカさんの本名聞いとくべきだった」

「偽名使ってる人に聞いて教えてくれると思えねえけど？」

「あ、それもそうだよな。アーサーさんも教えてくれなかったし」

「そりゃそうだろ・・・」

「でも聞いちゃったけど」

エルメスの言葉に俺とトリス興味津々。アーサーの正体めっちゃ知りてえ！ それはエルメスも同様だったらしい。

「トリスちよっとパソコン貸して！」

「いーよー」

みんなには本名内緒！ つつて自分で検索を始めたエルメスは、少ししたら結果に辿り着いたようだった。

「マジでええええ！？」

「どした！ どした！？」

「ちよ、ヤバい。ちよ、ヤバい」

なんかエルメスの動揺が半端ねえ。こっち振り向いてワタワタしてる。ますます俺ら興味津々。

「見せて！」

「どれ……」

『マジでええええ！？』

危うく腰抜かしそうになったぞコノヤロー！ いえ、すみません。今まで生意気な口きいてすいません。

「まさかアーサー様があの世界一有名な吸血鬼だったなんて……」

「まさかアーサーさんがあの串刺し公だったなんて……」

「まさかアーサーがあのワラキアの英雄だったなんて……」

俺らしばらくボーゼン。いまだに信じられんが、そう言われてみれば確かに最強の吸血鬼で、化け物たちの中で神格化するほどの吸血鬼つつたらもうアンタしかいねえじゃねえか！

まさかアンタがあのドラキュラだったとは驚きだよ！

「す、すごい……私何も知らないで、今までとんでもない人に仕えてたんだ。ヤバイ！ 超スゴイ！」

「っーかお前、伝説の吸血鬼の眷属とかマジスゲー！」

「つーか俺らも血族じゃん！ うわー、マジスゲエ！」

俺ら大興奮。ハリウッドスターに知り合いがいるとかよりも自慢できるじゃん。マジスゲエ。マジヤベエ。

興奮しすぎてエルメスに至っては、名字ドラキュラに変えちゃおうとか言いだすほどだ。それはちよっとさすがにあんまりだから却下したけど。

少しして興奮が落ち着いてきた頃に、改めてパソコンの画面を見つめてたトリスがあれ？ つつって俺らを呼んだ。

「アーサー様の名前、アナグラムだ」

「え？」

「ほら、DRACULA、これ逆から読んでみて」

「え？ ALUCARD・・・アルカードさんになった！」

「おー！ こんなトリックが！」

思わず拍手だよ。アンタすげえな。存在が魔術じゃねえか。その後もアンタの謎解きで大盛り上がりだよ。

つーか今更だけど、隠してたところ探ったりして悪かったな。心配するな、誰にも言ってるねえから。俺らだけで盛大に楽しんでやったから！ ハハハハハ！ やべえ、みんなに喋りてえ！ ……
…冗談だ。

しかし、アンタも色々あったんだな。俺らが知ったことは史実上のアンタでしかないし、本当の事はわかんねえけど、それでも俺なんかよりも遥かに辛い人生だったんだな。トリスがなんかしみじみ言ってた。

「俺らが500年前に臣下にいたら吸血鬼になってなかったって、こつこついう事だったんだ」

アーサーも裏切られ続けて、それでも戦い続けてきたんだな。絶望してそれでも尚、生き続けてきたんだな。500年以上も、ずっと孤独でも、それでも生き続けてきたんだな。

アーサー、アンタは本当にすげえよ。エルメスの父親だけあって、エルメス以上に強ええ。弱い化け物なんかじゃねえ。本当に弱いなら、とつくに生きることから逃げてる。

アーサーは本当に立派な王様だ。今俺達に、アーサーの血がわずかにでも流れていることを、本当に誇りに思う程だ。

正直俺は吸血鬼になったことがすげえイヤだったんだけど、アーサーの事を知って、この事があって、なんかイヤじゃなくなった。

うーん、まさかアーサーにまで救われるとは。アーサー親子、恐るべし。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

エルメスがうざい。

「カイー、アーサーさんまだ帰ってこないの？」

「さーなー」

「アーサーさん早く帰ってこないかなあ」

「そーだなー」

「アーサーさんに会いたいなあ」

「そーだなー」

「カイも会いたいでしょ？」

「別にー」

「でも帰ってきてほしいでしょ？」

「まーなー」

「じゃあ会いたいでしょ？」

「別にー」

「意味わかんない！」

わかれよバカ。確かに俺はアーサーに一日でも早く帰ってきてほしいと思ってるけど、別にアーサーに会いたいわけじゃねえからな。勘違いすんなよ。エルメスの為だからな、言っとくけど！

「カイー、アーサーさん今どこにいるのかなあ」

「さーな」

「アーサーさん何してるのかなあ」

「さーな」

「アーサーさんに会いたいよあ」

「さーな」

「そこでさあな、はおかしいよ！ もー！ さっきから返事が適当過ぎだよ！」

「そりゃそうだろ！ 俺の相槌のキャパ越えてんだよ！ お前この会話何ラウンド目だと思ってるんだ！」

「そんなのしょうがないでしょ！」

「しょうがなくねえよ！ 一日に10回も20回も同じこと言いやがって！ いい加減しつけーんだよ！」

「だって！ だって！ 会いたいんだもん！」

先日の件でアーサーに惚れ直した様子の子のエルメスは、更にアーサーが恋しくなったらしい。よかつたな。

しかし、そのとばっちりがコレだ。この会話を毎日毎日一日に何十回も繰り返される俺の身にもなってみろ。

勿論、エルメスがアーサーに会いたい気持ちはよくわかる。うん、わかる。だけでもだ・け・ど、人には我慢の限界と言う物があ

るのだよ。人じゃねえからってのはこの際無しだ。

元々サツパリ風呂上り気質な俺には、今のエルメスのようにベツトベトした粘着ローション気質は耐え難いわけだ。そりゃもう苦痛なわけだ。わかる？

例えるなら酔っぱらって調子に乗ったオッサンが、若い女に何度も同じ自慢を繰り返しているのと同じ状況だ。な、うぜえだろ？
実にわかりやすい解説。さすが、インテリジェンス俺。

「はぁ・・・アーサーさん、会いたいな・・・」

「また始まった・・・ハア」

そりゃゲンナリもするぜ。溜息も出るさ。そんな俺の気も知らないで、シュヴアリエの奴らったら笑うのよ。ひどいじゃない。

リオ 「プクク、副長、アーサー様に嫉妬してんだぜ」

パーシー 「可愛い妹取られたとか思ってたんだぜ、あのシスコン」

こいつらは死ねばいいと思う。ていうか、殺そうと思う。

俺 「テメエら・・・人の気も知らねえで好き勝手言いやがって」

ペレアス 「んなことねえよ？ 副長の気持ちはよくわかってるから！ なぁ？」

トリス 「そうだよー。なんてったって世界一大事な妹だもんなー」
ダイナ 「大好きな妹だもんなー」
ユアン 「そりゃアーサー様の話ばかりされたら寂しいよなー」
キルシュ 「シスコンの副長には耐え難いよなー」
俺 「そーかそーか、お前らがそんなに死にたがってたとは知らなかったぜ。すぐ楽にしてやる」
バカども 『ギヤアアアア！』

ふう、スッキリした。いいストレス解消になった。とりあえず喋った奴は全員撃った。黙って苦笑いしてただけの奴らは見逃してやった。神のごとき慈愛を持つ俺、さすがだ。

でもさ、でもさ、その後がもつとヒドイのよ。もつと可哀想なのよ、俺。

「ちょっと！ 何も撃つことないじゃない！ みんなに謝りなさい！」

え、この子お母さん？ 俺のお母さん？

エルメス激怒。まさかの命令口調。あまりの剣幕に思わず怯んじやった俺。

「カイはいつもすぐ撃つんだから！ やめなさいって何回言われたらわかるの！」

「いや、でもこいつらが・・・」

「言い訳しない！ 今度やったら爆破するわよ！」

「い、ごめんなさい」

「謝る相手が違う！ みんなに謝りなさい！」
「じめん……」

完全にお母さんに怒られるガキだよ俺。つーかブチギレたエルメス超怖ええ。普段が温和なだけに温度差が半端ねえ。爆破するって言われた時マジ冷や汗かいたぞ。

しかしエルメスは俺に言ってはいけないことを言ってしまった。

「どうしてそんなにバカみたいに撃つの！？ 全く！ 変なとこばっかりアーサーさんに似て！」

一瞬、どこの世界のホームドラマ？ と思っただけど、聞き捨てならないセリフにアドレナリンが再活性。本来の俺、復活。

俺 「テメエ、今なんつった？ 誰が誰に似てるって？」

エルメス 「カイの変なとこがアーサーさんに似てるって言ったの！」

俺 「そりゃ聞き捨てならねえな。眉目秀丽・豪放磊落・品行方正な俺様があんな自己中横暴吸血鬼と似てるわけねえだろ！」

エルメス 「品行方正の方が聞き捨てならないけど！？ 自己中横暴吸血鬼なんて、カイの為にあるような言葉じゃない！ 加えて鬼畜！」

ガルフ 「更に付け加えると狂犬」

パーシー 「歩く嫉妬心」

ディナ 「歩く独占欲」

リオ 「つまり極度のシスコン」

俺 「更に言うなら優秀・有能・秀才・完璧！ それ俺！」
エルメス「カイはどこまで強欲なの！？ バカじゃない！？」
ガロード「ていうかシスコンは否定しなくていいの？」

俺 「忘れてた！ する！ 全否定！」

ベデイ 「全否定したらバカしか残らねえじゃん」

エルメス「カイって結構バカだよ」

俺 「黙れ！ お前に言われたくねーんだよ！ アルティメットバカ！」

エルメス「アルティメット！？」

このバカは究極のバカなだけに、とんでもねえ事を言いやがる。似てる？ 俺が？ アーサーに？ 冗談じゃねえ。欠片も似てねえよ。共通点があるとしたら性別くらいなもんだつつの。

「お前よお、冗談は顔だけにしろよ、マジで」

「ヒド！ なんでそう言うこと言うかな！」

「事実だから。大体アーサーついたらさあ、自己中・性悪・人格破綻者・傲岸不遜・陰険・卑怯・横暴・乱暴・粗野・エロオヤジ。どこも俺と共通点ねえよ」

「全部該当するよ！？ 今のまるつきりカイの自己紹介じゃん！」

「んなわけねえだろ！ あんな化け物と一緒にすんな！ 俺は地上に舞い降りた高尚かつ崇高な天使だぞ！」

「よ、よくそんな事を恥ずかしげもなく言えるね・・・ある意味尊敬するよ」

「おう、尊敬しろ。俺に跪き傳き敬い崇め、奉れ」

「・・・カイって、すごいね」

「ようやくパーフェクトバカにも理解できたか。引き続き俺を敬愛しろ」

「うん、もう相当引いてる」

何なんだこのクソ生意気でバカな小娘は。アーサーの躰がなつてねえから俺はこんな不当な言い様をされてんだぞ。アンタみてえなのをモンスターペアレンツと呼ぶんだ。そのガキも親に似てモンスターだ。こっちはたまったもんじゃねえ。

エルメスといいシユヴァリエといい、俺の周りはバカばつかだ。嫌がらせか。もしくはこれが俺に対する神の報いか。冗談じゃねえ。

でもとりあえずバカどもは一応大人しくなつたから俺もソファに腰かけたら、ずっと黙ってたランスが隣に座ってきて俺に耳打ちした。

「本当はアーサー様に似てるって言っていただけで嬉しいでしょう？」

急に何を言いやがるんだこのクソガキは。何を根拠にそんなイカれた発言をしやがるんだこのクソガキは。

俺の目から放たれるふざけんなビームに気づいたランスは再び耳打ちした。

「エルメス様の為に何にでもなりたいカイ様には本望でしょう？」

「は！？ なに！？ 何言ってるの！？」

「アーサー様の代わりになるとおっしゃったじゃありませんか」

「おま、お前聞いてたのか！」
「ええ、カイ様のメソメソ言う声で目が覚めましたから」
「メソメソなんてしてねえ！」
「してましたよ」

俺としたことがなんたる失態。あれを他人に、よりによってこの腹黒のクソガキに盗み聞きされるとは、大失態にも程がある。自殺級シヨック。

慌ててランスを引つ掴んでその場から逃亡すると、案の定、悪魔の囁き。

「みなさんに知られたくはないでしょう？」

「テメエ今度は何が目当てだ。金か？」

「お金なんて要りません。僕の頼みを聞いてほしいだけですよ」

「要求はなんだ」

「勿論エルメス様です」

「出た・・・とうとう本性表しやがって。お前がエルメスをオトすのを黙認もしくは協力しろってか」

「察しが良くて助かります」

「お前見た目草食系なのに、なんでそんなに獰猛なんだよ。いつそお前の野生が恐ろしい」

「カイ様だつて野獣の様にエルメス様に襲い掛かったじゃないですか」

「お前・・・お前本当いい加減忘れる。俺は今それどころじゃねえんだよ。なんでお前が当人以上に根に持ってたんだよ」

「勿論わかってますよ。今のカイ様にそんな気が微塵もない事も、エルメス様を大事にしてらっしゃることも。ですが、僕はそれが許せません」

「は？　なんでだよ。これ以上のノープロブレムは存在しねえ」

「いいえ、大問題です。できる事ならエルメス様に近づいてほしくもありません。ですが、それがエルメス様の望みなので、僕は渋々容認しているにすぎません」

「お前本当どんだけだよ・・・」

アーサー、ヤベエよこのガキ。相当だよ。もう病気だろ。アンタ本当にうかうかしてらんねえぞ。コイツの策略好きと腹黒さと卑怯さはアーサーを彷彿とさせるな。

ていうかさあ、まあ人には色々欠点なり長所なりあるわけじゃん。でさあ、よく考えてみたらさあ、別にアーサーに似てるところがあんのって俺だけじゃない気がする。

ただ単にアーサーが人の悪い部分の集大成っただけであって、たまたま一致するようなどころはみんなあるぞ。

要するにアーサーは悪の代名詞。OK？　仮にアーサーの資質を継ぐ奴がいるとしたら、俺の目の前でニヤリと笑うこの薄気味悪い腹黒のクソガキだろう。間違いないねえ。

「つーかお前、さつさと諦めやがった上に卑怯くせえ。騎士で紳士じゃねえの？　恥ずかしくねえの？」

「カイ様、ご存じないんですか？　本物の騎士あるいは紳士は、悪にすら喜んで手を染めるものです」

「それは主人の為にだろ。お前は自分の本能に忠実なだけじゃねえか」

「いずれエルメス様は、僕なしでは生きていられないようにして差

し上げます。それこそがエルメス様の幸せですよ」

「おま・・・どこでそんなセリフ仕入れて来るんだよ。お前本当に11歳？」

恐ろしい・・・一応上司としてコイツの面倒を見てきたが、こんな恐ろしい奴に育つとは・・・ガラードと何が違ったんだろう、コイツ。

ガラードは俺に似てあんなに素直でいい奴に育つたのにコイツときたら。多分コイツの企み好きはジュリオ様の影響だな。間違いない。

アーサー、このガキヤバいぞ。本当にヤバいぞ。弱みを握られた以上、俺はもうエルメスに賭けるしかないぞ。今はまだアーサー、アーサーってばかり言ってるけど、その内寝取られるぞ、文字通り。

あ、でもエルメスがウザくなくなるなら、それはそれでいい気もするな。うん。やっぱ俺ランスに着くわ、悪いけど。決めんのはエルメスだ。せいぜい頑張れ！　ハハハハハ！

以上

報告
シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

結局あれからどれほど頭を悩ませてモミラーカさんの本名はわからなくて、まあ当たり前なんだけど。どうせならインドに連れてきて、クリシユナさんと一緒に眠らせてあげようという事になった。

「本来ならちゃんと生まれたところの方がいいんだろうけど、クリシユナと一緒にならミラーカさんも寂しくないよね」
「そうだな。お前も毎日会いに行っただげられるしな」
「うん」

実際にミラーカさんを迎えに行けるのはまだ少し先になりそうだ。今あの城に行って、ヴァチカンの調査員にバッタリ遭遇、なんてことになったら本末転倒だからな。

話の流れで、エルメスがミラーカさんのことを話してくれた。

「ミラーカさんはアーサーさんの次に出会った吸血鬼で、私が吸血鬼化したばかりの頃からずっと一緒だったんだ」

「ふーん、じゃあ付き合い長いんだな」

「そうだよ。アーサーさんと暮らし始めた当日に紹介してもらったから。その頃はね、ミラーカさんアンティークショップやってたの。無許可営業だったけど」

そう言うつとエルメスは壊れてしまったコバルトブルーの髪飾りを取り出した。これが壊れてしまったのはあの戦いのせい。ジュリオ様に髪の毛を掴まれた時に一緒に握りしめられて割れてしまった。

「これはね、その時にミラーカさんがくれたの。出会った記念に、お友達になった記念につて。私すっごく嬉しくて、使うのが勿体なさ過ぎて、自分の結婚式とあの時しか使ったことなかったんだよ。だけど、壊れちゃうならもっと普段から使ってあげればよかった」

エルメスは髪飾りを握りしめて悲しそうに俯く。あの日の彼女の死は、彼女の死に方は俺の目から見てもエルメスにとっては恐らく一番心残りだ。ミラーカさんはエルメスとアーサーを守るために、ずっと封印してた力を解放してしまった。そのせいで死んでしまった。

彼女はそれが使命なんだと言ってたし、それは讃えてあげるべき

だ。彼女は立派に使命を全うして、そのおかげで今エルメスは生きている。彼女のあの決断があったからこそ、今のエルメスがある。だけど、わかつてはいてもエルメスは後悔せずにはいられない。

「アーサーさんにとってのミラーカさんは、私にとってのカイと同じだったのよ。100年前からずっとアーサーさんを支え続けて、私の事にしても他の事にしても、私達に相談できないような事でもミラーカさんには頼ってた。本当にアーサーさんにとってミラーカさんはとても大事な人で、特別な人だったの。あの時のアーサーさんの辛そうな顔が忘れられないの。あの時のミラーカさんの涙が忘れられないの」

あの時の事を思い出す。涙ながらに微笑んで幸せだったと言いながら消滅したミラーカさん。普段の様子からは想像もつかない程取り乱して、ミラーカさんの砂に縋り付いていたアーサー。その隣で慟哭するエルメスの姿。

エルメスの言う通り、アーサーにとってミラーカさんは唯一無二の親友だったんだろう。後になってガロードから聞いた話だと、スパイ活動の事もミラーカさんだけは最初から関与してたと言ってたし、立場的にも心理的にも彼女はアーサーの相談役だったんだな。

「ミラーカさんにとってもアーサーさんは本当に特別だった。あの二人が並んだところは綺麗で、とても綺麗だけどなんだが悲しくてきつと二人とも同じ悲しみを背負って、二人で乗り越えてきたんだと思う。だから私の事もとても大事にしてくれたの。いつも可愛がってくれて、妹みたいに大事にしてくれた。大好きな優しいお姉さ

んだった」

泣きながらそう言うエルメスにとっても、ミラーカさんは特別だったんだろう。吸血鬼になったばかりの時から傍にいた姉。そういえば俺とエルメスがケンカした時も、真っ先に文句言ってきたのはいつもミラーカさんだった。

そう思い返してみると本当にエルメスを大事にしてたんだなあ。
・・・もしかして、俺嫌われてたかも。

「私とアーサーさんの為に命を張って、魂を代価にして使命を果たしたミラーカさんには本当に感謝してもしきれない、謝罪してもしきれない」

「そうだな。でも、お前もわかってると思うけど彼女は立派に使命を果たしたんだから、ちゃんと讃えてやれよ」

「うん。でも、できることならアーサーさんの為に、ミラーカさんには生きていてほしかった。ミラーカさんが居なくなってしまうって、アーサーさんは心の拠り所をなくしてしまった。帰ってきて、きつとミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはとっても辛い事だと思う」

「確かにそうかもしれないな。100年以上もずっと傍にいた親友がいなくなるなんて、想像するだけでも辛いな。それほど時間を一緒に過ごしてきて、きつとあの二人は友達の域なんて超えてたんだろうな」

「そうだね。きつとあの二人は心で深く繋がってたんだよ。心で繋がったソウルメイトだったんだよ」

「ソウルメイトか・・・」

話ながら考えた。もし、同様に俺の前からエルメスがなくなってしまうたら？ 想像すらしたくねえ。エルメスのいない世界を想像できねえ。想像するだけで辛い。俺が想像だけで味わう以上の辛さを、アーサーは帰ってきてから実際に体験しなきゃいけない。

きっとアーサーはとても辛い思いをするだろうし、きっと一生忘れられなくて後悔もするんだろう。そんなアーサーを見て、エルメスがどれほど悲しむか。

「それほどの人がいなくなってしまうって、アーサーさんはきつと帰ってきてもすごく悲しむ。ミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはきつと耐え難いこと。だから私が支えてあげなきゃ。私がミラーカさんの代わりにならなきゃ」

エルメスは、本当にアーサーの為に生きている。だからこそきつとエルメスはアーサーの支えになれると思う。でも決意をしたような眼でそう言ったエルメスは、すぐに落ち込んだような顔をした。エルメスはミラーカさんじゃないから、及ばない部分もあるとわかってる。だからその事で、すごく苦悩すると思う。考えればすぐにわかることだ。

でも、そう考えていて気付いた。俺とアーサーとの決定的な違い。エルメスがミラーカさんの代わりに、俺がアーサーの代わりにならない理由。

「お前は多分ミラーカさんの代わりにはなれないんだろうな」

「・・・そうだと思う」

「でも、それはお前の力不足とかじゃないぞ」

「え？　じゃあ、なに？」

「元々の関係が違うからだ。人にはそれぞれ役割があるだろ。友達には親にはなれない。家族は恋人にはなれない。人には決まった相手にしか見せない決まった顔がある。ミラーカさんの席はミラーカさんだけの物だ。アーサーにとってのお前はお前でしかない。お前以外にはなれないんだよ。だからこそお前にしかできないこともあるんじゃないか。お前にしか見せない顔もあるだろ」

「・・・そっか、そうだね。そうだよな」

他人が他人の席を補うことは、その関係が深ければ深いほど不可能だ。その人はその人でしかない。その人の席は空けておかなければならない。本人がその席を整理できるようになるまで。

それができるようになるまではきつと苦しむ。心に穴が開いたみたい言葉があるけど、本当にそうなんだらう。けど、それは自分で乗り越えなきゃいけない事だ。むしろ誰かを代理に立てるなんてことはするべきじゃねえ。それは、本来の席の持ち主に対しても、代理にしようとした人に対しても冒涇以外の何物でもない。

それこそかつてエルメスは経験している。“ミナ”の人形。人形が手に入れば楽だらう、自分から人形に成り下がって、人形になりきってしまえば楽だらう。でも、人は人形じゃねえ。エルメスはエルメスだ。俺は俺だ。

エルメスにとってのアーサーは、師であり父であり主人だ。エル

メスにとつての俺は友達であり家族であり臣下だ。最初から決定的に違うんだ。根本的に違う。俺がアーサーになることは最初から不可能だった。俺が俺以外になることは、最初から無理なことだった。

「カイはいつも私の事を考えてくれてるけど、全然私の事見てくれてない」

あの時のエルメスの言葉の意味がようやく分かった。俺が見ていたのはエルメスの向こう側にいるアーサーで、アーサーならどうするかって事ばかり考えて、エルメスが俺に求めているものに目が向いてなかったんだと気付いた。俺が俺であることを忘れていた。

でも、それなら俺にしかできないことだってちゃんとあるはずだ。エルメスが俺にしか見せない顔があるはずだ。それに俺がちゃんと気づいてやらなきゃ。

とりあえず、一つだけアーサーに頼みがある。エルメスは以前アーサーに人形扱いされていた時に傷ついたと言ってた。それでも今アーサーの為にミラーカさんの代わりになりたいと思った。

きっとアーサーはミラーカさんが居ないことにとっても傷ついて辛い思いを思うけど、できることならエルメスの思いを汲んでやってほしい。傷ついて尚、自ら人形に堕ちようとしたほどの思いを、いつかわかってやってほしい。すぐには無理でもな。とりあえず、それだけ。

以上

拝啓 アーサーさん

今日はちょっと私の悩みを聞いてください。

カイは普段からいつも私の事を考えてくれて、自分のことを後回しにして、辛い思いを押し込んで、私を励まそうとしてくれます。いつもたくさん心配かけて、いつもたくさん助けてもらってます。

だけど、私は助けてもらってばかりで、カイを助けてあげられません。カイが背負うジュリオさんへの罪悪とか、あの戦争で受けた悲しみを私が癒してあげることが出来ません。

それをカイに話したらやっぱりいつも通り別に、みたいな、俺はいつも自分最優先だ、みたいな感じで。私じゃ助けにならないのって聞いたら、バツカじゃねーの、みたいな顔されて。

だけど、カイは私にいつぱい助けてもらったって、救われたからって言ってくれたんです。でもカイはずっと辛そうな顔してるから、今は何が辛いのかって聞いたら、アーサーさんが居なくて私が泣いてることが辛いつて言ってたんです。

私はそれを聞いてとても嬉しかったけど、とても悲しく思いました。カイは何にも悪くないのに、私の悲しみをカイにまで背負わせてしまっていると思うと、とても悲しくなりました。

私はやっぱり災厄だったようです。私はいつも助けてもらってるのに、私がカイを苦しめてたんです。その事が、すごく悲しかった。

それなのにカイは、いつも助けてもらってるのは自分だからって、お前を救ってやれなくてゴメンって、傍にいる事しかできなくてゴメンって謝るんです。私にはそれがとてもとても辛かった。

私には、カイが傍にいてくれるだけで十分なのに、たくさん助けてもらってるよって言うてるのに、カイは全然わかってくれないんです。

ずっと自分を責め続けて、アーサーさんの代わりに、クリシユナと北都の代わりに、私の幸せの為に何にでもなるとまで言って。そこまでカイを追い詰めてしまった自分が、許せない。

だから、せめて私の泣き顔をカイに見られないように、と頑張ります。それに気づかれたら怒られちゃうかもしれないけど、気付かれなきゃいいかと思って。

でも、問題はここからです。

この前ちょっと色々あって、なんだか最近とてもアーサーさんに会いたくて、本当にどうしようもないくらい会いたくて。それをずーっとカイに言っていたら、さすがにうぜえって呆れられたんですけど。

そしたら、それを見てたシュヴァリエのみんながまたシスコンとか言い出して、それでカイが怒ってみんなを撃っちゃったんです。それはさすがにあまりだと思って、私が怒ったら一応おとなしくなっただんです。

でも、前から思ってたけど、アーサーさんとカイって普段は仲悪かったけど、妙なところで意気投合してたじゃないですか。なんか変なところばかり似てると思ってて。

アーサーさんもちよとしたことですぐクライドさんをランチしたりしてたし。だからそれを言ったらカイがものすごい怒り出して。

なんか色々言っていましたけど、自分は優秀で完璧で品行方正だから、あんな自己中横暴吸血鬼と一緒にすんな！ とか言い出して。もう、何を言ってるんだこの人、と。

しまいには、俺は地上に舞い降りた天使だとかアホみたいなこと言いだして、本当にこの自信は一体どこからやってくるのかと呆れました。というか、引きました。

この前はあんなにメソメソ言っていたのに、相変わらずキャラに定まりがないと言つか、いつそ二重人格なんじゃないかと思う程です。というか、絶対二重人格です。良い人の時と悪い人の時でギャップが激しすぎます。いつそ異常者です。

メソメソしてる時のカイはあり得ない程自信喪失してるのに、普段が異常なほど自信満々なのはなぜですか？ どっちが本物なんですか、あの人。もう私にはわかりません。意味が分かりません。

どっちも共通してるのは、結局私の話を聞いてないことです。普段はまあ当然ですけど、メソメソバージョンの時だって、私は助けてもらってるって何度も言ってるのに、全然聞いてなくて助けてやれないって言い張るし。結局私の意見無視ですよ。

つまるところ、あの人自分の考えに絶対の自信があるんですよ。それがいい事でも悪い事でも。しかも思い込みも激しい。俺がそうだったつたらそうなんだよ！ですよ。

私の意見なんか聞きやしないんですよ。私が私のこと言ってるのに完全シカトですよ。世界はカイを中心に回ってるみたいです。

なんかそう考えると、カイの為にと思って隠れて泣いたりしてたのがバカみたいに思えてきました。私は何しても、何もしなくても、カイが考えを改めない以上は変わらない気がする……。そう思いませんか？

あ、でも一つだけ改まったみたいでした。さっきも書いたけど、カイは自分がアーサーさんの代わりにならなきゃってずっと思ってたみたいだったんですけど、それは考え直したようです。

実はミラーカさんの事で少し話したんですけど。ミラーカさんはアーサーさんにとって本当に特別な人で、大事な友達だったでしょう？ だから、アーサーさんがすごく辛い思いをするだろうって思ってます。

だから、アーサーさんが帰ってきたら私がミラーカさんの代わりにアーサーさんを支えてあげなきゃって言ったんです。

そしたらカイが、人には役割があって、その人にしか見せない顔があるから、その人の席はその人の物でしかないって。私は私でしかなくて、だからこそ私にしかできないことがあるって言うてくれたんです。

そう言われて、確かにそうだなあって思って。私は逆立ちしたってミラーカさんにはなれないし、逆にミラーカさんも私にはなれないですもんね。

だから、私は私なりにアーサーさんを支えようって。私にしかできないことをしようって思いました。

そう言えば以前クリシュナに、自分にできる事、自分にしかできないことを考えて実行した方が建設的ですよって言われたのを思い出しました。なるほど、こういうことなのね、と思いました。

カイも自分で言いながら、それだ！ みたいな顔してたので、少しはカイの肩の荷も降りたんじゃないかな、と思います。

私もカイも今は五里霧中を試行錯誤しながら歩いてるけど、この1か月で色んなことを考えて、色んなことが見えてきました。少しだけ、霧が晴れてきた気がします。

アーサーさん、今カイが傍にいてくれることで、より強く思います。ミラーカさんが亡くなってしまったことが本当に心残りで、残念でなりません。

アーサーさんが帰って来た時に、もう今まで支え合ってきた親友はここにはいない。その事を思うと、アーサーさんがどれほど悲しむかと思うと、苦しくて仕方がありません。

アーサーさん、残念だけど、私ではミラーカさんの代わりにはなれません。私はミラーカさんほど世界の事も人の事もわからないし、アーサーさんの事にしてもその気持ちを深く理解してあげられないかもしれません。

だけど、私は私なりにあなたの支えになります。前に約束した通り、ずっと傍にいます。どこにもいきません。一生あなたの為に生き続けます。

私ではあまりアーサーさんの役には立てないかもしれないけど、絶対にあなたを一人にはしません。ずっと傍にいますから。それだけは約束します。それだけは私の役目、私の使命です。誰にも譲ってあげないんです。

きっと私は前の様に一生懸命あなたの背中を追いかけるんだろうけど、あなたの後ろで背中を見守って支えるのが、私の使命です。そこが私の席です。たまに振り返って呆れたように笑う、あなたのその笑顔を絶やさないようにずっと傍にいますから。

アーサーさん、あなたに早く会いたいです。もう1か月も経ってしまいました。あなたに会いたくて、会いたくて、会いたくて、どうにかなってしまいそう。

あなたはいつ帰ってくるんですか？ もう1か月も経ったのに、まだ私は待つんですか？ まだ、ただいまと言ってくれないんですか？

早くあなたに会いたい。早く帰ってきてください。じゃないと、アーサーさんが帰って来た時に話すことが多すぎて、話す方も聞く方も大変ですよ？

まあ、いつまでも待ちますけどね。でも、ホントに帰ってきてくださいよ？ 絶対ですよ！ じゃなきゃアーサーさんの正体みんなバラしちゃいますからね！

敬具

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

やはり、俺は間違っていたようだ。俺の教育方針も、考えも。俺が甘かった。でも俺は悪くねえ。

「カイー、明日お買い物行きたい」

「そーか。行って来い」

「一緒に行こうよ」

「断る」

「行こうよー!」

「断固拒否」

「行くの! 命令なの!」

「お断りします」

「んもー! ケチ!」

「ケチじゃねえ。ランスと行け」

我儘でうぜえこのバカなお嬢ちゃんは、買い物に行くのだとうるさい。前回の事があるから、俺は二度とコイツと外出したくないんだけど。

そんなやり取りをしてランスに押し付けようとしたら、ランスが傍まで寄ってきた。

「僕が同伴するのは構いませんが、それでもカイ様にはご同行頂きたいと思います」

「ああ？　なんでだよ」

「エルメス様になにかあったらどうなさるんですか？　シユヴァリエなんですからちゃんとお守りするのにも仕事のはずですよ」

「アイツが人間に負けるわけねえだろ」

「それだけではありません。また以前の様に警察沙汰にでもなったら、僕には対処しかねます」

そうだった。忘れてた。以前こいつはランスと出かけた際に迷子になった拳銃、ギヤングを壊滅させた上に警察沙汰にまでなったんだった。

あの後大変だったな・・・教理省の枢機卿（表）のジーサンから

「さすが、と言っておきましょう。さすがに殲滅機関を率いるキング枢機卿の部下なだけに、大したじゃじゃ馬ですな。しっかり手綱を握って、調教するがよろしいでしょう」

とか嫌味言われて、特務機関聖堂騎士パラディンの機関長からも文句言われて。散々だったな・・・

全く、何がどうなったらそうなるんだ。アーサーの躰がなってねえせいだぞ。あんな面倒事は金輪際ごめんだ。コイツを野放しにし

ておくのは危険だな。

そう言う結論に至って、俺も渋々同伴することにした。

んで、翌日。

「カイ様！ 歩くのが早いです！ エルメス様に合わせてください
！」

「ああ？ 何言ってるんだ。お前らが俺に合わせる」

「何をおっしゃるんですか。それでもシュヴァリエですか？ それ
でも筆頭なんですか？」

「これでもシュヴァリエ筆頭だ」

チクショー腹立つ、このクソガキ！ こいつのせいで終始険悪ム
ードだよ。コイツ空気読むとかそう言うのしないわけ？ 面倒くせ
え。腹立つ。

で、イライラしながらもなんとか一度も迷子にならずに、エルメ
スの行きたがってた靴屋に到着。迷子にならなかったのはよかった。
そこは。

椅子に座ってポケーっと買い物をするランスとエルメスを眺めて
たら気付いた。ランス、デカくなったなあ。ガキは成長が早ええな。

「カイ、お待たせー」

「お待たされ。エルメスお前身長いくつ？」

「ん？ 150だよ」

「ちっさ！ ガキか！」

「東洋人は西洋人に比べたら小さいものなの！」

「だとしてもチビだろ」

「まあ、だとしてもチビだけど」

「ちよつとお前ら二人背中合わせに並んでみる」

買い物を済ませて戻ってきた二人を早速比較してみることにした。二人を背中合わせに並ばせて、頭を合わせてみる。

「お、ランスももう少しでエルメス追い抜くんじゃねえか」

「本当ですか！？」

「ああ、あと3センチ位」

「ウツソ！ もうランスに追い抜かれちゃうんだ。やっぱり子供は成長早いねえ」

「来年なつたらとつくに追い越してんだろうな」

「うわあ、嬉しいです。僕も早く大人になりたいなあ」

「今から大人んなるのなんかあつという間だぞ」

「へえー・・・」

エルメスと出会ったばかりの頃、約3年前はまだほんのガキだったんだけどなあ。ガキの成長はいつ見てもいいもんだ。ランスは自分の成長が嬉しいようで終始ニコニコだ。10代の時間なんて本当にあつという間だから、コイツもすぐに大人になっちまうんだろうな。

「カイ様は身長いくつですか？」

「180ちよい」

「デカ！ ムダに！」

「ムダじゃねえ」

「じゃあ僕は185目指します」

「目指したからってなれるもんでもねえけどな。つーか何そのムダな負けず嫌い」

「大人になつてまでカイ様より劣る部分があるなんて、自分が許せません」

「どつという意味だコラ」

なんでコイツこんなにムカつくの？ なんで俺に負けたくないの？ もしかして俺見下されてんの？ 俺はコイツ喜ばせてやったのに、この言いようはどういうことだ。なんなんだよ、腹立つ。

店を出てそんなことを考えながら歩いてたら、通りすがりに男に肩がぶつかった。サーセン、と声をかけてそのまま行こうとしたら急に大声でまくしたてられた。が、何を言ってるのかが分からん。

「エルメス、アイツ何言ってるの。何語？」

「あれはヒンディ語だね。ぶつかつといて謝罪もなしかつて」

「あー、じゃあゴメンって言っとけ」

「うん」

エルメスが間に入ってその男を宥めはじめる。でも、事態は俺の予想だにしない展開に。エルメスとその男が段々険悪になってきて、大声で口ゲンカを始めた。

「ちよ、エルメス!? 何やってんだお前!」

「だってコイツ調子乗るんだもん! 病院行くから金出せとか言うから!」

「ああ? 面倒くせえ。んなもんやりやいいだろ。ホラよ、拾え!」

財布から金を抜き取って男の前にはら撒いてやった。で、男が金を拾ってる間にエルメス引き摺ってその場から退散。

「なんかカイ、成金の超ムカつくオッサンみたいだったよ!」

「お前ね、誰のせいだと思ってるんだ。しなくて済むケンカ始めたのは誰だ。なんでもかんでも拾ってくんじゃねえよ、バカ犬が!」

「そうですよ、エルメス様に何かあったらどうするんですか。ケンカはダメですよ!」

ランスにまで説教されたエルメスは、くっ、みたいな顔してる。そりゃランスでも説教すんだろ。この点に関して俺に同意しない奴はいねーはずだ。

しかし、街を見ていて気付いた。首都なだけに色んな地方から人が集まるものなんだろうが、さっきのヒンディ語と言い、街中では色々な言語で会話がなされてる。洋服を着た男、サリーを着た女。近代的な建物にムガル帝国時代の名残を残す建造物。混在する文明に目を奪われる。

「インドは文化が多样だな!」

「そうだよ。インドは国と言うより大陸だって言葉がある位だもん。人種も文化も言語も多種多様。面白いよねえ」

「ふーん、すげえな」

「そういう多種多様なインドの文化とかが面白くて、クリシュナは宗教とか歴史とかを研究してたんだよ」

「ふーん、つか吸血鬼なのに宗教研究してたのか」

「そうなの。クリシュナって変わってるよねえ」

クリシュナさんを思い出しながら笑うエルメスに何となく可哀想な気がしてきたが、それ以上に嫉妬むき出しの視線をぶつけるランスが気になる。

しょうがねえだろそこは。お前、思い出位ひたらせてやれよ、と内心呆れた。

思わずランスに溜息を吐いて次の店に入ると、蒸せかえるような香の匂い。

「うっ！ くっさ！ 気持ち悪！」

「本当・・・どうしよう」

「お二人ともどうなさったんですか？」

「この香が気持ち悪い」

「・・・そうでしょうか？」

「前に同じの嗅いだことある。ミラーカさんが言った。サンダルウッドっていう儀式に使われる香だって」

「なるほど、道理で。オイ、さっさと済ませてさっさと出てい」

「え？ カイは？」

「こんな臭えとこいられるか。俺は外で待つてる」
「わかったー」

しばらく外で待つていると、青ざめた顔をしたエルメスと、その後から心配顔をしたランスが出てきた。

「気持ち悪い・・・」

「どっかで休むか？」

「うん・・・」

近くに公園を見つけてベンチに座ると、エルメスはランスに膝枕されながらうだりはじめた。煙草に火をつけてその様子を見ていたら、エルメスがファイとこっちに顔を向ける。

「うう、今はその煙草の匂いがすごくいい匂いに感じるよ」

「さっきのアレに比べりゃあ、だろうな」

「カイ様、煙草って美味しいんですか？」

「吸う奴にはな。ランス、お前も吸ってみろ」

吸っていた煙草をホレ、とランスに向けると、ランスは慌てて首を横に振る。

「い、いいですー」

「お前早く大人になりてーんだろ？俺にできることができないまままでいいわけ？俺はお前くらいの歳にはもう吸ってたけどなあ。非喫煙者はシユヴアリエン中じゃお前だけだぞ」

「ええー…」

「ちよつとカイ、ダメよ。ランスはまだ子供なんだから」

出た、お母さんエルメス。うぜえ。

起き上がってきたエルメスは俺の手から煙草を取り上げ横に離すと、煙草は一瞬で灰になってその場にサラサラと散っていった。

「エルメス様すごい」

「っーかソレまだ吸ってたんだけど」

「あ、ゴメン、つい」

怒られた上に一瞬で灰になったマイハニー。エルメス許すまじ。でも慈愛にあふれる俺はあっさり許して新しく火をつけた。

「そついえば、煙草変えた？なんか匂いが違う」

「そりゃな。こつちで同じの売ってねえから」

「それもそつかあ。ていうか、やめようと思ったことないの？」

「ねーな。コイツと共に生きてコイツと共に死ぬの、俺は。俺が死んだら棺に煙草10カートン入れる。墓にも花じゃなくて煙草を供える」

「どんだけ・・・仮に私がやめてって言ったらやめる？」

「絶対やめねえ。意地でもやめねえ。っーかやめてほしいわけ？」

「んーん、別にどうでもいい」

「どうでもいいのかよ」

日の暮れた公園で紫煙をくゆらせる俺。素敵すぎる。ハードボイルド、俺。いや、ハードボイルドではないな。ニヒリスト、俺。いや、ニヒリズムに煙草は関係ねえ。ワイルドビューティ、俺。そうだ、これでいこう。

そーいや、吸い始めた頃はよくジュリオ様に隠れてみんなでコソコソやったなあ。で、ソツコー見つかって怒られたっけ。懐かしい。ジュリオ様は煙草、嫌いだったからなあ・・・

「！」

「カイ？ どうしたの？」

「いや・・・なんでもねえ」

「でも、なんか顔色悪いよ？」

「なんでもねえよ」

煙草から昔の事を思い出して、ジュリオ様の事を考えた瞬間に、あの日、ジュリオ様を殺した瞬間の映像がフラッシュバックした。

エルメスの手前と言うのもあるけど、それ以上に自分の為に見て見ぬふりをしている感情、罪悪感。言い訳をしようもないほど、俺はジュリオ様を殺した事を心底後悔してる。

でも、その事をいつまでも引き摺ってたらエルメスが苦しむし、俺も苦しい。早く、忘れてしまいたい。早く、消えて欲しい。

もう二度と、大事な人を手にかけることはしないと誓うから、も

う二度と、誰も裏切らないと誓うから、無理やりにも俺の選択を正当化させてくれ。

悪いのはジュリオ様だ。俺達を裏切つて、エルメス達を裏切つて、俺達を騙して、エルメス達を騙して、俺達の思いを蹂躪して、エルメスの家族を殺した。

悪いのはジュリオ様だ、俺のやったことは間違いなんかじゃない。主人の間違った判断を是正したに過ぎない。そうだ、俺は悪くない、俺は悪くない。

俺は悪くない・・・けど、あの人が好きだった。俺の、好きな父親。

正義の為に親を殺すのは、本当に正しい事なんだろうか。正義なんて立場が変われば悪にもなる。俺のやったことは本当に間違いじゃないかったのか。

仮に誰から見ても正義だ、と言ってもらっても、あの人に受けた恩を仇で返したことに変わりはない。俺達の出自がなんであれ、育ててくれたのはあの人だ。その事実には変わりはないのに。

何度も同じ葛藤を繰り返す。今まで毎日のように同じ問答を繰り返して、このメビウスの輪から抜け出された試しはない。

時間が忘れさせてくれるのを、待つしかないのか。

「カイ様、火、消えちゃってますよ？」

ランスに言われて煙草を見ると、根元まで短くなってとつくに火は消えていた。その場にポイと放り投げて足で踏みつけると、再びランスが口を開く。

「ジュリオ様の事ですか？」

「・・・別に」

「やっぱりまだ後悔してますか？」

「うるせえ」

「・・・カイ様、もしカイ様がジュリオ様で、僕やガロード様がカイ様だったら、あの時、あの瞬間、カイ様はどう思われますか？」

無駄な鋭さと不躰なランスにかなり腹が立つたが、言われて考えてみた。

もし俺がジュリオ様と同じように、どうしようもない憎悪に憑りつかれて同じことをして、ランスやガロードに殺されるとしたら、それはきつと、本望だ。

目的を果たすよりも、それほどの事をして尚家族に看取られるなら、泣いてくれたなら、幸せなのかもしれないねえ。

ジュリオ様は俺が嫌いになってないって言ったら、じゃあいいや、と言ってた。実に曖昧なニュアンスではあるけど、それは、そういう事なのかもしれない。

でも、それ以上というかそれ以前に、自分の息子にそんな責を負わせたくはねえから、そもそもそんなことしねえけど。

「元気でな、ってジュリオ様は最後に言ったんだよなあ」
「じゃあ元気じゃなきゃいけませんね。ジュリオ様を裏切ったと思
って後悔してるなら、これ以上の裏切りはダメですよ」
「お前、生意気」

驚いたことに、全く持ってランスの言う通りだ。コイツの言う通
りだと思っるのは相当癪なんだが、非常に遺憾ながら、なんか気が楽
になった。

しかし相当不本意だ。チクショー。エルメスはなんかニコニコし
てるし、腹立つ。部屋でサンダルウッド焚くぞ。あ、俺が嫌だ。煙
草の煙を充満させた棺にランスもろとも押し込んで、釘で棺の蓋を
打ちつけてやる。そうしよう。

こんな風に、コイツらと楽しく元気に生きてりゃ、その内煙みた
いに後悔も消えちまうんだろ。うな。

今日は、素直にそう考えた。

でも、その帰り道。

野良猫に魅了されたエルメスはまんまと迷子になった。

その内ヤキ入れてやる。

以上

第1期決算報告

これは由々しき事態である。

ペレアス「ヤバいな」

キルシュ「ああヤバいな」

ガラード「どうすんの？」

ガルフ「どうしよつか」

俺「またトリスの力を借りるか」

ランス「何をおっしゃるんですか。働けばいいでしょう。皆さん無職じゃないですか」

幹部一同「シュヴァリエだ！」

シュヴァリエ幹部会議中。全員で頭を抱える原因は、金欠だ。

俺「折角トリスが大金用意してくれたたつてのによお、お前ら湯水のように使いすぎなんだよ！」

キルシュ「あると使うもの、それが金じゃんよ」

俺 「だからってお前ら限度つてもんがあんだろ。毎晩のように夜遊びしやがって」

キルシュ「それ以外に俺ら楽しみないじゃん」

ガルフ 「まあ、確かにな。つーかカイだって何から何まで全部アルマーニで揃えやがって。人の事言えねえだろ」

ペレアス「しかもエルメスのもそのレディースラインで揃えてるし」

俺 「それは俺じゃなくてアーサーだよ！俺がやったのはアルマーニのエクステンジ！アイツにアルマーニは早ええ！」

ガラード「一緒じゃん」

俺 「一緒じゃねえよ！ ジョルジオ・アルマーニはエクステンジとは格が・・・」

ペレアス「ハイハイわかったわかった。副長のブランド解説は置いといて、どうすんの」

シャンティファミリーに支払う迷惑料及び水道光熱費 月400万

シュヴァリエの遊興費 月800万

被服、日用品費 月500万

その他 700万

残金 150万

ガルフ 「どう考えても使いすぎだな」

ペレアス「どんだけインド経済に貢献してんだ」

キルシュ「お陰で俺ら繁華街では既に有名人だぜ」

ガラード「自慢してる場合じゃねーし」

ランス「本当ですよ。遊ぶことしか能がないんですか？」

キルシュ「ランス、もうちょっと齒に衣着せようか」

俺「バカ、ランスの言う通りだ。どんな遊び方してんだお前ら。これからは自重しろ」

キルシュ「なんだよー、自分はエルメスに買いでるくせにさあ」

俺「買いでねーよ！ アイツが買えっつてうるせーから渋々買
い与えてんじゃねーか！」

ガルフ「それを世間では買いでるっつーの。全く、どいつもこい
つも……」

この調子だと150万なんて3日で飛ぶ。金は天下の回り物と言
うが、どう考えても流してばっかで帰ってきやしねえ。

俺「おい、お前らホストクラブでも働け。毎日が遊びだぞ
キルシュ」やだよ。相手したいんじゃないやなくてされてーの。第一酒飲
めねーし。お陰でキャバクラ行ったら嫌な顔されんだからな」

ペレアス「キャバクラでもねえのにこの金額はすげえよ。一体どん
な店で何時間延長して何件ハシゴしてんだよ」

キルシュ「ランスの前じゃ言えねー」

ランス「僕も聞きたくありません。虫酸が走ります」

キルシュ「ランス、もしかして俺のこと嫌いなのか？」

ランス「僕は本来エルメス様しか好きじゃありませんし、エルメ
ス様に色目を使う人は誰だって嫌いです。いつそ死ねばいいです。

この下種野郎」

キルシュ「クソー！ なんだよお前！ 超ムカつくんだけど！」

ペレアス「ランス、その辺にしとけ。泣くからコイツ。っーかお前

も子供相手にキレんな」

俺 「つーかランスの性悪っぷりはいつそ将来性を感じるな。アーサーの後継はランスで決まりだ」

ガルフ 「何言ってるんだよ。カイに似たんだろ」

俺 「どこが!? 俺に似たのはガライド! ランスは微塵も似てねえ!」

ガライド「いや、俺はエルメス似だから。どうでもいいけど、何度脱線したら気が済むんだよ」

ガライドが溜息を吐きながらそう言っつて、思わずみんなで、そうだった、と現実を思い出した。その時会議室(という名のガルフの部屋)にノックの音が響く。

「カイー、いるー?」

「ああ、なんだ?」

エルメスがドアから顔を覗かせてきた。部屋に入ってきたエルメスは申し訳なさそうにしながら、俺に一枚の紙を差し出した。

「おま・・・俺は今この類の紙を見ると頭痛がするんだけど」

「ごめんねえ」

エルメスの持ってきた紙はまさかの請求書。その額15万。こっちの気も知らないで残金は135万に減少。

「てめえ15万も何に使いやがった」

「本」

「本！？ 本で15万！？」

「うん。100冊くらい買ったよ！」

「買ったよ！ じゃねえよ！ テメエ本ばっか買いやがって、もう本棚入りきらねえだろ！」

「心配ご無用！ 本棚も買ったよ！」

「そう言う事じゃねえよ！ つーか余計な出費すんな！」

「うん、ゴメンね・・・これからは気を付けるよ。だから怒らないで。ごめんね？」

「ハア・・・たくお前は・・・しょうがねえな。俺が払っというやるから」

「わーい！ ありがとうー！ じゃあお願いね！」

「ハイハイ」

上機嫌で部屋から出ていくエルメスに深い溜息を吐いて振り返ると、なぜか白い目線。

ペレアス「副長、エルメス甘やかしすぎ」

ガラード「なるほど、確かに貢いでる」

キルシュ「涙目の上目遣いとごめんね？ に騙されてんだぜ、このシスコン」

ランス「さすがエルメス様。カイ様をウマイ事手懐けましたね」

俺「は！？ 手懐けるってなんだよ！ 騙されてもいいねーし！」

ガラード「それ否定したら副長が率先して貢いでる事になるよ」

俺 「貢いでねーし！」
ペレアス「貢がされてんだよ」
ガルフ 「エルメス意外と悪女だな。カイがエルメスにお願いされたら断れないってちゃんとわかってるぜ、アレ」
俺 「そんなバカな・・・」
ガルフ 「バカはお前な」

なんとということだ。したたか！ 女つてしたたかでズルい！ 畜生、俺の慈愛を弄びやがつて、エルメス許すまじ！
怒りと悲しみに打ちひしがれる俺の気も知らねえで、シユヴァリエの奴らは何故か笑いだす。

ガロード「こんなに他人に振り回される副長見るの初めてだ」
キルシュ「確かに。俺らは女で遊んでたけど、副長は遊ばれてるよな」

ペレアス「確かに。俺も女には気を付けるわ。いい勉強になった」
ガルフ 「確かに。でもカイは既に手遅れだな」
ランス 「確かにそうですね。まあ、エルメス様がどれほどカイ様を弄ぼうが全く問題ありませんが」

俺 「バカ言え！ 大問題だコノヤロー！ ざけんなよ、クツソオオオ！ 冗談じゃねえぞコノヤロー・・・アイツ、あのバカ女、その内目にモノ見せてやる。ヤツてやる、泣いて気絶するまでヤツてやる！」

エルメス「そんなことしたら芥子炭にするよ？」
幹部一同「ギヤアアア！」

突然現れたエルメスに一同仰天。エルメスは本当に突然、ガルフ

のベッドの上に正座して座っていた。

「おま、お前どっから・・・」

「その前に。あなた、謝罪と焼死、どっちにする？ それとも、バ・ク・ハ？」

「すいませんでした」

「わかればよろしい」

思わぬ真相を突きつけられた上に、盛大に驚かされた上に、謝罪までさせられた。俺ちよつと可哀想すぎる気がする。アーサーは本当にどういう教育をしたんですかね。バカかと思えば変なところで妙に頭使いやがって。ムカつく。

ガラード「ていうかエルメス急にどっから、いつの間に？」

エルメス「エへへ、ジュリオさんにできることが私にできないはずがないと思つて、本で勉強したのだ！」

キルシュ「もしかして瞬間移動？」

エルメス「うん！ 体を素粒子まで分解して自分の認識した座標で観測したの！」

ペレアス「量子力学か？」

ガルフ「ゴメン、全然意味わからん」

エルメス「要するに行つたことある所なら行けるって事！」

ランス「それはすごいですね。迷子の心配ないじゃないですか」

エルメス「うん。でも人前じゃ使えないけど」

俺「んなことより何の用ですかね」

俺の質問にエルメスは思い出したような顔をして、デケエケースを目の前に2つ置いた。

エルメス「お金盗ってきたよ」

キルシュ「は？」

エルメス「お金」

ガルフ「え、ていうか、盗ってきた？」

エルメス「うん。銀行から」

ランス「ご、強盗したんですか？」

エルメス「やだなあ、泥棒だよ！」

ペレアス「相変わらず悪趣味だな」

エルメス「趣味じゃないよ！」

そう言っただけでエルメスが開けたケースには札束がギツシリ詰まっていた。アーサー・・・アンタ本当にどんな教育したんだよ。まんま、本物の悪女じゃねえか。笑顔で泥棒したとか普通は言わねえよ。

「テメエ、なにやってんだよ。なんで勝手にそう言うことすんだお前は！」

「だって、お金ないって言ってたから」

「だからってお前、やって良い事と悪い事があんだろっか！」

「でも困ってたでしょ？」

「だからってこんな金使えるか！返してこい！」

「でも私達はいつも泥棒してたよ」

「マジか」

「マジ。それにホラ、いつも色々買ってくれるでしょ。貰うばかりって悪いし、私もたまにはみんなの役に立たなきゃと思って。だ

からそんなに怒らないですよ。ごめんね？」

「ハア・・・ったくもう、本当お前はしょうがねえな。今回だけだぞ」

「うん！ ありがとう！」

元気よく返事をしたエルメスはその場からフツと消えていなくなった。それに少し驚いたけど、さすがアーサーの眷属だな。何でもアリか。

エルメスも反省してるようだし、それに俺らの為にと考えてやってくれたみてえだから、今回は許してやることにした。次回からはやっぱりトリスに助力願う。まあ、結果的には一緒だけど。

ガロード「ていうかやっぱり副長エルメスに甘いよ」

ペレアス「エルメス甘やかすなって言ったの誰だよ」

キルシュ「俺らにはいっつも厳しいくせにー」

俺 「バカ言え。今回だけだ。それに俺らの為だってんならしようがねえだろ」

ガルフ 「だからお前騙されんだよ。バーカ」

俺 「ああ！？」

ランス 「カイ様は完全にエルメス様の傀儡ですね。アハハ最高！マジウケる！」

俺 「ランス、テメエ素に戻ってんじゃねえよ」

ランス 「次期息子、そして次期旦那候補のこの僕がマリオネットのカイより格上なのは当然じゃん。敬語遣ってやる義理ねーし」

俺 「誰がマリオネットだコルア！ つーか敬称くらいつけやがれ！ このクソガキが！」

ガルフ 「やっぱランスはカイ似だな」

俺 「黙れ！ うっせー！ クソボケチクショー！」
ペレアス「副長が一番うるせーよ」

アーサー、俺もう本当どうしよう。タスケテ・・・泣きたい。色々ムカつきすぎてわけわかんなくなってきた。

俺はもう本当、なんなんですかね。どうしたらいいんですか。どうすればいいんですか。全員殺せばいいんですか。そうですか。わかりました。あ、心配するな。エルメスだけは見逃してやつから。

幹部のバカども「ギャアアアアアアア！」

アーサーの助言のお陰で、心の平穏を取り戻しました。だいぶスッキリしました。ありがとう。
ストレスフリーな俺、プライスレス。

以上

【重要】アーサーへのクレーム報告

疲れた・・・俺にはね、正直理解できないんだよ、そういうの。
だから余計面倒くさい。

インドに来て既に一か月を経過。それで最近やっと少しだけ落ち
着いてきて、インドの生活にも慣れてきた。それで気づいた。

どうやら俺はシャンティファミリーの一人、アジメールに嫌われ
ているらしい。

なんで？ 俺は何かしたか？ 全く身に覚えがない。でもアイツ
は俺と目が合った瞬間に逸らしたり睨んだりする。なんだよ、スゲ
エムカつくんだけど。

別にほっといてもいいんだけど、それにエルメスが気付いたら余
計に気を遣わせるだろうと思って、シャンティに聞いてみた。

「ああ、そーみたい。なんか文句言ってたもん」

「なんで!?! 俺何もしてねーじゃん!」

「アハハハハ！ 確かにね。まあでもしよすがねえよ」
「なんでだよ」

「嫉妬だよ、嫉妬」

「はあ？ なにが？ なんで？」

「カイはミナ様と同室で、いつつもつきつきり。ミナ様はカイに頼りつきり。まるで夫婦」

「はああ！？ 同室は俺の意志じゃねえし、しよすがねえだろ！

っ！か俺的には病気で入院中の娘を心配する父親の気分なんだけど
っ！」

「あ、そつちのがしつくりくるな。まあ、一応あたしはわかってっけどさ、ミナ様に一番近いのはカイだし、ミナ様がカイを傍に置きながらのが気に入らないんだよ」

「それ、俺のせいじゃねえじゃん・・・」

「まーね。でもしよすがねーじゃん。アジメールはミナ様大好きだし。ライバルだと思われてんじゃねーの」

「あり得ねー・・・大体エルメスにはクリシユナさんとアーサーがいるんだし、っ！か俺無関係なんだけど！ っ！かクリシユナさんとアーサーは良いのに、俺が目をつけられる意味が分からん！」

「まあ、あの二人にはみんな感謝してるし、尊敬してるから。アンタにはしてない」

「デメエ・・・」

要するにとぼっちりだ。最悪だ。超面倒くせえ。やっぱほっこりっ。

シャンティと話が終わって部屋に入ろうと思ったら、ディナが慌てて走ってきた。

「副長！ 大変大変！」

「だから副長じゃねえって。筆頭もしくはカイ様と呼べ」

「それどころじゃないんだって！ ケンカ！」

「は？」

「ガードとアジメールがケンカはじめてんの！ 止めて！」

「はあああ！？」

普段大人しいガードがケンカするなんてどうという風の吹き回しだ。ていうか面倒くさいんだけど。

「いや！ お前なんかまだまだだね！」

「お前みたいな新参者に何が分かるんだ！」

「わかるに決まってるんだろ！ 俺はエルメスの息子なんだから！」

何を言ってるんだこいつらは。何をやってるんだこいつらは。

「何？ つーかなんでケンカしてんの？」

傍でケンカの様子を眺めてたパーシーに聞いてみると、パーシーは笑って答えた。

「ああ、どっちがエルメスをより崇拜してるか競ってただよ」

「バツカじゃねえの！！ そんなこと競ってどうすんの！？ アホ

か！

もう俺やだ・・・面倒くせえ。アーサーさえいてくれたらこんなアホどもが活発になることもなかったのに。もういっそ、これはアーサーのせいだぞ。マジで。

俺 「あーお前らもうやめろ、うぜえ」

ガラード「ゲツ！ 副長！」

アジ 「つーかアンタが一番ムカつくんだよ！」

俺 「あーハイハイわかったから。うるせえ、黙れ」

ガラード「副長も何とか言っちゃってよ！ 俺エルメスの唯一の支配下の吸血鬼じゃん！ 特別じゃん!？」

俺 「あーハイハイそうだな」

アジ 「ていうかガラードもだけどカイが一番ムカつくんだよ！

急に現れて当たり前みたいにミナ様につきつきりできあ！」

俺 「あーハイハイすみませんね」

ガラード「ていうか、そうだよな！ 副長ズルい！」

アジ 「だよな！ なんなんだよアンタ！ カイよりも俺の方がミナ様好きなんだからな！」

俺 「あーハイハイそうですね」

なにこれ超うぜえんだけど。もう本当どうでもいいんだけど。なんでケンカしてた二人が俺に突っかかってくんだよ。俺が一体何をした。うるせーし、マジうるせーし。

正直俺は呆れて物も言えない的な感じなんだけど、このバカどもは容赦なく文句を連ねてくる。さすがに腹が立ってきた。

俺 「つーかお前らよお、そんなにエルメスが好きなら言えば

いいじゃねーか。それで白黒はつきりさせりゃいいだろ」

ガイド「俺のはアジメールと違って不純な好意じゃねーの！ 大体近衛の俺がそんなことしたら本末転倒じゃん！ アーサー様に殺されるじゃん！」

アジ 「誰が不純だ！ つーかできるか！ 俺はアンタと違って厚顔無恥じゃねえんだよ！ ミナ様にはクリシユナ様とアルカード様がいらっしやるんだぞ！」

俺 「誰が厚顔無恥だ。つーか、わかってんならケンカする理由もねえだろ。大体お前らがケンカして一番嫌がるのは誰か考える」

バカ二人「……」

俺 「わかったらバカみてえなことでケンカすんな。お前らがどんなに競つても、エルメスはみんなを平等に見てるぞ、アーサー以外はな」

アジ 「……アンタもか？」

俺 「当然だ。アイツの博愛主義は徹底してるからな。こいつは嫌い、こいつは好きみたいなことをエルメスは出来ない。今俺が一番アイツに近いのは、俺が言い出したから、友達だから、筆頭だから、それだけだ」

やつとのことと黙ってくれた。さすが俺、さすが管理職の威厳。しかし、クリシユナさんにランス、アーサーにコイツら、エルメスがこんだけ愛されてるのは良い事なんだろうけど、そのとぼっちりを食らうのは心底面倒くせえ。アイツの博愛主義は八方美人とも言うな。その内絶対自分で責任を取らせる。

ケンカが収束してリビングの人口が減ってきた頃に屋敷のインタールホンが鳴った。シャンティが連れて来たのは一組のカップル。

「ミナ様にお客様だ。呼んできてくれねーか？」

「ああ、ランス」

「はい」

ランスに呼ばれてリビングにやってきたエルメスは急に涙目になって、そのカップルに抱き着いた。

「@ ¥ ○ ¥ 。 @ ○ # \$ % ○ # \$ % # ○ !」

「# \$ # \$ % ○ # % & !」

何語？　なんて言ってるかわかんねえんだけど・・・ひとしきり抱き合って不思議語で語り合ってた3人は少しすると落ち着いたようにソファに座った。

「あ、紹介するね。この二人はベトナムでの友達なの。女の子がトリン、男の子がツアン。ベトナムのセーフハウスの守護者たちだよ」
「あーなるほどね。んじゃさっきのはベトナム語か」

「うん。ていうか、トリンとツアンって英語じゃべれた？」

「あたしは喋れるよ。お父さんアメリカ人だしね」

「俺は今義父さんに習って勉強中」

「ツアン上手じゃない！　ていうか、義父さんってまさか！」

目を輝かせたエルメスの前にトリンとツアンはにっこり笑って左手を差し出した。その左手の薬指には光る指輪。

「うわぁ！ 結婚したんだ！ おめでとう！」

「えへへ、ありがとう！ もう、アミン連絡つかないから知らせる事も出来なくて困ったよ」

「ごめんねえ・・・ていうか私も結婚したんだよね、一応」

「マジで！？ いつの間に!？」

目を輝かせる二人の前で、エルメスは寂しそうに笑った。話すのはまだ辛い、か。だけど、この二人が友達だってんなら話して慰めてもらうのもいい。

「エルメス、積もる話もあるだろうから部屋でゆっくり話せ」

「あ、そうだね、ありがとう。カイも一緒に来てよ」

「あ？ なんでだよ」

「私一人じゃ話せないから」

「・・・わかった」

「

そっか、アルも・・・」

泣きながら一生懸命言葉を繋ぐエルメスの話を聞いて、ツァンは寂しそうに呟いて、トリンは泣いていた。話はベトナムを出国してから今日の事まで。でも序盤からエルメスの顔は曇った。インドに来てすぐにクリシュナさんと出会ったから。

エルメスの話を聞いて思った。本当にエルメスとクリシュナさんは運命の出会いだったんだな。

昔なんかの雑誌で読んだことがある。お互いに一目惚れして出会った男女は、遺伝子で惹かれあってるんだと。遺伝子の引力とでもいうのか。まあ、運命って言うには夢のない話かもしれないけど。

でもそれは本当に砂漠から砂金を見つけるような確率で、そんな相手に出会えたら運命としか言えねえと思う。

エルメスはアーサーと出会ったからクリシュナさんと運命的な出会いをして、アーサーとジュリオ様が宿命の再会を果たしたから俺たちと出会って、今ここにいる。人の生つてのはわかんねえもんだ。

「でもね、アーサーさんは帰ってくるって言ったの。だから待つてるの。ここでカイやみんなと一緒に、クリシュナのお墓を守りながらずっと待つ。きつと帰ってきてくれるから」

泣きながらそう言って、エルメスは二人に笑顔を向けた。その笑顔はやっぱり営業スマイルで、トリンとツァンはすぐにそれに気づいたようだ。

「辛いな、辛いよな。よく耐えてきたな。でも、無理すんなよ」
「そうだよ。辛い時には辛いつて言っていていいんだよ。あたしたちにできることがあつたら何でも言つてね?」

つくづく、エルメスは周りに恵まれてると思う。多分それもエルメスの人徳なんだろうけど。二人の言葉を聞いてやっぱりエルメスは泣き出して、ありがとう、と小さく言った。

しばらく経つて落ち着いたエルメスは、二人に何故ここに来たのか尋ねた。

「実はシャンティから連絡を貰つたのよ。会いに来てあげて欲しいつて」

「え? シャンティが? なんで知ってるんだらう?」

「俺同様にシャンティにも継承したんだろ? 譲渡書と別に連絡先を残してあつたみたいだよ。アルに何かあつたら連絡するようにつて」

「ウン・・・」

エルメスと共に俺も驚いたぞ。アーサー、アンタいつから予測してたんだ。それとも念のためレベルの杞憂か? いや、アンタのことだ。そんなはずはない。

いつからこうなるとわかつてた? もしかして、今消滅してるのは計算の内なのか? それなら何故、エルメスに何も話してないん

だ？

驚いていたエルメスは徐々に考え込むような顔をしてブツブツ言
いだした。

「そう言えばアーサーさん、インドを出る時にすぐにまた戻ってく
るとか言ってた。その時、その内話すとか言ってた。そう言えばな
んかミラーカさんとコソコソしてた。そう言えばなんか対策がある
のどのの言ってた！ そう言えば私を眷属にしたのは理由がある
とか言ってた！ そう言えば消える瞬間、時が来てしまったとか言っ
てた！ てことは私に出会う前から、8年前からわかってたの？
まさか、まさか、今いないのって計算通りなの！？」

「そーみたいだな」

なぜか俺に突っかかってきたエルメスに俺は肯定してやりました。
ざまあみる。全くアーサーは大した奴だよ。何重に策を弄してやが
るんだ。

ていうか、エルメスには話しとけよ！ どんだけエルメスが辛い
思いしてると思ってるんだ！ このボケ！ アホ！ バカ！

「んもー！ アーサーさん相変わらずヒドイよー！ 教えないって
言ってたのはこの事だったのか！ そりゃ計算通りなら帰ってくる
って言えるよね！ 全くもー！ 本当にあの人はー！ バカマスタ

ー！」

「全くだな」

「本当だね。相変わらずアルは性格悪いな」

「ドンマイ、アミン」

ソファに伏せて暴れるエルメスに俺らは苦笑いですよ。あーでも、ムカつくけど、ちゃんとアーサーが帰ってくるってわかって、正直スゲー安心した。

つーか話しとけよ！ この件に関しては100回文句言っても足りねえ！ このバカ！ 陰険クソオヤジ！

ひとしきり暴れて起き上がったエルメスは怒ってたけど、でも嬉しそうに言った。

「全くもう、しょうがないなー。待っててやるかあ」

全然しょうがないって感じじゃなかったけどな。いつ帰ってくるのかはわかんねえけど、帰ってくる可能性が高いつて言う保証は、随分エルメスを楽にしてくれた。

帰ってくるかどうかわからないって不安は、本当にエルメスにとつては辛いものだったから、本当に良かったと思う。つーかマジこのバカ！ ざけんな！

しばらく話して再び4人でリビングに戻った。さっきの話をシュヴァリエやシャンティ達に話して聞かせると、なんだよー！ ってやっぱ怒ってたぞ。でも、みんな安心してた。

当然だ。俺らだってアーサーが帰ってくるのを本当に心待ちにしてんだからな。つっても別にアンタに会いたいわけじゃねーからな。言っとくけど。

つーか、トリンとツァンが結局、爆撃機だった件。

「ていうか、最初アミンが結婚したって言った時、あたしカイくんが旦那さんだと思った」

「あー俺も」

「んなわけねーだろ。たまたま近くにいただけじゃねーか」

「それもだけど、なんていうか雰囲気？」

「そうそう。カイくんがアミンを見る目が超優しいから」

「イヤイヤイヤ、やめてくれ。本当にやめろ」

「えー？ カイが旦那さん？ 想像できな〜い」

「しなくていい！ あり得ねえから！ お断りだから！ 断固拒否
！」

「・・・ちよつとシヨツクなんだけど」

「黙れ！ むしろ喜べ！ バカ！」

「まあ、何怒ってんの？ ていうか、喜ぶわけないじゃない！ カイが一番仲良しなのに！ カイは特別なのに！」

「うおお！ マジやめるバカ！ 空気読めバカ！ 喋んなバカ！」

「な、何もそこまで言うことないのに・・・」

夕方のことがなきや普通に嬉しかったと思いますよ。でもね、視線がね。痛いんですよ。もうアジメールとガイドがめっちゃ睨んでるしさあ、ランスとかスゲエ形相してるしさあ。マジあのバカ女勘弁してほしい。

「あ、じゃああたし達帰るね」

「アミン、また来るからな」

「二人ともありがと！ 送ってくよ〜！」

「あたしも一緒に行くよ」

どうも雰囲気を感じたらしいトリンとツァンは足早に立ち去って、エルメスとシャンテイも二人と一緒に屋敷を出て行った。俺も着いて行こうと立ち上がると、にっこり笑ったランスに引き留められた。

ガラード「ふーん、副長は特別なんだってさ」

アジ「ウソつき」

ランス「まさかそう言う作戦？ 僕たちを安心させといて、裏から虎視眈々と・・・」

おれ「なわけねーだろ！ エルメスが言ったのはそう言う事じやねえよ！」

アジ「じゃあなんだよ」

俺「え？ えーと・・・あ、そうだ。付き合い長えし！」

アジ「それなら俺たちの方が付き合い長いけど」

俺「あ・・・えーと、あ、仕事で一緒だったからだ！」

ガラード「それなら俺らも一緒だったけど」

俺「・・・っ！かお前から面倒くせーよ！ 元々友達なんだから普通だろ！ いいじゃねーか別に！」

ランス「よくない！ カイが同室なだけでも僕は嫌なんだから！」

俺「それは俺の意志じゃねえよ！」

アジ「だからムカつくんだろーが！ なんでミナ様はアンタを指名してんだよ！」

俺「部屋が空いてねえからだろ！ っ！かランスも指名されてんだろ！」

ガラード「それはランスが子供だからじゃん。なんで副長なの？」

俺「知るか！ エルメスに聞けよ！ っ！か俺はむしろ誰かに変わってほしいんだけど！」

ガラード「そんなこと言ったらエルメスが可哀想。それ聞いたらエルメス悲しむよ」

アジ「ミナ様のご指名なのに逆らうのかよ！ 反逆者め！」

ランス「カイは筆頭なのに命令の一つも聞けないわけ？」

俺「なにをおおお！？ つーかお前らどっちだよ！ もう面倒くせーよ！」

もー！ アーサー！ アーサー！ 何とかしろよコイツらを！
付き合いきれねえし、面倒くせーし、もう面倒くせえ！

念のため言っとくけど、俺はエルメスには興味ないからね！？
忠誠と友情しかないからね！ エルメスも俺にはそう言う興味はないからね！

大体さあ、そう言う嫌疑をかけるのって俺にもエルメスにも失礼だと思わねえ？ 俺もエルメスも友達だって言ってるわけじゃん。
俺はエルメスのシュヴァリエとして忠誠を誓ってるわけじゃん。その友情と忠誠を疑われたと思うと、俺は悲しくてしょうがねーよ。

もう本当俺の味方になってくれんのシャンティくらいしかいねえ。
アイツはその辺分かってくれてるみたいだからな。やっぱアイツはいい奴だ。

アジ「とか何とか言って実際嬉しいくせに」

ガラード「さすが副長。ポーカーフェイスが上手だな」

ランス「カイはジュリオ様によく似てウソつきだもんね」

アーサー、アンタ帰ってきたらこいつらを速攻シバキ回してくれ。

生きてることを後悔するほどにシバキ回してくれ。頼むわ。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

何に囚われて、何に縛りつけられているのか。俺は、分からない。

あれからしばらくトリンとツアンはインドに留まっていた。大体1週間くらいか。その間毎日屋敷に遊びに来ては、エルメスを元気づけてくれた。

その時に、トリンの救出作戦だの、デイヴィスファミリーとの抗争だの、トリンに射殺された話だのいろいろ聞いた。

アイツすげーな。こんなにネタに困らねえ奴なんてそうそういねえぞ。なんなのアイツ。ネタ製造機？

「あたしを助けに来てくれた時のアルはさすがだったよ。あたしベツドに手錠で捕まってただけで、鍵かかったドアをバーンって壊

して、手錠ブチって引きちぎって「立てるか？」って。危うくホレそうだった」

「もう、その事何度思い出してもムカつくよ。その間私撃たれてただけだし」

「まさしく撃たれ損だよな」

思い出話に花を咲かせて笑うエルメスは、以前のエルメスに戻ったような笑顔だ。この二人のお陰で、だいぶ元気を取り戻せたみたいだ。やっぱ持つべきものは友達だな。

ツアン 「でも俺アミンが死んだって聞いたとき本気で泣きそうだったよ」

トリン 「あー・・・ごめんね」

エルメス 「もう済んだことじゃない！ 友達に射殺されるなんて中々経験できな・・・あ、今でもしてるわ」

ツアン 「ええ！？ どゆこと!？」

エルメス 「カイに何度か殺されそうになったし、殺し合いもして何度か撃たれた」

トリン 「カイくん・・・本当に友達なの？」

俺 「親友」

ツアン 「・・・アミン、お前騙されてるんじゃないの」

エルメス 「騙されてはないよ。カイが異常なだけ」

俺 「まあ、そうだな」

トリン 「認めるんだ・・・ていうか、アミンはそれでいいんだ」

俺 「いいに決まってるんだろ」

ツアン 「なんでカイが答えんの？ あのさあ、限度って言葉知ってる？」

エルメス 「まあ、ちょっとくらいなら死なないから」

トリン 「そう言う問題？」

死ななきやいいつてもんじゃないよね、とオシドリ夫婦は首を傾げるが、エルメスは終始ニコニコしてた。

コイツの寛容さはもはや寛容とは言わねえ。ただのバカだ。撃つた俺が言うんだから間違いないえ。

俺 「それを水に流しても有り余るほど助けてやってるからな」

エルメス 「そうだけど、カイがソレ言う？」

俺 「言う」

エルメス 「バカじゃないの？」

俺 「バカはお前。全く、クソ生意気なバカ娘だな」

トリン 「ヒド・・・カイくん、本当に友達なの？」

俺 「大親友」

ツアン 「ウソつけ！」

俺 「マジで。世界で二番目に大事にしてやってっから」

ツアン 「なんか胡散臭い上にいかがわしいんだけど」

トリン 「ちなみに一番は？」

俺 「二番と圧倒的に差をつけて、俺」

エルメス 「私が一番じゃなかったの？」

俺 「日によってごく稀に一番だ。喜べ」

エルメス 「そつか。ありがとう」

ツアン 「アミン、飼い馴らされてんな・・・」

そーだよ！ 本来俺が飼い馴らすべきだ。ていうか、本来俺がこの駄犬を飼い馴らしてたんだっただよ。

じゃあなんで俺貢がされてんだよ。意味わかんねえし。やっぱガ

ルフたちの勘違いか。そうだな。そうに決まってる。俺がエルメスにいい様に使われるはずがねえ。

大体見てみる、このバカを。終始ヘラヘラ笑ってるだけのバカ娘じゃねーか。コイツの取り柄つつたらバカと巨乳以外にはねーだろ。そんなバカに俺が操作されるはずはねえ。

っーか何回バカを連発させる気だ。いい加減ゲシユタルト崩壊してくるぞ。っーかアーサー本当によくこんなバカに惚れたな。マジで理解できん。

しかし、アーサーと言い、クリシユナさんと言い、ランスと言い、アジメールと言い、まあガロードは別格だが、アタマおかしいんじゃないの。俺には全く理解出来ねえ。

いや、もしかして、俺がアタマおかしいのか？ いや、そんなはずはねえ。まあ確かにちよつと異常なところはあると自覚してるけど、俺はおかしくねえ。

っーか、なーんで俺は今日こんなにイライラしてんだ。多分エルメスに対するストレスがかなり溜ってるんだな。それはそれでムカつくな。エルメスこときの為にストレスため込むなんてバカみてーじゃん。

「ツァン、マイケルさんとはどう？」

「義父さんは、さすがだよ。超やり手。基本的にいい人だし、さすがに元マフィアだけあってコネクション作るの上手いんだよ。見てすごい勉強になる」

「へえー！ でも、確かにそうかもね！」

「ツアンとお父さんが仲良く上手くやってくれるから、あたしも安心だよ」

「本当だね！ そう言えば子供は？」

「実は今5か月！」

「マジで！？ すごーい！ おめでとう！」

「えへへ、ありがとう」

トリンとツアンは本当に幸せそうで、そんな二人ののろけ話を聞きながらエルメスも嬉しそうだ。エルメスは本当にこの二人の幸せな姿が嬉しいんだろうな。

エルメスは、幸せじゃないのに。

夫は死んで、子供だって作れない。主人もいなくなって家族も死んだ。エルメスはもう人並みの幸せを手にする事は出来ないのに、なんで、笑って聞いていられるんだよ。

なんで俺はこんなに、この二人に、エルメスに腹を立ててるんだろう。

エルメスはこの二人の幸せな姿を見て喜んでるじゃねえか。二人の幸せを羨んだり妬んだりしてねえじゃねえか。エルメスが笑ってるなら、それでいいじゃねえか。

エルメスは前のエルメスみたいに、幸せそうな笑顔で笑ってる。

この二人の存在が、エルメスを元に戻しつつある。それで、充分だろ。

なんだ？ 俺は、どうしたんだ。どうしたって言うんだ。エルメスが笑ってるのが、許せないなんて。

あり得ない。今日の俺は明らかにおかしい。この二人に妙に腹を立ててる。二人と笑いあうエルメスに腹を立ててる。何故？

わからない。俺は、どうしたいんだ。どうなれば満足するんだ。

エルメスの笑顔を取り戻したいんじゃないのか？ エルメスが幸せになれば、それでいいんじゃないのか？ アーサーが帰ってきて、エルメスが安心できればそれでいいんじゃないのか？

この二人が来たことでそれに近づいているのに、俺はそれを不満に思ってる。自分が、わからない。

アーサー、俺は、どうしたんだ。何に囚われてるんだ。俺はどうしたいんだ。俺はどうなれば満足するんだ。

俺は自分が、わからない。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この安心は、一体どこからやってくるのか。この不安は、一体どこからやってくるのか。

俺は何を心配しているんだろう。何を懸念してるんだ。

「もうそろそろベトナムに着いた頃かなあ」
「多分な。わかんねーけど」

あの二人が帰ったことに、安心してる。

「寂しいー！ 今度私達もベトナムに遊びに行こうよー！」
「そのうちな」

寂しがるエルメスにイラついている。

「もー、カイどうしたの？　なんか最近冷たい」

「俺はいつも優しい」

「・・・どこが？」

「全部。俺はお前にはいつも優しい」

「まあ、そうと言えばそうだけど。でもなんかおかしい」

「お前ほどじゃねえ」

やっぱり俺はおかしい。

一週間ほどインドに滞在していたトリンとツァンは今日、帰って行った。二人を空港まで見送りに行って、飛び立つ鉄の鳥を見て、俺は心底安心した。

ああ、よかった。これであの二人にはしばらく会う事はないだろう。これで、エルメスは今までどおり
今まで
どおり・・・なんだ？

なんで俺はあの二人が気に入らないんだ。シャンティ達やシュヴァリエ達に、あそこまで腹を立てたことはない。あの二人とシャンティ達とシュヴァリエ達と何が違う？

イラつきすぎて、思わずエルメスに冷たく当たってしまっ。なぜ？　エルメスは何もしてないだろ。俺が勝手にイラついてるだけだ。ただの、八つ当たり。俺らしくもない。

いや、エルメスにもイラついてた。エルメスの笑顔に、イラついてた。なぜ？

わからない、わからない。

不安

なにが？ 何度考えても、わからない。

もう、考えるのは辞めよう。どうせわからない。分からないことをいつまでも考え続けるのは、面倒くせえ。

今回の事は、忘れよう。きっと、たまたま虫の居所が悪かっただけ。そうに決まってる。

「カイ、煙草吸い過ぎ！」

最近イラついてたせいか、明らかに本数が増えてた。空港からの往復だけで、もう既にひと箱空になった。

「うるせーよ。吸血鬼なんだから別に病気になったりしねえよ」
「それはそうだけど。私に煙草の匂いが移っちゃうじゃない」

その言葉に、強烈に感じた

幸福感。

「別にいいじゃねーか」

「まあ、よくないよ。髪についちゃってるもん。ホラ」

エルメスのサラサラとした長い髪から漂う煙草の香り。「俺の」
煙草の香り。

漂う香りは、まるで、マーキングでもしたように。証拠。エルメ
スが、俺の物であるという、証拠のよう。

感じた不安、幸福感、行きついた結果。

執着、依存、嫉妬、独占、支配
スを、征服したい。

俺はエルメ

強烈な、征服欲。異常な、独占欲。
俺はエルメスを、自分の「所有物」だと思ってる

いっそのこと、これが愛情ならよかったのに。

俺は自分の都合で、自分の好きなように、自分の望むように、俺だけのエルメスを作り出そうとしている。

俺の理想。

エルメスが幸せになって、アーサーが帰ってきて、エルメスを幸せにする。それまでは、エルメスはアーサーを思って、俺の保護の下で、俺の管理下で、俺の手によって笑顔でいなければ気が済まない。

俺以外の他人が、俺とアーサー以外の他人が、エルメスを笑顔にすることが許せない。俺の手で生み出されるものでなければ気が済まない。

これは愛情なんかじゃない。異常な、所有欲。異常な、支配欲。異常な、管理欲。

愛情だったなら、エルメスがただ笑顔でいれば、幸せだと言っ
たら、それで満足できたはずなのに。エルメスの幸せだけを願えたは
ずなのに。

切望するのは、俺に支配されたエルメスの幸福。

その為に、エルメスの我儘を何でも受け入れて、片時も離れず傍
にいて、エルメスに近づく他者を排除する。

エルメスの独占支配。強烈な嫉妬と執着と依存。まるで、ジユリ
才様の妄執を引き継いだようだ。

異常な、妄執。

異常

ああ、俺は、異常だ。

LETTER - 4 Cruel 「邪険」

拝啓 アーサーさん

どうしよう、どうしよう。私カイを怒らせちゃったのかな。嫌われちゃったのかな。アーサーさん、私はどうしたらいいんですか？

この前からカイの態度がおかしくて、ずっとなんか冷たい感じがしてたんですけど、最近明らかに避けられてると言うか、冷たくされます。

もしかしたら、我儘を言って調子に乗りすぎて呆れられちゃったのかもしれないし、すぐにケンカになったり、トラブル起こしたりするのを怒ってるのかもしれない。

お金を盗んできたのを怒ってるのかもしれないし、トリンとツァンが遊びに来てた時に、仲間外れにしたみたいに思われて、怒ってるのかもしれないし、全部かもしれない。

トリンとツァンが帰って行った後くらいからますます私を避けるようになって、私が話しかけても適当にしか返事をしてくれないし、私が近づくと逃げられちゃいます。

私はカイに嫌われちゃったんでしょうか。どうしよう、どうした

らしいんですか。

私、カイに嫌われちゃったら、生きていきません。ずっとあんな風に冷たくされるなんて、耐えられません。

シャンティと、ガロードとランスに相談してみても、そんなはずないよって、カイは私を大事に思ってるよって、気のせいだって言ってくるけど、気のせいのはずない。

謝った方がいいのかもしれないけど、何に怒ってるのかわからないし、そんな状態で謝っても適当に謝ってるみたいに思われて、余計に嫌われちゃうかもしれないし。

それになにより、面と向かって嫌いになったって言われたら、私もう生きていけない。辛くて辛くて、今だって死んじやいたい。

222

私、カイがいなきゃ生きていけないのに、カイに嫌いって、いらないうって言われたら、どうしたらいいのかわかりません。生きる気力なんて失くしてしまいます。

みんなが、カイがいるからアーサーさんを待てるのに、カイがいてくれたからちよつとずつ元気になれたのに、私がバカだから嫌われちゃったんでしょうか。

私、カイに甘えすぎてたのかもしれない。カイに頼りすぎてた

のかもしれない。カイは前から鬱陶しいの嫌いって言ってたし、私のそう言うところに嫌気がさしたのかもしれない。

カイが頼っていいって、甘えていいって言ってくれた言葉を真に受けて、調子に乗りすぎてたのかな。

アーサーさんにも調子に乗って怒らせたりしたこといっぱいありましたもんね。私は、そういうダメな女なのかもしれない。

アーサーさん、もしアーサーさんが同じ理由で怒ったら、私がごめんなさいって、これからはちゃんとするからって言ったら許してくださいますか？

ちゃんと言う事聞くから、我儘言わないからって謝ったら許してくれると思いますか？

ガードとランスとシャンティは、カイが私を嫌いになるなんて絶対にあり得ないって言うてくれるし、私もそうだと思いたいです。

だから頑張って謝ってみようと思うけど、本当にカイが嫌いになってたらどうしよう。そう思うと、怖くて、辛くて、悲しい。勇気ができません。

こんな時アーサーさんが居てくれたら、私もカイも怒ってくれて仲直りできたかもしれないのに、アーサーさんが居ないと私一人じゃ、自分のことも解決できない。

アーサーさん、お願い、助けて。帰ってきて。私、どっいたらいいのかわかりません。怖い、怖い。

カインに嫌われたら、生きていけない。

筆頭にあるまじき思想に対する反省文

あれから俺も、かなり考えてかなり悩んだ。

とりあえず、なんで俺がそこまで異常者なのかという事から考えてみた。で、出た結果。

異常な男に異常な環境で育てられ、加えてこの異常な状況。正常でいられるわけねえだろ！ あの日以前から精神崩壊してたっつーの！ つーか既に10代の頃に「正常」なんてなくなってるじゃん、俺！ それどころか、ガキの頃から既におかしかったのかもしれねえ。

よし、これはジュリオ様のせいだ。全責任はジュリオ様にある。

次に、なんでエルメスにそこまで執着するのか。で、出た結果。

エルメスは俺にとって友達で、家族みたいに思ってた、俺の主人で、俺のアイコンで、俺の神で。俺の神なら俺の物で、俺だけの為に・
・いやいや、落ち着け、俺。

とにかく、度が過ぎた。友情とか忠誠とか通り越して、これはもはや信仰、いや狂信だ。

アイツはいつも俺といる時は本当に楽しそうに笑ってて、よく怒るし、泣くし、俺を何度も救ってくれて。だから、アイツのその全てが俺に向いてなきゃ嫌だと思うようになった。

今こんなことになって、マジ大変なことになったと思ったけど、心のどこかでヤツタ と思ってた節がある。

アイツにはもう頼れる相手は俺しかいないから、俺が支えてやんなきゃって、俺がアイツを助けるんだって、俺が、俺が・・・俺はダチヨウ倶楽部か！

ハア、まあとにかく、俺の手の届かない神々しいエルメス様が地上に、地獄に突き落とされてきて狂喜したわけだ。うわー俺って最低。

で、結果は散々。俺にはエルメスは救えない。俺にはエルメスを幸せにできないという現実に向面してしまった。だから、他人がエルメスを笑顔にしていることがものすつごく許せなかった。

その中で、なんでアーサーはいいのかっていうと、俺のエルメス幸せプランにアーサーが最初から組み込まれていたこと、それと実に癪だが、アーサーが俺より圧倒的上位のオスだということもある。

シャンティ達を許せたのもそこだ。幸せプランの一員だったから。

何より屋敷で共同生活してても、俺がほとんど寄せ付けねえしな。だけどトリンとツァンは俺にとってはイレギュラー以外の何物でもなかったわけだ。だからあんなだけ、帰れ！とか思ってたわけだ。

シュヴァリエの奴らなんて、説明する必要もねえ。俺の管理下にあるから。

要するに、全て俺が管理できてりゃそれでいいわけだ。マジ・・・俺とだけ管理好きなのよ。管理職も職業病とかあんのか。職業病で管理したがつてんのか。

ああ、本当に異常だよ、俺。本物の異常者じゃねえか。あの時ランスが言ってた言葉の意味が、今はよく理解できる。

「いずれ俺なしでは生きられないようにしてやる。それがエルメスの幸せ」

俺はヘンタイか！・・・ヘンタイかもな。ランスの場合、それが恋愛感情から来てるだけまだマシだ。まだ救いようがある。

でも俺違うじゃん！別に愛してねーもん！ただ所有したい！独占したい！支配したい！エルメスは俺の物だ！俺のエルメスに近寄るな！

イカンイカン、思わず興奮してしまった。つか、俺のじゃねえだろ。アーサーのじゃん。なのにさー、なのにさー、もっかい前に書いた報告書読み直して気づいたんだけどさー。

俺今まで何度かさー、エルメスをアーサーにくれてやるだの、プレゼントしてやるだの書いてたじゃん。完全に俺のもんだと思ってるよねコレ。完全に俺の所有物だと思ってるよねコレ。

「俺のだけど、やるよ」

みたいなさー。もう、俺なんなの本当。もう俺本当ヤバいわ。ランスもヤベエけど、俺の方がよっぽどイカレてる。ランス、アイツ本当に俺に似てたんだな・・・もうイヤ。

ハア、もう、コレもある意味裏切りだよな。アイツは俺を家族だと、親友だと思ってんのに、俺の中にあるのはただの支配欲だ。

トリンとツァンの言った通り、友達だなんて思ってなかったんだ。本当に俺は最低だ。

エルメスは俺の信仰の対象そのもので、エルメスは俺の前ではないつも笑ってなきやいけなくて、俺の前でだけ泣いて、俺だけに怒って、俺だけを救う。

それこそが俺のエルメスであって、俺に向けられるものと同じものが、俺以外の「友達」に向くのが死ぬほど嫌だ。

エルメスを笑わせていいのは俺だけ、エルメスを泣かせていいのは俺だけ、エルメスを怒らせていいのは俺だけ。エルメスを助けて、

守って、保護し、管理し、支配し、征服していいのは俺だけ。

もう、マジで他の奴らなんか死に絶えればいい。飛行機落ちろって本気で思った。

異常な執着と異常な嫉妬。

俺はなんて異常なんだ。怖ええー、俺。マジ変なところばっかジュリオ様に似てしまった。本当、ここに至って初めてジュリオ様を殺してよかったとすら思える。マジあの人のせいだ、全部。

ジュリオ様に奪われた俺の人生。普通の家庭、普通の家族、普通の友達、普通の環境、普通の人生。

エルメスに出会うまで、俺は異常な環境で異常な人生を歩んできた。でも、エルメスと出会って、俺の苦悩も呪いも何もかも、アイツが払拭してくれた。

アイツが友達になってくれて、普通の友達みてえに助けて、助け合って、ケンカして笑い合って。

吸血鬼だけど、アイツは俺の理想を、俺の憧れを再現して、俺の願いをすべて叶えてくれた。

エルメスを俺の神と言わず何と呼べばいい。

エルメスが幸せになるなら、俺は何だってやる、何にだってなつてやる。アイツが本当の、本来の神の姿に戻るのなら、俺は何でもする。

アイツは俺の、俺だけの神じゃなきゃいけない。

っあー！ また暴走した。本当、なんなの俺。そう言えば前にエルメスが、俺の理性のリミッター壊れてるとか言ってたな・・・確かにブツ壊れてっかも。マジ修理出そう・・・どこにだよ。

もう本当にさ、こればかりは完全に隠蔽する必要があると判断した。ていうか、頑張つて健常者になる必要がある。

動機としては別にやましいところはないし、いや、やましいと言えばやましいか。そこはおいといて、エルメスが結果的に幸せになるなら、むしろ俺に任せとけて感じてはある。でも、人としてどうなのよっていう。人じゃねえけどよ。

もしエルメスにこの事を感じかれたら、間違いなく軽蔑される。間違いなく嫌われる。そんなことになったら、俺シヨック死。本当、冗談抜きで死ぬ。マジで、冗談じゃねえ。

あ、ちなみにこれに関してはアーサーに見せる気はねえからな。

コレ、ただの懺悔だから。

なら別に書く必要ねえだろってなるかもしんねえけど、どっかに吐き出しとかなきゃ頭バーンなるからな。一層異常になるぞ。

これ以上エスカレートしたら、エルメス連れ出して逃亡するぞ・
いや、ウソ、冗談。これは本当に冗談。

とにかくそういうわけで、俺は考えを纏めるのに必死だったこともあって、隠蔽&健常者な俺に生まれ変わろうと、とりあえずエルメスを避けてた。

エルメスと離れて、俺にとってもエルメスにとってもお互いが「一番」でない状況を作り出すことが先決だと思ったから。

でも、その俺の行動が思わぬ結果を呼んだ。

今日バルコニーに出て煙草吸ってたら、突然、本当に突然ガラードとランスとシャンティに飛び蹴りされた。3人がかりで。

俺 「うお！？ 何！？ お前ら何すんだ！」

ガラード 「何すんだはこっちのセリフだ！」

俺 「は！？」

シャンティ「アンタ、ミナ様が一番大事なんじゃなかったのかよ！」

ランス 「エルメス様、泣いてるんだよ！ カイが無視するから！」

ガラード 「なんで急にエルメスに冷たくすんの！？ 理由を言え！」

ああ、どうしよう、状況は分かったけど理由は絶対誰にも言えねえぞ。という逡巡と動揺を上回る歓喜。俺は状況を察した瞬間に、大喜びした。わーい、ヤッター。マジ最低。でも喜んでる場合じゃねえ。

俺 「え？ 理由？ えー・・・別にないけど」
シャンティ「理由もなくあの態度!？」

ランス 「自由にも程があるよ！ エルメス様の気持ちも考えろ！」
ガラード 「エルメス、泣いてたんだよ？ カイに嫌われたらどうしようって。カイに嫌われたら生きていけないって。エルメスに謝れ」

もう、俺にはコイツらが天使に見えた。エルメスが俺に嫌われることを恐怖してる、俺の存在に依存してる。その事をもたらしたコイツらに好きなだけ褒美をくれてやりたい。

あー、俺超幸せ。超嬉しい。ヤッター！

つてのを面に出すわけにもいかねえから、大人しくわかったって頷いてエルメスの所に行った。で、エルメスの隣に座って、ゴメンなって謝った。

「私の事、怒ってる？」

「いや、なんでもねえ。ゴメン、悪いのは俺だから」

「カイ、私の事嫌いになった？」

「そんなわけねえだろ。俺はお前が一番大事だから」

訪れる、最高の、至福の瞬間。エルメスは俺にすがるみたいに抱き着いて、泣き出した。

「本当に？ 本当に？」

「本当に」

「ごめんなさい。もう我儘言わないから、カイのいう事ちゃんと聞くから、私を嫌いにならないで」

「バカ、俺がお前を嫌いになるはずないだろ」

「よかった、私カイに嫌われたと思って、嫌われたらどうしようって思っ、私、カイに嫌われたら生きていけないから」

多分、俺は笑ってたと思う。俺のしたことはエルメスの俺への依存度を急激に高めて、エルメスの中での俺の重要度は生死を左右するほどになった。

その事に俺は幸福を感じて、笑いそうになるのをこらえるのに必死だった。

ああ、エルメスは健気だな。たまに同じことをやってやるうか。それとも、嫌いになるぞって脅迫したら、エルメスは俺に服従するかも。

いや、落ち着け俺！ 俺って悪魔！ 最低！ 健常者になるんじゃないのかよ！ ここで喜んだらお終いだっての！ ここは反

省するところ！

なんか妙な葛藤に苛まれた。ハア、健常者への道のりは、程遠いな。

俺は異常で、最高に、歪んでる。俺は、悪魔だ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

思えば、俺は昔からそうだった。

普段は誰にも関心を持たない。自分のことしか興味はない。だけど、特定の人物や感情、現象には異常なほど執着して盲信した。あまりにも執着して、盲信しすぎて、自分をどうでもいいと思ってしまっただけ。

ある時は神に、ある時はシュヴァリエ達に、ある時は栄誉や仕事に、ある時はジュリオ様に、そして今はエルメスに。

多分、それは俺にとっての現実逃避の一環なんだと思う。辛い現実から目を背けたくて、異常なほど特定の人や物事に執着する。それしか見えないように自分を固執させる。

この異常な本性は、俺の弱さそのものだ。

なーんで、こんな摩訶不思議なイケメンになったかなーと言う俺の悩みも知らず、エルメスはキ口と遊んでる。

いつそ能天気なアイツが羨ましいよ、全く。俺がおかしいわけだが、半分はお前のせいだぞコノヤロー。

気分的には俺はこんな本性に気付きたくはなかったけど、このままほっといたらヤバイことになってた気がしなくもない。

下手したら俺より先にエルメスや他の奴らに感付かれてた可能性もなきにしもあらず。今、この段階でブレーキかけられんなら、それに越したことはねえ。

俺の狂信の対象が他に移れば楽なんだけど。俺もなんかペットでも飼おうかな

ペットを溺愛する俺、気持ち悪っ

！ダメだ、らしくねえ。向いてねえ。ペットはやめよう。

いやあ、しかしこれが愛情なら本当によかったっていうか、まだマシだったんだけど。残念ながら俺にはそれが理解できない。ただ、だからこそ最悪のパターンは回避できる。

今の俺に後から愛情なんて厄介なものが付属されたら、それこそ最悪だ。想像するだけで恐ろしい。もしその時アーサーがいなきや俺の天下、アーサーがいれば殺されて終わり。

そう考えると、マジで俺そう言うの理解できない人で本当に良かった。そこは異常でよかった。いや、良くねえ、良くねえよ。現状で妥協してんじゃねーよ。

いつからこんなカンジになっちまったのかはつきりわかんねえけど、少なくとも最初の内は単純に友達だと思ってたはずだ。

その頃に、戻りたい。

今、俺はエルメスを裏切ってる。エルメスを騙して、ウソをついてる。エルメスが友達だと思ってる俺は、こんな俺じゃない。

そうだ、本当の俺はこんな奴じゃない。こんな弱い奴じゃない。戻るんだ、強い俺に。エルメスの友達に、戻るんだ。

そこで俺は色々考えた結果、手っ取り早く元に戻る方法を発見した。そうだ、催眠術師を探そう。

この超面倒くせえ本性を消し去って戴こう。金と他人の力で俺の悩みは一発解消。うん、いいな、この方法は。

しかし、俺の面倒くさがりが意外な展開に発展した。

「エルメス、俺ちよつと出かけてくる」

「え？ どこいくの？」

「あー・・・人探し」

「クライドさん達探しに行くの!？」

「え、いや、えーと」

「私もいく!」

「え、ええー・・・」

なぜかクライドさんとボニーさんを探しに行くことになった。

「でも、どこから探せばいいかな？」

「え、あ、そうだな。とりあえず城に一旦行ってみるか？ 何か手がかりがあるかもしれないしねえし、もうそろそろ調査も済んだかもしれないし、ミラーカさんの事もあるし」

「うん！ そうだね！ そうしよう!」

元気よく返事をしたエルメスが俺の手を握ると、気が付いたら目の前にはあの巨大な城。

「・・・お前、行くなら行くって言えよ。すげえビックリしたじゃねーか」

「あ、ゴメン」

一応周囲を警戒。人影、人の気配はなし。調査は終わったのか、今日はもう終わったのか。とにかく誰もいなくて安心した。

エルメスと改めてあの巨大な城を見上げる。石灰質の白い城壁は焼けて黒くなってるし、天守閣の辺りは爆発のせいで崩壊してる。あれだけエルメスが手を入れていた庭も踏み荒らされて、花壇や噴水、石像にもおびただしい数の弾痕。

城の有り様は、荒廃、この一言に尽きる。

3年近くもエルメス達とここで過ごした。楽しく、過ごしてた。3年かけて作り上げた城も庭も関係も信頼も、ジュリオ様に一夜にして滅ぼされた。

エルメスはかつて青いバラが権勢を誇っていた、今では枯れて荒れ果てた花壇の前に座り込んで、枯れたバラを一つ手に取った。

「青いバラは、ジュリオさんだったんだね」

「どういうことだ？」

「他人の都合で、勝手に作り替えられた。バラは青い色なんてきつと望んでなかったんだね。赤いまま、枯れたいと思ってたんだね」

アーサーによって恋人を奪われ、自らも吸血鬼になったジュリオ様は、せめて人間に戻りたいと渴望してた。

人間の事前勝手な夢のために赤を奪われ、青を組み込まれたこのバラも、ジュリオ様と同じことを考えてたんだらうか。

エルメスの隣にしゃがんでバラに手を触れると、かさり、と音を立てる。その中に茶色い蕾のようなものをみつけた。バラの、種子。

「そーかもな。でも、このバラから採れた種子は、んなこと思っ
てねえよ」

俺は最近になってやっと受け入れられたけど、他の奴らは切り替えが早かったからなー。リオに至っては鉛玉で撃たれても怪我も
ないって逆に喜んでたくらいだ。

今更、人間に戻ろうとは思わねえ。むしろ人間に戻ったら、エル
メスの傍にいられなくなる。そっちのが願ひ下げ。

枯れたバラから見つけた種子をエルメスの手に渡すと、エルメス
はその種子をぎゅっと握ってそっか、と笑った。

城に入ると中はもっと荒れてた。真っ黒で、焼け焦げた家財が散
乱してた。

本当に戦争が起きたんだな、俺達は何もかも失ったんだな。

あの楽しかった日々も、使用人達も、エルメスの家族も、ジユリ
才様も。

荒れた城内の静寂さが、一層寂しさを引き立てる。穴だらけでボ
ロボロになったテーブルに目をやると、近くにはアンナさんが旦那

さんの快気祝いにとくれた花瓶が割れて転がっている。

ふと、エルメスが再び俺の手を取ったかと思うと、次の瞬間にはインドの屋敷の自分の部屋に戻っていた。

「エルメス？」

「カイ、ごめん・・・私、まだ・・・」

エルメスは俺の手を握ったまま俯いて泣き出した。あの日、あの場所で真実を知らされて、あの瞬間から裏切られた。あの瞬間から、同居人が敵になった。いつまでも、裏切られたトラウマはエルメスに着いて回る。

あの城で3年も過ごして、3年分の楽しかった思い出は、あの一夜に塗り替えられた。あの城での思い出は、ほとんどが黒く塗りつぶされた。

「どうして、どうして私はあの瞬間まで気づけなかったの・・・」

あの瞬間まで気付かせなかったのは、アーサーと俺たちの責任だ。仮に事前に知らせていたとしても、あの戦争を止めることは不可能だった。

きつと、アーサーとジュリオ様が再会した時点で、こうなる運命だったんだ。それでも思ってたなきゃ、この状況に耐えられない。

しばらく泣きすがっていたエルメスは、少ししてポツリと言った。

「ボニーさんとクライドさんの結婚式、楽しみにしてたのにな……」

拳式当日に起きた戦争。あの二人が恐らく一番残念だったに違いない。あの時

思い出した。

あの時、二人はサルーンに姿を現すことはなかった。呼びに行つたはずのシュヴァリエ達も何の報告もなかった。でも、確かあの時シュヴァリエ達には呼びに行く振りをしてあの二人を殺害しろ、と命令が下りてたはずだ。

まさか、シュヴァリエたちが殺したのか？ いや、それはあり得ない。じゃあ、既にあの二人も殺害されていたのか？ いや、でも直前までミラーカさんとアーサーが二人に着付けをしていたと言つてたし、何よりいくら城が広いからって銃声に気づかないはずはない。ならばサイレンサーを使ったのか？

でも、あの後シュヴァリエ達は何も言っていなかった。生きてるとも、死んでも。あの状況なら仕方がないといえなくもないし、何よりあの後もバタバタしてそれどころじゃなかったし。

今思うと、戦争が終わって逃走の準備をしているときも、俺はエルメスのことで頭がいっぱいでそこまで余裕がなかったけど、誰一人その話題を持ち出さなかったことが不思議で仕方がない。

これは、何か裏があるような気がするな。元々シュヴァリエ達はアーサーの命令でスパイ行為をしていたんなら、俺の知らない事実がまだあったとしても不思議じゃない。

絶対何かある。これはアーサーから俺への挑戦と見た。絶対暴く！

以上

【重要】アーサーへのクレーム報告 2件目

エルメスが落ち着いてから、あの時の状況をガラードに聞きに行
った。

「あの時、呼びに行った。あの二人は？」

「実は俺達はアーサー様から二人を呼びに行く振りをして逃げろつ
て言われてたんだ。でも、どうせならあの二人も一緒について思って
部屋に入ったんだけど・・・」

「・・・けど？」

「いなかった。どこを探しても、どこにもいなかった。姿も砂もな
くて、生きてるのか死んでるのかも、俺にはわかんない」

「そうか、わかった。完全に生死不明か・・・いや、待て、呼びに
行く「振り」？ アーサーがそう言ったのか？」

「そうだよ。で、そのまま逃げろって」

「どういうことだ、それはおかしい。「呼びに行きそのまま逃げろ」
じゃなく「振りをしてそのまま」？」

本当に呼びに行く必要はない、そういうことか。なぜ、必要がない？ アーサーは、あの二人がいないことを知ってたのか？

いや、待て、よく思い出せ。いつからあの二人を見なかった？

いると思い込んで、思い込まされていただけで、実は既にいなかったとしたら？

いつから・・・戦争の3日前から前日にかけて、アーサーとユアンも見かけなかった。

まさか、まさか！

いてもたってもいられなくて、ガラードの部屋を飛び出してすぐさまユアンの部屋に飛び込んだ。

「コルア！ てめえ何隠してやがる!!」

「は!?! いきなりなんだよ!」

「てめえ、アーサーに口止めされてんだろ」

「は? 何を?」

「とぼけても無駄だ。ボニーさんとクライドさんを逃がしたんだろ」

「いや、俺知らねーし!」

「とぼけても無駄だつたつたろ。俺はもうわかつちまったからな」

言いながら銃を取り出してユアンの眉間に突きつけた。

「オラ、吐け」

「マジ！ マジ知らないから！」

「俺が撃たねえとも思ってたのか？ 死にたくなけりゃ、吐け」

「マジ副長勘弁しろよ！ 俺は本当に…ギャアア！」

いつまでも口を割らねえもんだから耳を撃った。耳から血を流して悶絶するユアンに再び銃を向ける。

「次は左だ。吐け」

「マジ副長、最悪だよ。無理だつて、アーサー様が一生誰にも言うなって言ってたぞ」

「心配すんな、俺も共犯になってやる。誰にも、エルメスにも言わねえ。お前一人で秘密を抱えんのは辛れえだろ」

「副長……」

「なるほどな！。つーか、実はエルメスと二人の捜索に行ったんだよ。いずれはまた探しに行きたいって言出すぞ」

「そうなんだよ。エルメスに限らずみんなだって言い出しかねないよな」

「どーすっかなー。その搜索が不毛だなんて俺らにはわかりきってるし、見つからなくて憔悴していくのを見るのもちよっとな」

「いっそ死んだことにしちゃうとか」

「それでエルメスが泣いたら、お前の言う彼女の前でお前のケツに操縦桿ブチ込むぞ」

「いっそ殺せよ。あ、じゃあ、こつ言うのは？ 例えば……」

「あ、それでいいな。それで行こう」

というわけで、エルメスとシュヴァリエ及びシャンティファミリも召集。

シャンティファミリーの奴らは仕方ないが、シュヴァリエの奴らは全員遊んでる暇なくせしてブーブーうるせえ。

「黙れてめえら。今日は重大なお知らせだ。その機能不全な脳と耳をフル稼働してよく聞け」

「いーから勿体つけてねーでさっさと話せ」

「よし、パーシーは後で射殺な。私語厳禁。喋った奴から射殺する」
「……」

やっと静かになった。さすが威厳の男、俺。ミスター管理職。

俺 「質問は後で受け付けるからとりあえず聞け。話はボニールさんとクライドさんについてだ」

ガロード「なんか手がかり掴めたの!？」

ガルフ「二人はどこに!？」

俺 「あの日シユヴァリ工達で呼びに行つたときは既にもぬけの殻で、二人は生死不明だった。それもそのはず」

ガルフ 「シカトかよ・・・」

俺 「あの二人はとつくに城から逃走してた」

エルメス 「ウソ！ でも衣装合わせとか打ち合わせとかしてたよ！」

俺 「そーだな。二人の代理としてミラーカさんがな」

エルメス 「あ、そういえば・・・」

俺 「あの二人はアーサーの手引きでミラーカさんの協力の元、逃亡した」

シャンティ 「じゃあ、お二人は・・・」

俺 「ああ、生きてるはずだ」

二人が生きている、その事に屋敷は歓喜に沸き立った。こんなにみんながみんな喜ぶのって初めてだな、と感慨に浸つたのも束の間、歓喜の波は質問の津波になって押し寄せてきた。

ガライド 「つーかなんで副長知ってんの？」

ガルフ 「さては以前から知ってやがったな！」

俺 「や、俺もさっき知った」

そう言つてユアンを前に引き立てると、全員がユアンに視線を注いだ。

リオ 「え？ ユアン、知ってたのか？」

ユアン 「いや、俺もよく知らない」

ディナ 「は？ 全然意味わかんないんだけど」

俺 「だからとりあえず聞けつて。ユアンは当事者だ。でもよく知らない、これは本当だ」

トリス 「いや、だから意味わかんないって」

俺 「アーサーの不思議能力の一つ、魔眼に最近までヤラれてた」

エルメス「え！？ そうだったの!？」

俺 「そ。コイツはアーサーに操られてあの二人の逃走を手伝った。その事だけを最近思い出したが、その内容はスツポリ抜けたみたいに覚えてなくて、どこにいるのかもわかんねえらしい。な？」

ユアン 「そう。あの日の数日前に、アーサー様とミラー力さんに呼ばれて部屋に入ったところまでは覚えてる。気付いたら車を運転して城に帰つてるところで、その間の事は断片的にほんの少ししか思い出せない」

ベデイ 「なんでわざわざそんなことまでして・・・」

俺 「さーな。アーサーが何考えてるかわかんねえのは、今に始まったことじゃねえだろ」

エルメス「確かにね・・・」

アーサーが何考えてるかわかんねえ、てのはものすごく説得力あるな。みんな納得して一気に質問の数が減った。

パーシー「覚えてることって？ 例えは？」

ユアン 「二人の入った棺を運んでるとこ、飛行機を操縦してるとこ・・・くらいかな」

ランス 「逃がしたことしか本当にわからないんですね。飛行機という事は、イタリアや近隣国ではないんでしょうね」

ユアン 「多分。でもそこがどこかは覚えてないな」

エルメス「うーん、だとしたらアメリカかなあ。でもアーサーさん

世界中うろついてたみたいだし、わかんないや」

ユアン 「一つ大事なことを覚えてるよ」

ガラード「なに？」

ユアン 「アーサー様はあの二人に「待ってる」って言ってた。きつと帰ってきてから、アーサー様がちゃんと迎えに行くつもりなんだよ」

エルメス「アーサーさん、人を待たせるの好きだな・・・」

俺 「全くだ。でも、わざわざ二人にもそう言ったって事は、ほぼ確実に帰ってくるって事だ。今あの二人をやみくもに探しても世界は広いし、見つからねえだろ。あの二人の無事が分かってるなら、大人しくアーサーの帰りを待とう」

エルメス「そっかあ。でも、生きてるんだね、良かった。本当に、本当に・・・良かった」

ユアンと俺の話聞いて安堵したのか、エルメスは嬉しそうにしながら泣きはじめた。普通の泣き顔とは違う、エルメスの嬉し泣きは何度見てもいいもんだ。

クライドさんとボニーさんが生きていることが、どれほどエルメスの救いになったか計り知れない。アーサーが確実に戻ってくるといふ事が、どれほどエルメスを救ったか知れない。

アーサーは本当にムカつくな。

ちなみに、この召集に至るまでの裏話。

俺の脅迫と甘言に、渋々ユアンは口を開いた。

「クリスマススイブの3日前、あの二人を連れて、逃がした」

「じゃあ、あの二人は生きてるんだな」

「ああ、生きてる」

「二人はどこだ？」

「それも言わなきゃダメ？」

「当然」

「わわわかった、言うから銃を下ろしてください。あの二人は、日本だよ」

「日本!？」

「そ。アーサー様のご友人の方に預けてある」

「日本・・・なるほど。日本なら吸血鬼は気軽に出入りできねえもんな。それでお前だったわけか。飛行機操縦できるから」

「そういうこと。二人は何も知らねえよ。何も知らされずに彼女の元へ連れてって、アーサー様が戻っていらしてから迎えに行くことになってる」

「つーことはお前、アーサーがほぼ確実に帰ってくることも知ってたんだな」

「・・・ま、そういうことになるかな」

アーサー、俺らはどんだけアンタに踊らされてりゃいいんですか。アンタはあと何個策を立ててんだ！　なんだコレは、謎解きはデイナーのあとにしる！

「そか、わかった。撃って悪かったな」

「いいけど、マジで黙っててよ」

「わかってるって。で、その彼女っつーのは信用できんのか」

「できるよ！ アーサー様の友達なんだぞ！ それにあのほうがいい人だ！ 綺麗だし！」

「うお、びっくりした。急に興奮すんな。っーか信用に顔は関係ねーだろ」

「でも彼女はいい人だ！」

「ハイハイ、わかった。お前がそこまで言うなら信用する」

俺の失言に異常に興奮するユアン。知らねえ間にその彼女とフラグが立っていたようだ。

それは置いていて、マジでアーサー・・・アンタはわざとやってんのか。俺らとエルメスがアンタの掌で躍り狂ってんのがそんなに楽しいか。

俺も異常だけど、アンタの秘密主義と悪巧みと性格の悪さは群を抜いて異常だ。

っーことは、だ。この事を知ってるのは俺とユアンだけ。エルメスは勿論皆にも秘密。なぜ秘密にする必要があるのかわからない。エルメスの事を思えばすぐにでも話して日本に迎えに行きたいが、残念ながら複雑な山道だったせいでユアンは場所を覚えてねえ。それにアーサーがいない状態で海を渡ることに不安がないわけでもない。

どうせ行けないなら下手に話さない方がいいか。下手に話して探して見つからなかったら余計にエルメスの不安を煽りかねないし、日本だとエルメスの時効だのなんだのしがらみも多いから厄介なことになるかねない。

ん、もしかしてそれで日本を選んだのか。そりゃ、日本ならキリスト教国じゃねえからヴァチカンの人間だって気安くは入れない。吸血鬼も簡単に入れるような国じゃない。潜伏先ならトリンとツァンという選択肢もあるのに、それを差し置いて日本にしたのはその為か？

何より探し出せたとしても、アーサーのいない状態で「宿敵の身内」である俺らがエルメスの傍にすることを、あの二人と例の彼女がすんなり納得するかが疑問だ。アーサーの説明がなきゃ俺らがどれほど説得しても、策略だと疑われても仕方がない。

あ、それで秘密なのか。なるほど。さすがアーサー、ムカつくぜ。

ていう結果にたどり着いて、真実は闇に葬って生きてることだけを伝えることにした。本当ならすぐにも二人を迎えに行つてエルメスを安心させてやりたい。

でも、エルメスは日本でのこともあるし、ヴァチカンの奴らが日本に近寄る外国人を警戒していないという保証もない。アーサーみたいに魔眼で操れるわけでもねえしな。

だけど、二人が生きているというだけでエルメスはメチャクチャ喜んでたし、俺もすげえ安心した。
つくづくアーサーの策略に躍らせられんのはものすげえムカつくし腹が立つけど、今回ばかりは、感謝だ。

以上

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

時計の針と同じように時間も動かせたらいいと思うのは、不毛な願いだ。

「バレンタインおめでとう」

そう言ったエルメスとシャンティにプレゼントをもらった。二人はそう言いながら全員にプレゼントを配っている。

それに首を傾げる俺ら。おめでとうっておかしくねーか？ それになんでバレンタインで？ いや、確かに今日はバレンタインだが。

「なんでお前らが贈るんだよ？」

「あのねー、日本では女の子が男の子にチョコと一緒に愛を伝える日なの。外国では逆だって日本を出てから初めて知ったよ。みんなには本当にお世話になってるから、日頃の感謝を込めてみた！」

「ふーん、なんでチョコ？」

「さあ？ 日本人は企業戦略に騙されやすいんだと思う」

「フーかコレ、中身チョコなら受け取り拒否」

「拒否しないでよ！ チョコなわけないでしょ！ もう！」

「冗談だつて」

正直、エルメスから貰ったもんなら中身がセミの抜け殻でもいいんだが、いや、よくねえか。

とりあえず、エルメスを虐めておかないと気が済まない。笑いながら箱を開けてみると、中からはシルバーの腕時計が出てきた。

「お、カッコイイ」

「カッコイイ？ 気に入ってくれた？」

「ああ」

「えへへ、シュヴァリエはシルバーで、シャンティファミリーはゴールドで、みんなお揃いなもの！」

「い、いい年こいてお揃いかよ・・・」

「みんな仲良し！ ちゃんと使つてね！」

周りを見てみると、まんまとお揃い。ガラードとランス以外はみんなアラフォーだつてのに、全員お揃いとか嫌がらせか。

まあ、エルメスだしなあ、せつかくくれたんだし、しょうがねえよなあ、と渋々時計を装着。そしたら、ガルフが覗き込んできた。

「あれ？ カイだけフェースの色違つじゃん」

「あ？ お前の見して」
「ホラ」

俺のフェースの色は黒で、よく見るとガルフや他の奴らは白だった。

「カイは筆頭だし、リーダーってわかりやすいように！」
「誰にわかりやすくする必要が？」
「・・・それもそっか」

思わずツツコんでしまったが、俺超嬉しい。俺だけ特別扱い！
ヒヤッホウ！ なんとかバンザイしたい衝動を抑えてエルメスに向
き直った。

「エルメス、ありがとう」
「やっとお礼言ってくれた！ 遅いよ！」
「ああ、ワリーワリー」

むくれるエルメスに思わずニヤケて謝ったら、またバカどもが騒
ぎ出す。

パーシー「ちょっと、御覧なさい。副長ったらあのニヤケ面」
トリス「ありゃ嬉しくて仕方がないんですわよ」
キルシュ「そうですね。なんてったって、自分だけ特別ですもの
ね」

リオ 「大好きなエルちゃんからの特別に愛のこもったプレゼント、そりゃニヤケもしますわよ」

マジ、アイツら・・・という怒りを通り越して、俺は戦々恐々。何故バレた！？ いつの間に俺の本心は白日の下に晒されたんだ！？ 大喜びから一瞬で目が覚めた。

ディナ 「シスコンのお兄様にとっては至上の喜びでしょうよ」

あ、そつちか。じゃあいいや。いや、よくねえけど。でもバレるくらいなら、シスコンだと思われた方がまだマシだ。

いや、良く考えたら全部シスコンでなんとか通りそつな気がする。いざとなったら、もうそれで行こう。

いや、もしかして本当にシスコンの思想なのか。そうと言われればそんな気もする。いや、ていうかそもそも妹じゃねえけど。友達なんだけど。つーか、シスコンて何？ んん？ なんかワケわかんなくなってきた。

俺 「君たち、ちょっといいかい？」

リオ 「あら、エルメスのお兄様、なにかしら？」

俺 「とりあえずその貴婦人キャラはよせ」

ディナ 「面白いじゃん」

俺 「全然。不快にして不愉快。つーかそもそもシスコンってなんだっけ」

俺の質問にみんなは、ん？ と首をひねりながら考え始めた。よく考えたら俺らみんな男兄弟みたいなもんだし、シスコンなんて概念がよくわかんねえ。

ガルフ 「とりあえず、妹大好きでー」

キルシュ 「妹を独占したくてー」

パーシー 「妹にベツタリ」

ユアン 「妹に寄りつく奴が許せなくてー」

ペレアス 「でも北都はクリシュナさん許してたから、認めた相手はいいんだろうな」

ベデイ 「てことは、妹の相手は自分より上位ならいいのか」

トリス 「えつとねー、シスターコンプレックスは、特に「姉妹に対する恋愛的感情」や「自分のものにしたいたい独占欲」のある兄弟、と言う図式で捉えられる。boyウィキペディア」

ガラード 「へえ、そうなんだ。え、ていうか恋愛的感情？」

ダイナ 「っーか「的」ってなに？」

俺 「的もなにも、それはねえんだけど」

ランス 「けど？ それ以外ならあるの？」

俺 「・・・・・・ねえよ」

ガルフ 「何、その間」

え、ちょっと待て、ちょっと待て。全部該当するんだけど。俺ってシスコンだったの？ これってシスコンだったの？

いやでも、エルメス妹じゃねえし。兄妹みたいとは言われるけど、妹じゃねえし。友達だし。じゃあ、なんだ。

ペレアス「アラアラ、悩んじゃってるよ」
ガルフ「誰がどう見たってシスコンだったの。そうじゃなきゃただの異常者だよな」

さすがガルフ、俺の副官だけあつて的確な事言いやがる！俺思わず冷や汗かいたやつた！あー、いつそのことホントに兄妹ならシスコンで済んだものを！結局俺はただの異常者じゃねえか！そうだ、もう認めよう。それを認めて楽になろう。そうしよう。

俺「ひ、百歩譲ってシスコンだとしても、俺は別に異常じゃねえから」

ガルフ「は？シスコンな時点で異常者だ」

俺「な！ちよ、じゃあ北都も異常じゃねえか！」

ガルフ「北都は開き直ったからいいんじゃないかねえの」

ランス「ていうか、北都くんも、って言った時点で認めちゃってるよね」

ベディ「確かに。副長も開き直れば？」

開き直れば・・・うわあ、なんて誘惑だ。開き直ったら楽だろうな。開き直りてえー！

でも、俺は明らかに常軌を逸してる。女にすら嫉妬してる位だ。北都の比じゃねえ。完全に開き直ったら、俺は多分エルメスを監禁する。やっぱりシスコンなんてレベルじゃねえ。開き直りは、マズイ。

ガルフ「おやおや、また悩みだしたよ」
デ INA「しょうがない兄ちゃんだねえ」
ベディ「こりやエルメスも大変・・・あれ？ エルメスは？」
トリス「あれ？ ついさつきまでいたのに」

俺が悩んでると言うのに、エルメスは俺を置いてどこかへ行ってしまった。本当ヒドイ、あの子。俺もコイツらもほつたらかしかよ。勝手にやってるってか。なんかすげえムカつくんだけど！

「チクシヨー！ エルメエエス！ どこだああ！」
「やっぱシスコンじゃねえか」
「うるせー！」

一言エルメスに文句を言ってやろうと、エルメスを探し回って見たものの、屋敷の中にはいない。

まさか一人で城に行ったのか！？ いや、さすがにそんな暴挙はいくらアイツでも・・・やりかねええ！

一抹の不安を抱えつつ屋敷の外も探し回ってみると、いた。

いつもの様にクリシュナさんの墓に花を供えて、プラス今日は小さな箱も添えてあつて。その前にエルメスがしゃがみこんでいた。そうか、今日はバレンタインだ。日本では女が男にチョコと一緒に愛を伝える日なんだって、さつき言ってたな。

すっかりイライラが収まってしまった俺は、エルメスの隣に座った。

「クリシュナさん、きっと今頃天使にメチャクチャ自慢してんじやねーの」

「アハハ、なにそれ」

「愛妻家にとっちゃ、嫁からのプレゼントは至上の喜びだろ」

「だったら私も嬉しいな」

「間違いねーよ」

少しの間笑ってたエルメスは、段々悲しそうな表情になって涙を零した。

「クリシュナがね、最後に言ったの。幸せになってって、愛してるよって。でも、それって残酷じゃない？ クリシュナがいなくて、愛する人がいなくて、どうやったら幸せになれるんだろうね」

クリシュナさんはエルメスにとって幸せの象徴そのもの。愛の象徴そのもの。どちらもその愛情の全てを注いでいたのに、あの日に断絶させられた。アーサーとエルメスを守るために、自分の命が削られるとわかっていて、その命を使い果たした。

クリシュナさんが命を使い果たしてでも、守りたいと思った女。その女が泣いているのを見て、きつとさっきまで有頂天だっただろうクリシュナさんも、今は悲しい顔をしているんだろう。

「クリシユナさんは、本当にお前を愛してたんだなあ」

「でも、死んじゃったら意味ない、傍にいてくれなきゃ意味ないよ。
・・・」

「んなこと言うな。意味ならちゃんとある」

「え？ なに？」

「クリシユナさんはお前を本当に愛してたから、幸せになってほし
いって思ってたんだろ。生きてなきゃ幸せにはなれねえだろ。だから
お前をアーサーに託した。アーサーもお前を愛してたから、俺らに
お前を託した。クリシユナさんの願いがあったから、それが今繋が
ってるんだろ。クリシユナさんはいなくなっちゃったけど、クリシ
ユナさんの愛が生きてるから、お前が生きてるんだろ」

「うん、そうだね・・・だけど、やっぱり寂しいよ。私はいつま
で、こんな思いをするのかな」

さすがにこれ以上はもう、俺には無理だ。それはどうしてもエル
メス自身が乗り越えなきゃいけないことだ。

エルメスがクリシユナさんの死と向き合って想い続ける覚悟をす
るか、新しく恋をするか、クリシユナさんを忘れるか。

早くアーサーが帰ってきて、エルメスの傍にいてくれればいいの
に。いや、この際エルメスが愛した相手なら誰でもいい、ランスで
もガラードでもアジメールでも。エルメスを愛して、エルメスが愛
した人が隣にいてくれたら、幸せになれるのに。

こんな別れ方をしたら、ジュリオ様やアーサーの様に100年や200年では忘れられないかもしれないな。それほど長い月日を、エルメスは苦しみ続けなきゃいけないかもしれない。

そこに至るまで、一体どれほどの時を刻まなきゃいけないんだろう。時間は、戻すことはもちろん、進める事も出来ない。時間は時計と同じ動きをしてはくれないんだな。

「お前はきつと、クリシュナさんの事で長い時間をかけて、悩んで苦しむんだろうな」

「・・・そうだね。ずっとずっとこんな思いをするんだろうね」

「でも、場合によっちゃそれもあつという間だ」

「どうして？」

「お前がそのまま足踏みしてたら時間は大して進まねえだろうけど、お前が進んだらその分時間も早く過ぎるんじゃないかねえの」

そう言ったらなんでか知らんがエルメスは驚いた顔をして、笑い出した。

「なに？　なんか俺変なこと言った？」

「アハハ、違うの。クリシュナと同じようなこと言うんだなと思っ
て」

「クリシュナさんが前なんか言ったのか？」

「うん。いつまでも苦しいって言ってちゃダメだよって。前に進みなさいって。カイにまで言われると思わなくてびっくりしちゃったよ」

「そりゃお前、俺が正しいって事だな」

「そうかもね。カイはそう言うところクリシュナに似てるね」

「・・・アーサーに似てるっつたり、ジュリオ様だったり、クリシュナさんだったり。俺は何者だよ」

「二重人格かと思ってたけど、多重人格だったんだ」

「お前そんなこと思ってたの」

「思ってた」

「どうやら俺は既に異常者だと思われていたらしい。軽くショックなんだけど。折角人が慰めてるっつーのに、本当にこのお嬢ちゃん
はヒドイ子だ。」

「ま、でも、結果的に涙が止まって今笑ってくれてるから、まあ、
いっか。」

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

もうそろそろ延滞料金100万超えるぞ。早く戻ってこねえと借金地獄だぞ。ご利用は計画的に。

「まさかの3か月経過」

「もう春だね・・・どうしよう」

「つか俺今日で45じゃん！ 怖！」

「え？ カイ今日が誕生日なの？ 45歳？」

「あ、しまった」

「別に隠すことでもないじゃん」

「いや、ミステリアスな方がいいだろ、なんか」

「別に？ あ、誕生日おめでとう」

「ハア、この歳になると嬉しくねえ・・・」

ウソです。エルメスに祝ってもらえたら嬉しいです。超嬉しいです。フィーと溜息を吐きながらエルメスと未だ帰らぬアーサーに思いを馳せてたら、急にシユヴァリエ達が笑い出した。

「マジウケる！ これ見て！」

そう言ってトリスが見せてきたパソコンの画面。

3月25日生まれ 牡羊座の基本性格

ポジティブキャラクター

- ・ 開拓精神、あらゆることに関するパイオニアに成り得る人物。
- ・ 新しい事を始めるエネルギーに満ちている。
- ・ 人々を牽引していく力、リーダーシップを発揮することができる。
- ・ パワフルでダイナミックな実行力。
- ・ 旺盛な競争心、負けず嫌い。
- ・ どんな分野においても自分が一番になろうとする。勝つまで戦う。
- ・ 瞬発力、素早く機敏に行動する。
- ・ 判断が早い。
- ・ 勇敢、多少の危険や障害はものともしないで行動することができる。

- ・ 独立的、人に頼る事は考えない。自分で考え自分で行動する。
- ・ スポーツマンとしての才能。
- ・ 現実主義者。いざという時に冷静に行動できる。

「おお、まさしくじゃねえか。つーか俺牡羊座だったのか」

「自分の星座位把握してないの？」

「興味ねえ」

「それより、ネガティブの方見てよ」

ネガティブイメージ

- ・ 独善的、自分の行動は常に正しいと信じている。
- ・ おせっかい。
- ・ せっかちで、早く結果を出そうとする。むやみに他人を急がせる。
- ・ あわてもの、判断も行動も素早いが、そそっかしい。
- ・ 勘違いなことをしでかしがち。
- ・ 衝動的、粗野、短気。すぐにカッとなる傾向。
- ・ 尊大。自分はこの世で一番偉いと思っていることがある。
- ・ 自己中心的、宇宙は自分を中心にまわっていると考えている。
- ・ 他人の気持ちを考えられない。無愛想でぶっきらぼう。
- ・ 中途半端、飽きっぽい。
- ・ やりかけたままの事がそのままになりがち。すぐにやめてしまう。

「.....」

「アハハハハ！　すごい！　まるつきりこれだよね！」
「星座占いバカにしたた！　マジウケるんだけど！」

全員大爆笑しやがってムカつく・・・微妙に思い当たるところがあるから余計ムカつく。チクシヨ！。大体占いなんで、60億いる人間をたったの12種類やそこらで大別しようとする事自体がナンセンスなんだよ！

「くっくだらねえ。バカじゃねーの。こんな誰にでもあてはまるようにできてんだよ」

「出た、独善的」

「うるせえよ！」

「出た、短気」

「・・・ムカツク。じゃあホラ、エルメスの見せてみる。お前何？」

「あ、見たい見たいーい！」

「だから何座だよ」

「出た、せつかち」

「黙れ！」

「私てんびん座！」

「ハイハイ、てんびん座ね」

天秤座のポジティブキャラクター

- ・ 協調性、あらゆる人々との調和を大切にする。
- ・ 説得力がある。信用されやすい人物。友人が多い。
- ・ 友愛的、平和主義。人々との良好な人間関係を築く。

- ・外見には気を使う。洗練されたセンスの良いファッション。
- ・正義、フェアプレイの精神を持つ。
- ・芸術的センスがある。ロマンチスト。
- ・如才のなさ、知的で上品な印象を人に与える。
- ・コミュニケーション能力が高く、社交的、外交的。
- ・優しさ、共感的。機転がきく。
- ・なにごと人も人とわかちあうことができる。
- ・常に強いパートナーシップを必要としている。

「微妙じゃねーか？ 知的で上品？ 外見に気を遣って、ソレ？」

「ヒドイ！ 私だって色々勉強してるもん！ カイより絶対物知り！」

「知識と知性は別モンだろ」

「ムカつく・・・」

「じゃあ、ネガティブみてみよう」

天秤座のネガティブキャラクター

- ・気紛れ。
- ・策略的な愛情、人に媚びる傾向。
- ・論争好き。自分を正当化する傾向。
- ・平和至上主義、面倒なことや不快なことには向かっていかない。
- ・波風をたてるのを嫌う。問題をためこむ。
- ・怠け者。贅沢好き。
- ・優柔不断、決断が遅い。諦めやすさ。
- ・ナルシスト、虚栄心から自己陶醉に陥る傾向。

・孤独には耐えられない。

「あー、わかるわかる。お前媚びるよな。気紛れだし、面倒事から逃げたがるし、優柔不断で金もかかる」

「えー？ 媚びてるわけじゃないよ！ 少なくともナルシストじゃない！」

「必死にアーサーに媚びてご機嫌取ってたじゃねえか。電波がナルシストのいい証拠」

「電波じゃないもん！ でも、孤独には耐えられないカモ！ ねえ、これってネガティブなことなの？」

「少なくとも無理やり同室を強いられてる俺にしてみれば、ネガティブ以外の何物でもねーな」

「いい加減それは諦めてよ！ ケチ！」
「我儘に大人しく従ってやってんだから文句位言わせるよ。お前が贅沢言うな」

「むきー！ ムカつく！ なんでネガティブの時だけ食いつくのよ！」
「あー、うるせえ。キャンキャン言うな」

なんだかんだで合ってるっちゃあ、合ってるか。俺のは合ってるけど。

それからしばらくみんなの占いを見てワァワァ騒いでたら、エルメスがアーサーのを見たいと言い出した。

「アーサーの誕生日知ってるのか？」

「確かこの前調べた時に見たような・・・えーと確かさそり座だっ

たよ！」

「じゃあさそり座見てみるね」

さそり座のポジティブキャラクター

- ・公正で誠実な性質をもつ。
- ・深くて激しい感情の持ち主。
- ・内面的なエネルギーが人一倍強い。驚くべき精神力。
- ・カリスマ的な存在感。強い意志、信念を持つ。
- ・実行力がある。約束は必ず履行する人物。
- ・決断的、合理的、内向的、情熱的、優れたセックスアピール。
- ・神秘的で魅力的。
- ・鋭い洞察力、直感的、気付き、第六感が冴えている。
- ・高い潜在能力。負けず嫌い。
- ・困難、苦境にあっても、かならず這い上がる。
- ・経営的手腕がある。

「うーん、合ってるっちゃあ合ってるか」

「公正で誠実・・・？」

「元王様なら経営手腕もありそうだよね」

「約束守るしね」

「情は深いかもな」

「神秘的で魅力的だな」

「アーサーさんちって美形の家系らしいよ」

「マジか」

「カリスマと言えばカリスマだ」

「情熱的で、セックスアピールってエロオヤジって意味？」

「それは違・・・いや、そうかも」

「フーかポジティブ要素がいいトコ取り過ぎじゃね？」

「ではお待ちかね。ネガティブ見てみよう」

さそり座のネガティブキャラクター

- ・ 執念深い。復讐心を燃やす。
- ・ 良い事も悪い事もいつまでも覚えている。
- ・ 妥協しない。
- ・ 支配的、独断的人物。権力を好む。
- ・ なかなか他人と親しくなれない。
- ・ なかなか他人を信用しない。
- ・ 不寛容、神経質、秘密主義。
- ・ 向こう見ず、暴力的。
- ・ 戦略的、疑い深さ、嫉妬深い。
- ・ 自己抑制がいきすぎることがある。

「あー、確かに。わかるわかる。戦略的、懐疑的、嫉妬深いなんてドンピシャじゃねえか」

「支配的で独断的もだよ。いつも勝手に決めて決定押し付けるし」

「不寛容で秘密主義だし暴力的だよな」

「親しくなれないっつーか、なるうとしないよな」

「自己抑制？・・・ああ、エルメスに関しては抑制してたか。しなくていいのに」

「・・・私は有難かったけどね。執念深い、これもだよ。あの人すーごい根に持つから」

「あー、良くも悪くも妥協しねーよな。神経質で完璧主義」

アーサーも例にもれず、ネガティブキャラクターをいじくられて悪口大会になった。怒るなよ、全部事実だ。星座占い、あなどりがたし。俺のは合ってねえけど。

アーサーがさっさと帰ってこねえから、みんなで占いなんかやって陰口をたたく羽目になるんだぞ。自業自得だ。

トリス達の思いつきのせいで、一時的に占いが大流行したぞ。占いなんて良いとこだけ信じて悪いとこ忘れちまえば良い気もするけど。つーか、見てもすぐ忘れるし、あんまり意味のあるもんじゃねえよな。

ま、でも、どの占いにしてもアンタのが一番盛り上がった。アンタが謎の男過ぎて、みんなアンタの本質に興味津々だったぞ。

いない間に、どんどん暴かれてくな。ご愁傷様。それが嫌ならさっさと帰ってこい。あ、金も忘れんなよ。

「あはははは！ カイ見て！ 牡羊座の人が12星座中一番占いの結果が合っていないって反論するんだって！」

アーサーのみならず占いにまで踊らされてる俺って一体・・・

以上

拝啓 アーサーさん

んもう！ 3か月ですよ！ もう春じゃないですか！ 待つって決めたけど、正直いつまで待てばいいのかも全然わかんなくて、漠然と待つって決めたもんだから段々不安になってきましたよ。

そう言えば、今日はカイの誕生日でした。別にお祝いとかしなかったけど。それで、トリスが星座占いを見つけてカイの基本性格みたいなのを見たらあまりにもピッタリで、みんなで大笑いしました。

良いところは、パワフルでリーダーシップがあって決断力があって、独立心があって勇敢とか。で、悪い所がそそっかしくて、無愛想で、自己中で、短気。ね、ピッタリですよ。本人は絶対間違ってるって言い張ってましたけど。

それで、牡羊座の人は12星座中一番占い結果が合っていないって反発するんだって教えてあげたらすごく悔しそうな顔してました。本当あの人面白いですよ。

私も占い見てもらったんですけど、いいところに常にパートナーシップを必要としてるって書いてて、悪い所に孤独に耐えられないって書いてました。これは本当に、正解だと思いました。

よくよく思い返してみると、最初の頃はアーサーさんに頼って、クリシュナと出会ってからは、クリシュナにベツタリで、今はカイにまわりついてます。

本当に私って、誰かが傍にいなきゃ生きていけないんですね。なんか妙に実感しちゃいました。

ていうか私、本当にウザいのかも・・・この前カイが私を避けるって書きましたけど、その後仲直りできたけど理由は教えてくれなかったんですね。なんでもないとか言って。

この占いを見て思ったけど、もしかしてウザいのが嫌だったのかも。よく考えたら、孤独に耐えられない私と、孤独を愛するカイじや相性最悪じゃないですか。カイにしてみたら相当ウザいのかも・・・まあ、でもいいですよ、別に。私は寂しいんだもん。

でね、でね、アーサーさんのも見ちゃいました。アーサーさんは11月10日生まれだからさそり座でした。

で、さそり座のいいところは情が深くて、約束守って、精神力が強くて、何事からも逃げなくて、神秘的なカリスマ。悪い所は、独断的で、支配的で、策略家で、暴力的で、秘密主義で、妥協しなくて、嫉妬深くて、執念深い。

アーサーさんのもピツタリでみんなで超盛り上がりました。

アーサーさんの占いを見て、思いました。あの戦いするとき、私が逃げまじょうって言ったら、アーサーさんは言いましたよね。それは許されない、それはまるで敗北主義者のようだって。

あれほど大変で辛い状況なのに、そこから一步も逃げようとして立ち向かうなんて、アーサーさんは本当に強い人ですね。

なのに、なのに！ ボニーさんとクライドさんを逃がしたでしょ！ なんて教えてくれなかったんですか！ もう、ヒドイ！ 秘密主義も大概にしてくださいよ！ もう！

しかもユアンを魔眼で操ったりなんかして！ もう、本当アーサーさんのやることには着いて行けませんよお・・・

でも、すつごく嬉しかった。二人が生きてるってカイとユアンから聞いたとき、本当に光明が見えました。本当、アーサーさんでかした！ って思いました。

アーサーさん、あの二人を逃がしてくれて、本当に、本当に、ありがとうございます。

どこにいるのかわからないし、いつ会えるのかもわからないけど、生きてればそのうちきつと会える。アーサーさんが帰ってきたら、二人にも会える。

ますますアーサーさんが恋しくなりました。ますますアーサーさ

んの帰りが待ち遠しくなりました。嬉しいのに余計ソワソワしちゃって、正直複雑な気分です。

でも、アーサーさんが教えてくれたから、カイと二人で城まで探しに行ったんですからね！

それで城の有様があまりにも酷くて、あの日の事を思い出して辛くなってすぐ帰っちゃって。泣いちゃったじゃないですか。

これが本当のくたびれもうけの骨折り損ですよ。全くもう。

カイも言ってたけど、本当にアーサーさんの企みには振り回されっぱなしです。踊らされっぱなしです。もう本当、いい加減にしてください。一喜一憂するのも疲れるんですからね！

さすがにもう、これ以上の事はないだろうと思うけど、もう本当勘弁してください。

でも、本当に一喜一憂のふり幅がこれほど大きい事ってなかったと思います。二人が生死不明なことにすぐ落ち込んだのに、二人が生きてるってわかっただけで大ジャンプですよ。

人を絶望にも陥れて、人をこれほど歓喜させることって人の生き死に位なものですよね。

先月、バレンタインの時にクリシユナのお墓詣りついでに、クリシユナにもプレゼントあげてたんです。いつも毎年クリシユナが私にくれたり、愛してるって言うてくれたから、今年は私から。

その時カイが来て、一緒にお墓参りしてたらあの日の事を思い出して悲しくなつて泣いちゃって。その時にカイが言うてくれました。

クリシユナは私を愛してたから幸せになつてほしくて、生きてなきゃ幸せにはなれなくて、だから私をアーサーさんに託して、アーサーさんも同じように思つてたから俺らに託したんだぞつて。

クリシユナの愛が生きてるから、それが繋がつて私が生きてるんだつて。

その時は悲しくて素直にその言葉を聞けなかつたけど、いつまでも足踏みしないで、お前が進めば時間もその分早く過ぎるつて言つてくれて、なんか無愛想なクリシユナと話してるみたいでおかしくなつちやいました。

それでちよつと元気が出て、頑張らなきゃつて思いました。クリシユナの、今でも生きている愛を、それほどの愛を無駄にしちゃいけないなつて。頑張つて幸せになれる様に私も努力しなきゃつて思いました。

今はまだやつぱり私の心の中は、あの日の事で、悲しみの青で染まっています。

でも、ボニーさんとクライドさんが生きてた。アーサーさんが帰

つてきてくれるってわかった。カイやシャンティ達が傍にいてくれるから、安心できる。

ちよつとずつだけど、心の中は青ばつかりじゃなくなってきました。私がつと頑張つて元気になったら、もつと青は薄くなるんじゃないかなつて思えます。

私の色は、やつぱり青なんだと思います。カイは、黒かな。ガードは白。ランスは・・・バイオレット。シャンティはオレンジっぽい。アーサーさんは、やつぱり赤でしょ。

みんなが傍にいてくれて、ゆつくり平和に過ごしていけたら、きっと私の心の中は万華鏡ですよ。

でも、アーサーさんが帰ってきたら全部真っ赤になつちゃうかも。それはそれでコワイ。でも、帰つてこなくて今みたいにずっとカイに引つ付けていたら真っ黒になるかも。それもそれでコワイ。

赤が加わつたらそれだけですごく明るく華やかになります。赤が入つたらボニーさんの黄色とクライドさんはブラウンかな。それも加わると思うと楽しみ。

早く帰つてきて、色を添えてください。

敬具

宣誓書

何がそんなに面白いのか、エルメスは食い入るよう見つめている。ランスも一緒に。

283

「相変わらず手際良いねえ」

「さすがに唯一の取り柄だけあるね」

「ランス、撃ち殺されてえのか」

「やだなー、冗談じゃん」

エルメスとランスは俺が愛用してる銃「ファントム」を整備するのずっと眺めてる。俺的には何がそんなに面白いのかわからんけども、二人はずっと人形劇でも見る子供みてえにガン見してる。

「私に組立させて！」
「ヤダ、お前絶対壊す」
「壊さないよ！」
「信用ならん。それに俺はコイツを他人に触られんのがヤなの」
「ちえつ、ケチ」
「ケチじゃねえ」

コイツに触らせて銃が暴発でもしたらコトだ。エルメスならそう言う事をやりかねない。俺はまだマシだけど、ランスは確実に死ぬ。そこまで発想のおよばねえ残念な脳のエルメスには、とてもじゃねえけど触らせるわけにはいかん。

エルメスの我儘を突っぱねて溜息を吐く俺に、興味津々の目を向けてランスが尋ねてきた。

「ねーねー、その銃何年くらい使ってるの？」
「確かまだ2年くらいか。コイツで7代目」
「そんなに壊れるもんなの？」
「使用頻度がハンパなかったからな」
「ふーん。それお気に入り？」
「俺には使い勝手がいいからな。名前も俺に似合ってるし」
「ああ、確かにカイは怪人だよな」
「お前が言うな」
「言うよ」

ムカつくガキだ。いつか撃ってやる。イラつく俺の気を知ってか知らずか、俺とランスの会話を見てエルメスは異様にニコニコして

やがる。まあ、エルメスの事だ。何考えてるか想像はつく。

「カイとランスは仲良し親子みたいだね」

ホラ来た。絶対そう来ると思った。ある程度想像のつく言葉に、盛大に溜息を吐く俺とは対照的にランスは文句を並べたてる。

「エルメス様、冗談じゃありませんよ。こんな野蛮な男と僕のどこをどう見たら仲良しに見えると言うんですか」

「丸見えだよ」

「見えませんよ！ 失敬な！」

「お前の発言の方が失敬だろうが」

「ハン、カイに敬意を払う義理なんてないもんね！」

「お前ね、一応俺上司なんだけど？」

「以前はね！ 今は違うじゃん！ 僕はカイの部下じゃなくてエルメス様の部下だから！ 勘違いすんな！」

「このクソガキが・・・喰われてえのか」

「これだから野蛮な男は嫌いなんだよ。ねえ？ エルメス様？」

「そうだよ。カイ、あんまりランスを怖がらせるような事言っちゃダメじゃん」

「お前な・・・」

このクソガキのどろろがビビってるように見えるんだ。

「へへーんだ、喰えるもんなら喰ってみろ！ エルメス様に嫌われなくても知らないよ！」

って顔に書いてんぞ。つたく、どんな教育を施したらこんなクソガキに育つんだ。親の顔が見てみた・・・こいつを育てたの、俺じやん。じゃあ、俺のせいじゃねえ。コイツが勝手にこうなったんだ。そうだ、そうに決まってる。

しかし、なんでエルメスはコイツの腹黒さに一切気付かねえんだよ。どこまでバカなんだ。それとも気付いててほっとしてるのか。

「私には優しいから別にいいや！」

とか思ってたそうだな。あ、それだ。絶対それだ。エルメスは変なところで計算高いところがあるから間違いないえ。

溜息を吐きながら銃を磨く俺に、再びランスが質問してきた。

「ねーねー、何歳から銃使ったの？」

「最初は10歳」

「え！？ そんな子供の時から？」

「まあ、ガキの頃から仕込んで一流の兵器に育て上げるのが、ジュリオ様の目論見だったからな」

「嫌じゃなかったの？」

「銃を使うこと自体は、別に」

「人を殺すのはヤだった？」

「最初はな。もう、慣れた」

「慣れたのは、いいこと？」

「さあな」

マセガキが。微妙に嫌な質問してきやがる。つーか、そんなこと聞かれる俺の気持ちも考えろつての。第一、んなこと聞いてどうすんだよ。

と、思ってたら一つの可能性を見出した。

「ランス、お前はダメだ」

「・・・なにがさ」

「お前には一生銃を触らせねえし、教えねえ」
「なんで！」

「お前は銃を使えるようになってエルメスを守りたい、とか思ってるんだろうけど、これじゃエルメスは守れねえぞ」

「守れるよ！ 僕が強くなって守るもん！」

「お前が強くなるのはいい。でも、銃はダメ」

「だからなんでだよ！」

「これは人殺しの道具だからだ。人を殺すもので、人を守ろうなんて滑稽だな」

「・・・・・・」

「お前はいずれエルメスに吸血鬼化してもらうんだろ。実際それで十分すぎるほど強くなれるし、後はガルフやエルメスにでも格闘訓練つけてもらえ」

「・・・・・・ケチ」

「ケチじゃねえ」

ランスにまでケチ呼ばわり。なんだ、俺はそんなにケチか。いや、ケチじゃねえ。このバカ二人が我儘なだけだ。俺とランスの会話を

聞いてエルメスはまたニコニコしてる。何考えてニコニコしてるのか今回もある程度は想像つく。

俺とエルメスの飯を取りに行くつつって部屋からランスが出て行ったあと、エルメスは嬉しそうに言った。

「カイは優しいね」

ホラ来たー。またしても的外れな感想で勝手に悦に浸りやがって。エルメスの中で俺は一体どんなキャラクターを構成してんだ。

「優しくねえし、優しさで言っでんじゃねえよ」

「でも、ランスに銃を使って欲しくないっていうのは、ランスに悩んだり苦しんだりしてほしくなかったからでしょ？」

「違う。銃に慣れたら、撃つことに慣れたら、その内人殺しにも慣れる。俺はそれが嫌だっただけだ」

「それはランスの為にでしょ？」

「いや、俺の為。俺の理想をランスに押し付けてるだけだ」

「でも、結果的にそれがランスの為になるなら、やっぱりそれは優しさだよ」

なんて平和な脳してやがる。コイツに掛かればある程度の奴は善人扱いだ。ある意味恐ろしい。

多分コイツは

「私って周りに恵まれてる！ 私の周りっていい人ばかり！」

とか、幸せなことを思ってるんだろうけど、実際そんな事ねえ。そんな事じゃその内また誰かに騙されたり裏切られるぞ。エルメスのこういうところも非常に危険だ。

ジュリオ様の事も、トリンの時も、エルメスは人を信じすぎて傷ついた。それが悪い事だとは思わないけど、そのせいでエルメスを傷つけるなら、もう少し人を疑う事も知らなきゃいけない気もするんだけど。

「お前さあ、その誰でもいい人に見えるのは何とかならねえの」

「ならない！　だつていい人だよ、カイは」

「いい人じゃねえし、仮にいい人だとしてもお前にだけだ」

「じゃあいいじゃん」

「.....」

ダメだ、反論すら思いつかねえ。つーか呆れて物も言えねえんだけど。結局エルメスは自分に優しくしてくれるなら、その本質がどうであれ全然構わねえのか。それってどうなんだ。

エルメスは周りの人間をみんな大事にするけど、それは周りがエルメスに優しくするからだ。もし、今誰かがエルメスに優しくしなくなつて、他人みたいになつたらエルメスはどうするんだらう。

「なあ、お前はさ、人殺しに慣れたか？」

「慣れたね」

「でも最初は嫌だつたらう」

「最初は嫌だったよ。でも、慣れちゃった。その事はすごく残念に思うけど、仕方ないよね。だって全然知らない人の命は、重く感じないんだもん。それは誰だってそうじゃない？」

「・・・そうだな。俺も、そうだ」

変わってしまったのは、俺だけじゃなかったらしい。エルメスの性格からして、最初はすごく嫌だったはずだ。その為にアーサーとケンカしたって聞いたことがある。それなのに、今は笑って慣れたと言っ。

銃が殺すのは他人だけじゃなくて、使う人の心も殺してしまうんだな。つーか、俺はそれを知ってたけど。

もしあの戦争が起きなくて、エルメスがずっと俺らの隊長として人殺しを続けてたら、いずれはエルメスも俺みたいになってたのか。

狂った化け物は、俺とアーサーで十分だ。今ならまだエルメスは引き返せる。これから戦いのない世界で生きて行けば、エルメスは昔のエルメスに戻るんじゃないかと思う。

エルメスの博愛主義は、広く、浅い。きっと昔は今よりもっと深かった。そのせいで傷ついてきたこともあっただろう。でも、俺はそっちの方がいいと思う。もし、今後そう言うことが起きそうになったら、俺が守ればいいだけの話だ。

俺の心は化け物だ。俺には「ファントム」が似合う。でも、ランスやエルメスに「ファントム」は似合わねえ。

アーサーに一方的に約束しよう。俺はエルメスを化け物にはしない。アイツを俺やアーサーのような化け物にはしない。アイツの博愛主義を本物にしてやる。

アイツの心は、俺が守るから。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連戦連敗。ただいま10連敗中。どんだけだよ。

「チェックメイト」

「イヤー！ また負けた！」

「エルメス様、相変わらずチェス弱過ぎです」

「ランスが強いんだよ」

「確かにそうですが、僕も手加減してるんですけど」

「そんな真実聞きたくなかった・・・」

11歳のガキにチェスで全敗と言う結果に打ちひしがれるエルメス。今まで何度も挑んで一度も勝てたことがないらしい。やっぱりバカだ。

チェスは知恵を図るゲーム。正直エルメスに一番向いてないゲームと言える。エルメスにはジェンガあたりがお似合いだ。

「お前向いてねーんだよ。諦めろ」

「だって1回くらい勝ちたいじゃん」

「手加減してもらって負けてる奴がよく言つよ。お前にはムリムリ」
「じゃあカイなら勝てるの？」

エルメスの言葉にランスはギツと俺を睨みつける。なんだそれは、やる気満々か。

「ランスごときに俺が負けるわけねえだろ」

「じゃあ私の代わりにやつて！」

「いーけど、圧倒的に勝つたりしたらランス泣くかもしんねえしな
あ」

「誰が！ 絶対勝つ！」

「言っとくけど手加減しねえぞ」

「望むところだ！」

というわけで、なんか俺とランスで対決することになった。

ランスは11歳にしてエルメスを全敗させるだけあって、なかなかやりこんでいるらしい。まあ、エルメスが弱いただけだけど、で、結果。

「チエックメイト」

「うわー！ ウソだ！」

「ハハハハ、俺に勝とうなんて100年早ええ」

「カイすごーい！ 強いね！」

「いや、ランスもなかなか強い。でも、俺の方がもつと強い」

「マジあり得ない・・・こんな野蛮人に・・・」

「言つとくが俺は頭脳派だ。お前はやる方だけど、狡猾さに欠けるな。まだまだガキだ」

「くっそー！」

「親子対決はやっぱりパパの勝ちだな」

「親子対決」？ 親子じゃねえ。ふざけんな。でも悔しがるランス、いいもの見れた。

俺とランスのチェス勝負を面白がっていたの間にかシュヴァリエの奴らやシャンティ達も観戦してた。

「ていうか、カイは大人げないな。ランス相手に本気出して」

「うるせえ。俺はウサギを狩るのにも全力を尽くす獅子のような男なの」

「場合によってはそれってバカだよ」

「うるっせえな！ バカ女に言われる筋合いねえんだよ！」

「自分だつてバカのくせに！ ミナ様の命令だつてロクに聞けないバカじゃん！」

「聞いているよ！ つーかエルメスのは命令じゃなくてただの我儘じやねえか！ 俺は十分に聞いてますけど！」

「全然足りない。ミナ様の前に跪いて靴舐める」

「舐めるか！ ふざけんな！」

「俺らは靴以外ならどこでも舐めるよ」

「うわ！ やめろ、お前ら！ エルメスを変な目で見るな！」

「アンタの部下も最低だね」

「“も”じゃねえ、“は”だろ！」

「“も”だよ」

全く、ムカつくバカ女とバカなシュヴァリエのせいで勝利の余韻はどっか行っちゃまったよ。エルメスは突然のセクハラ発言に困ってるし。可哀想に。

エルメスをディフェンスしながらシュヴァリエ達に向いた。とりあえず、コイツらにもう一度釘を刺しておかねば。

「テメエら、俺のエルメスに指一本でも触れたらブツ殺すぞ」

「副長のじゃねえじゃん」

「あ、間違えた。アーサーのエルメスに・・・」

「今更言い直しても遅ええよ」

痛恨のミス！ 一番言つてはいけないことを公然と言い放つてしまった俺、残念！ 一瞬激しく動揺したけど、今後の展開は予想できた。次のコイツらの言葉に期待。

「極度のシスコンだな」

ホラ来た！ よっしゃ！ 神様ありがとう！ 思わずガッツポーズしそうになる俺。

シュヴァリエ達は一齐にシスコンコールを送り始めるけど、今回ばかりは全許し。敢えてその言葉を飲み込もう。

「カイ、もう否定しないの?」

シスコン呼ばわりされて安心する俺に、微妙に痛いところを突いてきやがる俺のエルメス。が、そこも計算済みだ。

「いや、認めてねえけど。いい加減反論するのに疲れたから、もう好きにさせる。勝手に言ったりやいんじゃね」

「ああ、そうだね」

クリアー! さつすが俺! なんで俺こんなに機転がきくんたる、本当。マジ俺の脳は完璧だな。本当神はスゲーな。俺のような完璧な存在を作り出すなんて、本当俺スゲー。

しかし、エルメスは俺の脳を凌駕するほどの爆弾を投下する。

「ねえ、私カイのなの?」

「え! い、え、えー・・・いや、違ええよ。お前はアーサーのだ」
「でもさつき俺のつて言った」

「あー・・・それはお前アレだよ。俺の友達ってことだ」

「そうなの?」

「そうだ。つーかそれ以外に何があるわけ?」

「・・・まあ、そうですね」

「そうですねよ」

うつわ、微妙。エルメスは「なんつか釈然としないなあ」みたい

な納得できないみたいな顔してやがる。

チクショー、俺はまだ修行が足りないのか。人生経験と言う名の修行が足りないのか。もう45だというのにまだ足りてねえのか。つーか、良く考えたら今までこんなトラブルなかったからなあ。しようがねえ。俺は悪くねえ。ジユリオ様のせいだ。

困ったことが起きたら全部ジユリオ様のせいだ。これでオツケイ。

とりあえず、場の空気を入れ替える為に以前から気になってたことをシャンティに相談してみることにした。

「つーかお前らさあ、いつまでミナって呼ぶ気だよ。もう今はエルメスなんだからエルメスって呼べ。アーサーも」

「なんでアンタにそんな事言われなきゃいけないわけ？ ミナ様はミナ様じゃん」

「そりゃそうだけど。状況的に見てそれがマズそうだから言ってるの」

「なんでマズイの？」

「今俺らは逃亡中の身。エルメス達がインドにいた頃の事は調査でわかっている。一応死んだことにしてるし、城を焼いてきたから報告書なんかも燃えちまってると思うが、逃亡したことが発覚しないと言い切れない。もし逃亡先としてここが怪しいってことになって、そんな時調査員たちが俺達とアーサーやエルメスの名を聞いたら、お前らごと抹殺だ」

「それはいくらなんでも心配しすぎじゃないの？」

「しすぎるに越したことはねえ。一応データも消したらしいし、その可能性は低いとは思っけど念のためだ。イスラムの奴らの事もあつるし、こっちは生死がかかってんだからな」

「うーん、そつか。それもそうだな、わかった」

何とかシャンティが納得してくれた。ずっとこの事は気にかかってたけど、アイツらはミナと伯爵を崇拜してたわけだし、その気持ちが無下にするのも可哀想な気はしたからな。

でも、命には代えられねえし、何よりシャンティ達まで死ぬようなことになったら大変どころの騒ぎじゃねえ。

とりあえず、納得してくれてよかった、と思っただらシャンティが何か思いついたような顔をしてもう一度俺に振り向いた。

「でもさ、いくら名前変えたって、顔変えなきゃ見つかったらアウトじゃん？」

「そう、確かにそうなんだよな。でもこん中で顔変えられんのはエルメスとリオしかいねえからなあ」

「え？ リオ顔変えられたの？」

「エルメス知らなかったっけ？ なんか知らんけどアイツはそれができたから、潜入とかさせてたんだけど」

「あー、そうだったんだ。知らなかった」

「それよりどうすっかなあ。うーん、なんとか頑張って変身能力を開発するか・・・難しいな。じゃあ整形？ いや、俺の美しい顔に傷をつけるなんざ許せん。大体手術中に元に戻りそうだな」

「何言ってるのアンタ・・・ていうか、アンタが目立つんだよ」

「だろうな。主に俺が美しいから」

「違ええよ！ 全員金髪だからだよ！」

「ああ、そういえば。じゃあとりあえず髪色を変えよう」

というわけで、何色がいいかそれぞれアンケートを取することに。
エルメスとリオは除外。ランスもまだ子供だし除外。俺を含め、残りの10人の意見を紙に書かせた。

俺 「黒が1人、ブラウン1人、ライトブラウン3人、ベージュ2人、アツシユ? こいつは却下」

トリス 「なんで!？」

俺 「俺とカブるからダメ。それともお前俺に憧れてんの？」

トリス 「違ええし! もう、じゃあベージュでいい!」

俺 「じゃあベージュ3人・・・オイ、ブリーチって書いた奴誰だ」

パーシー 「俺俺! プラチナブロンド目指す!」

俺 「テメエ相変わらずクリシユナさん目指してんのか。身の程を知れつつたのを忘れたか」

パーシー 「ええ!?! 違うのに・・・じゃあもう黒でいい」

俺 「えれえ極端だな。じゃ、黒が2と。とりあえずこれで全員だな」

ペレアス 「ん? 数が合わねえぞ? あと一人足りなくないか？」

俺 「ああ、俺は現状維持。俺はこの髪の色気に入ってるから」
キルシユ 「ええ!?! 自分ばかりブルーイ!」

俺 「うるせえ。俺は筆頭だからいいんだよ。さて、じゃあ明日にでも買いに行くとするか。オイ、チャラ男3兄弟、お前ら暇だろ。明日行つて来い」

キルシユ 「自分だつてヒマなくせに・・・」

シユヴァリエ達はなんかブーブー言つてたが知ったこつちやねえ。一人くらい現状維持がいても問題ねえ。それが俺なら尚更問題ねえ。でも、この3人に行かせたのは俺の大失策だった。

翌日、屋敷に立ち込める異臭から逃げるように部屋から出てエルメスと二人リビングでテレビを見ていると、急にチャラ男3兄弟が全速力で降りてきた。

キルシュ「敵を補足！ 確保！」

パーシー「ヤー！」

リオ「神妙にお縄に着きやがれ！」

俺「は！？ うわ、離せええええ！」

3兄弟に強制連行されてキルシュの部屋に連れ込まれた俺は、パーシーとリオに床に組み伏せられるという無残な姿に。

「てめーら何すんだ！ 離せ！」

「フハハハ、副長殿、そろそろ年貢の納め時ですよ」

そう言ったキルシュがプラスチックの容器を一生懸命シャカシャカ振っている。

「え、ちょ、マジ、マジやめろ」

「さーてコレは何色でしょう？ 当てたらやめてもいいけど」

「ブラウン！」

「残念！」

「ギヤアアアア！」

答えを外した俺の頭の上にキルシュはそりやもう嬉しそうに笑いながら、ドバドバとカラーリング剤をブツかけた。

ああ、これがついてしまったら染めねえわけにいかねえじゃねえか。チクシヨ、クツソー！ くせえええ！

そして放置すること30分後。

キルシュ「さあ、カイクンお風呂いこつかあ」

パーシー「お兄ちゃん達がキレーキレーしてあげるからねー」

俺「テメエらマジ覚えてろよ、マジぶっ殺す」

相変わらず捕まったまま今度は風呂場に強制連行。浴室に入るとそのままシャワーをぶっかけられる。

リオ「ちょっと、俺にも水が飛ぶんだけど」

俺「つーか普通頭にだけかけるだろ！ 服ビショビショじゃ

ねえか！ 着替え持って来い！」

キルシュ「自分で取りに行けば？」

俺「マジ殺す……って、あー！ 服に色移ってんじゃねー

か！ 俺のアルマーニ……テメエらマジ……マジ殺す！」

パーシー「ハイハイ、シャンプーするからじっとして。お客様おかゆいところございませんかー？」

俺「お前らの存在が齒がゆいわ！」

捕まったまま頭まで洗われた上にドライヤーまでご丁寧に掛けられた。ドライヤーの風になびく前髪を見て俺超シヨックを受ける。

俺 「マジ・・・黒？」

リオ 「カッコいいよ」

キルシュ 「似合ってる似合ってる」

パーシー 「すげえ副長っぽい。超ロック」

俺 「あり得ねえ・・・黒とかマジあり得ねえ。確かに俺はロックでニヒルなイケメンだけど、黒はねえよ。黒はねえ」

キルシュ 「イヤイヤ、俺の見立てに狂いはなかったね」

俺 「主犯はお前か。覚えとけよ」

で、そのまま引きずられて再びリビングへ。未だテレビに夢中なエルメスの隣に放り投げて、3兄弟は全力でその場から逃走した。

「クソ！ アイツらブツ殺す！」

すぐに追いかけてようとして起き上がると、エルメスに腕を掴まれた。

「カイも髪染めたの？」

「アイツらに染められたんだよ！」

「カッコいいよ」

「そりゃ俺は何してもカッコいいけど！ でも黒は俺の中では想定外だ！ 黒はねえ！」

「そんなことないよ。似合ってるよ、カッコいいよ」

「……そーか？」

「うん。こっちの方がカイっぽくて好き」

俺、撃沈。さすが媚びる女。男の喜びポイントをよくわかってる。あ、なるほど。アーサーはこの手管にやられたな。なるほど、良くわかった。

とりあえず、エルメスに免じて3バカトリオは許してやることにした。で、服を着替えて再びリビングに降りると、他の染めた奴らもエルメスに報告していたようだ。

「みんなカツコイイ！ ガラードはブラウンの方が似合うよー」

「そう？ ありがとう」

あのアマ！ 誰にでも言いやがってムカつく！ なんて打算的でズルい女だ！

瞬間的に相当キレて階段の手すりをボコボコにしてたら、後ろからランスが下りてきた。

「あれ？ カイも染めたの？」

「不本意ながらな！」

「ふーん、似合ってるよ。超ダーク」

「ダーク！？」

「うん、すごい悪者っぽい」

なんだろう、今日は本当になんなんだろう。なんで俺はこんなにイライラさせられるんだろう。

微妙に反論する気力も起きなくて、ランスに手を引かれてリビン
グに降りると、シュヴァリエ達からもダークだの悪人だの怖いだの
言われる始末。しかも最終的にそれが

「副長似合っー！」

どういうことだよ。悪人ぽいのが似合っってどういうことだよ。
俺は天使だぞ。ふざけんな。

「もお、カイ、そんなに落ち込むことないじゃない」

「落ち込んでねえよ！ 怒ってんだよ！」

「ちゃんと似合ってるよ？」

「それがムカつくんだよ！」

「なんで？ ちょいワルっぽくてカッコイイよ」

「・・・ん？」

「なんか黒の方がミステリアスっぽくて、カッコイイ」

「まあ、俺は何してもカッコいいからな」

さすがエルメス。物は言いようとはこの事か。

悪人？ ちょいワル ○

という図式が俺の中で確立してしまった。

キルシュ「ププ、見ろよ。あれ照れてんだぜ」

リオ 「俺らのお陰で大好きな妹ちゃんにカッコいいって言ってもらえたわけだし」

パーシー 「むしろ俺らご褒美貰わなきゃいけないんじゃないんじゃん」

俺 「そーだな。礼はキツチり返してやる」

3兄弟 「ギヤアアアア！」

やっぱり許せなかったからとりあえず殴った。次はコイツらピンクとかにしてやる。

「これでみんな変身完了だね。でも、くさい」

顔の前でパタパタ手を振るエルメスに、リアルに落ち込んだ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

バルコニーで煙草を吸いながら、春の夜長に花壇の手入れをするエルメスを眺める俺。

「春になったら植えてみようと思ったの！」

そう言っつて、城に行った時に俺が渡したあの青い薔薇の種子を握っつて、外に飛び出していった。

空いたスペースを見つけてせつせと種を植えていくエルメス。種の数はそう多くはない。元々弱い品種だし芽が出るかもわからないけど、エルメスが一生懸命作業する姿を見ると、芽が出て欲しいなと思っつ。

煙草を消して、再び火をつけようとする火が見当たらない。あれ？ どこやったっけ？ とポケットをパタパタ叩いていたら、ハ

イ、と目の間に火が出てきた。それに俺超ビックリ。

目の前には、蝶のような羽根を背中に生やして、指先から炎を出すエルメスがバルコニーの手すりに腰かけて微笑んでいた。

「この、化け物が！　ビックリすんじゃねーか！」

「ヒ、ヒドイ・・・」

「あ、でも火は貰う。お前便利だな」

「もう本当ヒドイ！」

そう言っつてエルメスが手を引つ込めようとしたから引つ掴んで火をつけると、エルメスは悔しそうな顔をした。

「もう！　私は親切でやってるのに！　文句ばかり！　便利とか

ヒドイ！」

「あーフリーワリー」

「・・・謝る気ないよね」

「んなことねえよ。その羽根、綺麗だな」

「そう？　ありがとう」

一瞬でご機嫌を回復したおバカなエルメス。エルメスの体を反転させて羽根をよく見ると、黒地に青と黄色の模様。

「揚羽蝶か？」

「そうだよ。私は青が似合うつて言ってもらえたし、でも北都の黄色の羽根も捨てがたいし、クリシュナの黒い羽根もカッコよかったし。どうしよつかなくて思ってたら、さっき目の前を蝶々が飛んでっつて、これだ！と思って」

「ふーん、でもアーサーは羽根なくても飛べたじゃねえか。お前はソレできねえの？」

「できるよ。斥力を発生させて後はサイコネシス応用で。でも、羽根に慣れてるから」

「ふーん、意味わからん」

「あはは、カイのバーカ」

「お前ほどじゃねえよ、バーカ。あ、飛んでるところ見せる」

「きゃああー！」

ふと、飛んでる姿が見てみたいと思つて、手すりに腰かけてたエルメスを突き飛ばすと、そのまま地面まで落ちていった。

ええー、なんで落ちるんだよ。意味わかんねえ。何のために羽根生やしたんだよ。

なかば呆れながら地面を覗くと、ムクリと起き上つたエルメスは怒った顔をしてヒラヒラと戻ってきた。

「ヒドイ！ なにすんのよ！」

「つーか何で落ちてんだよ。飛べばいいだろ」

「急に突き落すからビックリしたんじゃない！」

「その羽根いらなくね？」

「いるよ！ もう、バカ！」

「お前がな」

エルメスはパタパタと滞空しながらキャンキャン吠えている。と
りあえず、飛んでる姿を見れたからそれで満足。でもそんなエルメ
スを見て、飛びながら怒ってるエルメスがなんか面白くて、思わず
笑ってしまった。

「何笑ってるのよ」

「いや、綺麗だなと思って」

「ウソばかり！ 明らかにそう言う笑い方じゃなかったよ！」

「イヤイヤ、ホント」

「もう、絶対ウソ！」

怒ったエルメスはそのまま再び花壇にヒラヒラと戻って行った。
春の月の下、ひらりと舞うように飛んでいるエルメスを見て、思わ
ず口にした。

「綺麗だな」

「そうだね」

「うお！？」

まさか返事が返ってくると思わずに、超ビックリして横を見ると、
いつの間にかシャンティが隣にいて、ニヤニヤ笑ってた。

「おま・・・心臓から口が飛び出るかと思ったじゃねーか」

「ソレ逆ね」

「そんぐれえビックリしたんだよ」
「ははは、だろうね。綺麗なエルメス様に釘づけだったもんね」
「うるせえ。つーかなんか用か。エルメスならまだ作業中だ」
「いや、さっきエルメス様が落ちてきたから何事かと思って」
「ああ・・・なんか落ちてたな」
「カイがなんかしたんだろ」
「俺が？ まさか。何か知らねえけど勝手に落ちてた」
「いくらエルメス様でも勝手には落ちねえだろ」

全く猜疑心の強い女だ。俺がこれほど知らねえつつってのに。
まあ、俺が突き落としたんだけど。
疑惑のまなざしを向けていたシャンティは少しすると諦めたのか、
エルメスに視線を向けた。

「エルメス様、よく笑うようになったな」
「そうだな」
「よく怒るようにもなったし」
「そうだな」
「今は泣いてる？」
「たまにな」
「そう。アンタの前では泣くんだな」
「お前の前でも泣くだろ」
「最近泣かない」
「ふーん」
「だからアタシ、アンタがムカつく」
「はあ？」
「お休み」
「は？」

よし、シャンティの二つ名は「インドの嵐」だ。全然意味わからん。突然話を振ってきて俺を混乱に陥れてさっさと消えやがった。なんなんだあの女は。一方的にムカつくって言い捨てて、理由も言わずさっさといなくなりやがって。

でも、シャンティと話して俺はスゲエ嬉しかった。エルメスが俺の前でしか泣かないことが。確実に本当のエルメスを独占しているという事が。

こういう事で喜ぶべきじゃないっていう自制心ブレーキが機能しない。エルメスにとって俺が特別であるという事が、俺にとってはそれほど重要なことなんだろう。

さっきのシャンティとの話を思い起こして、突然安堵した。

ああ、良かった。俺は異常者じゃなかったんだ。

シャンティはエルメスが俺の前でしか泣かないから、俺にムカついたって言った。それは、俺と同じじゃないか。自分がしたい事を自分にできなくて、他人に先を越された。シャンティのは俺に対する嫉妬だ。

そう思い至って安堵する。良かった、俺だけじゃなくて。シャンティもそうだって事は世の中の他人にもそういう奴らがいるに違いない。良かった、俺は異常者じゃないんだ。

つーことはシャンティはナカーマ！ でも、俺の方がランキングは上！ イヤッホウ！

風呂から上がって血を飲み終わって、くわえ煙草しながら廊下を歩いてたら、同じく風呂上りのエルメスに遭遇。

「なんかちょっとカラーリング剤落ちっちゃった？」

「ああ、頭洗うたびに黒い汁が出るな」

「真つ黒の方がいいのにー」

「鴉の濡れ羽色と言え」

「なんか気持ち悪い」

「うるせえ」

エルメスのせいでさっきまでのウキウキ気分はちよつと消沈。ま

あ、いつものことだけど。

寢室に入る前にもかいバルコニーで寝る前ラスト煙草を吸いに出た。一応これはエルメスとランスとアーサーへの配慮だ。アーサーが帰ってきて煙草くせえつつって殺されないように、というのが一番の理由だが。

火をつけて微妙に紺色になった空を見つめてたら、エルメスも外に出てきた。

「さつきシャンティと何話してたの？」

「ああ、お前が落ちてきたのにビックリしたとか何とか」

「それでなんて言ったの？」

「俺は知らねえつつつた」

「よくそんな平然とウソを・・・」

「エルメスが勝手に落ちたとも言った」
「・・・ヒドイ」

俺に蔑みの視線をぶつけてくれるこのお嬢ちゃんを虐めるのはマジ楽しい。俺の日課の一つでもある。エルメス虐めに始まり、エルメス虐めに終わる日常、素晴らしい。
そして素敵な俺は最後にこう来る。

「それと、ひらひら飛んでるエルメスが綺麗だとも言った」

そう言うてにっこり。するとさっきまで俺を侮蔑の眼差しで見ていたエルメスは、嬉しそうに笑った。マジバカ！ 単純！ コイツ面白っ！

心の中で大爆笑する俺の顔を覗き込んできて、ホントに？ ホントに？ と、エルメスはウザい。

「本当だつて。シャンティに聞いてみるよ」

「じゃあ聞いてくる！」

「バカ、今頃寝てんだから邪魔すんな」

「あ、そっか」

走り出そうとするエルメスの首根っこを？まえて諭すと、すぐに引き下がった。そのままエルメスを寝室まで引きずって行くこうとすると、エルメス大暴れ。

「もー！ 私猫じゃないよ！」

「ああ、犬だっけ」

「もう！ 違うよ！ 私が主人でしょ！ ご主人様に無礼は許さないわよ！・・・わっ！」

カッコつけて俺に背を向けた瞬間に、半開きになっていた寝室のドアに激しく頭をぶつけるエルメス。マジ最高、何なのコイツ。さすがはバカの象徴、やる事が違う。

「ああ、お前はなんて可愛い奴なんだ」

「それって、褒めてんの？」

「当たり前だろ。エルメス、なんでお前はいつも俺のハートを鷲掴みにするんだ」

「くっ・・・ムカつく」

「エルメス、俺はもうお前の虜だよ。お前は最高だ。最高にラブリーなバカだ」

「むきー！ ムカつくー！」

悔しそつに顔を真っ赤にするエルメスと対照的に俺メチャクチャ上機嫌。ああ、楽しい、楽しすぎる。今日の俺最高にハッピー。

「お静かに。ランスが起きてしまいます」

「むう・・・ていうか、何そのキャラ」

「ご主人様に忠誠を尽くすのがシュヴァリエの役目ですから」

「ムカつく・・・」

「あまり興奮なされると寝つきが悪くなりますよ。さあ、今日は私と

一緒に寝ましようか」

「え？ いいの？」

「勿論です。今日はご主人様のお陰ですこぶる機嫌がいいので、私の機嫌を損ねないうちに言う事を聞いた方がよろしいかと思ひますが」

「え？ う、うん。ありがとう」

「結構です。本当に今日は最高に上機嫌ですので、一晩中可愛がって差し上げますよ」

「なんかヤダ！」

「冗談に決まってるだろ。うるせえな。棺で寝ろ」

「あ、ウソウソ！ ゴメン！」

「ハハハ。はー、やっぱお前面白れえ、最高」

「やっぱムカつく・・・」

「お休み」

「・・・お休み」

ここまで大満足して寝たのはインド来て初だ。いや、人生初と言っても過言じゃない。素晴らしい。さすがは俺のエルメスだ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

昨夜は大変ご機嫌麗しく速攻就寝した俺だったが、目覚めた瞬間から意気消沈。

「なにその手。どけるよ」

寝てる間にいつの間にか腕枕してエルメスを抱っこしてたらしい。ランスは俺のベッドの脇に仁王立ちして、その手をグイッと払いのける。

「何って言われても、寝てる間の事まで責任持てるかよ」

「折角、最近時々だけどエルメス様が棺でお休みになれるようになったのに、カイが過保護にするとまた逆戻りじゃなか」

「お前嫉妬だけのくせにそんだけ正論吐けるなんて大したガキだな」

エルメスを起こさないようにそうつと腕を抜く俺を見て、ランスは怒ったように顔を歪めた。

「前から思ってたけどさ、カイってなんなの？」

「は？ なにが？」

「友達にしては度が過ぎると思うけど」

「んなこと言われてもなあ。友達なのは事実だし」

「じゃあ、この前の“俺のエルメス”ってなんだよ」

「うーん、微妙だけどシスコンのようなもんだ」

「そう言われて、その時安心してたよね」

「あ？」

「その言葉を隠れ蓑にしてるだけじゃないの？」

「何が言いてえんだよ」

内心、ランスの観察力と鋭さに冷や汗の俺。本当にコイツ11歳？ まさか見抜かれてんのか！？

ランスの返事を戦々恐々として待つ俺に、ランスは俺を睨みつけた。

「本当は、エルメス様が好きなんじゃないの？」

「………は？」

「でも、筆頭だから、立场上隠してるだけじゃないの？」

「違うけど」

「隠さなくたってみんなもそう思ってるよ」

「それはない」

「じゃあなんでエルメス様を自分の物にしたいの？」

「え、いや、それはそういうアレじゃなくて・・・」

俺が素直にウンと言う筈がない。だって好きじゃねえし。でも否定する割には言葉に詰まる俺にランスは更にキレた。

「カイは裏切り者だ」

「裏切つてねえよ」

「アーサー様への忠誠を裏切ってる！」

「裏切つてねえつて」

「なんでカイが裏切るんだよ！」

「いや、だから・・・」

「カイなんて嫌いだ！ 死ね！ バカ！」

「あつ、オイ！」

全く人の話を聞かないランスはこの俺に向かって罵声を浴びせて、勢いよく部屋から出て行った。激しくドアの閉まる音に、エルメスも目を覚ましてしまった。

「おはよー。なんかうるさいよ」

「ああ、おはよう。なんだろうな、知らん」

ランスの言葉に自分でも疑問を感じた。確かに俺は友達としては度が過ぎると思う。もしかして、俺がエルメスを独占したいと思ってるのは、本当に恋愛感情から来てるのか？

そう思って寝起きエルメスをガン見してみる。象牙色の肌、黒く

大きな瞳、紅く小さな唇、サラサラの長い茶髪、細く小さい躰、それと巨乳。

まあ見た目は悪くねえ。コイツは面白いし、一緒にいるのは楽しい。なんだって俺の神と信仰するほどだ。一般的に考えてこれほど一緒にいて惚れる要素がないわけではない。

でも、どう考えても、どれほど冷静に分析しても、それはない。検索してもそんなファイルは見つかりません。微塵もそう言う感情が湧き上がってこない。やっぱり違うな。やっぱり俺はそう言うのが分からない奴らしい。

ランスはまだ子供だから、人の中に自分が思ってる以上にいろんな感情があることを知らないんだな。自分がそうだから、俺もそうだと思っただけか。でも、直接俺に言ってくるくらいだ。その内大騒ぎしかねえな。一回ちゃんと話すか。

そう決めて、着替えた俺は早速シュヴァリエ幹部会と、シャンテイ・スニル・レヴィも招集した。

「今日集まってもらったのは、俺にかけられる不当な嫌疑を晴らすためだ」

そう言ってランスを見ると、ランスは俺を睨み返す。

「不当？ 正当だろ」
「残念ながら不当だ。それはあり得ん」
「じゃあ証明しろよ」
「ああ、いいぜ。ガルフ、俺の女性遍歴を覚えてるだけ述べる」
「は？ 自分で言えよ」
「いや、俺覚えてねえから」
「相変わらず最低だな」
「まーな。よろしく」

ハア、全く、と溜息を吐いたガルフは俺の昔を知らない奴らに視線を向けた。

ガルフ 「えーと、カイが女を作ったのはラルフが死んでからガードが3歳になるまでの約4年間の間だけ」
レヴィ 「え？ その期間だけ？ ていうか聖職者じゃなかったの？」
ガルフ 「吸血鬼になってはっちゃけたっつーのもあるし、その頃は色々あつて荒れてたんだよ。それは俺らもだったけど。4年で辞めたのは、まあ、飽きたらしい」
ガイド 「飽きたのか・・・」
ガルフ 「で、最初の2年でカイの毒牙にかかった女は約500人」
シャンティ 「はあ！？ ご、500人！？」
ガルフ 「俺の知ってる限りはな。毎晩のようにつかえひつかえ。一晩に2、3人なんてザラ。勿論水商売とかのプロじゃなくその辺の女。すさまじくコイツはモテてた」
スニル 「ああ、なんか口が上手そう」

キルシュ「副長と一緒にいる時のナンパ成功率100%だったもんな」

ガラード「副長、スゲエ。最低じゃん」

俺「若エ頃の女なんか大概が性欲処理の道具だろうが」

シャンティ「本当に最低なんだけど」

スニル「微妙に否定は出来んだけど、そんなストレートかつ偉そうに言う事でもねえよ」

ガルフ「で、残り2年で思い直したのか、ちゃんと付き合うようにした。それが更に最低だった」

ランス「なんで？」

ガルフ「その2年で付き合った女は約50人、それでも異常な数だ。それもそのはず。彼女なのに一切興味もたねえのこイツ。連絡はいつも相手から、相手から誘いがなきゃ会いにもいかない上に大概断る。会つてもやることやったら彼女シカト。5股6股は当たり前。そんなんで毎回ついていけないってフラれる。その繰り返し」

スニル「ひ、ひでえ・・・」

レヴィ「そりゃ、そうなるだろうな」

ガルフ「女たちがどれほど尽しても泣いても縋つても、来るもの拒まず去る者追わず。屋敷にまで女が押しかけてきて大騒ぎになったこともある」

ペレアス「あ、懐かしいな、それ。副長その女うぜえつってビンタしてたよな」

シャンティ「最低・・・」

ガルフ「で、とうとうこイツは悟った。飽きたんじゃないな、あれは間違いだ」

ランス「悟ったって？」

ガルフ「自分は人を愛せないってことを。最初からその感情が欠如してるってことに気付いて、女遊びをやめた」

ガラード「え？　じゃあ今まで一度も人を好きになったことないの

？」

俺 「いや、そんなことはねえけど、愛だの恋だの言うレベルまでは到達しなかったな。興味とか好意どまり」

ガルフ 「そう。カイはこういう奴だから、心配しなくてもエルメスを好きになるなんてことは、あり得ない」

俺 「そう言う事だ。ガルフご苦労。お前スゲエな。よく覚えてんな」

ガルフ 「普通こんな強烈な女性遍歴忘れねえよ。完全に忘れてるお前もスゲエよ」

俺 「そりゃ忘れんだろ。どうでもいいからな」

ガルフの話聞いた俺の昔を知らない奴らは啞然。あ、違うな。この視線は軽蔑だ。こういつつまらん話を他人に聞かせるのは気分が悪いが、この話を持ち出さなきゃ俺がなんて言っても納得しないだろう。

事の発端、問題児ランスも例にもれず引いてるが、多分納得してくれただろうと思ったら。

「人を愛する感情がないなんてあり得ないだろ」

「あり得るだろ。そんな奴世の中にいっぱいいるじゃねえか」

「でも、人としての根源だろ」

「一応俺には家族愛とか兄弟愛はある。所謂友愛は存在する。ただ、女に対する恋愛だけがない。理解ができない」

「そんなわけ・・・」

「ある。世の中には自分の子供を虐待する親もいるだろう。それは俺にしてみればあり得ねえ。でも、実際にあることだ。お前が知ら

ないだけで、知らないことを存在しないと決めつけるのはよくねえな」

「・・・カイは、異常だよ」

「ああ、そうだな。知ってる」

「カイはそれでいいの？」

「少なくとも今この状況では、かえって好都合としか思えねえけど？」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「俺にとっては、邪魔だ。無駄、無意味、余計なものだ。必要ない」

なんか知らんが、ランスの目は悲しみを帯びてくる。もしかして同情してんのか、俺が可哀想な奴だとも思ってたんのか。余計なお世話だコノヤロー。

俺を見つめていたランスは俯くと、少ししたら再び顔を上げた。

「じゃあ、今はなんなの？　なんでエルメス様にあそこまで尽くすの？」

「アイツが俺の親友で、家族で、大事な人で、俺の生きる理由だからだ」

「それは、愛じゃないの？」

「違うな。似て非なる物、依存と信仰だ」

「依存と、信仰？」

「そ。アイツは俺を何度も助けてくれて、俺の願いを叶えてくれた。その事にスゲー感謝してるし恩を感じてる。それは信仰だ。今まで色々あって、ありすぎて、俺の心はとくにブツ壊れてる。それはアイツも同じ。俺とエルメスは相互に依存し合って、お互いの傷をなめ合ってるだけの間柄だ。それでもお互いがいなきゃ生きていけないから、依存する。エルメスは強烈に他人を求めるし、俺もアイ

ツがいなきやマトモじゃいらねえから、傍にいて信仰の為に尽くす。それだけ」

「じゃあ、俺のって言ったのは・・・」

「俺以外の奴に頼る様になって、俺がお払い箱になったら困るだろ」

「じゃあ、恋愛でもシスコンでもないんだ」

「そうだな。恋人でも兄妹でも、下手したら友達とすら呼べねえかもな。俺とエルメスは、そういう可哀想な関係だ」

半ば嘲笑的にそう言うてはみたものの、内心イライラがバースト寸前だ。

チクショー、クソガキが、ここまで言わせやがって。あークソ、ここまで俺の本心を白日の下に晒すのは屈辱だ。ここまで言ったんだから納得しねえとブチ殺すぞ。

イライラかつハラハラしながらランスを見下ろしていると、ランスは驚くべき行動に出た。

「ごめんなさい」

「・・・あ？」

「エルメス様がカイは特別だつて言つてた意味が今ようやくわかった。カイにとつてエルメス様が崇める人であるように、エルメス様にはカイは導く人なんだ。自分を引っ張つて違う世界に連れて行つてくれる人、アリスの白兔」

「アリスの白兔ねえ・・・それはどつちかつーとアーサーだろ」

「今はカイだよ。カイがエルメス様を導いてる」

「そうかもな。アーサーが不思議の国に連れてきて、俺が鏡の国から連れ出そうとしてんのかもな。白兔が導いて、白のナイトがアリスを守つて、アリスが赤の王様にチェックメイトしたら、こんな悪

夢からも目覚めるんじゃないの」
「うん・・・ジャバウォックも、バンダースナッチも、僕たちがやつける」

アリスの白兎とは上手い事言うじゃないか。ウサギなんて可愛い代物じゃねえけど。フーか内心俺は自分がジャバウォックなんじゃないかと思っただけ。まあ、ランスが納得したならいいや。

フーかここまで話したら全員納得すんだろ。上手くすればシスコン疑惑すら払拭。さすがは俺だ。

今のこの状況は、誰の見てる悪夢なんだろう。アリスか、白兎か、赤の王様か、白のナイトたちか。いや、誰の夢でもいい。チェスの間中爆睡してる赤の王様に、チェックしかけて起こしてやんねえと。それまで、俺はアリスを導かなきゃな。

いつか必ず、アーサーにチェックメイトを言い渡してやるから、その時はこの夢を、終わらせてくれ。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

この前話し合いをしたおかげか、不当な言いようと不快な視線を浴びることはなくなった。マジ良かった。懸念すべきことが一つ減っただけでも、だいぶストレス解消。

ていうか、ランスに至ってはなんかちよつと優しくされてるような・・・気持ち悪い。

それとは対照的に、どういうわけかエルメスは俺によそよしい。超シヨック。もしや話したのか。シャンティの奴、あの昔話をエルメスに話して引かれたのか。

最初はそのことがシヨックで気づかなかったけど、どうやら避けられているのは俺だけじゃない。シュヴァリエが避けられてる。

それに、エルメスが微妙な態度をとることに気付いてから、シャンティ達も微妙に俺らと距離を置いているような気がしてきた。正確には避けられてると言うか、なんかよそよしいと言うか、何かを取り繕ってるような・・・

初めは大して気にもしなかったけど、もし集団で俺らに隠し事をしていてとしたら、俺らに関わる重大なことに違いない。そう思っ
て再び幹部会を招集。

俺 「オイ、お前らもおかしいと思わねえか？」

ガルフ 「やっぱカイも思った？」

ランス 「僕もそう思った。エルメス様ウソつけないし」

キルシュ 「そうそう、シャンティ達はともかくエルメスがね・・・」

ペレアス 「そう言われてみれば・・・なんで？」

ガラード 「副長、なんで？」

俺 「それがわかんねえから招集してんだよ、バカ」

6人でうーんと頭を悩ませて、とりあえず思いついたことをそれぞれ言ってみることにした。

ガラード 「副長の束縛に耐えられないとか」

ランス 「カイが怖いとか」

ペレアス 「副長が嫌いとか」

ガルフ 「カイが虐めるからじゃね？」

キルシュ 「わかった！ 実はシャンティがカイに惚れてんだ！」

俺 「テメエら、本気で言ってるのか？ だとしたら拷問の末に火炙りにして殺すぞ」

ランス 「冗談じゃーん」

ガルフ 「悪かったって！ 心配すんな、エルメスはちゃんとお前が大好きだって！」

俺 「うるせえよ！ そう言う事言ってるじゃねえよ！ もつと真面目にやれ！」

「まったく、マジ使えねえバカどもだ。なんで俺の部下はこんなバカの集合体なんだよ。コイツらはバカ組合の団体職員か。腹立つ。」

俺 「とりあえずエルメスとシャンティファミリー総出で俺らによそよそしくしてる位だ。隠し事してるのは明らかだと思う。これほど徹底的に集団で俺らに隠蔽しようとするって事は、俺らにとって重大だつて事だ」

キルシュ「そうだなあ。なんだろう、シャンティ達にとっての禁忌を、俺らがそうと知らずに冒した、とか？」

ペレアス「それなら、シャンティの性格からして文句言ってるきそうじゃね？」

ガラード「確かに。じゃあ、払ってる迷惑料だけじゃ本当は足りてなくて、でも泥棒するのは副長が許さないから困ってるのか？」

ガルフ「それはどうだろう。それをエルメスに話すと思うか？」

俺 「少なくともシャンティはそう言う話をエルメスにするくらいなら、直接俺に言うだろうな」

ガラード「だよねえ。あーもう、全然わかんない！」

ランス「折角同居してるのに、仲良く過ごせないのは辛いなあ」

キルシュ「そーだよなー。折角インドまで来たのにー」

とうとう幹部たちは仲間外れにされてることにスネ出した。確かにコイツらの言う通り、今のままじゃ居心地が悪くて仕方がない。俺達がインドに来たのもある意味運命だと思ってるんだけど

心の中で呟いた言葉に、真相が見えた。

俺 「そうか、なるほどな」

ガラード「副長？ どした？」

俺 「あいつらが俺らに隠すほどの事、そして俺らとエルメス、シャンティ達との共通点と言えば一つしかない」

ガルフ 「え？ まさか！」

俺 「おそらくビンゴだぜ。さて、真相を暴きに行くとするか」

キルシュ「俺わかんないんだけど」

ペレアス「俺も分かんないんだけど」

ランス 「わからなくていいから、行こう」

俺 「テムエ何仕切ってただコノヤロー」

ランス 「たまにはいいじゃん」

舌打ちしながら幹部どもを引き連れて1階に降りると、エルメスとファミリーの奴らはテレビを見ている。シャンティの姿はない。と、思っていたらシャンティが厨房の方から出てきた。

時計の針は既に午前0時を回っている。手を拭きながら出てきたシャンティからは洗剤の匂いがした。

「珍しいな、お前が家事なんて。普段社長業で忙しいお前の代わりに他の奴がやってんだろ」

「あ、うん。たまにはな」

「もう12時まわってるぜ。今まで飯食ってたのか」

「今日は忙しかったからな」

「ふーん・・・お前ら確かヒンドゥー教徒だったよな。でも、洗剤の匂いに混ざって、僅かに牛の匂いがする。ヒンドゥーでは牛肉は禁忌じゃなかったっけ？」

そう言っつてシャンティを見据えると激しく動揺して、一瞬だけ俺の背後に視線を向けた。シャンティが目を向けた方向にあるのは地下室への階段。

顔を蒼くしたシャンティに確信を得て地下室に足を向けると、後ろでシャンティが制止する声が聞こえた。

それを気に留めることなく階段を下りていくと、後ろから必死にシャンティとエルメスが俺達を呼び止める。それでも無視して、地下室の前に降りた。

密閉された地下からは微かに食事の匂いがする。予想は、確実に確信へと変わった。

「・・・やっぱりな。初めまして。いや、ひよっとしたら二度目か？」

「？ 君たちは？」

地下室の扉をこじ開けて入ると、中にはひげを生やした老人。その男は俺達を不思議そうに見上げてベッドに座っていた。

「40年も前だもんなあ。忘れて当然だ。俺は忘れた事ねえけど」

「・・・ま、まさか」

「カイ！ 待つて！ やめて！」

「会いたかったぜエ、イルファーン・スレシユ。会って早々悪いが、死ね」

エルメスの声を見無視する以外の選択肢は、俺にはない。目の前の男は、俺の目の前で俺の両親を殺して、俺を攫ってジュリオ様に売った。死んで当然。

素早く取り出した銃のセーフティを外し、スレシユのアタマ狙って引き金を引いた。その瞬間、スレシユの前にエルメスが姿を現して、弾はエルメスの左胸を直撃した。胸を抑える指の間隙からボタバタと血を流し、エルメスはゆっくりと膝をつき、その場に倒れた。

その光景と40年前の惨劇が、リンクした。

俺は、俺はなんてことを！ エルメスを撃ってしまった、殺してしまっただけ！

途端に恐怖と絶望に支配されて、すぐにエルメスに駆け寄った。

「エルメス！ エルメス！ オイ！ 誰か血を持って来い！」

「わかった！」

すぐに倒れたエルメスを抱き起すと、エルメスは苦しそうに顔を歪める。クリシュナさんが居なくなっただけで力を失ったエルメスの、大口径の「ファントム」に撃たれた胸には穴が開き、そこからじわじ

わと血が広がって水色のワンピースを朱く染めていく。

それを見て猛烈な恐怖に襲われた。エルメスを撃ってしまった。
もしこのままエルメスが死んでしまったら
！

恐怖と焦燥に駆られてエルメスの名を呼び続ける俺に、苦しそうにしながらエルメスは口を開く。

「うっ・・・大丈夫、ごめんね。大丈夫、心臓には当たってないよ」
「本当か！？ ああ、エルメス、良かった・・・良かった！」
「カイ、ごめんね。ごめんね。お願い、この人を殺さないで。ごめんね。今まで隠してて、ごめんなさい」

最早スレシユの事なんかどうでもよかった。エルメスが死なずに済むとわかって、心底安堵してエルメスを抱きしめた。

「エルメス・・・良かった。エルメス、なんで俺の前に出てきたりしたんだ。頼むからこういうことはもうやめてくれ」
「それはこっちのセリフだよ。銀弾なんて、もう必要ないでしょ？」
「そうだな、ごめん。もう、捨てる」
「ありがとう、ごめんなさい」

そうしているうちにガロードが大量に血を抱えてきてそれをエルメスに飲ませると、エルメスはムクリと起き上がって、痛みに顔を

歪めながら胸から銀弾を抉り出した。

赤く染まった銀の銃弾はコロンと床に転がる。その銀弾を見て、俺は久しく忘れていた、人を殺すことの恐怖を思い出した。

あと1、2センチずれていたら、エルメスは死んでいたかもしれない。俺がこの手で殺してしまっていたかもしれない。その事を、とても恐ろしく思った。

ひとまずエルメスを休ませるために、エルメスを抱えてリビングに戻った。スレシユも連行して。騒ぎを聞きつけた残りのシュヴァリ工達もリビングに集まってきた。

しばらくして、傷が塞がって落ち着いたエルメスが着替えを済ませて戻ってくると、エルメスは床に手について、俺たちに深く頭を下げた。

「みんな、今まで隠しててごめんなさい。本当にごめんなさい。スレシユは、生きてたの。スレシユと、私が取引したの。私たちの言うことを聞いて大人しくしている内は、命の保証をすると約束したの。みんなが今までどれほど辛い思いをして来たかわかってるつもり。みんなが何を失ったのかわかってるつもり。でも、約束したの。私と、アーサーさんがスレシユに約束したの。だから、殺さないでください、お願いします」

エルメスにも、きっと俺たちの気持ちはわかってるんだろう。他

人に勝手に家族を奪われたのは、エルメスも同じだ。

床に着いてぎゅっと握られた手の甲に、涙をポタリとこぼしたエルメスは、顔を上げてスレシユに向いた。

「スレシユさん、お久しぶりです」

「やあ、ミナ、久しぶり。大丈夫か？」

「ええ、平気です。スレシユさん、彼らはかつてあなたがジュリオさんに依頼を受けて攫った子供たちです。彼らはジュリオさんとあなたに、人生を奪われました。家族を奪われました。どうか彼らに謝罪してください」

「そうか・・・やはり、これも報いか。まさかあの子供達が復讐しに来るとはな」

エルメスの話を聞いて俯いたスレシユは顔を上げると、俺に目を向けた。

「君がカイ・・・カルロか？」

「・・・よくわかったな」

「ああ、君はおれが頭目になって最初の依頼だったからな。それに、ついさつきシャンテイと君たちの話をしていたばかりだ」

「ふーん、なるほどね。覚えてたんなら気分的にはちったあマシだ」

「・・・君は覚えていないようだが・・・君の両親を殺したのは、おれだ」

その言葉を聞いた瞬間、憎悪の炎が燃え上がった。再び銃を向ける俺と、再びスレシユを庇うエルメス。慌てて俺を止めようとした

レヴィを、ガロードが引き留めた。

「副長を止める権利があるのは、俺達とエルメスだけだよ」

ガロードの言葉にレヴィもシャンテイ達も黙り込んで、シユヴァリエ達も俺とエルメスとスレシュの様子を静観している。銃を向けられたエルメスはビクツと体を震わせながらも、その場から動こうとはしない。

「エルメス、そこをどけ」

「カイ、ごめんなさい、ごめんなさい。カイの気持ちはわかるけど、スレシュさんを殺さないで」

「黙れ！ そいつは殺す！ どけ！」

「違うの！ カイのご両親を殺したのは、スレシュさんじゃない！」
「コイツが殺したって自分で言っただろうが！」

「違う！ ボスが自ら現場に赴くはずがない！ スレシュさん、どういうつもりなんですか！ なんでそんなウソつくんですか！」

「・・・ミナ、どくんだ。約束はもういい。彼の言うとおりにするんだ」

「何を・・・！？」

スレシュの言葉に、エルメスも俺も動揺した。スレシュは驚いて掴み掛るエルメスに悲しげに微笑んでみせる。

「おれはもう70歳だ。どの道もうすぐ死ぬ。今死んでも大差はない」

「そんな！」

「それに、ミナと彼らがここにいるという事は、ジュリオは死んだんだろう?」

「・・・はい」

「君たちが殺したのか?」

「そうです」

「じゃあ、おれも殺されなければ。少なくとも彼らには、その権利がある」

「さすが長生きしてるだけあるな。よくわかってんじゃねえか。お前が直接手を下してようがそうでなかるうが、関係ねえんだよ。エルメス、どけ」

「ダメ! お願い、これが理不尽だとわかってる! カイの気持ちもわかってる! でも、この人を殺さないで。許さなくてもいい、殺さないで。お願い・・・」

「黙れ! どけつつつてんだろ! 俺にはコイツを殺す権利があるんだよ!」

「ダメだよ! それじゃ、ジュリオさんと同じになっちゃう!」

泣きながらそう叫んだエルメスの言葉にハツとして、その瞬間から憎悪の炎は沈静化していった。

エルメスの言う通りだ。憎悪と復讐心に憑りつかれてスレシユを殺してしまったら、俺はジュリオ様となんら変わらない。

でも、俺のこの苦悩と憎悪を一体どうしたらいいんだ。許してやることなんか出来ない。あの日の惨劇を、40年経っても、今でも鮮明に脳裏に浮かぶ母さんの血の色を、どうしたら忘れられるって言うんだ。

「カイ、お願い。許せないってわかってる。許さなくたっていい。」

でも、どうしてもスレシユさんを殺すなら、その前にスレシユさんに私を殺して貰わなきゃ」

「・・・何、言ってるんだ」

「私達は、この屋敷を奪うために、スレシユさんの部下を大勢殺した。ベトナムの時は、トリンのお父さん以外は全員皆殺しにした。だから、スレシユさんには私を殺す権利がある」

エルメスは再びスレシユに向くと、スレシユの目を真っ直ぐ見て尋ねた。

「スレシユさん、私が憎いのですか？ 殺したいのですか？」

「スレシユがエルメスを殺すなら、俺は容赦なくスレシユを殺す」

「カイ、それは・・・」

「ミナ、おれは君を憎んではない。君は取引の時に言ったね。私は殺したくありません、だから、どうか取引に応じてください、とおれはあの時の決断は間違っていないと思ってる。部下の大半は生き延びることが出来た。失われた部下は、おれの家族も同然だった。でも、それでわかった。自分のしてきたことが、どれほど非道だったか。家族を奪われることが、どれほど苦痛なのか。ミナのお陰でその事を知った。これほどの苦痛を小さな子供に背負わせたおれには、当然の報いだ」

スレシユの言葉を聞いて、エルメスはポロポロと涙を零して、スレシユの膝に額を付けた。

「スレシユさん、ごめんなさい、ごめんなさい。謝って済むような

事じゃないってわかってます。許されることじゃないってわかってます。ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「ミナが謝ることじゃないさ。ミナはおれと取引をしただけ。ミナは何もしていないだろう」

「でも・・・でも・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

膝に泣き継るエルメスの頭を、スレシュは優しく撫でて困ったように微笑んだ。

話から察するに、実際にスレシュの部下を殺したのはアーサー達で、エルメスは取引を持ちかけて皆殺しを防いだけなんだろう。それでもエルメスは懺悔する。

今は自分の家族が奪われて、俺も、俺達も、スレシュも、エルメスも、同じだから。家族を奪われる者の気持ちを知ったから。

俺も、エルメスも、スレシュも同じ

気が付くと、スレシュに向けていたはずの銃口は床に向いていて、俺の腕は下がっていた。

これは、エルメスに免じて今日の所は見逃してやっていいんじゃないのってことか。そう結論付けて、銃をしまった。

「エルメス、悪かった。スレシュは殺さねえから」

未だ膝にすがって泣いているエルメスの肩を撫でてそう言うと、エルメスは驚いたように顔を上げて余計に泣き出すと、すぐに今度は俺に飛びついてきた。

「カイ、ゴメンね、ゴメンね、ありがとう」

「お前に泣かれちゃしようがねえからな」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「もう謝るな。別にお前のせいじゃねえだろ」

「うん・・・カイ、ありがとう」

「ゴメンな、エルメス。ありがとう」

エルメスが止めなければ、俺は憎悪に支配されて、ただ復讐心のみでスレシュを殺そうとした。ジュリオ様と同じように。

あの惨劇を二度と繰り返さないと決めた。苦しみながらもそこから這い上がるつもりだ。

俺と同じように家族を奪われたエルメスは、ジュリオ様を許そうと決めた。今でも悩みながら努力してる。苦しみながらもそこから這い上がるつもりだ。

俺と同じように家族を奪われたスレシュは、その罪を受け入れて懺悔し、反省した。スレシュまで改心したってのに、俺がそうしないわけにいかねえ。

40年前から止まってしまった時計の針を、いい加減動かしてやらねえと。

泣きつくエルメスの肩を撫でて、シュヴァリエ達に振り向いた。

「俺は、スレシュを許そうと思う」

「副長！？ 本気で言ってるのか！？」

「ああ。エルメスに免じて、だけど。もういい加減、憎むのにも疲れた。お前らはスレシユをどうしても殺したいか？」

俺の言葉に困惑と動揺を隠せないシユヴァリエたちは顔を見合わせて悩み始める。しばらくすると、ランスが前に進み出てきた。

「カイにできることが僕にできないはずないじゃん。いいよ、許しても」

ツンとすましたランスの生意気な物言いに、シユヴァリエ達の両手はWで、とうとう呆れ笑が浮かんだ。続いてガラードが歩み出る。

「俺もいいよ。今は、エルメスがいるから」

ガラードの言葉に、みんなも首を縦に振った。

ベディ 「確かに思い出としては最悪だけどさ、昔の事だしな」

リオ 「今はエルメスやみんながいるし」

パーシー 「そうそう。その事がなきゃ、みんなに出会えなかったもんな」

ガルフ 「きつとこういう運命だったんだろ」

トリス 「むしろ今の方が大家族で楽しいじゃん？」

ユアン 「だよな。それまで一人っ子だったのに今や12人、いや13人兄弟？」

キルシュ「スレシュがいなきや、きつと一生出会わなかった。みんなとも、エルメスとも」

ペレアス「そこを汲むなら、許してやってもいいか」

ディナ「つーかぶっちゃけ、俺覚えてないんだけど」

トリス「あ、実は俺も」

ガロード「そう言えば俺もだ。物心つくころには副長がお父さんだったし」

俺「誰がお父さんだ」

ベディ「うわ、そっぴやガキの頃、副長を兄ちゃんって呼んでたわ！」

パーシー「そう言えば！懐かし！気持ち悪！」

俺「テメエら後でリンチな」

数分前まで殺すだの殺さないだの、相当シリアスな雰囲気だったはずなんだが、バカどもの手に掛ければこのザマだ。コイツらの切り替えの早さと能天気っぷりは、最早賞賛に値する。

いつの間にかエルメスもクスクス笑っていて、エルメスの笑顔を見て改めて、みんなと出会えてよかったと思えた。

「つーわけで、スレシュ。水に流すってわけにはいかねえが、まあ、許してやる」

スレシュに振り向いてそう言っていると、スレシュは顔を歪めたかと思つと目に涙を溜めて床に額をこすりつけた。

「君たちには、本当に申し訳ない事をした。本当にすまなかった。ありがとう。本当にありがとう。本当に、すまなかった」

絞り出すような声で謝罪を述べるスレシユに、多分それなりに反省してるんだろつな、そう思った。

そんで、みんな乗り越えてきてるんだから、俺も頑張らなきゃいけねえかってなんとなく覚悟を決めた。

エルメスはジュリオ様を許そうとしてる。俺も、エルメスとコイツらと一緒に頑張って、これから新しく時を刻んでいこう。

この話には、まだ少し続きがある。

その後、少ししてスレシュが落ち着いた頃に、俺らの様子を静観していたシャンティが急に前に出てきて、エルメスの前に膝き頭を下げる。どうしたのかと見守っていると、シャンティはエルメスと俺に目を向けて言った。

「エルメス様と、カイ達シユヴァリエが許してくれるかはわからないけど、お願いがある」

「え？ なに？」

「・・・スレシュを、地下室から解放してほしい」

「は！？」

「え！？」

思わぬ相談に驚いて、エルメスと顔を見合わせた。突然の事にスレシュ自身もとても驚いている。

「えっと、それはどうして？」

「ずっとスレシュの世話をしてて思った。スレシュは根っからの悪人じゃない。利益を求めていただけで、自分のしたことを悪だと知らなかっただけだ。それに頭もいいし、機転も利く。トリンとツァンはマイケルさんに助役をやってもらってるんだろ。アタシも、ア

タシの会社の相談役として、スレシュを雇いたい」

「ええ！？　そ、それは・・・」

「お前、本気で言ってるのか？」

「本気だ。アタシ達は学も経験もない。ブレインとして役立つ素材が欲しい」

何とも野心的なシャンティの言葉に、再び顔を見合わせる俺とエルメス。

「え、あ、カイとみんなはどうしたい？」

「決定権があるのは俺らじゃねえだろ」

「決定権・・・アーサーさんだ」

「よし、アーサー連れてこい」

「無茶言わないでよ・・・アーサーさんならどうするかな？」

「うーん・・・そうだな。あくまで俺の考えだけど、アーサーならシャンティの意見を汲むな」

「え！？　アーサーさんなら怒りそうな気もするけど・・・なんで？」

「アーサーならシャンティの夢を応援するだろうし、それに約束もある。スレシュが約束通り大人しくエルメスやシャンティに従ってれば問題ない。逆らったり妙な真似したら殺せばいい。何よりスレシュはもうトシだ。そんな無茶やつてもメリツトがない。最後に役に立ってもらった方が双方に利潤がある」

「ああ、なるほどお・・・じゃあ、そうしよつか」

「そうしよつかって、あくまで俺の意見だっけってんだろ」

「でも、アーサーさんっぽいからいいんじゃない？　アーサーさんはいいつもこっちがビククリするような決断するし」

「まあ、そう言えばそうだな」

結局俺も納得してエルメスと二人でシャンティに向き直った。

「じゃあ、私がアーサーさんの代理として、スレシユさんの地下室からの解放を許可します」

「シャンティ、お前ちゃんと見張っとけよ」

「二人とも、ありがとう」

俺とエルメスの答えを聞いて、シャンティは深く頭を下げる。続いて俺達はスレシユに向いた。

「スレシユさん、突然ですけど、これからはシャンティの会社で相談役として尽力してください。シャンティと共に、会社の発展と不触の民の救済に尽力すると、約束できますか？」

「勿論だ。シャンティの興した会社はいい、素晴らしい。シャンティの夢を叶える歯車になれるのなら、おれの罪の償いにもなるだろう」

「そうだな。言っとくけど、妙な気起こしたら即抹殺だからな」

「ああ、わかってる。信用しろとは言わないが、そんな気は微塵もない。あの男と、アルカードと約束したからな」

スレシユの言葉を聞いて嬉しそうに微笑んだエルメスにつられて、俺もなんだか安心した。

その後の話し合いで、スレシユの居室は結局地下室のままだけど、鍵はエルメスが壊して、俺達の居室のある4階に近づかないという事で今後の生活指針が決まった。

エルメスとシャンティは今後の細かい話をすると行ってスレシユと共に地下室に行ったから、俺とランスは先に部屋に戻った。

エルメスから貰った腕時計を見ると、もう時間は夜中の3時。ランスも眠そうだ。

風呂でも入るか、と、ピストルのホルダーを外そうと手をかけた瞬間に、エルメスを撃つたことを思い出す。

マシンピストルCZ75-SP01をベースに、化け物を一撃の下に殺せるようにベディが改造したCZ75-SP00 Custom
om“PHANTOM”

ゴトリ、とテーブルの上に「ファントム」を置くと、傍までランスが歩み寄ってきた。

「お前も見てたなら、よくわかつたろ」

「え？」

「銃は、人を守ることなんか出来やしねえんだ。銃は人を殺す道具なんだよ」

「でも、カイはエルメス様を撃ちたくて撃つたわけじゃないだろ」

「同じことだ。俺が銃を抜かなければ、エルメスを撃つことはなかったんだからな」

「そりゃそうだけど・・・」

「銃が奪うのは、他人の命だけじゃねえ。自分の心も、大事な人を失うことだってあるんだ。それが故意か事故かは問題じゃねえ」
「じゃあ、エルメス様の言った通り、銀弾を捨てればいいよ。そしてたらエルメス様が傷つくことはなくなるじゃん」
「ああ、そうだな。でも・・・決めた」

すぐにキャビネットの引き出しを開けて、ストックのマガジンとスピアの「フロントム」を取り出す。するとランスが嬉しそうしながら寄ってきた。

「カイ、意外と騎士じゃん」

「意外は余計だ。お前、証人になれ」

「うん」

俺とランスはその足でガルフの部屋に向かった。ガルフは俺とランスが入って来たのを見て、俺が手にしている物を見て、クスッと笑う。

「どーした？ 百戦錬磨のカイも、さすがに怖くなつたか」

「まーな。つーか、少なくとも今は必要ねえと判断した」

「今は？」

「まあ、コイツが活躍する機会が今後ない事を祈るが、世の中何が起こるかわかんねえからな。本当に必要な時が来るまで、お前が「フロントム」を預かっててくれ」

「なるほどね。了解」

ガルフのデスクの上に銃を置くと、ガルフはそれを箱にしまって戸棚の奥に押し込んだ。振り向いたガルフは俺とランスを見てまたクスツと笑う。

「ランスを連れて来たのは、道德の教育？」

「まあ、そんなとこだ」

「ハハハ、ある意味カイは優秀な教育者かもな。ランスは反面教師やつてりゃ、随分立派な奴になるぜ」

「あはは、確かに！」

「何納得してんだデメエ」

「そりやするよ。ねえ？」

「そーだな。カイ、エルメスを撃つた時、撃つたことが怖かったか？」

「ああ。今思えば、エルメスならああいう事をやりかねえ。それすらも気が回らねえ程に憎悪に憑りつかれて引き金を引いた自分に、エルメスを殺しそうになったことに、怖くなったよ」

「一旦人殺しが怖くなったら、もう二度とできねえかもしんねえぞ」

「そうだな。でも、もう必要ねえだろ」

「だな。もう俺達は死を振りまく神じゃなく、エルメスを守護するシユヴァリエだからな」

「白兔に銃なんて物騒な物は似合わないしね」

ランスの言葉に思わず俺とガルフは笑ってしまった。確かにウサギに銃なんか似合わねえ。

「ランスの言う通りだな。白兔の持ち物は、時計だけで十分だ」

俺だけフェースの黒い、鈍く光るシルバーの腕時計を見ると、規則正しく時を刻む。俺は40年も遅刻してしまっただけで、俺の時計の歯車は再び動き始めた。

きっといつか、40年分の時間に追いつける日がやってくる。エルメスとコイツらがいるなら、一緒に努力していけばきっと、スレシュを許してやれる日がやってくる。

この日俺は「ファントム」を手放して、人を殺すことを、やめた。

拝啓 アーサーさん

事件です！ 大事件です！ スレシユさんが生きていることをシユヴァリエのみんなに知られちゃいました！

でも、みんなはスレシユさんを許すって言うてくれたんです！
本当に良かった！ これを事件と言わず何と言いましょ！ さらには事件はこれだけじゃありません！

ちよつと興奮しちゃった・・・順を追って説明しますね。

この前起きたらカイはすぐにシユヴァリエの幹部会議をするっていなくなっちゃって、仕方なく一人でリビングでテレビ見てたんです。だいが経って、アジメールさんが食事の乗ったトレーを持って厨房から出てきたんです。

「アジメールさん今からご飯ですか？ こんな時間に一人で？」

「え、あ、うん」

なんか妙な態度取るな、と思ってよく考えたら、アジメールさんが向かって行こうとしているのは地下室で、そこに監禁している人がいたことを思い出しました。

というか、完全にスレシユさんの事忘れてました。そう言えばインドが出る時にスレシユさんの処分をシャンティに押し付けて出てきたんだった・・・と思つて。

でも、同時にシユヴァリエのみんなの事を思い出して、凄く焦りました。アジメールさんに聞いたら、インドに来た翌日にシユヴァリエのみんなとジュリオさんとスレシユさんの関係を話してたから、何とかバレないようにやっててくれたみたいです。でも、それもいつまで隠し通せるかわからない、とも。

アジメールさんの微妙な態度は、多分今がこんな状態だから、私にも心配かけないように内緒にしてくれていたんでしょう。

一回スレシユさんとも話そうかと思つたけど、私が地下室に出入りしてるのを誰かに見られるとマズイし、どうしようと思つて頑張つて隠してたんだけど、やっぱり私には女優は向いてなつたみたいで。

とうとうカイの名推理で昨日、バレちゃいました。

カイ達は私達が止めるのも聞かないで地下室に乗り込んで、ドアを開けたカイはすぐさまスレシユさんを殺しにかかりました。それは何とか止めることが出来て、その後カイ達に謝罪して話し合いをしました。

カイもみんなも、両親を殺されて誘拐されたことで今までずっと苦しんでいました。あれから40年経ってもその苦しみに苛まれてきたんです。

今となつては、カイ達の気持ちは私にも痛いほどわかります。大事な人を奪われることがどれほど辛い事なのか、子供の時分に親を失うという事がどれほど辛い事なのか。

でも、それでもスレシユさんを殺してほしくありませんでした。理由としては、私もですが、アーサーさんとスレシユさんとの約束を破らせるわけにいかないと思ったから。

そう説得したら、カイはひとまず引き下がってくれたんですが、ここでまさかの事件です。スレシユさんがカイにカイの両親を殺したのは自分だと名乗り出てしまいました。

当然カイは怒ってスレシユさんを殺そうとします。私にはそれが真実だとは思えなくて、勿論嘘だって根拠ありませんでしたけど一生懸命説得しました。

スレシユさんを殺してほしくない理由はもう一つあります。もしカイ達がスレシユさんを殺してしまったら、それは憎悪に憑りつかれて復讐したジユリオさんと同じなんじゃないかと思ったからです。

そのことを話したら、カイは少し落ち着いたようで、卑怯だと思いましたが、とどめに言いました。

「カイがどうしてもスレシユさんを殺すなら、先に私をスレシユさんに殺して貰わなきゃ」

カイにスレシユさんを殺す権利があるのなら、スレシユさんにも間違いなく私を殺す権利があります。正直、賭けでした。我ながら随分卑怯なことを言ったなと思います。スレシユさんの部下を直接殺したのは私じゃなかったけど、それでも見殺しにして容認していたんだから同じことです。

でも、スレシユさんは言いました。私が取引を持ちかけてくれたおかげで、自分の所業の非道さに気付けたんだと。ミナが謝る必要はないよ、と。

スレシユさんは自分のしたことを反省して、更に私まで許してくれました。私は卑怯な手段を使って話を納めようとしたのに、私達だってスレシユさん達に酷い事をしたのに、スレシユさんは許してくれたんです。

その事がとても申し訳なくて、本当に申し訳なくて、自分が嫌になりました。スレシユさんは言いました。家族を奪われることは辛いこと、それほどの思いを小さな子供に負わせてしまった自分には、当然の報いだ。

それを聞いて思いました。きっと、今のこの現状も報いなんだと。ベトナムで、インドで、イタリアで、私は大勢の罪もない人を殺しました。たくさん、たくさん殺しました。きっと神様はその事を怒ってたんですね。だから私から家族を奪った。愛する人を奪った。

今私の身に起きていることは、当然の報いだったんです。それは自分で反省して受け止めなければいけないことなのでしょう。ちゃんと後悔して反省して懺悔する必要があることなのでしょう。

だから、スレシユさんに謝りました。謝ったからって今更どうにもならないし、許されることじゃないってわかってたけど、とにかく謝りました。そして、心に決めました。もう二度と、誰も殺さないって。もう二度と、こういうことを起こさないようにしようって、決めました。

スレシユさんの思いが通じたのか、カイもスレシユさんを殺さないうって約束してくれました。そしてシュヴァリエのみんなに、俺は許そうと思ってる、お前らはどうするって聞いてくれました。

最初はみんな動揺してたけど、今はみんなが、私がいるからいいよって。スレシユがいたからみんなと出会えたんだし、それを汲むなら許してあげるって言うてくれました。

私はみんなの強さと優しさが、とても嬉しかったです。みんながいてくれて、本当に良かったって思いました。

それで何とか和解が成立したんだけど、ここで第2の事件が発生です。

何とシャンティが自分の会社の相談役にしたいから、スレシユさんを解放してくれて言い出したんです。それには本当にびっくりしました。

スレシユさんは根っからの悪人じゃないし、自分達には学も経験もないから優秀な人材が欲しいって。

相変わらずシャンティは野心的でプライドの高い女の子です。どうしようかってカイに相談したら、カイはアーサーさんならシャンティの意見を汲むはずだって言ったから、じゃあそうしよっかってことになって、結構あっさり決まっちゃいました。

それから今後の話し合いをスレシユさんとシャンティと3人でし

たんですけど、ジュリオさんの事とかを少しだけスレシユさんと話しました。その時にスレシユさんはジュリオさんの最期を聞いて言いました。

「そうか、ジュリオは幸せな最期だったんだな」

それを聞いて、涙が出ました。ジュリオさんが最後にそう思ってくれたなら、カイが辛い思いをした甲斐があつた、と思いました。

そして、今日になって第3の重大事件です。今日ランスがコッソリ教えてくれました。

「カイは銃を封印しましたよ。もう人殺しをしないって決めたようです」

なんでそうなったかっていうと、私の憶測なんですけど、実は最初にカイが地下室に乗り込んだとき、スレシユさんを殺すのを阻止するために私が間に入り込んで、カイの撃った弾に当たってしまったんです。

その時カイもみんなもすごく心配しました。カイの撃った弾は銀弾で、心臓の近くに当たったから。正直な話、ああコレ死んだな、と思いました。

すごく痛くて苦しくて、倒れた私を抱き起したカイは必死に、本当に必死に私の名前を呼んでくれました。大丈夫だよって言った時にすごく安心した様子でした。

その時に、もう銀弾なんて必要ないでしょって言ったなら、もう捨てるって言ったんです。

まさか銃自体を封印するって決めるとは思わなかったけど、その事で撃つことを怖くなったのになって思いました。

この前、ランスが銃を習いたがってるって見抜いたカイがランスに言ったんです。

「これは人殺しの道具だ。人を殺すもので、人を守るうなんて滑稽だな」

それを聞いて、カイは優しいなって思いました。そう言ったら本人は否定してましたけど。

その時ランスはむくれちゃったけど、大人しくいう事を聞きました。今回の事を教えてくれた時は、すごく嬉しそうに話してくれました。カイは僕が思った以上に騎士でしたって。

本当に仲良し親子です。なんだか嬉しい。これを言ったらカイはまた怒るんでしょうけど。

でも、その時最後にランスが言ったことが意味が分からなかったんですけど。

「白兔の持ち物は時計だけで十分ですからね」

どついう事でしょう？ カイが白兔なんですかね？ 白兔ってなんでしょうか？ 全然あの人にウサちゃんイメージが湧かないんですけど、どこからやって来たんでしょう。

着てる服もいつも黒いし、性格も黒いし、今は髪も黒く染めちゃって完全に黒猫みたいなイメージなんですけど。白兔とは対極なんですけど。意味わかりません。

聞いてもランスは教えてくれなかったし、考えてもどうせわかんないから諦めます。

そう言えば聞いてくださいよ！ この前カイに猫パンチされたんですよ！ 手すりから突き落とされた上に、心配したシャンティに俺は知らないとか私が勝手に落ちたとか言ってたんですよ！ ヒドイですよね！

そう言えば前にインドにいた時もアーサーさんから窓から落とされたような・・・ここでは落ちる運命なんでしょうか・・・

とりあえずこれからは、銃を持つ人の前に立ちはだからないこと、落ちないことを心がけます。

そうそう、アーサーさんに見せたいものがあるんです。髪を染めたみんなと、まだ咲くかわかんないけど、城から持ってきた薔薇が咲いたらその薔薇と、新しい私の羽根。

それともう一つ、「元ファイア」で「現相談役」のスレシユの姿。

これでアーサーさんが帰ってきたら、シャンティはアーサーさんに共同経営者になってくれとか言い出しそう。

アーサーさん、少しずつ私達はいい方に向かっていってます。運命を受け入れて乗り越える覚悟をして、努力してますよ。

やっぱりまだ辛い事もあるけど、きつとアーサーさんが帰ってくるときに、笑顔でお帰りって言えると思います。

早く帰ってきてくださいね。お願いしますね。

敬具

報告
シユヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

あれからスレシユは朝シャンティと共に出社して、夜戻ってくる
と持ち帰った仕事に没頭しているようだった。

俺達は相変わらずスレシユとは距離を置いてるけど、まあ無理に
詰める必要もないと思うし、正直すぐには無理。でも、インドにい
た頃スレシユの世話をしていたのはエルメスだって言ってたから、
エルメスはスレシユには普通にしてる。

それがかなり複雑な気分だけど、それでこそエルメスかとも思う。
つーか、アーサーが帰ってきた時、スレシユはどうするんだろうな。
やっぱりさすがにアーサーを許すことはできないのか、それとも許
すのか。まあ、そんな時にならなきゃわかんねえか。

やっぱり俺らは全面的にスレシユを信用できるわけじゃないし、
ウソについて取り入ってる可能性もあるから、基本警戒してる。

仕事は増えることになるが、俺らはそれでいいと思ってるし、その辺はエルメスやシャンティ、スレシユ本人もわかってるようだ。

つーか、すっかり忘れてただけだ。いい加減、催眠術師探そう。

あれからもつかいよく考えてみたけど、やっぱり俺は異常かなと。シャンティと同類ではあるけど、そのレベルが段違いだと思う。

フツツに考えて、友情が信仰に発展するなんてあり得ねえと思うし。まあ、依存はよくあることだとは思うが。

正直考えるのも面倒くさいから、やっぱり消すことにした。

「エルメス、俺出かけてくるから」

「どこ行くの？」

「ヒミツ」

「私も行く！」

「ダメ」

「どうして？」

「お前には言えない所に行くから」

「・・・いつてらっしやい」

俺の微妙な言い回しに勝手に勘違いしたエルメスは、引きながら渋々送り出した。微妙に腹立つな。まあ、結果オーライって事ではないか。

早速街に繰り出して、あらかじめ予約していた催眠療法をやって

るっつー先生の所に行った。

「どーも」

「あなたがカイさんね。さあ、そこに座って」

受付をすませてドアを開けると、セクシー美人女医が椅子に座って微笑みかける。ベデイが喜びそうだ。

言われたように椅子に座ると、先生はクリップボードを手にして問診を始める。

「ご相談はどういったことですか？」

「催眠術で性格っつーか感情の一部を消せるんですか？」

「場合によっては可能ですよ。厳密には消すというか消えたと暗示をかけると言った方が正しいですが」

「ああ、じゃあ俺の異常性を消してください」

「異常性・・・？ 詳しくお話を伺ってもいいですか？」

「いいですよ。長くなりますけど」

とりあえず自分の生い立ち、以前のヤバイ仕事、ジュリオ様の事やエルメスの事、そして俺を悩ませる異常性について話した。勿論そこまで詳しくは話さないし、ヴァチカンの事や吸血鬼の事は黙って、元某国の国家権力ってことにしたが。

俺の話聞いて先生は頭を悩ませる。

「それ、本当の話ですか？」

「信じ難いでしょうけどね」

「一応信じますが、それが本当だとすると難しいかもしれませんよ。とても根の深いもののようなので」

「でしょうね。ずっと同じことを繰り返してきましたから。でも、今回ばかりはそれじゃ困るわけですよ。このままエスカレートしたらアイツに迷惑がかかる」

「そうですね。最悪の場合「アイツを殺して俺も死ぬ」でしょうね」

「・・・思った以上に最悪だ。なんとかお願いします」

「わかりました、やってみましょう」

そう言うと先生は俺に向き直って、俺の額に手を当てる。

「リラックスして、深呼吸して、落ち着いて私の言葉に耳を傾けてください。ゆっくり、ゆっくり目を瞑って」

先生の静かな声に耳を傾けながら、深呼吸をしてゆっくりと目を瞑る。少しすると先生は口調を変える。

「それではまずそのお友達の事を思い浮かべてください」

「はい」

「・・・入ってませんね」

「そつみたいですね」

実際俺は平常心そのもの。全然催眠にかかっている感じがしない。

先生はうーんと唸りながら俺の額から手を外すと、もう一回やって

みましよう、と同じことをやり始めるが依然として催眠状態に入らない。

「じゃあやり方を少し変えますね」

そう言って今度はライターを取り出した。火をつけて俺の前に差し出すと、それを凝視するように言われて言う通りにやってみる。

「集中してください。この火をよく見てください。炎の中にお友達の事を思い浮かべてください」

「・・・あー先生、全然ダメ」

「・・・ダメですか」

先生と二人でガツカリ溜息。どうやら俺は催眠術にかからないタイプの人間らしい。先生の話だとたまにそういう奴がいるようだ。

「もしくは、カイさんは緊張しているのかもしれませんが」

「緊張？ してませんよ」

「いえ、ここに来た事ではなく、状況にです。そのお友達の為に毎日気を張っているんじゃないですか？」

「それは、まあそうですね」

「それに数か月前の事件のせいで、そのお友達とお身内の方しか信じたくない、と思ってるっしやるのかもしれませんが。あるいはその両方が」

「そうかもしれませんがね」

「カイさん、まずはあなた自身が心身ともにリラックスできる状況を作ることが先決ですね。可能な限り自分にとって楽な方に見てみてください」

「俺基本的に自分のことしか考えてないんですけど」

「いいえ、あなたはいつも状況を難しく考えて思い悩む癖があるようです。現に今あなたの頭の中はお友達の事でいっぱいでしょう？」

「……ですね」

「お友達の方と距離を置くのは難しいでしょうし、それはあなたにとっては苦痛でしょう。とりあえずは、お友達の方やお身内の方と楽しく過ごすことだけを考えてみてはいかがでしょう？」

「そうですね。そうします」

「困ったことがあったらいつでも相談にいらしてくださいね」

「ああ、はい」

結局俺は何をしに来たんだろうか。ただカウンセリング受けただけじゃねえか。この俺がカウンセリング・・・なんか俺のプライドが許さないんだけど。なんか腹立つんだけど。

どうも催眠術もきかねえみたいだし、やっぱこれは自分で解決しろって事なんだな。柄にもなく他人の力に頼ろうとするところということになる。よくわかった。もう二度と行かねえ。

そう決めてガツカリしながら歩く帰り道、通りかかった店のショーウィンドウに「MADE IN JAPAN」と書かれたガラスの万年筆を発見。それを見てエルメスを思い出した。あ、これアイツに買ってやるう。

速攻買い物して少しご機嫌回復して屋敷に戻ると、俺を出迎えてくれたのはニヤニヤ笑ったディナとベディ。

「何笑ってんだよ、気持ちわりいな」

「オニイチャン今夜の相手はどんな女？」

「セクシー美人女医」

「マジ!? 羨ましすぎる・・・」

「ベディお前本当好きだな」

「そんな事よりエルメスがさ、副長が自分を置いて夜遊びしに行っただってご機嫌斜めだぞ」

「早くエルメスの相手してあげなよ、オニイチャン」

それを聞いて速攻エルメスの下にダツシユしたエルメス思いな俺。そう言えばアイツ俺が夜遊びしに行ったと思ってたんだ。いちよ前に嫉妬なんかしゃがって、うい奴め。

「エルメス、ただいま」

「あ、カイ、おかえりー」

勢いよく部屋に戻ってドアを開けるとエルメスはキロと遊んでて、帰ってきた俺にそう言うてにっこり笑った。

なんか思ってた以上に普通なんだけど。ハツ、さてはアイツら俺を騙しやがったな!? 俺がスツ飛んで行った様子を見て今頃笑ってやがるに違いない! チクショー!

ドア前でひとしきり打ちひしがれた後、不思議そうにするエルメスの傍に寄ると、エルメスの髪にキロの羽根がついていることに気が付いた。それに手を伸ばそうとすると、スツと逃げられる。

「汚い手で触らないでくれる？」

「ピィ」

なんか思ってた以上にご機嫌斜めだったんだけど。鋭角に斜めなんだけど。ヒドイ言われようなんだけど。

エルメスは相変わらずニコニコしてるけど、よく見たら営業スマイルだった。笑顔でそんな辛辣なことを言うなんて、エルメスも成長したな。

やっぱりご機嫌を損ねてたエルメスに、思わずニヤケちゃった俺。

「エルメス、なーに怒ってんだよ？」

「別に？」

「俺がいなくて淋しかったんだろ」

「別に」

「俺がお前ほつたらかして遊んでるのがヤだったんだろ」

「違うもん」

「じゃあ何に怒ってるわけ？」

「別に怒ってないし、そんなのカイの勝手じゃん」

「じゃあさっきの触るなっでなんだよ？」

「別になんでもない」

エルメスは段々営業スマイルが消失していく。その様子に俺ご満悦。

こういうエルメスを見れるなら、また夜遊びすんのも悪くない。頻繁に遊びに行くところエルメスが慣れるから、たまーに遊ぶことしよう。とか最低なことを考えた俺は、さっき買ってきた万年筆の入った箱をエルメスの前に出した。

「そんな怒んなよ。コレ買ってきたんだよ。お前にやる」

訝しげに箱を受け取ってフタを空けたエルメスは、その中のガラスの万年筆を綺麗、と言いながら手に取る。

「ソレさあ、この前雑誌で見かけたんだけど、日本製のガラスの奴でスゲー書きやすいって書いててさあ。お前たまにせつせとなんか書いてんだろ。お前にやろうと思って、探したんだぜ」

俺のウソつき！ そんな情報知らねえよ！ しかし俺のウソにまんまと騙されたエルメスは嬉しそうに笑った後、ハツとした顔を向けた。

「カイ、あの、ごめんね？」

「なにが？」

「なんか、態度悪くて」

「なんで態度悪かったわけ？」

「カイが遊びに行っちゃったから」

「なんで俺が遊びに行くのがヤなの？」

「だって、なんかヤだ。淋しいじゃん」

もう、エルメス可愛い！ 健気！ よし、やっぱり夜遊び再開しよう。でも面倒くせえから素人女はもうやめよう。

やっぱり最低な俺はそう決めて、エルメスの髪に着いたキロの羽根を取る。

「もう怒んねーの？」

「うん、ゴメンね」

「いーよ」

やはり俺にはエルメスが最高の癒しだ。んで、やっぱり俺って最低。

報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

今思えば、マインドコントロールだったんだろう。

あの戦いが始まる前にアーサーが言ってたよな。ジュリオ様は俺らをジュリオ様に絶対的に服従する忠実な兵器として育て上げたんだと。

それを踏まえて考えると、そもそも俺は「そう言う風」になるようになっていたのか。

この前の催眠術の件で、ちょっとだけ精神医学について調べてみた。同じものかと思ってたけど、洗脳とマインドコントロールは違う物らしいな。

【通常、児童からの教育段階で偏った情報を与えて、特定の（一部の者に都合の良い）思想や価値観を持たせてしまう場合はマインド

コントロールに、既に成長して主義・思想を持つ人間に働き掛けて、特定の主義・思想に（本人の意思に関わり無く強制的に）変更してしまう場合は洗脳に分類される。

特に後者では、薬物の使用や過酷な環境下において、人間の精神が極めて受動的になることを利用して行われる】

だとさ。俺はジュリオ様に子供の頃からマインドコントロールされて、きつと今はジュリオ様によって精神的に追い詰められたせいで、エルメスを盲信するように洗脳されたって事なんだろう。

いや、自分からそうなっちまったってことは、セルフマインドコントロールにあたるのか。ま、どっちにしたって異常に変わりはないし、どっちでもいいか。よくねえか。

でも、そこまで精神的に狭搾していたんだとしたら、あの先生の言った通り、俺は色々深く考えすぎるタチなのかもしれない。場合によってはそれは良い事なんだろうが、この事に関しては悪い事なんだろう。

この点に関しては、エルメスを見習った方がいいのか。シュヴァリエ達を見習った方がいいのか。あんなバカどもを見習えと？ スゲエ嫌なんだけど。

しかし、俺には悩みの種が尽きないんだから仕方がない。そりゃ悩み事も山積みになるはずだ。

「はあ、もう半年も待ってるのに、アーサーさんはいつ帰ってくるの？」

「さーな」

「んもー！ バカ！」

「俺に言うな。アーサー帰ってきてから本人に直接言え」
「ムリ、コワイ」

今の所最大の悩みの種はアーサー、アンタだ。アンタのせいで俺が責められてんだぞコノヤロー。

今日は6月25日。半年経ったぞコノヤロー。マジでいつまで待たせる気だコノヤロー。エルメスがどんだけアンタの帰りを心待ちにしているかわかってんのかコノヤロー。

サンルームで煙と共に溜息を吐く俺の隣で、エルメスもキ口を見つめながら深い溜息を吐いている。エルメスはきつと俺なんかよりもはるかに待ちくたびれてる。辛いだろうな、そう思ってエルメスを見ていたら、エルメスが何かを思いついたような顔をしてこちらに振り向いた。

「あのね、6月は北都の誕生日なんだよ」

「へえ、そうなのか。おめでとう」

「アハハ、ありがとう。北都が生きてればもう18歳だ。アーサーさんと出会ったころはまだ子供だったけど、生きてればもう大人な

んだね」

「そうだな」

「きつとランスもすぐに大人になっちゃうね」

「だろうな」

もしかしたら、エルメスはランスに北都の影を見てるのかもしれない。まあ、無理もない。ランスはまだ子供だし、初期の頃からエルメスに懐いてたし。

完全にそう思ってたならランスが気の毒な気もするが、今すぐだと効果が期待できないから、エルメスにモーションかけるのは最低でも16になるまで待てつつあるし、まあいいか。

「そっぴや、お前と北都って年離れてるな」

「実はウチの両親デキ婚だったらしいんだ。本人達は授かり婚だつて言い張ってるけど。それで結婚が早くて家に余裕なくてずっと一人っ子で、私が兄弟ほしいってせがんだらしい。覚えてないけど」

「ハハハ、なるほどな。お前ガキの頃から我儘だったんだな」

「ま、ね。今思うとすごい我儘なお願いだよね」

「じゃあ北都メチャクチャ可愛かったろ」

「そう！ もう、私嬉しくてさ、家族全員溺愛だよ。北都を独り占めしたくて傍から離れなかったもん」

「俺にはどっちかつつーと北都のが溺愛してるように見えただけど？」

「多分小さい時から溺愛しすぎたんだねえ。小さい頃はお姉ちゃん」と結婚するんだって聞かなかったもん。可愛いよねえ。私もウンつて言ってたけど」

そう言っつて嬉しそうに笑うエルメス。仲がいいのは大変結構。で

も今の発言がアブナイ気がするの俺だけか。エルメスは実はシヨ
タコンなんじゃねえか。

いや、じゃあクリシュナさんは？

「そんだけ溺愛してて、北都はよくお前の結婚許したな。大反対さ
れてもおかしくなさそうじゃん」

「最初聞いたときはアーサーさんに任せるよりは安心できそうって
言ってたよ」

「そんな前から仲悪かったのか、あの二人は」

「もう最初からだよ。お姉ちゃんを連れてっっちゃう奴なんか嫌いだ
って」

初代白兎は狂犬に噛みつかれたか。アーサーに噛みつくとは、北
都は怖いもの知らずだな。さすがはケルベロスの再来だ。

そう言えば俺もクリシュナさんと北都にエルメスを虐めるなって
散々文句言われたような。虐めてねーし。遊んでただけだし。

「でね、後からもう一度聞いてみたの。どうして結婚許してくれた
の？ って」

「そしたら？」

「そしたらね、僕といる時よりもお姉ちゃんが幸せそうだから譲っ
てあげるって」

「なんて姉思いな奴・・・」

「本当に。だから私も北都には幸せになって欲しかったんだけどね。
体は消えちゃっても、ずっと一緒に楽しく生きていきたいなって思
ってたのにな」

「北都はお前と一緒にいられて幸せだったと思うぞ」

「そうかな？」

「絶対そう。決まってるだろ」

「そっか。ありがと」

そう言っではみたものの、そう返事をしたもののエルメスは悲しそうだ。当然だ。北都はそれほどまでにエルメスが大好きで、エルメスもそれをちゃんとわかってて大事にしたのに死んでしまった。キロに目を向けたエルメスの瞳には、とうとう涙が浮かんでくる。

こういう時、エルメスが俺の前でしか泣かないのか、俺がエルメスを泣かせてしまっているのか、どっちなのかわからなくなってくる。

俺だって北都と同じくらいエルメスを大事に思ってるつもりなのに。きっと北都はエルメスを泣かせたりしなかったはずなのに。エルメスの心は俺が守ると決めたはずなのに。

泣いているエルメスになんて声をかけてあげたらいいかわからなくて、とりあえず頭を撫でてみる。するとエルメスは俺の肩に頭を預けて余計に泣き出してしまった。

ああ、ヤバい、どうしよう。なんで？　なんで？　と、内心大慌てな俺の気を知ってか知らずか、エルメスは泣き続ける。仕方なしに再びナデナデを再開すると、しばらくしてからエルメスは俺から離れた。

ああ、やっぱり俺はエルメスを泣かせてしまっただな、と軽く自

己嫌悪に陥る俺に、エルメスは涙を拭って顔を上げた。

「カイ、ありがとう。もう落ち着いたから大丈夫だよ」

「そか」

「カイは優しいね」

「優しくねえ」

「優しいよ。私を泣かせてくれるから。私が泣ける場所になっ
てくれるから」

「・・・俺が？」

「うん、あのね、泣いたら、涙と一緒に罪とか悲しみも一緒に流れていく気がして、落ち着くの。カイは前からそうだったでしょ。私の気持ちをわかってくれて、ただ泣かせてくれる。だから、カイが傍にいてくれたら安心して泣けるの。私、カイのそう言う優しさが大好きだよ。ありがとう」

エルメスは勘違いをしている。俺はエルメスの気持ちをわかってない。エルメスがそう言う風に思っていたとは完璧想定外。むしろ俺が勘違い。逆にありがとう。

エルメスも勘違いしてるし、俺も勘違いしてるし、本当にアーサーの言った通りバカコンビだ。

つか、先生の言った通り俺は本当に考え過ぎなのかもな。少なくとも、悪い方にはあまり考えないことにしよう。その方がストレスの軽減にもなるしな。

そう考え直していると、エルメスはにっこり笑って言った。

「弟は、北都はいなくなっちゃったけど・・・でも、カイはお兄ちゃんみたい。優しくて楽しいお兄ちゃんが傍にいてくれて、私ってホント幸せ者だよね」

なーにバカなこと言ってんだかと思っただが、それで喜んだ俺も、バカだ。

決意表明

届かないとわかっていても、祈らずにはいられない。叶わないと知っていても、願わずには、いられない。

化け物に堕ちても尚、「愛」という感情を消してくれなかった残酷な神よ、地獄に堕ちろ。

主よ、永遠の安息を彼らに与え、
絶えざる光でお照らしください。
正しい人は永遠に記憶され、
悪い知らせにも恐れはしないでしよう。

天使があなたを楽園へと導きますように。

楽園についたあなたを、殉教者たちが出迎え、
聖なる都エルサレムへと導きますように。
天使たちの合唱があなたを出迎え、
かつては貧しかったラザロとともに、
永遠の安息を得られますように。

自分にやらせてほしい、と名乗り出たダイナのレクイエムと共に
暗い墓穴に沈められる棺を見て、エルメスは慟哭する。

後悔に眉を顰め、苦悩に顔を歪め、悲壮に涙するエルメスは、レ
クイエムと二つになった墓石に、改めて思い知らされた。

愛していた大事な家族が、ミラーカさんが、死んだと。

慟哭して泣き絶るエルメスを抱きしめながら、俺は心に決めた。

昨日、エルメスが突然言い出した。

「ミラーカさんを迎えに行く」

以前城に行ったときは、エルメスはそのあまりの荒廃ぶりに耐えきれずにすぐに戻ってしまった。

もう平気なのか、そう聞きたかったけど、エルメスの瞳は自らを奮起するような光が宿っていて、その言葉を飲み込んだ。

さすがに2人だと、というか俺1人だと心許ないと思って、ガラードと3人で城に行った。

城に着いて、その様相に驚愕するガラードと、繋いだ手により力を込めて俯くエルメス。驚いていたガラードはそんなエルメスにすぐに気付いて、空いているもう片方の手でエルメスの肩を撫でる。

「ありがとう」

顔を上げたエルメスは礼を言って微笑むと、手を離して城の裏庭へ歩き出した。俺とガラードもすぐにエルメスの後に着いて行く。

墓石の前に辿り着くと、エルメスはその前に跪いて手を合わせる。

「ミラーカさん、遅くなってごめんなさい。一緒にインドに帰りましょう。本当はオーストリアに連れて行きたかったけど、できなくてごめんなさい。こんな、お墓を暴く様な事をしたくはなかったけど、ミラーカさんを一人にしておきたくないんです。一緒に、帰りましょう」

ミラーカさんに語りかけたエルメスは立ち上がると、墓石を外してガラードに持たせた。エルメスはもう一度手を合わせ礼拝すると、両手を地面に向ける。その直後からボゴツと地面が蠢き始め、土がだんだんと横に流れていき、そこからミラーカさんの棺がゆっくりと這い上がってきた。

棺が完全に姿を現すと避けていた土は元の場所に戻り、更に周囲の土も寄せ集めて、最初からそこには何もなかったかのように均される。

ガラードに持たせた墓石を再び元に戻すと、エルメスは左手を棺に添えて、右手を俺達に差し出す。俺達が手を取ると、インドの屋敷のサルーンに出た。

「カイ、ガラード、葬儀の準備をお願いしてもいい？」

「カトリック式しか知らねえけど、いいか？」

「うん、お願い。その間、私休んでいいかな。まだ力を使うのにはあまり慣れてなくて、ちよつと疲れたから」

「ああ、そうしろ。ガラード、準備は俺が仕切るから、お前はエルメスに着いてろ」

「わかった。じゃ、エルメスいこっか」

「うん、ありがとう」

ガラードと共に階段を上っていくエルメスの背中を見送って、ミラーカさんの棺の前に跪いて十字を切った。

「ミラーカさんは東欧系だったからもしかしたら正教会かもしれま

せんが、俺らカトリックしか知らないので、許してください。そのかわり、これから毎日エルメスが会いに来ますから。もう貴女を一人にはしませんから」

ミラーカさんの棺にそう語りかけて、俺もシュヴァリエ達を招集しに向かった。

俺 「ミラーカさんは吸血鬼として死んだから、吸血鬼らしく弔う。十字架も聖水も聖餅もいらぬ。聖鐘も不要だ。聖水の代わりに血を用意しろ。あとはレクイエムと埋葬だけでいい。ああ、花の準備を忘れるな。ミラーカさんに似合う華やかな牡丹や薔薇を用意しろ。レクイエム覚えてる奴は？」

トリス「あ、俺覚えてるよ」

ダイナ「俺も」

俺 「じゃあどっちか頼む」

ダイナ「俺がやりたい。俺にやらせて」

俺 「ああ、任せた。じゃあ残りの奴らはミサの準備だ。トリス、ユアン、リオ、お前らは花を調達してこい。ベディとペレアスは新しい石碑を用意しろ。逆十字の紋を刻め。パーシーとキルシュは墓穴を掘れ。ガルフ、埋葬するまで彼女はクリシュナさんの部屋に安置しろ」

返事をした面々はすぐに準備に着手した。俺も細かく指示を出して、ミサの進行を練りながらエルメスの事が気になった。

アイツ、きつと今頃泣いてるんだろうな。無理して笑顔なんか取

り繕いやがって。とりあえずガラードに任せてるから安心できると思っただけ。ガラードならきつと、エルメスと一緒に泣いてくれるはずだ。

内心エルメスの事を思うと気が気じゃなかったし、本当は俺が傍にいたかったけど、そう言い聞かせた。

仕事から帰ってきたシャンティ達も作業に合流すると、シュヴァリエ工達が「ここは任せてエルメスに着いててやれ」と言ってくれて、その言葉に甘えることにした。

寝室に入るとエルメスは寝ているようで、エルメスの手を握ってベッド脇にガラードが腰かけて、エルメスを見つめていた。

「エルメス、泣き疲れたみたいで寝ちゃったよ」

「そうか、その方がいい。寝てる間は何も考えなくて済むからな」

「うん、そうだね」

そう言えば、インドに来た初期の頃はまだ夜だったのに早く寝たりしてたな。もしかして、眠っている間は恐怖から逃げられるって無意識に眠っていたのか、そう考えながらガラードの反対側に腰かけて、眠るエルメスの髪を撫でた。

「眠り姫みたいだね」

「ああ」

「夢の中くらいは、幸せな夢を見て欲しいな」

「そつだな」

「最近は悪夢とか見てる？」

「たまにな。うなされてたり、飛び起きたりすることがある」

「・・・エルメス、急に迎えに行こうなんて言っつて、まだ早かったんじゃないかな。大丈夫だったのかな」

「どうだろうな。エルメスは乗り越えようとしてるんだろうけど、

一人で我慢させるのは、心配だ」

「そつだね。乗り越える手伝いはしたいけど、無理はさせたくないな」

ガラードと二人でエルメスの様子を見てみると、午前0時を回った頃にランスが寝室に戻ってきた。

「とりあえず、一通り準備は終わったよ」

「そつか、悪かったな。お前はもう寝ろ」

「僕もエルメス様見てる」

「いや、お前は寝ろ。で、朝になってからエルメスを見てる。俺は昼間起きてられねえし、多分エルメスもそつだと思っつが、念の為。

俺がついてるから、二人とも風呂行っつて来い」

「わかつた」

「じゃあ、副長お願いね」

「ああ」

二人が出て行っつたあと、エルメスの髪を撫でながら、思っつ。エルメスはあの戦争の後、俺達の前では「普通」にするように努めていた。

勿論、ふさぎ込んで泣いていたけど、それでも明るく振舞っつてい

た。この「異常」な状況で「普通」であるというのは、逆に「異常」なんじゃないか。そう思うと、急激にエルメスが心配になってくる。

裏切りに耐え、家族を失ったことに耐え、アーサーが消滅したことに耐え、ジユリオ様を許そうと努め、俺達にまで気を遣い、アーサーの帰りを待ちながら、自分の力で乗り越えようとしている。

エルメスは強い奴だけど、人は、それほどの苦痛に耐えられるようにできているのか？ 本当は、エルメスの心は無事ではいられないんじゃないのか。

エルメスの以前と変わってしまったところ、以前よりはるかに怒らなくなつて、媚びるようになった。愛想笑いをするようになった。我儘を言うようになった。贅沢をするようになった。よく眠るようになった。人がいないことに恐怖するようになった。悪夢に飛び起きるようになった。俺に銃を向けられた時、恐怖していた。フラッシュバックに悩まされることがあった。

そう考えて、精神医学の本の内容を思い出した。

エルメスは、PTSDだ。

再体験・回避・過敏症状、間違いない。エルメスは何とかそれを踏破しようとしているけど、これ以上無理をさせたら最悪の場合、解離性同一性障害を起こす可能性もある。

我儘や贅沢をするのは無意識に危機介入をしているのか、現実逃避か、あるいは新型の鬱病の可能性もある。

エルメスの精神は、崩壊寸前だ。俺が守らなければ。自分のことで四の五の言っている場合じゃない。エルメスを、助けなければ。

葬儀が終わって、今日もエルメスと一緒に寝た。棺で寝るなんて突き放すのもう止そう。エルメスの恐怖を少しでも軽減させたい。あんな風に泣くのは、今日で最後にしてあげたい。

「エルメス、もう城に行くのはやめような」

「・・・うん」

「あんまり、無理しようとするな」

「うん」

「最終的に前が幸せになるなら、どれほど時間がかかってもいいから、急ぎ過ぎるな」

「うん」

「一度メンタルクリニックに行つて診てもらおうか？」

「やだ。知らない人になんて会いたくない」

「そうか。じゃあ俺達に何でも頼れよ。前は多少つて言ったけど、何でも言う事聞いてやるから。お前の望みは、全部叶えるから」

「・・・ありがとう」

俺は、決めた。エルメスを幸福に導くことが出来るなら、俺は何でもする。何にでもなる。以前ランスが言っていた。

「本物の騎士は悪にすら手を染めるものです」

俺はエルメスに生涯の忠誠を誓ったシユヴァリエだ。エルメスの為に生きて、エルメスの為に死ぬ。エルメスの望みは、全て実現させてやる。

エルメスが望むなら、何でもする。何だってやってやる。何だって許してやる。それがエルメスの望みなら、何をしても許される。例え誰が困ろうとも、俺が壊れてしまっても、エルメスの幸せが、俺の幸せだ。

神を殺してでも、エルメスを幸福に導いてやる。それが俺の、使命だ。

決意表明2

とは言ってみたものの、ちょっと早まったかなとも思ったり。つか、つーか俺はもう本当、うつ病になる。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」

「私も行く!」

「・・・わかった」

「どこ行くの?」

「あー、本屋」

本当は先生にエルメスの事を相談しに行こうと思っていたんだけど。俺の事はともかく、エルメスの事はちゃんとしたプロに聞いた方がいいと思っただけど、あえなく挫折。

よく考えてみたら、エルメスは俺が出かけようとするといつも着いてきたがるし、俺が屋敷の外で単独行動をすることは不可能に近い。

まあ、折角秀才なんだから自分で勉強するか、と諦めて本屋に切り替えた。

「カイ、何の本買いに来たの？ エロ本？」

「違いよバカ！ アレだよ、雑誌。ファッション誌」

「ああ、カイ服好きだもんね」

「そーそー。お前にも好きなの買ってやるから持って来い」

「うん！」

「予算は2万だからなー」

「わかったー！」

元氣よく返事をしたエルメスは、すぐに専門書の書架へ向かって言った。それを見てちよつと焦った俺。

つーか、俺もそつちに用事があるんだけど、エルメスの隙を見てなんとかするか、そう思つて陰からエルメスを見てみると、エルメスは順調に本を選別していく。その背表紙を見て呆れた。

量子論、量子力学、ニュートン力学、物理学、相対性理論、宇宙論・・・お前は何になる気だ。ノーベル賞でも狙つてんのか。まあ、俺らのアタマなら狙えるだろうけど。

しばらく見張っているとエルメスは別の書架に移動したから、すぐさま本を選別して買い物済ませた。少し待っていると、エルメスも本を選び終わって俺の所にやってきた。エルメスの身長よりもうず高く本を積んで。

「あ、カイやつと見つけた！」

そう言つて俺の下に走つてきたエルメスに一抹の不安。

「バカ！ 走るな！」

「あつ、わああ！」

「うわっ！」

案の定陳列棚にぶつかったエルメスは、俺に向かって本をぶちまける。咄嗟に出たエルメスを抱き留めて、本をバサバサとナイスキヤッチ。俺スゲエ。

回りの通行人たちから拍手と賛辞を浴びながらホッと息を吐くと、俺から離れたエルメスも大喜び。

「うわあ、カイすごーい！ カッコイイ！」

「それよりお前、お約束みたいなことすんのやめてくんない」

「えへへ、ごめんね」

謝罪するエルメスからは微塵も反省の毛色を感じられない。腹立つ。恐らく同じことを繰り返してアーサーに怒られ慣れたんだろうな。

エルメスの抜け作は今に始まったことじゃねえか、と諦めてそのまま会計を済ませて店から出ようとしたら、意外な人に遭遇した。

「あら、カイさんお久し振りですね」

「先生！ ここで会ったが百年目ですね！」

「言葉のチョイス間違えてませんか？」

「こんなところで会えるとは、運命を感じます」

「そんな事おっしゃって、彼女さんに後から怒られますよ？」

苦笑しながら先生が俺の横に視線を移して、釣られて見るとエルメスが膨れっ面をしていた。どうもほったらかしにしていた事に気を悪くしたようだ。

「カイの知り合い？」

「ああ、エルメスわりい。この人はえつとー・・・」

そこまで言っただけで困った。素直に紹介するわけにいかねーじゃん。言葉に詰まる俺に、エルメスは猜疑と軽蔑の視線を投げかける。

「カイ、まさか・・・」

「違う違う！ ちょっと耳貸せ！」

「わっ、なに？」

「この人は医者だ。血を盗みに行った時に見つかった。金握らせて血を盗むのを黙認してもらってたんだよ」

「え？ そうなんだ。カイってドジだね。慎重に言ったのに」

「うるせえ。吸血鬼って事は言っただけから気をつける」

「うん、わかった」

何とか適当に誤魔化せた。我ながらいい言い訳を思いついたもんだ。話に納得したエルメスは先生に向かってにこっと笑いかけた。

「はじめまして、どうもお世話になってます。私彼女じゃないですよ。カイのあるじでエルメスと言います」

「まあ、それは失礼しました。カイさんがお仕えしてる方なので
ね。私医者をやってます、ジユノと言います。よろしく」
「こちらこそ、よろしくです」

自己紹介を済ませてほのぼの雰囲気でエルメスとジユノ先生は握
手を交わす。その瞬間、エルメスは驚いたような顔をして、それに
ジユノ先生も気づいた。

「あらエルメスさん、もしかして気付いちゃいました？」

「き、気付いちゃいました」

「は？ なにか？」

「お二人とも、今からお時間あります？」

「はい、私もジユノ先生とゆっくりお話ししたいです」

「ありがとうございます。上階にテラスがあった筈ですから、そこ
に行きましょう」

「はい」

「だから、何が？」

俺の何が？ を置き去りにして二人はさっさとエスカレーターに
向かって行き、エルメスが早く！ と急かすもんだから渋々ついて
行った。

テラスに到着してエルメスはあたりをキョロキョロと窺って安全
を確かめると、すぐに目を輝かせてジユノ先生の手を取った。

「ジユノ先生に出会えて、私感激です！」

「ありがとうございます。もしかしてエルメスさんも？」

「はい！ カイモです！」

「まあ、そうだったんですね」

「だから何がだよ」

「もう！ カイの鈍感！」

「イテ！」

なぜかエルメスにバシッと腕を叩かれた。なぜだ。俺は質問しただけなのに。腕をさすりながらエルメスを睨みつけていると、エルメスは嬉しそうに言った。

「ジユノ先生も人間じゃないよ」

「は！？ ウソだろ！？」

「本当！ だって手を握った時、皮膚の物質がタンパク質じゃなかったもん」

「あら、それでわかったんですね」

「は？ じゃあ先生は何者ですか？」

「当ててみてください」

そう言っつて微笑むセクシー美人女医。背が高くすらつとして、出るところは出た妖艶な肢体。栗色のウェーブのかかった長い髪、弧を描く綺麗な唇、艶やかな白い肌、黒く大きな瞳、見た目はミラーカさんに匹敵するほどの美人。

美しくなけりや化物としての値打ちはないと聞いたことがある。美しさこそが神への背徳だと。それを踏まえたら十分にその資格があると言える美貌の女性。こんな美人が化け物なんて勿体ねえ。

「とりあえず、吸血鬼ですか？」

「違いますよ」

「あ、じゃあ妖精！」

「残念」

「まさかの人狼？」

「違います」

「わかった！ 死神でしょ！」

「不正解」

「ま、まさか天使ですか？」

「まさか。違いますよ」

「えー、もうわかりませんよ。先生俺降参」

「わかんない！」

完全お手上げな俺とエルメスに先生はクスクス笑う。しょうがないな、という顔をした先生はにっこり微笑んだ。

「ヒントです。私は国ではこう呼ばれています。大公爵ジュノ・アスタロト」

『えええええ！？ ア、ア、アスタロト！？』

聞き覚えのある名前に、エルメスと仰天して顔を見合わせた。

「え、え、ジュノ先生があのアスタロトですか！？」

「あの地獄の大悪魔、地獄の3大領主の一人、アスタロト！？」

「あら、ご存じ戴けてたみたいで嬉しいです。いかにも私が“大公爵”ジュノ・アスタロトです」

『マジでえええええ！？』

アスタロトつつつたら以前ドイツに悪魔退治に行った時に、アーサーが逃げられたって言うあの大悪魔アスタロト！

大物中の大物じゃねえか！ しかもこの人の配下の悪魔いっぱい殺しちゃってるし、それがバレたら殺される！

「エルメス、あの事は黙ってるよ」

「そ、そうだね。アーサーさんが取り逃がすほどだもん。絶対敵わないよ」

「フーかまさか直接会い見えるとは思わなかったぜ」

「本当だよ・・・うっかり謝罪しそうになっちゃったよ」

「マジお前絶対言わないよ。言うなよ」

「うん、これは本当絶対言わない」

エルメスとヒソヒソ相談を済ませて先生に向くと、相変わらずニコニコ微笑んでいる。悪魔が常に恐ろしい顔をしているとは限らないってこういう事なんだな、と納得するほど綺麗な微笑だ。全く持つて恐ろしい。

「す、すいません。俺ら元神父と元シスターなもんでビックリして」
「そうなんですよ。まさか実在するとは」

「あら、そうだったんですね。そういえば二人はなんの魔物ですか？」

「あ、私達は吸血鬼です」

「もう悪魔に比べたらカスみたいな化け物ですよ」

「ホントホント」

「元聖職者で吸血鬼？ お二人とも随分と面白いですね」

「えへへへへへ」

「ハハハハハハ」

なんとかご機嫌をとりつつ、媚びつつ、笑って誤魔化すバカコンビ。アスタロトと知って急に怖くなった俺らは必死だ。

はつきり言つてアーサーより怖え。つーかなんでまた人間界にいるんだよ。なんで医者やってんだよ。

「あの、ジユノ先生・・・いや、ジユノ様」

「ジユノでいいですよ」

「いえ、そう言うわけには参りません。ジユノ様は何故医者を？」

「ああその事ですか？ 医者なら効率よく患者の魂を戴けますから」

「あ、ああ、そうですね。さすがジユノ様」

「でもカイさんが術にかからなかった理由がはつきりしてよかったです。吸血鬼なら人間用の術がかからなくて当然ですもの」

アレ催眠術じゃなかったのか！ 俺魂抜かれそうになってたのか

！ 怖！ この人怖！

意外な新事実に震えあがる俺。そんな俺とは対照的にエルメスはあろうことかジユノ様に食って掛かった。

「術ってなんですか！ カイを殺そうとしたんですか！」

「ごめんなさいね。それが生業ですもの。こうして知己になったからには、もう殺そうとしたりしませんよ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、本当です。吸血鬼の知り合いができる事なんて滅多にありませんからね。殺してしまうのは勿体ないですから」

「そ、そうですか。ならいいです」

意外にあっさり引き下がるエルメス。俺の為に怒ってくれたのは嬉しいんだけど、できる事ならもう少し引つ張ってほしか・・・いや、無理か。無理だな。エルメスがジユノ様の逆鱗に触れなかっただけ幸いだと思おう。

「あの、ジユノ様は男ですか？ 女ですか？」

「エルメスさんまで・・・性別は、悪魔にはありませんよ。普段人間になるときは男の方が圧倒的に多いですが、女医の方が男女問わず安心されますから」

「ああなるほど、さすがジユノ様。さすが知略の悪魔ですね」

「エルメスも見習え」

「うん、頑張る」

「でも前回来た時にとてもいい男と出会って、その顔を拝借しようかどうか迷ったんです」

「いい男？」

首を傾げる俺らにっこり笑ったジユノ様は、パツと男に姿を変えた。それを見た瞬間ジユノ様に抱き着いたエルメスに、その瞬間、その一瞬で俺は走馬灯が100回見えた。

「アーサーさああん！」

「エルメス！ やめろ！ やめろって！」

「だって、アーサーさ・・・あ、しまったああああ！」

無理やりエルメスを引きはがすと、すぐに事態に気付くも時すでに遅し。アーサーの姿をしたジュノ様は、アーサーの様に不遜に笑った。

「お前達、この男と知り合いか」

「ウソ・・・声も喋り方ま・・・むぐっ」

「お前も喋んな！ いやいや、違うんですよ！ エルメスが好きな俳優に似てたから興奮しただけですよ！ 本当！」

「この私にそんなウソが通用するでも思っているのか？ 元ヴァチカンのエクソシスト」
「・・・」

こ、怖えええええ！ さすが知略の大公爵！ あっさり見抜かれて俺放心。俺に無理やり口を塞がれたエルメスも放心。

これはもう、死んだな。俺ら死んだ。さようならみんな、さようならアーサー。ジュリオ様、今から逝きます。

死を覚悟して心の中で遺言を呟く俺とエルメスに、偽アーサーは再び不遜に笑う。

「心配するな。さつきも言っただろう。吸血鬼、しかもあの男の知り合いならば殺す理由はない」

その言葉に生氣を取り戻したエルメスは、口を塞いでいた俺の腕を剥がして偽アーサーに食いついた。

「アーサーさんの知り合いなら殺す理由がないってどういうことですか!？」

「以前あの男、アーサーに会った時に約束をした」

「は!？ 約束!？」

「そうだ。吸血鬼の女は永遠の処女。アーサーの眷属の女吸血鬼、その娘の魂と引き換えにアーサーの身内の者を殺さない、とな」

「ええええええ!？」

「その娘と言うのはエルメス、お前だな？」

「ちっ違います! 違います!」

「私にウソは通用しないぞ。吸血鬼の魂など、そうそう手に入るものではない。楽しみだ」

「ヒイイイ!」

アーサー!？ マジあり得ねえんだけど! 何勝手なことぬかしてんだテメエは! 何勝手にエルメスの魂悪魔に売り渡してんだテメエは! 自分の売れよ! つーかアンタが逃がしたのかよ! マジ最低だなテメエは!

ショックでエルメスは再び放心だよ。エルメス可哀想すぎんだろ。・いくらジュノ様と敵対してアーサーじゃ敵わないってなったからってそりゃねえよ。もうテメエ帰ってくんな。むしろ死ね。

ジユノ様の登場で、アーサーに反旗を翻した俺の隣で何とか気を取り直したエルメスは、悲しそうに俯いて呟いた。

「でも、それならあの戦争の時、私の魂と引き換えにみんなを助けてくれればよかったのに」

俺としてはその意見には大反対だが、エルメスの気持ちはわかる。そんなエルメスの様子を見て、ジユノ様は溜息を吐く。アーサーみために。

「その件に関してはアーサーに打診したが、拒絶された」

「え？ そうなんですか？」

「ああ、去年の秋ごろだったか。急に現れて「今くれてやるわけにはいかない。それより、ソイツの魂を他人に奪われそうだ。そうなるとお前が困るだろう。そうならないように策を施せ」と言われてな」

「去年の秋？ あ、私の誕生日！ 道理でアーサーさん一人でインドに・・・」

「それで、どうしたんですか？」

「カメルレンゴを操り教皇に入れ知恵させて、敵の首魁を殺させた」

「はあ！？ あれはジユノ様の命令だったんですか！」

「そうだ」

なんてこった・・・マジ、なんてこった。あれはただの教皇命令じゃなかったのか。てことは、俺がジュリオ様を殺したのはジユノ様の、アーサーの策略って事か！ マジでどこまでアンタは・・・

俺はどこまでアンタの策略に踊らされりゃいいんだよ！

「マジ最低だよ、最悪だよアーサー・・・アイツ死ねばいいのに」

「本当、今度ばかりは死ねばいいのにね。最低」

「ハハハ、あの男は吸血鬼にしておくには惜しいな。死んだら悪魔にしてやるっ」

『やめてください！』

とりあえず、テメエ帰ってきたら殴らせる。撃たせる。つーか殺す！ できるかどうかはおいといて。

エルメスの魂を悪魔に売り渡すわ、カメルレンゴ操って俺にジユリオ様殺させるわ・・・まあジユノ様がそういう手段をとると予測してたかは定かじゃねえが、結果としては同じこと。

テメエは悪魔以上に悪魔だ！ 最低だ！ 死ね！ テメエが最低すぎて目の前の偽アーサーにすらムカつく！ クソ！ 殺してええええ！

「ジユノ様・・・とりあえずその姿やめてもらえませんか？ 怖さ5割増しなんですけど」

「本当お願いします。アーサーじゃビビッて誰も食いつきませんか」

「だらうな。せいぜいひつかかるのは頭の悪い女だけでしょうね」

言いながらパツとさっきの美人女医の姿に戻ってくれたジユノ様に感謝。しかしその言葉を聞いて落ち込むエルメス。

ああ、誰よりも引つかかったのはコイツだった。つくづくアーサーはロクでもねえ奴だ。

エルメスはひとしきり落ち込んだ後、急にハッと顔を上げて、恐る恐るジユノ様に振り向く。

「あ、あの、つかぬ事をお伺いしますが、私、ジユノ様に殺されるんですか？」

「今すぐってわけではありませんよ。今すぐじゃつまらないですからね」

「じゃあ、いつですか？」

「ときにアーサーは？」

「今いないんです。なんか消滅しちゃって。帰ってくるとは言ってるんですけど」

「そうですか。とりあえずアーサーが帰ってくるまで待って、それから面白く魂を戴ける算段を整えとします」

「お、面白く・・・」

「エルメスさん、これから仲良くしましょうね」

「いつ！ あう、ハイ・・・」

「その際、カイさんにも役に立っていただくとうしましょう」

「拒否権は・・・」

「ありません」

「ですよー・・・」

アーサー、テメエがクソ野郎なせいで、俺がエルメスの魂を面白く売り渡す手伝いをする羽目になったぞ。どうしてくれんだコノヤロウ。

つーか面白くってなんだよ。こえーよ。マジこえーよ。何させられんの俺。

「カイさん、エルメスさん、魂を貰うんですから当然、代価として一つだけ願いをかなえてあげましょう。その願いを達成する為であれば何でもお手伝いしますから、何でも言ってくださいね」

「はぁ・・・ありがとうございます」

「え、つーか俺もですか」

「あなたにも願い事がありましたよね？」

「あれはキャンセルで・・・」

「不可です。今なら変更は可ですよ」

これは、強力な味方だと思っていいんだろうか。願い事の仕方によつてはウマイ事行きそうだが、相手は知略の大公爵だ。相当うまく立ち回らないとあっさり魂喰われるぞ。

あー・・・こういう時にアーサーがいればなあ。エルメスがハンニバルと揶揄したほどの策略家だし・・・いや！ もうアーサーには頼らねえ！ アンタみたいならくでなしには頼らねえ！

どーせエルメスも俺も魂喰われんのが避けられねえんなら、俺がなんとかするしかない！ つーか、俺がなんとかする！ 見てろよ、クソ悪魔ども！

つーか俺、悪魔に魂喰われて死ぬんだ・・・ここまで不幸か、俺の人生。

辞表

ガツクリと肩を落として屋敷に帰ると、普段よりも賑やか。リビングに入ると驚くべき光景。

ミニスカートからスラリと伸びた綺麗な足を投げ出してソファに腰掛けるジュノ様と、その爪先にマニキュアを塗るシュヴァリエの姿。

俺とエルメスは思わず手荷物をその場に落下させた。

「何やってんですか!?!」

「何してんだテメエら!」

同時に叫んだ俺らにジュノ様とシュヴァリエ達は満面笑顔で振り向く。

「二人ともお帰りなさい」

「副長、エルメスおかえりー」

「おかえりじゃねーよ! 何やってんだ! っーか何してんですか

「！」

「ジ、ジユノ様どうしてここが・・・」

「うふ。獲物を逃がすはずがないでしょう？」

にこやかな大悪魔とデレデレなシュヴァリエにまたしても放心。どうやら俺らは大悪魔にロックオンされてしまったようだ。

「さすが副長だな。こんな美人の知り合いがいるなんてさ」

「さすがは百戦錬磨」

「さすが色男」

「こつちの気も知らねえで・・・」

俺とエルメスはその美女に殺される予定なんだけど。つかさつきまで偽アーサーされてたせいか、俺にはもう女に見えない。メツチヤ怖い人にしか見えない。獰猛な魔獣にしか見えない。ウサギとアリス大ピンチ。

戦々恐々とする俺とエルメスに残された選択肢は一つしかない。意を決したようにエルメスは俺に向いた。

「カイ、逃げよっか」

「そうだな、それ以外に生き残る術はない」

「瞬間移動なら追ってこれないよね、きつと」

「ああ、そうだな、そうしよう」

「アーサーさんのせいでこんな目に遭うんだから待つ筋合いないよ」
「全くだ。もう他人に関わるのはよそう」

「そうだね。もうひっそりと引きこもり生活をしよう」
「どっかの山奥か、無人島でも買うか」
「あ、それいいね」

相談が纏まった俺らは手を繋いでみんなに向いた。

「今までありがとうございました。もう会う事はないでしょう。さようなら」
「絶対に探すな」
「ええええええ!?!」

突然の別れを切り出した俺らに驚愕の視線を向けるシュヴァリエ達に、バイバイと手を振って着いた先は……どこだ、ここは。

到着した先、俺の目の前にはスレシユの屋敷より一回りデカイ屋敷がそびえたっている。都会的な街並みに、広い庭、デカイ屋敷。賑やかに通り過ぎる東洋人。

「エルメス、もしかして……」
「とりあえず急だし、トリンとツァンにお世話になると思うの」
「やっぱベトナムか……」
「え? もしかしてなんか都合悪い?」
「いや、全然」

全然都合悪い。気まずい。と思ってるのは多分俺だけだとは思う

けど、ぶつちやけあの二人には会いたくない。

しかし、背に腹は代えられねえし、状況が状況だ。正に藁にも縋りてえ気分だ。と言っても、別にあの二人を藁だと思ってるわけじゃない。敵だと思ってるだけだ。

気合を入れなおす俺の隣でエルメスが門のベルを鳴らすと、ハイとトリンの声が響く。

「トリン！ エルメスだよ！」

「え！？ 急にどうしたの!？」

「ちよつと色々あって、いかんともしがたい状況に」

「とりあえず門開けるね。入って！」

「ありがとう」

その言葉の直後に耳に着く金属音を立てながらゆっくりと鉄製の門扉が開いていく。門をくぐって広い庭を抜けると、玄関先でツァンとお腹が大きくなったトリンと金髪の老人が出迎えてくれた。

「うわあ、トリンお腹大きくなったね！ もうすぐ？」

「そう、来月の予定。ていうか、二人ともどうしたの？」

「ていうか二人だけ？」

「あ、あはは、マイケルさん、ご無沙汰してます」

「久しぶりだね、アミン。そっちは恋人かい？」

「いや、友だ・・・」

「下僕です！」

「誰が下僕だ！ ふざけんな！」

「もう、冗談なのにい。カイはすぐ怒るんだから」

「この状況で冗談言えるお前の神経疑うわ！」

「さっきから状況がどうのって何があったの？ 中入って、話聞か

せて？」

「そだね。お邪魔しまーす」

広いエントランスを抜けてリビングに通されると、リビングにはメイド達が待ち構えていて、恭しく首を垂れる。通常ならなかなかいい気分なんだろうが、今はそんな気分ですらなれない。

溜息を吐きながらソファに腰かける俺に、ツァンがニヤニヤしながら尋ねてきた。

「なになにー？ ついに愛の逃避行？」

「そんなわけねーだろ。アホか」

「ていうか、むしろそれならまだ良かったよ。まだマシだったよ」

「確かに、そっちの方がはるかにマシだな・・・」

「本当、何があったのよ」

「愛の逃避行どころか、魂の逃避行だ」

「なにそれ？」

「命がけで逃げてきたの。私とカイは一生逃げなきゃいけないの」

「なにから？」

『悪魔』

「は？」

首を傾げるデイヴィス一族に事の顛末を話してやると、その表情は驚愕から怒りに変わり、段々と呆れた表情を浮かべはじめ。んで、最終的には憐憫に。

「アルの性格の悪さもそこまで来ると悪魔だな」
「まさかそれほどは思わなかったよ。ちよつと見損なっちゃった」
「でしょでしょ！ ちよつとどころか私はかなり見損なっちゃよ！
もう本当あの人何考えてるんだらう。最悪だよ」
「またしても俺はとぼつちりだ。よくよく考えてみたらあの時俺が
エルメスの傍にいなきゃ、俺まで狙われなかったかもしんねえのに」
「よく言うよ。とぼつちりは完全に私の方！ そもそもカイの知り
合いで、最初から狙われてたじゃない」
「・・・そうだった」

現実逃避にエルメスに責任を追及するも失敗。そもそもあそこで偶然会わなければこんな事には・・・やっぱある意味運命か。俺とエルメスは悪魔に魂喰われて死ぬ運命だったのか。

でも、いくつか気になることがある。こうまでなってもアーサーがそんな事をするはずがないと思う部分はあるし、俺もエルメスも、なぜすぐに殺さないのか。

そりゃ、すぐに殺すのはつまらないと言つのはわからなくもないが、アーサーの帰りを待つ必要性を感じない。

ひよつとすると、俺らはジュノ様に嘘を吐かれた？ 本当はアーサーとジュノ様の間では別の約束が取り付けられていて、それを隠蔽するために嘘を吐いた？ その可能性はゼロじゃない。きつと裏がある。

殺さないと明言するほどだから、きつと何かの取り決めは合ったんだらう。

アーサーはあの戦争が起きることを随分前から予測していた。もし、ジユノ様と出会う前から予測していたとしたら？ いや、出会った後でもアーサーはジユノ様に再度会いに行ってる。その際に願いの事の内容を変更していたとしたら？

アーサーはエルメスの魂を売ったりはしないだろう。その策謀の限りを尽くして、ジユノ様の裏を掻こうとするはずだ。エルメスの魂をやり玉に挙げておいて、その魂を狩る条件を付けている可能性は十分にある。ジユノ様をも騙すほどの策を用意していてもおかしくはない。

アーサーの願ひ事、今思いつくのは死者蘇生。そして、エルメスの幸せとアーサー自身の幸せ。それを手に入れるには、過去の清算？ そもそもアーサーがジユリオ様と“ミナ”と出会わなければこんなことにはならなかった。アーサーは過去を変えようとしているのか？

いや、わからない。そんなこと、両方とも可能だとも思えないし、仮にそれが成就してエルメスもしくはアーサーの魂が喰われては意味がない。

うーん、わからん！ 相変わらずアーサーは何考えてんのかさっぱりわからん！ 元々の考え方の違いか、もしくは生きてきた年月の違いか、その両方が。とにかく俺にはどんだけ考えてもわからん。

とりあえず現時点でわかっているのは、

- ・アーサーとジユノ様の間で何かの取引があった。
- ・俺とエルメスはアーサーが帰ってきた後に魂を喰われる。

「こんだけ確実って事か。こんだけわかってても何もわかんねえ。今回ばかりはヒントが皆無だ。謎だらけ。相変わらず俺を悩ませやがる。チクシヨウ。」

「カイ？ どうしたの？ ずっと難しい顔して？」

「え、あ、いや、なんでもない」

急にエルメスに思考を中断されて現実に帰った瞬間、屋敷の電話が鳴り響く。何となく嫌な予感。電話に出て少し話したトリンはこちらにチラリと視線を送る。その視線に横に首を振ると、トリンは頷いた。

「え、あ、そうなんだ。えっと、こっちには来てないよ。うん、本当知らない。ごめんね、うん、うん。じゃあね」

受話器を置いたトリンは溜息を吐きながら再びソファに腰かける。

「シャンティからだったよ。二人がそつち来てないかって」

「ハア、探すなつつたのに」

「いや、急にいなくなったら探すだろ」

「もう会う事はないだろうって言ったのに」

「そんな言い方されたら探すと思うよ」

「ここも時間の問題かもな」

「そうかもね。落ち着いたら本格的に逃げる準備しなきゃね」

「だな」

「二人とも本気だね」

「まあ、しばらくはゆっくりしてなよ。うちなら家業の都合上、食料も簡単に手に入るし」

「ありがとう」

それから屋敷の中を案内してもらった後、部屋を賜ることになった。ここにきて若干揉めた。

「部屋はアミンが前に使ってたのが残してあるけど、そこでいい？」

「うん、いいよ」

「カイくんも好きな部屋使っていいからね」

「ああ、ありが」

「カイもおんなじ部屋でいいよ」

ある程度は予想してたけど、エルメスのその言葉に二人はナヌツと表情を変える。こういうやり取りは久しぶりだ。

俺もエルメスと同室で過ごすには随分慣れたけど、たまには一人で過ごしたい。もう本当我儘言わないから、短期間だけでもいいから一人にさせてほしい。

「ちょっとアミン、そりやおかしいよ」

「どうして？ 今までおんなじ部屋だったんだから問題ないよ」

「えー！？ 同じ部屋だったの！？」

「そーだよ。コイツが我儘言うから。それにあっちの屋敷は部屋が満室で空いてねえし」

「でもウチは部屋いっぱい空いてるから、分けた方がよくないか？」

「俺的にもそうしたいのは山々だけど」

「おんなじ部屋じゃなきゃヤダ！」
「コレだよ」

溜息を吐く俺に珍しく二人から憐憫の眼差しを受ける。その調子でもっと俺を憐れんで同情した上に畏怖してくれたら万々歳だ。

「アミン、さすがにそれじゃカイくんが可哀想よ」

「可哀想じゃないよ」

「お前な・・・」

「カイはイヤなの？」

「嫌だけど」

「ええー!？」

「何ビツクリしてんだお前。俺は最初から嫌がってただろーが」

「でも最近は何も言わなかったじゃない」

「そりゃ慣れただけだ」

「じゃぁいいじゃない」

「お前・・・」

「そつ言つ問題か？」

コレもある程度予想していたが、エルメスは俺の意見を汲む気はないらしい。どこまでも我儘な甘えん坊だ。結局どこに行っても俺が折れる羽目になる。

「あーもー、わかったわかった同室でいいから。トリン、どっかの部屋から」

「ベッド持ってこなくていいからね」

「アミン!？ 何言ってるの!？」

「今も一緒に寝てるから問題ないよ」

「・・・カイクン、本当に友達なの？」

「一応な」

「今回はちょっと自信なさげだな」

「バカ言っつな。自信満々だ」

「カイは友達だよ。ただ私に絶対服従なだけだよ」

「それ友達じゃなくて主従関係だよな」

「いつの間に立場逆転したの？ アミンに弱みでも握られてんの？」

「そんなわけないじゃない！ カイが自分むぐっ」

「黙れ。とにかく、もう面倒くせえからコイツの言う通りでいい」

「・・・そう。わかった」

俺が折れて、エルメスの口を塞いだまま引き摺って部屋に荷物を置きに行った。部屋に着いたらエルメスが大暴れするもんだから離してやった。

「ぶは。ていうか、荷物つてさつき買った本しかないんだ」

「トリン、ツァン、わりいけど今日はお前らの服貸せ」

「いーけど、俺のじゃカイには小さくない？」

「今日はしょうがねーからな」

「ねえ、一瞬だけインドに戻ってみる？」

「はあ？ それでジユノ様がいたらどうすんだよ。捕まったら終わりじゃねえか」

「私が捕まったら終わりだけど、カイだけなら私は逃げる」

「ざけんな！ 死ぬときは一緒だ！ お前も道連れ！」

「道連れがなければいいセリフだったのに」

「ていうかアミンなにげにヒドイよね」

ますます増幅する憐憫の眼差し。おそらくこの二人の目に俺はエルメスにいい様にこき使われる気の毒なイケメンに映っていることだろう。つーか俺本当気の毒だ。やっぱりあの誓いは早まった気がする。

その後も風呂の時以外はエルメスは俺に引っ付いて来るし、俺を引き回す。さすがに半年以上その状態だったから俺は慣れてるけど、二人の目には異様に映ったようだ。

エルメスが風呂に入ってる間自由時間をゲットした俺にツアンが話しかけてきた。

「カイも大変だね」

「マジで」

「アミン、前はあそこまでなかったと思うけど、やっぱりあの事件の影響かな」

「多分な。家族がみんないなくなっちゃまって孤独が怖いんだろう。」

この上更に悪魔に命狙われてんだから、不幸極まりねーよ」

「それはカイだって一緒じゃん？ アミンに構ってる余裕あんの？」

「ねえけど。でも、アイツを何とかしてやることの方が先決だ」

「アミンに何かあんの？」

「俺の憶測だけど、アイツは多分PTSDだ。あの事件が相当トラウマになってる。今は悪魔から逃げ回ってるけど、これはこれで良かったかとも思ってる」

「なんで？」

「状況から切り離すことも重要だと思っただけ。インドにはクリシュナさんとミラーカさんの墓もあるし、あの事件を想起させるものが多い。インドから離れて少しでも思い出す機会が減れば、アイツも少しは落ち着けるかなーと」

「ああ、それはそうかもね。カイは思った以上にアミン思いだな」

「まーな。伊達に世界一大事にしてねえよ」

「二番じゃなかったんだ」

「エルメスには言うなよ。アイツ調子乗るから」

「アハハ、なるほどね。わかった」

PTSDの治療法はいくつかある。投薬治療、同じ悩みを抱えた人間が集まって互いに慰め合う集団療法、そして家族療法。

治療には近親者の理解が不可欠だ。一人で悩ませるとより重症化するって書いてあったし、トラウマの原因を連想させるものを極端に避けるようになる、一人で行方をくramしたりすることもあ
るらしい。

本来ならインドであるの二人の墓参りもちゃんとさせてやって、の方があの二人にとってもいいんだろうが、今は我慢してもらうしかない。

こんな理由で逃げ回るのは本意以外の何物でもねえけど、旅行にでも連れてってやるうかと思ってたし、良かったと言えばよかったのかもしれない。

つーか逆に状況が状況だけに、これ以上ネガティブになりたくない。可能な限りポジティブに考えてねえと、マジでうつ病になるぞ俺は。少なくともエルメスの事考えてる間は余計なことを考えずに済むから、ある意味俺にとってもいい薬だ。

煙草に火をつけながら考え事をしている隣で、ツァンはクスリと笑う。

「実はね、俺勝手にカイに親近感持つてんだけど」

「何で？」

「俺と同じだから、かな」

「同じって？」

「大事な人との未来の為に、組織と過去を捨てたところ」

「お前も？」

「そう。俺元々デイヴィスファミリーの人間でさ、組織に拾われて育てられた。ファミリーの為にトリンとアミンに近づいて、トリンを売ってアミンを殺すつもりだった。だけど、いつの間にか俺は本気でトリンを愛してて、それに気づいたアミンが言ったんだよ。組織に恩があるのはわかるけど、過去は組織に置いてきて、未来を全部トリンにあげてくれて。それで組織を抜ける決意をした。結果的にはトリンがボスの娘だったお陰で丸く収まったけどね」

「そーか、お前も色々あったんだな」

「その時はやっぱすっごく悩んだけど、どうしてもトリンを幸せにしたかったし、トリンと幸せになりたかったから、今は後悔してない」

「そうか」

「多分カイもその内そう思える日が来るよ」

「だといいいけどな」

「カイは悩んでるだろうけど、努力してるから絶対大丈夫」

にこつと笑いながらツァンはお腹を撫でるトリンに目を向ける。

ツァンは悩んで選択した未来で、幸福を勝ち取った。他人に押し付けられた人生を退けて、自分で悩んで選択した未来。

苦悩と努力の果てに幸福が待っているという、いい前例だ。最初は嫌だと思っただけど、いい話を聞いてイイもんを見れた。ここに来たのは正解だったかもしねえ。

「お前らの子供が生まれるまでは、ベトナムにしようかな」

「もしかして、子供好きなの？」

「まーな」

「超意外なんだけど」

「うるせーよ。言っとくけど俺もう2人育ててるぞ。一人は失敗したけど」

「それ聞いちゃうと心配なんだけど」

「任せろ」

「ヤダよ」

この二人の幸福がエルメスの幸福になるなら、俺もちょっとくらいは我慢するでしょう。少なくとも魂喰われる前に、少しくらいは幸せにしてやんねえと可哀想だからな。

吸血鬼だって人間より長生きってだけで、いつかは死ぬ。人間と同じように苦しいことも楽しいこともあっていいはずだ。

髪に見放された存在にだって、幸福になる権利はあるはずだから。

LETTER・7 Complaint 「苦情」

拝啓 バカマスター

私、怒ってるんですけど。本気で怒ってるんですけど！ 一体どういう事ですか！

ジュノ様に聞きました。私の魂売ったらいいですね。どういうことですか。一体今度は何を企んでるんですか。

ボニーさんとクライドさんの時以上に驚くことはもうないだろうと思ってたのに、あっさりビツクリ一位に躍り出ましたよ。一体どういう事ですか。

大体みんなの命を保証するために私の魂を捧げるなら、なんで戦争が起きた時にその契約を執行しなかったんですか？ 私一人の命でみんなが助かるなら、私はそれでよかったのに。

アーサーさんがあの時私だけでも守ろうとしてくれたのはわかるけど、じゃあどうして私の魂をジュノ様に売ったんですか？ 本当に、何を考えてるんですか？

今に始まったことじゃないけど、アーサーさんが何を考えてるの

か、全然わかりません。カイまで巻き込まれて、命を狙われる羽目になりましたよ。しかも、カイは面白く魂を奪う手伝いまでさせられる羽目になりましたよ。一体どうしてくれるんですか。

なんですか、面白くって！ こっちは殺されるんだから、何にも面白い事なんかありませんよ！ 本当ム力つく！

それでも一応冷静だったカイは、なんかずっと考えてましたよ。そりゃ、私だつて何の目論見もなくアーサーさんが私の魂を売るとは思えませんよ。アーサーさんの事だから、絶対何か裏があるはずですよ。

でもね、それを差し引いても裏があるうがなかるうが、ム力つくものはム力つくんです！ 私は本当に怒ってるんですからね！

私はアーサーさんが帰ってくるのを待つって決めたのに、アーサーさんが帰ってきたら私は死ななきゃいけません。

アーサーさんが帰ってきて、やっと前みたいに戻れるって喜んで、ボニーさんとクライドさんにも再会して私が幸せを取り戻した瞬間に、ジユノ様は私の魂を奪うのでしょ。

私はこれからアーサーさんが帰ってくるまで、ずっとその事を心配しながら生きなきゃいけないんです。

アーサーさんが帰ってきて私が死んだら、それまでずっと私を支

えてくれたみんながどれほど悲しむか。みんなの思いと努力が水の泡になってしまふのかと思うと、悲しくて仕方ありません。

だから私はもう、あなたを待ちません。待つのをやめます。アーサーさんが帰ってくるのを待つって事は、自分が死ぬのを待つって事だから。みんなの悲しみを迎えることになるから、もうやめます。

ていうか、もう逃亡しちゃいましたもんね！ もうアーサーさんなんか知らない！ 私にはカイがいるからもういいです！

よくよく思い出してみたら、ジユノ様の配下の悪魔に殺されそうになった時も、助けてくれたのはアーサーさんじゃなくてカイでしたから！

その間アーサーさんは助けるどころか、私の魂をジユノ様に売ってたんですもんね！ 最低！

なんか前はクリシュナと二人でカイが頼りにならないのどの言ってましたけど、アーサーさんに比べたらカイの方がよっぽど頼りになりますよ！ バカ！

アーサーさんが帰ってきたら私の所在なんてすぐにバレちゃうでしょうけど、捕まりっこありませんからね！ なんとって私は瞬間移動の術を習得しましたから！ ざまーみる！ 一生逃げ回ってやりますよ！

もう、事ここに至ってくると、アーサーさんが私を好きだったの

も怪しいもんですよ。アーサーさんならみんなを騙せそうですね。

本当は私の事なんかどうでもよくて、私の魂を代価にして何かしようとしてるんですよ。あの時どうしようもなかったことって言ったら、やっぱりミラーカさんですよ。術者に魂を捧げちゃったから、ミラーカさんはどうしても救うことが出来ませんでしたもんね。

私の魂を代価にして、ミラーカさんを生き返らせる気ですか。そうですね。

まあ、ミラーカさんならいいような気もするけど・・・気が向いたら協力してやってもいいです。でも、今は絶対イヤ！ ていうか、それなら自分の魂売りなさいよ！ バカじゃないの！ 自分だけ幸せになるうとして！ ムカつく！

ていうか、すっかり忘れてたけど二度ならず三度までもキスしましたね！ 腹立つ！ 別に必要なかったでしょ！ 普通に飲めって言われたら自分で血ぐらい飲みますよ！ バカじゃないの！

もう本当なんなんですか。本当ムカつく。今から一時間歯磨きしてきます！

もういいですよ。アーサーさんが自分だけいい思いしようとする

なら、いいです。私だって自分の好きにします。自分の好きに生きて幸せ掴んでやりますよ！

別に私アーサーさんが居なきゃダメってわけじゃないし！アーサーさんが居ないことになんてもう慣れましたもん！

私にはもうカイがいるから、アーサーさんなんていりませーん！
バーカ！ バカマスター！

ま、アーサーさんがジユノ様との契約を取り消して、謝ってくれるなら許してやるうかなって考えなくもありません。けど、考えた結果やっぱり許せないってなるかもしれませんけどね！

でもそれって自業自得ですからね！ バカ！ どうせなら私の魂使って、クリシュナか北都を蘇生させてやりますよ。いつそのことジユリオさんを蘇生させてやりますよ！

まあ、できるかどうかは知りませんが。絶対ただでは死にませんから！ 目にモノ見せてやる！

敬具

俺とエルメスの旅行記

逃亡生活を始めて半月経った。追手の追撃は今のところない。平和そのもの。変わったところと言えば、エルメスが異常に長時間歯磨きをするようになったことくらいだ。

なんなんだろうな、あれは。歯磨き依存症？ 新しい形の精神病か？

「お前もう30分歯磨きしてっけど、なんか意味あんのか」

「ほーほふ！」

「なんて!？」

歯磨き中のエルメスに話しかけたせいか、何を言ってるのかわからん。口をすすいでタオルで拭いたエルメスは、何故か怒ったような顔をしている。

「消毒よ！」

「消毒？ ゴキブリでも食ったのか」

「そんなわけではないでしょ！ アーサーさん！」

「は？ アーサーの消毒？ 意味わかんねえ」

「ん？　もしかしてカイはあの時見てなかった？」

「なにを？」

「・・・なんでもない」

「意味わかんねえ。なんだよ？」

「なんでもなーい！」

って言われても気になるんだけど。アーサーの消毒ってなんだよ。アーサー喰って消毒？　いや、そもそも喰ってねえだろ。

あの時？　あの時見てたって、戦争のときか？　歯磨き？　消毒？　・・・ああ、思い出した。

「なんだお前、舌まで入れられたのか」

「やつば見てたんじゃん！　ていうかそこまではなかった・・・いや、ん？　どうだったかな？」

「そんな連日長時間歯磨きするほど、ロン中搔き回されたんか」

「ヒイ！　嫌なこと言わないでよ！　そうじゃないけどムカつくの！　これは復讐なの！」

プツ。嫌なことだつてよ。残念だったな、アーサー。あーあ、アーサーがエルメスの魂売ったりするからだぜ。

エルメスがアーサーに惚れる確率は、今回の件で相当低くなったな。ざまあみる。それにしても、ちっちええ復讐だな。

エルメスの話を聞きながら笑ってたら、別の復讐を思いついた。

「エルメス、もっと効果的な復讐を思いついたぞ」

「なに!?!」

効果的な復讐という言葉にエルメスはピヨンと飛びついてきた。そのまま体を反転させてエルメスを壁に押し付けて、顔を近づけた。

「俺が消毒してやろうか?」

はつきり言って、これはただの趣味だ。人妻だったくせに、こういう話題になるといつもエルメスは過剰に反応する。いつも通りエルメスを虐めて、怒ったエルメスがキャンキャン言うのが楽しみだ。

「うん! 是非!」

「なんでだよ!」

「ぬゃ!」

相変わらずエルメスは俺の想像の斜め上を行きやがる。思わずツッコみと同時に頭突きした。

つーか、条件反射で頭突きしたもんだから、手加減できなかった。ケロリとするエルメスとは対照的に、想定外の痛さに文字通り頭を抱える俺。

「痛ってえー・・・なんで俺の方が痛てえんだよ」

「さあ?」

「つーかお前アホか。何言ってるんだお前」

「むしろそれはこっちのセリフじゃない?」

「そーだけど、何だよ是非って。お前俺に惚れてんのか」

「違うよ！ ちょっと怒りで我を忘れてただけ！」

「ハイハイ。ああ、俺って罪な男だな。アーサー許せ。まあ、俺に惚れない女の方がどうかしてるけどな」

「何その自信！？ バツカじゃないの！」

「お前がな」

結局エルメスはキャンキャン言いだして、俺の望んだ展開に。さすがはエルメス、面白れえ。よし、もうちょっと虐めてやろう。

「お前の気持ちは嬉しいけど、ゴメン」

「何謝ってんの！？ 気持ちなんか無いし！」

俺の謝罪にキーキー文句を垂れるエルメス。そんなエルメスに罪な男・俺は、憤慨するエルメスの両肩をギュッと掴んで、真っ直ぐにエルメスの目を見つめて、笑いをこらえつつ、こう言ってやる。

「でもな、お前の事は本当に大事に思ってる。世界で一番お前が大事なのは変わらない。お前は優しいし可愛いし、その内絶対好きになるから。だから、それまで待っててくれ」

「え？・・・本当？」

エルメスは驚いた顔をしてキョトン顔をしている。そしてその表情のまま左上にヒョイと視線を向けて考え始めて、小さく笑った。恐らくエルメスの心中はこうだ。

「待ってって言われても別に好きじゃないけど。でも、この際アーサーさんなんかどうでもいいけど、カイのことはちゃんと考えた方が

いいのかも。それにしても、カイが私のことをそんな風に思ってくれたなんて・・・そんな風に思ってくれるのは嬉しいな」

絶・対・間違いない。エルメスのそのニヤケた面があまりにもおかしくて、とうとう吹き出した。

「ブツ！ アハハハ！ 何喜んでんだ！ んなワケねーだろ！ バカ！」

「ええ！？ ひ、ヒドイ！ 最低！」

一気に怒り出したエルメスは俺の手を振り払って、更にキャンキヤン吠えだす。そんなエルメスに俺、爆笑。

あー、マジ最高だコイツ。んなこと万に一つもねえっての。確率で言えば宝くじの方が高いくらいだったの。はー、マジウケる。笑いすぎて涙でできた。

「もー！ カイのバカ！ ヒドイ！ 最低！」

「アハハハハ！」

「ちよつと、いつまで笑ってんのよ！」

「はー、マジ面白れえ。マジで最高だな、お前」

「カイは最低だよ！ もおおお！ バカ！」

「！！ 痛ってえええ！」

とうとうキレたらしいエルメスは俺の大腿部に猛烈な蹴りを入れて、その勢いで転倒する俺に一瞥をくれると、その場から走って出て行った。

「痛てええええ！ クソ！ マジ痛てえんだけど！」

ひとしきりその場で悶絶して何とか体を起こした。ブツブツ文句を言いながら痛みをこらえて立ち上がろうとすると、蹴られた右足に妙な違和感。

ゴキン。

「マジかよ！ 骨折してるし！ あんの野郎・・・！」

自分のしたことは棚に上げて、俺は心底リベンジを誓った。

治った足で速攻リビングに攻め込むと、リビングではトリンとエルメスが二人で話していた。さすがにこの場だとまずいと思って、二人の背後に仁王立ち。

「オイ、エルメス。ちょっとツラ貸せや」

「なによ、やる気？」

「当たり前だろーが！ こっちは骨折してんだぞ！」

「何言ってるの。自業自得でしょ？ 別に相手してあげてもいいけど、カイじゃ私の足元にも及ばないよ」

「上等だコルア！ 表出るコルア！」

「フン、威勢だけじゃ私には勝てないよ」
「え、ちよ、ちよつと、二人とも・・・」

フンと鼻を鳴らして、自信満々に立ち上がるエルメスを制止するようにトリンが声をかけると、エルメスはトリンにっこりと微笑んだ。

「トリン、心配しないで。カイ程度の相手、すぐ終わるから」

エルメスのその言葉にブチ切れた。この俺様に向かって「カイ程度」だと？ ナメやがって！

外に出るのも待たずに、俺に視線を向けたエルメスに殴り掛かると、エルメスは笑ったまま俺の拳をパシッと受け止めた。

「ちゃんと本気出してる？ この程度じゃ勝てないよ」

「テメエごときに本気出すかよ！」

「手加減して負けたらみつともないよ」

「それはテメエだろ！」

「教えてあげてるんじゃない」

そう言ってニヤリと笑うエルメスになんだか嫌な予感がして、腕を引っ込めようとしたけど、エルメスに握られた手はびくともしない。一瞬焦った後、嫌な予感は的中。

エルメスに握られた手が、その部分からパキパキと音を立てながら氷結していく。強烈な冷気から激痛が響く。

あまりの痛みに無理やり腕を振り払おうとした瞬間にエルメスが

手を離した。

「もう、無理に暴れると手が壊れちゃうよ?」

「痛つてえ・・・テメエ能力使いやがつて、卑怯だぞ!」

「戦いにおいては卑怯も正攻法もないんでしょ? 勝ちさえすれば手段は常に正当化されるって言ったのはカイじゃない」

「テメエ・・・」

そう言えば前にエルメスとストリップ剣劇で大喧嘩した時に、そんな事を言った気がする。まさか覚えてやがったとは、チクシヨウ。

「どーせならまた脱いでくれると、俺も燃えるんだけどな」

「そう? じゃあ燃やしてあげる」

そう言つてエルメスがパチンと指を鳴らすと、掌にボウつと炎が燃え上がる。

ヤベ、どうしよう。勝てる気がしねえ。よく考えたら、エルメスに触れた時点で爆破されてもおかしくねえんだった。

正直内心かなり焦つて、作戦立てるべきだったと後悔していると、
天の助け。

「アミン、屋敷を火事にする気?」

「あつ、そっか、ゴメン」

ソファの背もたれに顔を乗っけて呆れたように溜息を吐くトリン。トリンのその言葉に、エルメスは慌てて炎を引っ込めた。そのタイミングでエルメスに中段蹴り。吹っ飛ばされたエルメスは反対側のソファにドサツと倒れこんだ。

「ちょ！ 今私トリンと話してたでしょ!？」

「だから？ 戦闘中によそ見してんじゃねえよ」

「いや、だから家の中でケンカはやめてくんない・・・」

力なく制止しようとするトリンにイラッと来て視線を向けると、なんだか顔が悪い。不審にトリンを見る俺にエルメスも気づいたのか、エルメスが起き上がってきた瞬間トリンが顔を歪めた。

「うっ・・・痛・・・」

「トリン！ どうしたの!？」

「お腹、痛い・・・」

「ええ!？ もしかして陣痛!？」

「そうかも・・・」

トリンの様子に一瞬でパニックに陥る俺とエルメス。トリンの出産予定日はまだ半月先のはずだったから、トリン本人も予期していなかったようだ。

「ど、どうしよう、どうしよう」

「とりあえずお前はトリンに着いてろ。俺は車回すから、オイそこ

のアンタ、ツアンとトリンの両親呼んで来い」
「は、はい！」

メイドに呼びに行かせて、俺も車を取りに行こうとエントランスへ向かった瞬間、エルメスが悲鳴を上げた。

「どうした!?!」

「トリン! 破水!」

「破水!?! つて、破水したらどうなるんだ?」

「えっ!?! わ、忘れたけど、なんかヤバかった気がする!」

エルメスも突然の事に相当混乱しているようだ。その時トリンの両親とツアンが上階から慌てた様子で降りてきた。

「おばさん! トリン破水したんです! どうなるの!?!」

「本当!?! それは、もう生まれちゃうって事だよ!」

「マジで!?!」

「ヤバイ!」

俺ら全員大慌て。その間もトリンは苦しそうで、駆け寄ったツアンが手を握って一生懸命励ます。その隣でエルメスは何故か頷いた。

「よし! 私がトリンを病院に連れてく!」

「は!?! お前大丈夫なのか? トリンは妊婦だぞ? 影響ないのか?」

「でも一刻を争うんだよ。人間だって構成物質は基本的には私達と

変わらないはずだから、行けるはず。ツアンも一緒に行こう」

「え、どうということ？」

「カイは後からトリンの両親と一緒に車で来て」

「・・・わかった」

確かにエルメスの言う通り、チンタラしてたらトリンも子供も危険だ。トリンを抱き上げたエルメスは、戸惑うツアンに腕に捕まるように言う。

「え？ どうすんの？」

「大丈夫、すぐに病院に着くから捕まって」

「わ、わかった」

そう返事をしてツアンがトリンの腕を掴んだ瞬間、3人はその場から姿を消した。それを見届けて驚愕して呆然とするトリンの両親を連れて、俺も病院へと車を走らせた。

病院に到着して処置室の前に行くと、エルメスが部屋の前のソファに座っていた。

「エルメス！ トリンは！？」

「あ、今処置してもらってる。ツアンも一緒にいるよ。たまたま先生が手が空いてたみたいで、本当に良かった」

「そっか。じゃあ後は祈るのみだな」

そう言って俺もエルメスの隣に腰かけるも、トリンの両親はその場をウロウロ。娘と孫の緊急事態に気が気じゃないらしい。トリン

の両親の様子を見て、俺とエルメスはなぜか和んでしまった。

「マイケルさん、おばさん、とりあえず座りましょ。ツァンがついてるから大丈夫ですよ」

「そうそう。それに俺らの祈りは神様聞いてくんねえから、二人も祈ってくんなきゃ足りねえよ」

「あ、確かにね。むしろ私達が祈ったら、トリンまでとばっちり受けちゃうかも」

そう言っただけで力なく笑うエルメスを見て二人も落ち着いたのか、大人しくソファに腰かけた。その時、処置室から悲鳴が響き渡る。

「うー！ 痛い痛い痛い！」

「トリン！ 頑張れ！」

いよいよ本格的になって来たらしいトリンの悲鳴とツァンが励ます声。聞いてくれないとわかっていても、俺もエルメスも必死に祈らざるを得なかった。

それから待つこと5時間、処置室から出てきた医者全員で立ち上がって詰め寄った。

「先生！ トリンは、赤ちゃんは!？」

掴み掛るマイケルさんに、先生は病室に視線を移す。開けられた

ドアからは微かに赤ん坊の泣き声が聞こえた。

「ちゃんと検査しなければわかりませんが、破水してましたし逆子でしたけど、赤ちゃんは無事に生まれましたよ。対処が早かったおかげですね」

その言葉に全員でバンザイして大喜び。とうとうトリンの両親は泣き出してしまって、その様子を見た医者も嬉しそうに笑った。

「病室に移ったらはじめましてのご挨拶ができますから。もう少し待っててくださいね」

「はい、先生ありがとうございます！」

少しするとツアンも出てきて、トリンは裏から病室に赤ちゃんを搬送されたようで、少しするとナースが呼びに来た。

案内されて病室に入ると、ベッドで横になるトリンの隣には小さな赤ん坊が静かに寝息を立てていた。その赤ん坊にみんな一瞬でメロメロだ。

「うわあ、すごい、生まれたての赤ちゃんってこんなに小っちゃいんだね」

「うーん、トリンに似てるか？ 男？ 女？」

「女の子だよ。名前はまだ決めてないけど、この子には感謝しなきゃ」

「そうだね、そうだね」

「アミン、違いわよ」

「え？」

てつきり生まれてきたことに感謝、的なことだろうと思ってた俺とエルメスはトリンに視線を移すと、呆れたように笑った。

「この子のお陰で二人の喧嘩が止められたんでしょ」

「あ、そうだった」

「そう言えば、忘れてたな」

「仲直り出来てこっちも安心したわ。この子に感謝してよ？」

「すいません」

「ありがとうございます」

謝罪とお礼を述べる俺とエルメスにまた呆れたように笑いかけたトリンは、赤ん坊に視線を移して微笑む。その表情は母親の慈愛そのもので、見ているこっちも幸せな気分になった。

が、急激に懸念すべき事案が発生する。

「エルメス、俺ちよっともう限界」

「実は私も」

安心したせいか、どっと疲れが押し寄せてくる。ベッドの傍から離れて後ろに行こうとする俺らに、みんなはどうしたの？ と首を傾げた。

「私達、昼間の眠りには勝てないの。ごめんね」

「あ、そう言えばもう朝か」

「そうそう。このままここにいたら俺ら寝ながら灰になるから、悪いけど先に屋敷に戻る」

「そうだな。二人ともありがとう」

「いえいえ、じゃ悪いけどお休み」

「トリン、夜になったらまた来るね」

「うん、二人ともありがとう。お休み」

見送るデイヴィスファミリーにお休みの挨拶をして、手を取った俺らは屋敷の部屋に転移した。

部屋に着いた瞬間に、猛烈な眠気に襲われる。もうフラフラな俺はベッドに倒れこんで、エルメスはクローゼットを慌てて開ける。

「うう、早く着替えなきゃ、このまま寝落ちしちゃう」

「俺もう、無理。寝る」

「ダメだよ、ちゃんと着替えなきゃ」

「うるせー、お前が骨折させたせいで修復にエネルギー使ったんじやねえか。もー無理」

そう言ってそのままベッドに潜り込んだ瞬間に記憶が飛んだから、そのまま寝たつばい。

翌目が覚めると、エルメスは既に起きたようでないかった。丁度着替えが終わった頃に、エルメスが部屋に入って来た。

「カイ、ご飯持ってきたよ。それとお風呂も準備してもらったから入ってね」

「お、気が利くな。ご苦労」

「なんでいちいち偉そうにすんの？」

「偉いから」

「私の方が偉いよ？」

「俺の方が人として偉い」

「人じゃないくせに・・・ていうか前も同じ会話をした気がする」

「そついえばそうだな」

前に同じ会話をした時は、スペインで人殺しの真つ最中だったんだっけ。あの時人殺ししながらこんな話をしてたのに、今は人の誕生を祝いながらこんな話をしているのか。

うつわぁ、平和だなー。これが人並みの幸せと言う物か。ていうか今の方が本来なら普通なんだよな。

エルメスも同じようなことを考えていたのか、毒気を抜かれたような顔をして俺に血を渡しながら、隣に腰かけた。

「トリンも赤ちゃんも無事で、本当に良かったね」

「あー、昨日は超焦ったな」

「本当。でもいい経験が出来て良かった！」

「本当だな」

今まで俺もエルメスも、人の「死」しか見てこなかった。人の「生」を見るのと人の「死」を見るのは全然違う。

俺達は人の血を食らう化け物で、人を殺さなきゃ生きられない。

トリンとツァンがいなければ、きつと一生出会う事がなかったであろう人の「生」と言う物は、本当に素晴らしい。

俺もエルメスも吸血鬼だから、自分の子供を手に入れることは一生叶わない。不老不死でも、強くて、こんなに不幸なことはない。人間が羨ましい。人間は素晴らしい。

人ってすげえんだな。母親は偉大だ。赤ん坊は人類の宝だ。生まれてきただけで、人に幸福を振りまく。

人間じゃない俺らにとってその瞬間に立ち会えた経験は、貴重な財産だ。

俺とエルメスの旅行記

支度をして再び病院に向かった。今度は普通に車で。その事になぜかエルメス上機嫌。

「カイが運転してるの初めて見た！」

「あー、そーいやそーうだな」

「ドライブブー！」

「いや、違うだろ」

まあ吸血鬼に本来車なんて必要ない。ただ、人間として生活するうえで車があった方が色々都合はいい。でも城にいた頃はエルメス達は車を所有してなかったし、今までも所有したことがないんだろう。と、考えていたら。

「あー！　そう言えばインドの空港に車放置しっぱなしだ！　ア
レどうなったんだらう？」

「なんだ、車あったのか」

「うん、クライドさんとボニーさんは運転できたから。インドから出る時に空港に放置してそのままだ」

「もう3年も経ってんなら、さすがに廃棄されたんじゃないのか」

「だよねえ、懐かしいなあ。クライドさんのフォード」

「フォードだったのか」

「うん、ボニーさんとクライドさんは生前からフォード愛好家だったんだって」

「へえ、なんで？」

「速いから。強盗の際に逃げるのに役に立つからって」

「・・・へえ」

エルメスもそうだが、つくづくアーサーのファミリーの人間は変わり者だ。あの二人、生前は強盗犯かよ。どうりでチンピラのはずだ。つーか一般人と、大学教授と強盗犯と貴族と王族が同居してたのか。スゲエ環境だな。

勝手に納得して呆れる俺の横でエルメスは更に興奮してハシヤギだす。

「でもね、基本的に長距離移動の時にしか車使わなかったから、こういう風に日常的に乗るのってなんか新鮮！　楽しいー！」

「ああ、そーですか。そりゃよかつたな」

「うん！　カイも楽しいでしょ？　ドライブ」

「別に。つーかドライブじゃねえって」

「もー、カイつまんなーい」

「うるせえ。つーかもう着くぞ」

「ちえっ、ケチ」

「そこでケチはおかしいだろ」

途端にむくれるエルメスをほっといて病院に到着。駐車場に車を停めて車から降りると、何故かエルメスから熱い視線。

「なに、気持ちワリイんだけど」

「ヒド！ 人が感動してたのに！」

「は？ なんで？」

「車をバツクで停めてる時の男の人はカッコよく見えるって、本当だったんだと思って」

「まあ俺は何してもカッコいいけど。お前俺に惚れるなよ、迷惑だから」

「惚れないわよ！ ていうか迷惑とかヒドくない！？」

「ヒドくねえ。マジ迷惑」

「やっぱヒドイ・・・ていうかムカつく！ 何様？」

「俺様」

「バカじゃないの？」

「お前がな」

「ムカつく！ もう二度とカイの事褒めてやんないから！」

「いらねえ。お前からの褒め言葉に有難味なんてねえよ」

「むきー！」

と、言いつつちよつと残念な俺。しまった、言いすぎた。まあでも、エルメスの事だからすぐに忘れるだろう。バカだから。

暴れるエルメスを引きずってトリンの病室に行くと、トリンの両親がベッド脇に座っていて、その反対側でベッドに持たれる様にツアンが眠っていた。

「ツアンさっきまで起きてたんだけど、さすがに一晩中起きてたから眠くなつたみたい」

「アハハ、そうなんだ。マイケルさんとおばさんも私達が来たから大丈夫ですよ。一旦屋敷に戻って休んでください。お風呂もお食事も用意してもらってるから」

「あら、エルメスは気が利くわね。ありがとう。じゃあ帰りましょ
うか」

「そうさせてもらおう。ツァン、起きなさい。帰るよ」

「んあ、はい……」

トリンの両親に揺り起こされたツァンは眠そうに顔を上げる。そんなに運転して帰れんのか。と、考えていたら一つ気付いた。

「そーいや、おばさん今エルメスって呼んだか？ 今までアミンって呼んでたのに？」

俺の質問に目が覚めたらしいツァンがにこつと笑う。

「一緒だと紛らわしいからな」

「一緒？」

首を傾げる俺とエルメスに笑ったトリンは、赤ん坊を抱き上げてエルメスに抱かせた。

「この子の名前決めたの。アミンって名前にする」

「ええ！？ 本当に！？ 嬉しいー！」

「ふっ・・ふう、ふぎゃあ、んぎゃあ」

「あわわ、泣いちゃった」

赤ん坊の傍で大声を上げたエルメスのせいで赤ん坊が泣きだして、エルメス大慌て。エルメスは必死にあやすも、中々泣き止まないの
で、俺が赤ん坊を取り上げた。

「お前抱き方が違うんだよ。よーしよし、怖いオバチャンはもういないからなー」

「誰がオバチャンよ」

そう言っ
て抱いた赤ん坊の背中をたたきながらあやしていると、すぐに赤ん坊は泣きやんだ。それを見たエルメスをはじめ全員驚愕。

「カイすごい！ 伊達に二児のパパじゃないねえ」

「当たり前だろ。お前とはキャリアが違うんだよ。つーかもう俺の事褒めないんじゃないのか」

「あ、そうだった」

ほら、やっぱり忘れてた。やっぱりバカ。俺一安心。なぜか悔しそうな顔をしてるエルメスの横で、ツアンもトリンも感心した視線を向ける。

「すげー、カイ本当にパパやってたんだな」

「ていうか、カイくんがパパって似合わなさすぎるよね」

「確かにね。カイはどう見ても子供好きには見えないもん」

「うるせー。余計なお世話だ」

尊敬されてもいいはずなのに、なぜか笑われる俺。俺が子供好きなのそんなにおかしいか？ つーかむしろ俺は慈愛の天使だぞ。お

かしいはずはない。コイツらがおかしい。

ひとしきり笑った後、ツアンとトリンの両親は「じゃあお願いね」と病室を後にして、俺らも赤ん坊をベッドに戻して、そのわきに座った。

「ねえトリン、どうして私の名前にしてくれたの？」

子供ベッドの赤ん坊を覗き込みながらエルメスがトリンに問いかけると、トリンは嬉しそうに笑う。

「エルメスみたい女の子になってほしいと思ったんだ」

「え？ 私みたいに？」

「娘にバカになってほしかったのか」

「違うわよ！ エルメスは、私達にとって運命の友人だから」

「運命の友人？」

「そう。エルメスと出会わなかったら、ツアンにも出会ってなかった。ツアンもずっとファミリーの人間だっただろうし、相変わらずお父さんはマフィアでお母さんと結ばれることもなかったんだと思う。エルメスと出会って、ツアンと出会って、私達もお父さんたちも結婚して、赤ちゃんまで生まれて。エルメスがいなかったら、今私きつとこんなに幸せになれなかった。私達はことごとくエルメスに運命を変えられたの。運命が変わって、今最高に幸せ。だから、この子にもエルメスみたいに、誰かに幸福を振りまく運命の女の子になってもらえたらなって思ったんだ」

トリンのその言葉を聞いて、エルメスは涙を零した。きつと、エ

ルメスにとってその言葉は何よりも嬉しかったに違いない。あの戦争で家族が死んだことで自分を責めていたエルメスなら、なおのこと。

「トリン、ありがとう。すごく嬉しい。トリン達が今幸せだっと思ってくれて、私も凄く嬉しいし、幸せだよ。本当にありがとう」

「お礼を言うのはこっちの方だよ。ありがとう、エルメス」

泣き出したエルメスの頭を撫でてトリンは嬉しそうに、ちょっと困ったように笑う。

幸福を振りまく運命の女の子。エルメスには、人を変える力がある。エルメスの傍にいたらみんな心を動かされて、幸せを望んでしまう。そしてエルメスの望んだとおりに、幸せになるんだ。

エルメスを、取り残して。

それでもエルメスは、自分の周りが幸せでいることが幸せだと思ってる。それは俺も同じかもしれない。エルメスの幸せが、俺の幸せだと思う。

もしエルメスがもつともつと昔にジュリオ様と出会っていたら、運命は変わっていたのかもしれない。

ジュリオ様の心を支配した憎悪を溶かして、人生をやり直す勇気を与えてくれたのかもしれない。そんなこと今考えたって不毛なんだけど、エルメスにならそれが出来たのかもしれないと思うと、いつそのことジュノ様にそれをお願いしたくなる。

あ、でもダメだな。そうなると、俺達とエルメスは出会わないことになる。それは嫌だな。うん、無理。

きつと、今はこうなる運命だったんだろう。変わるのは、これからか。

帰りの車の中、エルメスは未だに思い出し泣きだ。最近気付いたけど、コイツ感動屋だな。

既に若干呆れてきた俺の様子に気づくこともなく、エルメスは口を開く。

「私、すつごく嬉しかった」

「ああ、よかったな」

「うん、あのね、私ね、私は災厄だと思ってたの」

その言葉に思わずエルメスに視線を移すと、「危ないから前見て」と笑われた。前方に視線を戻しながら「なんで？」と尋ねると、エルメスは小さく笑う。

「まだそんな事言ってるのかって思うかもしれないけど、やっぱりあの戦争でのことで後悔はあるんだ。私をもっと早く覚醒してればみんなを助けられたのに、助けられなかった。あの時私は最後まで何もできなかった。生き延びてなお、カイやみんなに心配かけて、迷惑かけて、私はみんなを不幸にしてる。これを災厄と言わずになんて言うのかわかって」

「そんなこと思ってる奴一人もいねえよ」

「うん、わかつてる、わかつてるんだけどね。でも、私のせいで誰かが苦しんでるのは間違いないから」

「たとえ苦しんでたとしても、それはお前のせいじゃない。単なる足掻きだ」

「うん、その事にさっきやっと気づいたよ。トリンは私が運命を変えたって言ったけど、違うんだ。トリンもツアンも自分たちで悩んで考えて、幸せになるうって足掻いて勝ち取ったんだよ。私が変わたわけじゃない。私は友達に幸せでいて欲しいって思っただけ。でも、私がお前のきっかけになれたことは、凄く嬉しい」

「お前がアイツらの幸せを願って説得したから、アイツらも足掻こうと思えたんだよ。お前は災厄なんかじゃない。少なくともアイツらにとつちゃ、お前は幸福の象徴で、幸福を振りまく運命の女……うおっ！」

いきなりエルメスがタツクルをかましてきたせいで、ハンドル操作を誤って対向車にぶつかりそうになった。

何とかエルメスを引きはがすと、エルメスも驚いた顔をしていた。

「びつくりしたー……」

「ソレ俺のセリフ！ 危ねえだろ！ 状況考えろ！」

「ゴメン。嬉しくて、つい」

「つい、じゃねーよ。全くお前は……」

「えへへ、ゴメンね？」

「笑い事じゃねーし」

さっき泣いたカラスがもう笑いやがる。エルメスの喜怒哀楽はパラパラ漫画並に高速で切り替わる。気紛れにも程がある。まあ、慣

れたからいいけど。

事故未遂ですっかりテンションが上がったらしいエルメスにはこつと笑った。

「ねえ、カイは今幸せ？ それともやっぱり不幸？」

「ん？ フツー」

「普通って何？」

「状況的には不幸極まりねーけど、お前虐めんのが楽しすぎる。プラマイゼロでフツー」

「なにそれ・・・ああ！ 私というの楽しいんだ？」

「全然」

「もー、素直じゃないな！ 私は楽しいよ！ カイも楽しいでしょ？」

「いや、疲れる」

「んもおおお！ カイのバカ！」

「ハハハ！ あー、やっぱりお前面白ねえ。ウソウソ楽しいって」

「ウソ！ 今のは意地悪言うのが楽しかったんじゃない！ バカ！ バカはお前な」

本当の所を言うと、俺は全然幸せじゃない。あれから半年以上経ってだいぶ落ち着いてきたけど、あの出来事はどう転んでもいい思い出にはならない。

ジュリオ様の事もそうだし、スレシユのことだってすんなり受け入れられたわけじゃねえし、アーサーの事もジュノ様の事も自分のことも、俺の苦悩の種は順番待ちをしてる位だ。

でも、エルメスという時は、エルメスと笑い合ってる時だけは忘れられる。それに、エルメスが楽しいと言ってくれるなら、俺はそ

れでいい。そう言う日が続くことがエルメスの幸せならば、俺はそれでもいい。

そう言う日が続いて、それが当たり前になって以前の様に、「楽しいし、幸せだよ!」と明るく笑顔で言ってくれる日がやってくるなら、俺は幸せだ。

そうなってくれるなら、いくらだって足掻いてやるぞ。

俺とエルメスの旅行記

トリンの出産から約2週間後、ベトナムに来てからちょうど一か月が経過。あの戦争から7か月が経過。

夏真っ盛り。ベトナムは暑い国だと聞いたが、吸血鬼の俺らには大して影響はない。とりあえず、インドもだけど暑い国で昼間に起きてる奴が気の毒だ。

そのせいなのかなんなのか、エルメスは買い物に行きたいと言い出して、今スポーツショップ。

「お前バカだろ。何が悲しくて真夜中に水遊びしなきゃいけないだよ」

「絶対楽しいよ！ 夏は海と花火って決まってるんだよ！」

「知らねーよ。面倒くせえ」

「行く前から遠足は始まつてるんだよ！ ほら、カイも早く水着選んで！」

遠足なのか？ つーかエルメスのハシヤギっぷりが超うぜえ。第一俺ら海行つても楽しくねえだろ。海に拒絶されてんだから。

まあ、既に花火は買っちゃったし、気分だけでも楽しみたいって事なんだろう。だからってわざわざ水着を買う必要もねえと思うけ

ど。

適当に買い物を済ませて、例によってハイテンションなエルメスと共に海へGO。到着した時には既に午前0時を回ってて、さすがに海には誰もいなくて閑散としてる。

車を停めて浜辺に降りると、エルメスは速攻波打ち際に走り出した。

「うわーい、海ー！ ヒー！」

案の定海に拒絶されて、後ずさりするエルメス。さっきまであんなに浮かれてたのに、泣きそうな顔をして俺に振り向いた。

「カイ、どうしよう。水遊びできない」

「やっぱりな。今日は花火だけで我慢しろ」

「えー、折角水着買ったのに！ 着たかった！」

「じゃあ着れば？」

「うん！ そうする！ そこで待ってて！」

アイツは無意味な行動が大好きだな。そう言ってエルメスは車に戻って行った。どうせなら車から降りた時に花火持って、エルメスが戻ってくる間に全部やっつくんだった。

10分ほど待たされて出てきたエルメスはまんまと水着に着替え、両手に花火を持って嬉しそうに走ってきた。

「えへ、どう？ 可愛いでしょ？」

そう言っつてその場でクルリと回ってみせるエルメス。白のホルタ
ネックのフリルのついたビキニに、下はスカートみたいなやつ。
水着自体は可愛い。

「うーん、32点」

「辛口！ もつとイケるよ！ 70点くらい！」

「微妙に謙虚だな。他の女が着てたら96点だが、お前が着てるこ
とで3分の1になる」

「・・・カイの目には私はどう見えてるの？ 普通の女の人の3分
の1にしか見えてないの？」

「そーだな。でもお前の首から下はまあまあだ」

「ヒドーイ！ もう、バカ！ 眼科行け！」

「お前がな。首、値札ついてんぞ」

「あぁっ！」

慌てて首元に着いた値札を引きちぎるエルメスに俺大爆笑。エル
メスは悔しそうに顔を真っ赤にして、笑い転げる俺を憎々しげに見
つめていたが、少しすると花火をガサゴソと漁り始める。

パチンと指を鳴らして花火をつけると、俺に向けて発射した。

「うお！ お前何すんだ！」

「笑い過ぎなのよ！ ムカつく！」

「むしろそれはお前のせいだろ！ お前が笑かすからじゃねーか！」

「くっ・・・でもムカつくんだもん！」

「責任転嫁すん・・・うわっ！ やめろって！」

「アハハ！ 面白い！」

ムカつくつつて怒ってたはずなのに、いつの間にか嬉しそうに笑って俺に花火を向けるエルメス。この小悪魔め。悪魔の恐ろしさを思い知らせてやる。

俺もすぐに花火を漁って、おあつらえ向きの花火を発見。すぐに火をつけてエルメスに向けると、ひゅううと音を立てて、エルメスに到着した瞬間、パアンと火の花を咲かせた。

「きゃあ！ ケホっ、打ち上げ花火とかズルい！」

「ハハハ、今の花火のお陰で40点まで上がったぞ」

「いらないわよ！」

それからはしばらく花火で迫撃ゴッコだ。良い子のみんなは悪い子になってから真似しろ。ぶっちゃけ、意外と楽しかった。

でも、飛び道具系の花火が尽きてくると、さすがに大人しく花火を楽しむことにした。

「あ、っーか俺の服焦げてるし。買ったばっかなのに」

「カイも水着に着替えればよかったのに。そしたら焦げるの水着だけで済んだのに」

「なんだお前、俺の下半身に恨みでもあんのか」

「何言ってるの！ バカじゃないの！」

エルメスはプリプリ憤慨しながら、消えた花火を捨てて再び漁り始める。すると、あ、と声を上げて嬉しそうに向いた。

「カイ、線香花火入った！ コレやろう！」

「線香花火？ なんだそれ」

「日本の伝統的な花火でね、日本人はみんなこの花火好きなの」
「へえ」

火をつけたエルメスは一つを俺に持たせて、もう一つを自分で持って花火にじつと見入る。線香花火はパチパチと火花を散らせて、徐々に火の玉を形成していく。

「地味だな、オイ」

「地味とか言わないの！ 控えめで、侘び寂びがあって、趣があるでしょ？」

「ワビサビ？」

「人の一生は花火に似てるって聞いたことがあるよ。きっと線香花火みたいに、最初はゆっくりはじけて、どんどん元気にはじけて行ってそれから徐々に衰えて、最後に一際パチンってはせて・・・」

「あ、落ちた」

「こんな風に死んじゃうのが、人なんだね」

そう言ったエルメスの花火も、最後にパチンと爆ぜると火種はフルフルと揺れて、ポトリと地面に落ちた。

「なんつかこの花火、寂しくねえ？」
「それが侘び寂びというものですよ」
「俺にはわかんねえなあ」
「カイにはわかんないかもねえ」

笑いながらエルメスがもう一度線香花火を差し出してきて、再びその花火を見つめる。
「すげえシンプルな花火だけど、なんとなくエルメスの言ってたことが分かった。なるほど、この儂い感じがいいのか。」
線香花火の魅力を理解した俺に、エルメスは声をかけてくる。

「あのね、線香花火の火種が最後まで落ちなかったら、願い事が叶うんだよ」
「なんだそれ。ロマンチストにも程があんぞ」
「昔からそう言うの。落ちなかったことないけど」
「なるほど、だから叶うんだな」
「そうそう。カイも何かお願いしてみたら？」
「急に言われてもな」

そう言いつつ、ひそかに願ってみる。すると、エルメスの火種はポトリと落ちた。それを見てエルメスは残念そうだ。
しかし、俺の火種は一向に落ちない。紅いまま身を震わせた火種は、少しすると大人しくなって黒くなって動かなくなった。

「あ、すごい！ カイなにかお願い事した？ きつと叶うよー！」

「残念ながらしなかった。エルメスは何お願いしたんだよ？」

「世界平和！」

「アホか。壮大過ぎて花火レベルじゃ叶えきれないだろ。もっと手頃なものにしねえからだぞ」

「カイはお手頃なお願いしたの？」

「いや、そんなに手頃では・・・」

「やっぱお願いしたんだ！ なに？ なに？」

「チツ！ 秘密」

「もう、ケチ！ いーなあ、カイのお願い叶うよ、きつと。羨ましい！」

「だどいいけどな」

俺の願い事なんて言わずと知れた「エルメス限定ラブ&ピース」だ。また前みたいにエルメスが愛と平和に包まれた世界に生きられたいと思っただけだ。

神は聞いてちゃくれねえだろうけど、線香花火は俺の願いを聞き届けてくれただろうか。

エルメスがきつと叶うと言うのなら、叶うんだろう。俺の願いが叶う日がやってくることを花火とエルメスが保証するのなら、俺も頑張りがいがあるってもんだ。

そうしたら、死ぬ前に一際デカく火花を散らせて、潔く死んでやる気にもなれる。

悪魔に魂喰われて死ぬ前に、エルメスに大輪の花火を見せてやる。

俺とエルメスの旅行記

アンタ本当に元マフィアのボスなのか。ウソじゃねえのか。

「アミンちゃん、おじいちゃんであゆよー」

かつてベトナムの麻薬取引の総元締めと言われた大俠客、「麻薬を中毒にする男」ドン・デイヴィスはすっかり孫娘中毒だ。その様子にみんな半笑い。

「今の様子を見て誰が元マフィアって思うだろうね」

「マジで。既に疑わしい」

「アハハ、確かにね」

ベトナムの屋敷には、幸せが溢れてる。デイヴィスファミリーは全員が全員幸せそうで、毎日仕事に家族サービスに大忙しだ。正直なところ、メチャクチャ羨ましい。

「ハア、俺もまっとうな人生歩んでたら、今頃子供が成人しててもおかしくねえのによ」

「本当だよねえ。私だって子供の一人くらいいてもおかしくないのに」

「いや、お前はおかしい」

「おかしくないよ！ 失礼ね！」

「うるせーよ。あー、俺も子供欲しかったなあ」

「作ればいいじゃん」

「できねーじゃん」

「私は無理だけど、カイは出来るよ？」

「マジで!？」

エルメスの言葉に希望を膨らませて勢いよく顔を向けたら、エルメスはちよつとビックリした顔をして笑い出す。多分俺の目は超キラキラしてたと思う。

「うん、前にアーサーさんが言ってたよ。吸血鬼の男と、人間の女の間なら子供は出来るんだって。でも・・・」

「マジか！ 俺ちよつとナンパしてくる!」

人生に光明が見えた俺はすぐに立ち上がって嫁探しに向かおうとした。が、エルメスが服の裾を掴んで引き留める。

「ちよつと待って、待ってよ」

「なんだよ！ 俺はナンパで忙しいんだよ!」

「だからちよつと待ってってば」

「なんだよ！ 2時間で戻ってくるから、お前が待つてる！」
「リアルだし色々早すぎだよ！ じゃなくて、まだ話には続きがあるの！ 大事なことから聞いてっつてば！」

エルメスが必死にそう言って引き留めるし、まあ嫁探しはいつでもできるわけだしな、と俺もちょっと落ち着いて座りなおしたら、エルメスは大きく溜息を吐く。

「あのね、確かに子供は出来るんだけど、出産の確率は相当低いんだって。で、もし出産できたとしても、その子供はヴァンパイアハントーの能力と宿命を背負って生まれてくるんだって」

「マジ！？ じゃあ俺自分の子供に殺されんの！？」

「そう言う事だね。で、その子供も死んだら吸血鬼になっちゃうんだって」

「子供まで吸血鬼に・・・それは嫌だあ」

チクシヨウ、神のクソ野郎。テメエ性格悪すぎなんだよ、コノヤロ。さっきまでの俺の希望を返せ。俺の高揚感を返せ。

ソファにバツタリ倒れこんでメソメソする俺に、エルメスは励ますように半笑いで肩をたたく。

「チクシヨウ、神のバカヤロー。エルメスのバカヤロー」

「なんで私？」

「お前が余計なこと言わなきゃよお、こんな天国から地獄に落ちるようなこともなかったんじゃないかねえか、チクシヨウ」

「・・・それは、ゴメン。でも、もしかしたらなんとかなるかもよ」

「なんとかしろ！」

新しい希望にガバツと起き上った俺にエルメスは再び驚いて、再び笑いだす。

「何とかしろ！ 何とかなるなら何としても何とかしろ！」

「ちょ、落ち着いてよ。そう難しい事じゃないよ」

「何！？ なんだよ！」

「ジユノ様をお願いすればいいじゃん」

「その手があつたかー！！ いや、でも待てよ・・・」

ジユノ様をお願いするって事は、それが成就したら俺は死ぬって事だろ。子供が生まれて俺が死んだら全く無意味。普通に人間の子供でも、その成長を見届けられないなら意味ねえ。

てことは、普通の子供を作った上に成長を見届けたいって願えばいいのか。でも、それだとあの大悪魔の事だ。本当にその願いしか叶えないで、子供に超不幸な人生を歩ませそうだ。

じゃあ、普通の子供が幸せに成長するのを見届けたいと願えばいいのか。いや、それだけなら死後吸血鬼化する可能性もある。それにその子供が化け物嫌いとかに育ったら、その子供にとっての幸福が化け物のいない世界となれば、俺は間違いなく子供に殺される。あの悪魔なら、そう言う風に仕向けかねない。

クツソー、どうしたらいいんだ。少なくとも俺に想定し得る都合の悪い事態は、ジユノ様も想定することに間違いないし、それどころか俺も気づかない隙を見つけて実行する。

あの大悪魔を出し抜いて、俺の希望を全部叶えるのは相当難しい

な。

うーんと頭を悩ませていると、クスクス笑いながらエルメスが口を開く。

「ていうかそもそもさ、カイはお父さんにはなれるかもしれないけど、旦那さんに向いてないよね。カイのお嫁さんになる人大変そう」「嫁？ んなもんどうでもいい。俺が欲しいのは厳密には嫁じゃない、見た目だけ完璧で健康な“子供生産機”」

「最低・・・普通に考えて、女の人が自分の子供手放すはずないんだから、ちゃんと夫婦しなきゃダメじゃん」

「面倒くせえ。あ、良い事思いついた」「なに？」

「契約の代価に、嫁の魂を捧げる。これで全部解決だ。そーか、この手があったかあ」

「本当に最低だね。カイに見初められる人が現れないことを祈るよ」「むしろ俺の運命の出会いを祈れ」

「祈らない。私その人とどうお付き合いしたらいいかわかんないよ、気の毒すぎて」

「その必要ねえだろ。嫁は悪魔に食われて死ぬんだから」「・・・最低」

この会話だけで俺は何度最低と言われただろうか。そんなに最低か？ そつでもねえだろ。目的の為に手段を選ばないなんて使い古された言葉だ。俺は手段を目的とすり替えるような愚者でもねえしな。

そんな賢者な俺にエルメスははじめ話を聞いてた連中は白い視線を向ける。何だっつてんだコノヤロー。

相変わらず白い視線をぶつけるエルメスは、視線を外すと大きく溜息を吐く。

「でもさあ、カイはまだいいじゃん。私はクリシュナもないし、子供だつて産めないし、希望があるだけカイの方がマシだよ」

「まあ、確かに。つーかそれこそジユノ様に頼めばいいだろ」

「死者の蘇生なんてできるのかなあ。ていうか私が子供産めるようになったら、呪いが解けちゃうって事でしょ？ それって私が人間になるって事じゃん」

「そう言えば、お前は人間に戻りたいとは思わないのか？」

「最初は思ってたけど、今は全然。だつてみんなもカイも吸血鬼なんだよ。私だけ先に死んじゃうなんて嫌だもん。ずっと一緒にいたい」

「ま、そーだな」

「カイは、今は？」

「俺も今は別に戻りたいとは思わねえな。理由はお前と同じ」

「えへへ、そつかあ。嬉しい！」

「うざ！ 離れる」

「いーじゃん、ケチ」

「ケチじゃねえ」

さっきまで軽蔑の視線を投げてたくせに、今度は尻尾振って抱き着いてくる。コイツの切り替えの早さは音速だ。そして鬱陶しい。この鬱陶しさは恐らくアーサーの嫉の賜物だな。クリシュナさんが調教がどうのこつと言ってた成果だ。非常に迷惑。

すっかりご機嫌を回復したエルメスはエア尻尾をプリプリ振ってニコニコしてやがるが、俺は今の会話でちよつとだけ気分が沈んだ。

エルメスには人並みの幸せを掴むことはもう、不可能だ。吸血鬼になったせいで子供は出来ない。その事はもう諦めたのかもしれないけど、クリシュナさんももういない。エルメスが願いを叶える事は出来ないのに、俺だけ叶えることはできない。

そう考えていたら、エルメスがフイと俺に向いて、じっと見ていると思ったら口を開いた。

「カイ、私に遠慮してるなら、別にいいよ？　カイはカイの幸せ追いかければいいんだから。カイが幸せそうにしてたら私も幸せだよ」

表情で、悟られたのか。コイツはたまに変なところで聡い。でも、エルメスのその言葉で、遠慮するのはやめようと思った。

「遠慮じゃねえよ。俺はエルメスの面倒見なきゃいけないからな。そっちの方が大変で、子育てなんてやってる暇ねえよ」

「そんなことないよ！　私手がかからないよ！」

「いや、超大変。しかもそれが今後何十年も何百年も続くと思うと、既にネグレクトしてえよ」

「えー！　ダメ！」

「じゃあいい子にしてろ。ちゃんと俺の言う事聞け」

「むう、わかった」

「むしろお前が俺の世話しろ。俺には絶対服従な」

「ヤダ！」

「俺の言う事聞かねえなら一生シカトだ」

「えー！ ヒドーイ！ でもイヤ！」

「黙れ小娘。我儘言うな」

「カイがね！」

全く我儘な奴だ。でも自分で言っただけで、確かにコイツの相手してる間は子育てなんてしてる余裕ねえな。コイツの相手でイツパイイツパイだ。なんて手のかかるお嬢ちゃんだ。

しかも一生傍にいるって自分で言っただけであらう。まあそのこと自体はいいけど、その時点で俺の生活と一生はコイツ一色だ。コイツを中心に世界が回ることになる。なんか腹立つ。つーか既に回ってる気がする。

でも、それは俺の望みでもある。ある意味、俺は幸せと言えるのかもな。

未だ憤慨しているエルメスに視線を向けると、視線に気づいたエルメスはちよつと落ち着いて、不思議そうに覗き込む。

「なーに？」

「お前の幸せって、何？」

「え？ 私の？ うーん、なんだろう。とりあえず、平和で、みんな仲良しで、ボニーさんとクライドさんに再会出来たら言うことないかな」

「アーサーは？」

「アーサーさんは、契約取り消して土下座して謝ってくれたら許してあげないこともない」

「ハハ、珍しく強気だな。それちゃんと本人に言えよ」

「え、カイが言つて」
「なんでだよ。自分で言え」
「保護者自称するなら、それはカイの仕事！」
「ハア！？ なんでも責任押し付けてんじゃねーよ！」
「いーじゃん、ケチー」
「ケチじゃねえよ！ この甘えん坊が！」
「えへへ」
「なに喜んでんだ・・・」

褒めた覚えはねえんだけど、何故か喜ばれた。途中で会話の内容がすり替わつて、結局最初の質問がよくわかんなかった。

結局は、やっぱりコイツの幸せはラブ&ピースって事か。本当に化け物とは思えない理想だな。それは、少しずつコイツが元のエルメスに戻りつつあるんだと思つていいんだろうか。
もしそうだとしたら、俺が傍にいることも無駄じゃないと思つていいんだろうか。俺がエルメスの役に立てたと思つていいんだろうか。

なぜか喜んでニコニコするエルメスは笑顔で言った。

「だってカイにはなんか甘えなくなるんだもん。カイが傍にいたらなんでも大丈夫って思っちゃう。頼りにしてるって事だよ！」
「・・・物は言いようだな」
「だってそうなんだもん。カイの事は頼りにしてるし、一緒にいると楽しいし、カイは私にいつも意地悪いうけど、大事にしてくれるってわかってるから、カイが傍にいてくれたら安心なの。私、カイが傍にいてくれて楽しいし、幸せだよ！」

なるほどなるほど、ガルフが言った意味が今頃わかった。確かに俺、エルメスに騙されてる。エルメスのこういう言葉に騙されてる。いい様に操られてる。

でも、それでもいいか、とってしまった俺は、病気だ。病名、エルメス中毒。

俺とエルメスの旅行記

「と言うわけで、お世話になりました！」

「マジ世話になったな。その内また礼しに来るわ」

「もつとゆっくりしていけばいいのに」

「そうだよ、最近はシャンティからも連絡来なくなったのに」

「だからこそだよ。音沙汰ないのが余計怪しいからな」

「それで、今度はどこに行くの？」

「幸せの国に行くの！」

「どこそれ？ 天国？ まさか死ぬ気？」

「んなわけねーだろ」

次の目的地は幸福の王国、ブータン王国。

ヒマラヤのシャングリラ（桃源郷）として知られる仏教王国。20世紀後半まで鎖国に近い政策だったこともあり、手付かずの美しい自然と、自給自足を基盤にした伝統的な生活文化が残る国だ。

中国とインドの2大国に挟まれているが、インド文化の影響は少なく、チベット文化圏に属し、広大な仏教圏、チベット文化圏の文化と伝統を伝える残されたサンクチュアリでもある。国内の治安は非常にいい。

面積は日本のキュウシュウほど。緯度はオキナワと同じだけど、

標高が2000mある為に気候はカルイザワに似てるらしい。
キユウシユウとかオキナワとかカルイザワってどこだ。エルメスは納得してたけど。

ある調査によると、「今あなたは幸せですか?」という質問に、国民の97%がYESと答えたというデータがあるらしい。

そのデータを見たエルメスがブータンを見逃すはずがない。次の目的地はすぐに決定して、即銀行に泥棒に行って資金集めしてきやがった。

血もツアンの財団にかなり提供してもらったし、車も買ったし、準備を終えて涙ながらに別れを告げた俺らは、ベトナムを後にしてブータンへと向かった。

途中一番苦労したのはホテルでの宿泊だ。インドやベトナムの屋敷みたいな大豪邸ほどうっかりした建物でも、吸血鬼向けに改造された家でもないホテルでの寝泊まりは、息苦しかった。

「うう、狭い、苦しい」

「文句言つな、しょうがねえだろ」

「なんでカーテンないの? 棺持ってくれば良かった」

「しょうがねえだろ、あの状況じゃ。どこでも豪邸に住めると思うな」

「はあ・・・」

真夏だと言うのにエルメスと二人、暗幕を3重にして包まって寝た。とりあえず、俺もエルメスも寝相がいい方で良かった。それだけはよかった。じゃなきゃ死んでた。間違いなく。

俺的には問題は国境警備をどう突破するか、だった。ベトナム、インド周辺にかけては宗教派閥によるテロや土地の占有紛争が頻発しているせいで国境警備が厳しい。この辺りは未だに紛争地域だ。許可どころかパスポートも持ってない俺らがどうやって突破するか、実力行使に出るしかねえよな、と思ってたんだが、難なくクリア。

「国境見えてきたな、どうする？」

「そのまま突っ切っちゃって」

「そのままって、このままか？」

「そう、大丈夫だから」

って言われても不安なんだけど。俺の心配をよそにエルメスは国境が見えてきた瞬間に国境警備隊たちに視線を向ける。

心底不安を抱えながらも、スピードを落とすことなくそのまま突っ切った。本当にそのまま突っ切った。何事もなく。

「あれ？　なんだこれ！？　何したんだお前！」

国境のフェンスも壊すことなく、警備隊を轢き殺すこともなく、ましてや止められることも気づかれてもない。

驚く俺にエルメスは顔の前でピースしてにっこり笑う。

「えへへ、すごいでしょ？ 1つは錬金術の基礎！ 分解！」

「どういうことだ？」

「分子結合を緩めてすり抜けた！」

「ああ、なるほど。でもなんで気付かれてないんだ？」

「そして新技！ 光学迷彩！」

「おお、光の屈折率を変えたって事か」

「正解！ 厳密には私には光は変えられないの。でも私達の方の屈折率を変えた！ だから見えてないよ！」

「お前スゲエな」

「もつと褒めて！」

「よしよし、いい子いい子」

「えへへー！」

褒めて頭ナデナデしてやったらエルメス大喜び。お前は犬か。でも本当コイツはスゲエな。羨ましい。俺が勝てるはずねえよ、クソ。俺も活躍してえ。

活躍の機会は案外すぐにやってきた。国境周辺や山岳地帯になってくると、泊まれるような宿や村がみつからなくて、必然的に車内泊を迫られる。で、その日も車中で暗幕に包まって寝て、夕方になって目が覚めたら車に向かって数人の男達がダッシュしてきた。

「うお、なんだあれ？」

「多分山賊だよ」

「山賊！ スゲエ、初めて見た！」

「なんで喜ぶの？ 面倒なだけじゃない」
「じゃあお前はそこで大人しくしてろ、俺が片付ける」
「ふわあ、頑張ってるね。殺しちゃだめだよ」
「おう」

あくびしながらエールを送るエルメスに若干イラついたけども、車から降りると駆け寄ってきた男達は急ブレーキをかけて立ち止まる。一番奥にいた奴に視線を向けて、フンと笑ってみた。

「なんか用か？」
「大人しく金を寄越せば命まではとらない。金を出せ」
「やなこつた」
「金を寄越せと言ってるんだ」
「ヤダって言ってるんだろ」

やり取りをしている間も山賊たちは俺の周りを取り囲む。初めての山賊でテンションが上がった俺は、例によってワクワクしてきた。

「なんだ？ やんのかコラ」
「あの世で後悔するんだな」
「お前らがな」

吸血鬼じゃなくても、ガキの頃から戦闘訓練受けてた俺に、山賊じゃ相手にもならねえ。例え俺が人間だったとしても俺を倒すなら軍人を連れてこい。10人程度いた山賊は物の3分程度で沈黙。

「ハッ、口ほどにもねえな」

煙草に火をつけながら車に戻ろうとすると、エルメスがニコニコしながら下りてきた。

「カイ戦闘上手だね！」

「まあ、俺ら全員訓練受けたしな。昔はよくガルフと組手やったし」「そうなんだあ。ガルフ対人格闘得意だもんね。どっちが強いのか？」「俺に決まってるんだろ」

「へえー、すごいねえ。ところで殺してないよね？」

「ああ、気絶させただけ」

返事を聞いたエルメスは、伸びている山賊たちに視線を向けたと思ったら、車に戻って荷物を漁りだした。

「こんなこともあるのかと、こんなものを用意していたのだ！」

ジャジャーンと取り出したのは、なんと応急処置セット。エルメスは山賊たちの前にそのセットを置くと、ペコリと頭を下げる。

「まだ怪我治してあげらんなくてごめんなさい。これでおあいこね」

頭を上げたエルメスはまたにこつと笑って「行こつか」と車に戻っていく。コイツの行動は、本当に俺の想像を超える。

「お前そんないい子だったのか」

「そうだよ、カイに比べたら全然いい子だよ」

「うるせーよ」

「フフン、キリスト教のファシストよりも仏教徒の方が全然いい子だね」

「なんだお前仏教だったのか」

「家が浄土真宗の檀家だね。ていうか日本は基本仏教だよ。別に信仰ってほどはないけど。神様信じてないし。でも考え方は好き」

「ふーん、どんな？」

「なにごともしやらずはいけませんよ。感謝を忘れずに、人を大事に、自分を大事にしましょうねって感じかな。キリスト教ほど細かくも厳しくもないけど」

「ああ、だからキリスト教は仏教を宗教って認めてねえんだろうな」

「かもね。でもその仏教のお陰で平和なんだよ、ブータンは」

「そうかもな」

そして到着した幸福の王国、ブータン。

二つ名の通り、首都はとても賑やかで道行く人はみんな笑顔だ。人々は明るく挨拶を交わして、笑顔ですれ違う。なぜか道端にツバを吐く奴が多いけど。なぜかツバが紅くて道端には赤い斑点が至る所にあるけど。

「うわあ、すっごくいい雰囲気だね！」

「ああ、なんつーか、さすがだな」

「本当だね！」

「つーか、ブータン人ってお前と顔の系統似てねえ？」

「本当だねえ。不思議ー」

二人で夜の市をキョロキョロ見渡しながら歩いていると、服屋のおばちゃんに声をかけられて、思わず足を止めた。

「あんたら旅行者かい？」

「いや、この国に滞在しようと思って」

「おや、お嬢ちゃんはブータン人だね」

「いえ、私は日本人で・・・」

「日本人!？」

なぜかその単語に過敏に反応するオバチャン。傍で聞いていた人達も何人が集まってくる。何だっただ、日本人。

「うわあ、日本人に会ったの初めてだ」

「本当に似てるー！」

「ちっちゃい女の子だねえ」

「天皇によろしくね」

「え、ちょ、天皇によろしくって言われても、会える人じゃないんですけど。ていうか、なんで日本人知ってるんですか？」

戸惑う俺とエルメスにっこり笑ったブータン人たちは、嬉しうに話してくれた。

その昔、ブータンでは高山地帯のせいで慢性的に農作物が育たなくて飢饉に陥っていたそうだ。そこで日本が派遣した農業研究者によって収穫量が爆発的に伸びた。その研究者は没年までブータンに留まって、国内農業の水準向上に尽力したそうだ。

その後も日本とブータンは親交があつて、度々天皇も来訪しているし、数代前の天皇が崩御した際は、国王が弔問に足を運んで1か月も喪に服したそうだ。

どういうわけか顔もよく似ているし、民族衣装も、鎖国という歴史も共通点が多い。それで、ブータン人は大親日家らしい。

「うわあ、そうだったんですね。道理で！ 確かに衣裳も着物に似てますね」

「そうそう。嬢ちゃんも兄ちゃんもこの国に住むなら、家以外の場所では男はゴ、女はキラを着るのは法律で義務づけられてるからね。買ってきな」

「そうなのか、知らなかった。じゃあとりあえず10着ずつくれ」

「まいどあり！ 兄ちゃん気前がいいね」

「どうせ要るもんだからな」

服を買つと、店のおばちゃんは「奥の部屋で着替えてきな」と言ってくれて、エルメスと二人着替え始める。が、着方が分からん。

「エルメス、これどうやって着るんだ」

「アハ、そつか。カいはわかんないよね」

そう言うところエルメスは俺に着付けを始めた。想像以上に手際よく。ブータンに来たのは初めてのはずなのになんで知ってたんだ。

「なんでお前この着付け知ってたんだ」

「男の人の衣装は日本の民族衣装とすごく似てるの。日本では民族衣装を着る人あんまりいないけど、私は昔剣道やってたから着方は知ってるよ」

「ふーん、ケンドウってなんだ」

「日本の剣術だよ」

「ああ、だからお前剣だったのか」

「そうだよ」

そうこうしているうちにあつという間に着付けは終わって、今度はエルメスが着替え始める。着替えの終わったエルメスはどう？と振り向いた。

「女の衣装はインドのサリーに似てるな」

「そうだね。どっちも着付けの仕方知ってる服でよかったよ」

「だな。どうでもいいけど、俺らの荷物9割が服だな」

「本当だね」

店に戻ると、ギャラリーはまだ残っててエルメスが出てくるのを待っていたようだ。俺らが出てくるとなぜか大喜びだ。

「お嬢ちゃんはその格好するとブータン人にしか見えないね」

「兄ちゃんは微妙だな」

「余計なお世話だ！」

思わぬ非難を受けてイライラしながら煙草を取り出して火をつけようとすると、傍にいたオッサンから煙草を叩き落とされた。

「オイ、何すんだよ」

「兄ちゃん知らねえのかい？ ブータンは国内全面禁煙だよ」

「はあああ！？ マジで！？」

「国内では製造も販売もしてないからね。ブータンでは喫煙は禁忌なんだよ」

「マジ！？ 買えねえ上に吸うのもいけねえのかよ。家も？」

「いけないんだよ、コレが。家もダメ」

「観光客は少しなら持ち込みOKだけど、決まりだからね」

「マジか・・・シヨック」

知らなかった。ブータンが国内全面禁煙なんて知らなかった。コレ吸い終わったらお別れかよ。ああ、別れたくねえよマイハニー。そんな俺の気も知らないで、がっくりとうなだれる俺の肩をたたいてエルメスは半笑いだ。

「これを機に禁煙にチャレンジしてみたら？」

「無理だ・・・俺はコイツがいなきゃ生きてけねえんだよ。煙草は

「お前、俺の生涯の恋人だぞ」

「別れちゃいなよ、そんな悪女」

「悪女とわかってても俺はもうコイツの虜なんだよ。チクショー、ブータン出るか」

「それはダメ！」

「兄ちゃん心配すんな。そのかわり別の嗜好品があるからよ」

オッサンの言葉に顔を上げると、おっさんは何かわからん白い粉と葉っぱを取り出す。おもむろにオッサンはその葉っぱと粉を口に入れて噛みだして、俺にもそうしろと差し出す。言われたとおりにしてみると、口の中に渋みが広がった。

「なにコレ、渋っ」

「コイツの良い所は味じゃないんだよ」

「確かにこの渋味は慣れるまでは欠点だねえ。紅いツバがイッパイ出るのも」

「あ、それでツバ吐いてる奴多かったのか。あ、確かに溜ってきた」

ペツと吐き出すとツバは真っ赤だ。口の中もきつと真っ赤だな。

まあ血で慣れてるしどうってことねえか、と思ってたなら、なんか頭が軽くボワっとしてきた。

「おや、さすがに初心者はくるのが早いね」

「なんだ、コレ」

「コレには覚せい作用があるんだよ」

「マジ？ 覚せい剤？」

「ってほどでもないよ。酒程度なもんさ」

「ああ、なるほどね」

「ソレ、”ドマ”はどこでも売ってるから、気に入ったら買いなよ」
「おお、サンキユ」

おばちゃんたちに別れを告げて、車に戻ってホテルを探そうと思っただけど、どうも頭が微妙に酩酊してる。こりゃ明らかに酒気帯び運転だ。イヤ、酒気とは言わないか。

幸福の正体見たりか。

もしやこの国の幸福率の高さは、この”ドマ”によるものなんじやねえのか。これがあれば毎日ハイテンションでハッピーに暮らせるだろう。しかも麻薬ではないらしいし。

まあ、でも煙草の代わりにはなるか。でも、ご利用は計画的にだな。これ以上ブツ飛んだら俺は病院送りだ。気を付けよう。

FILE - 40 Crimson drug 「紅いドラッグ」(前書き)

もしかしたら、R-18かもです。18歳以下はUターンをお願いします。基準がよくわからない。

俺とエルメスの旅行記

なんとか宿泊先をゲットして、そのホテルに滞在して既に1週間経過した。その間まんまと俺は煙草を吸い終わって泣く泣くハニイと別れを告げ、“ドマ”に乗り換えた。

どうにかして家を探さなきゃなあ、どうでもいいけどこの“ドマ”ってガムつぽくなんねえのかなあ、と考えながら噛んでたら、風呂から出てきたエルメスが隣に座ってきた。

「それ、おいし？」

「美味くはねえ」

「どんなかんじ？」

「酒飲んだ時みてえな。なんかハイになる」

「へえ、吸血鬼には麻薬はクソ不味い大敵だつて聞いたけど」

「麻薬が混じった血は確かに不味いな。これは合成じゃなくて葉っぱだし、しかも喰う物じゃねえから平気なんじゃねえか。知らんけど」

「ああ、だから煙草もいいのかな。私もちよつと頂戴？」

「ホレ」

エルメスも真似して噛み始めるも、すぐに顔を歪める。この渋味

がお気に召さなかったようだ。それでも我慢して噛み続けるエルメス。なんだその無駄な忍耐強さ。

「嫌なら吐き出せよ」

「ちよつとしかないのに勿体ないよ」

日本発MOTTAINAI精神はここでも発揮された。しばらくして立ち上がったと思ったら、洗面所に吐きに行つてたようだ。俺も続いて吐きに行つたら、エルメスが洗面所からフラフラしながら歩いてきた。

エルメスの横を抜けてペツしてエルメスに向いたら、なんか目がトロンとしてる。

「なんかフラフラするう。なんでカイは平気なのお？」

「いや、俺も酩酊してるけど」

「ふうーん、カイ、だっこ」

うわあ、イツてるわ。何とか引きはがそうとしても例によって剛腕でとてもじゃねえけど離れない。

仕方なくそのままエルメス引き摺ってソファに座つても、ベタベタ引っ付いてきやがる。うぜえ。

「オーイ、いい加減離れようぜ」

「やーだ」

「ウザいんだけど」

「ウザくないもん。カイは私の事キライなの？」
「いや、嫌いじゃねえけど」

嫌いじゃねえけど、本当面倒くさいこの子。なんなのこのラリった吸血鬼。顔をそむけて横にハアとデカい溜息ついてたら、首筋に息がかかって思わず戦慄が走った。

「お、お前やめろよ。噛みつくなよ。俺はお前の眷属にはなりたくねえぞ」

「大丈夫だよ。契約するわけじゃないし、ちょっとくらいなら、眷属にはならないよ」

「そう言う問題じゃ・・・うっ」

まんまと噛みつかれた。皮膚を突き破る音がしたと思うと、ゆっくりと少しずつ血液が吸われる感覚がする。それと同時にこみ上げてくるゾクリとした感覚。

なんだこれ。これはヤバイ、これはマズイ、超気持ちいいんだけど。何だこの性的快感は。

うっかりその感覚に吞まれてたらエルメスがぶはつと口を離して、なんか変な気分になってきた俺に微笑んで、唇に着いた血を指で拭いて舐めとる。

「カイの、美味しい」

危ねえ！！ 今一瞬理性飛びそうになった。ふー、
危ない危ない。なんて恐ろしい酩酊エルメス。そして悲しい男の性。

妙な葛藤に苛まれる憐れな俺に、酩酊エルメスは更に大胆な行動に出る。いきなり俺の膝の上ののって来たと思ったら、風呂上りで濡れた髪を掻き上げて「ハイ、どうぞ」。

「い、いや、なにが？」

「カイもお腹空いたでしょー？」

「いや、いいです」

「私だけ貰うの悪いもん。ちょっとだけなら大丈夫う」

ちょっとだけなら、いいですかね。あっさり誘惑に負けた残念な俺は、メガネ外してエルメスの首筋に牙を立てた。

俺の牙が首筋に突き刺さった瞬間、エルメスはピクンと体を震わせる。あれ、これはもしかしてエルメスもなのか、そうなのか。

溜息に似た吐息を漏らすエルメスに、段々と俺の理性が外出の支度をはじめやがる。エルメスがちよつとつったからすぐに口を離すと、首筋に一滴血が流れた。それを舐めたらまたエルメスは体を震わせて、小さく声を漏らした。

それで俺の理性は「ちよつとコンビニ行ってくる。3時間くらい」
つって外出しやがった。

エルメスの首筋に舌を這わせてキスをすると、エルメスは体を震わせて甘い声を漏らす。

「やつ、カイ、ちよつと・・・待って」
「待たない」

よしよし、抵抗は弱いな。でかした合法ドラッグ。ちよつとくらいならいいだろ。いいはずだ。俺はエルメスの為に日々頑張ってるから、ちよつとくらい褒美をもらってもいいはずだ。

首筋から顔を離して、エルメスの頭を引き寄せてキスした。何度も何度も。エルメスは抵抗をするものの、本気で嫌がる様子はない。どうやらエルメスも雰囲気にもまれて、ドマでブツ飛んでるようだ。

徐々に深くキスして舌を絡ませてたら、俄然ノリノリになってきた。

段々下にキスを移して、首筋にキスしながら風呂上りでキャミソールしか着てなかった無防備なエルメスに感謝。

キャミソールとブラのストラップを一緒に下して、ブラを外すと腰までストンと落ちた。さすがにそれにはエルメスも慌てて前を隠すような仕草をする。

「やだ、ちよつと待ってってば」
「待たねえって」
「や、本当ちよつと待って!」
「無理」

膝の上に載ってたエルメスを反転させて、後ろ向きに座らせて後ろからがっちり腰をホールド。

どうもエルメスはビックリしてちょっと正気を取り戻したようだ。これは雰囲気でごまかそう。

「お前が誘ったんだろ」

「さ、誘ってないもん！」

「嫌じゃねえだろ」

「ヤだよ！」

「その割には気持ちよさそうにしてんじゃねえか」

「そんなことな・・・んっ」

後ろからエルメスの胸を触ったら、ビクツと体を震わせる。エルメスの巨乳はイイ。実にイイ。本格的に愛撫を始めると、さすがのエルメスも大暴れ。なんだよチクショウ。

「あ、もう！ ヤダ！ ヤダ！」

「暴れんな、気持ちよくしてやるから大人しくしろ」

「いやー！」

「暴れんなって」

「ちよっと、ダメ！」

俺の手をどかさそうとする指に関節技をキメて防御を阻止。ショー
トパンツの中に指を侵入させたら、指先にぬるっとした感触。

「なんだよ、嫌がってる割には濡れてんじゃねーか」

「やだ・・・違う、んっ！」

「違うってなにが？ 気持ちいいならそう言えよ」

「あっ、やだ！」

「お前と違って体の方は正直だな」

「もう、お願い、やめて！」

必死に閉じようとする足を開かせて間に俺の脚を挟んで封鎖を阻止。嫌がってるくせに指を動かすたびに反応して声を漏らすエルメスに超興奮。

んー、エルメス可愛いな。それもこれもドマのおかげだ。素晴らしきかなブータン文化。

最早ノンストップな俺のゴールドフィンガーに、徐々にエルメスの息遣いが荒くなってくる。

俺の手をギュツと握って、一際体を震わせた後クタツとなるエルメスに激萌え。何なのこの子。可愛すぎる。ぐったりするエルメスに後ろから抱き着いた。

「気持ちよかっただろ」

「はあ・・・もう、ヒドイよ。なんでこんなことするの」

「なに？ もう一回？ しょうがねえな」

「や、ちが、あっ！」

もう一回気持ちよさげにしてるエルメスが見たくなった。それで

更にテンションが上がって、新しくドマを口に入れてしばらく噛んで、更にハイになってきた頃にエルメスに口移しで流し込んで、手で口を塞いでやった。

最初の内は必死に手を剥がそうとしたけど、覚醒作用のせいかな抵抗しなくなって、素直に反応するようになってきてから手をどけてやると、再び絶頂に達したエルメスは咳込んで、吐き出した口元から紅い唾液が零れた。

ちょっとくらいと思ったけど、コレはもうヤツちゃっていいかな。うん、いいだろ。いいと思います。

合法ドラッグのせいで、俺の理性はとうとう家出した。

ぐったりエルメスを寝室まで抱えて俺が服を脱いでエルメスの服も脱がすと、さすがに逃げ出そうとするがガッチリ捕獲。しばらくキスしていると諦めたのか、大人しくなった。

さーで、いただきます、と本番に突入しようとした瞬間、再び正気に返ったエルメスは大暴れ。

「もー！ やー！ やー！」

「痛てっ！ お前暴れんなよ」

「もー！ ヤダって言ってんじゃん！」

「まあ、いいからいいから」

「よくないよ！ バカ！」

「ぐっ！」

まさかの強烈なボディブローに、思わずエルメスの上に倒れこんだ。チクショー、もう一息だったのに。

倒れこんだ俺に「もー！ どいてよ！」と、エルメスは執拗にボ
ディブロー。

その痛みで、俺の理性は慌てて帰宅した。

うおおお！ 何してんだ俺！ 何てことしてんだ俺は！ 最悪！
ドマ最悪！ やっべー、どうしよう。絶対嫌われた。ヤベー、マ
ジどうしよう。

ああああ、俺は本当に何てことしちゃったんだ、チクショー。マ
ジどうしよう、どうしよう、本当どうしよう。

頭を抱える俺の横でエルメスはバサバサとシーツを被って、怒っ
たように息を吐く。

うわあ、怒ってる。当たり前だけど怒ってる。どうしよう、謝っ
て許してくれんのかコレ。

つーか、俺は本気でこういうことを望んだのか。そりゃエルメ
スを独占したいか思ってたけど、こういうことは別に・・・まあ
オプシオンとしてはアリだけど、別に本気でこうなりたいか思っ
てたわけじゃないのに、何でこんなことに。

チクショー、合法ドラッグチクショー。そうだよ、そもそもエル
メスにアレやらせたせいだ。もう二度とアレには手をださねえ。

つーか俺もう死のうかな。うん、そうしよう。俺が男だからいけ
ねえんだ。俺が生きてるからいけねえんだ。どーせエルメスも許し
てくれないだろうし、もう嫌われただろうし、そしたら俺生きる意
味ねえし。よし、そうしよう。

ガバつと起き上がって服を着てエルメスに土下座した。当然エルメスはまだ怒ってる。

「すみませんでした」

「謝ったからって許さないよ」

「わかってる。お前とはここでお別れだ」

「え？」

「今まで楽しかった。ありがとう。ごめんなさい。さよなら」

「え、ちよ、ちよつと待って。どこに行く気？」

「ちよつと、ジュリオ様の所に行くてくる。もう死んで詫びるしかない。本当にゴメン。じゃーな」

「え！？ ちよ、ちよつと待って！」

「なんだよもー！ 離せよ！」

「待ってってば！」

エルメスに腕を掴まれてグイッと引つ張られたはずみで再びベッドにダイブ。力ではかなわないと悟ってシーツに泣きつく俺。

「もー！ なんだよもう！ 悪かったと思ってるよ本当に！ だから死なせてくれよ！」

「あの、ちよつと落ち着いてよ。なんでさっきから待ってって言うてるのに聞いてくれないの？」

「・・・ああ、そうか。お前が自分の手で殺したいんだな。わかった。似るなり焼くなり好きにする。本当にすいませんでした。お前に殺されるなら本望です」

「や、だから私の話聞いてよ。落ち着いてってば」

「いや、俺は落ち着いてる。さすがに落ち着いた。だから俺に生きる価値はないと悟った。本当に俺は最低だ。エルメスに嫌われるのも無理はない。許せなくて当然だ。だから俺に生きる価値はない。殺されて当然だ。ああ、俺はなんて最低なんだ。別にこういうことしたいと思つてたわけじゃないのに、エルメスを大事にしようと思つたのに、大事にしてるつもりだったのに覚醒作用に負けてしまった。俺は結局その程度の男だったんだ。エルメスにこんなことして、もう傍になんていらねえし、嫌われたら俺生きてる意味ねえしなあ。ああ、そうだ。ジユノ様に頼んで今日の記憶を消して貰おう。いや、いつそのことエルメスから俺の記憶を消して貰おう。そうしよう。それで俺が死んだら世界は平和だ。記憶が無くなればエルメスが嫌な思いすることもないし、俺も死んで一石二鳥・・・」

「もう、さつきから何言つてんの！ 落ち着いてつたら！」

シートにすがつてメソメソ言つてたら、エルメスにバシツと頭を叩かれた。それでエルメスの顔を見たら、俺を見下ろしてそれはもうデケエ溜息を吐いた。

「なんでこういうことしたの？」

「・・・なんでかな。強いて言えばドマのせいだ。どうかしてました」

「あれがなければしない？」

「絶対しない」

「本当に？」

「本当に」

「絶対？」

「絶対」

しばらく会話して視線を合わせると、エルメスはフイと視線を外して立ち上がった。

「私お風呂行ってくるから」

「いつてらっしゃい」

「そこ、動かないでよ」

「ハイ」

「カイも一緒に入る？」

「え！？ い、イヤ、いつてらっしゃい」

「・・・そこを動かないように」

「ハイ」

危ねえ、今のは罫だ。良かった、ひっかからなくて。とりあえずエルメスの言う通り大人しくしよう。

ベッドでゴロゴロしながら待っていると、1時間ほどしてエルメスが風呂から出て寝室に戻ってきた。

「カイもお風呂入って、頭冷やしなさい」

「ハイ」

「私は先に寝るから」

「ハイ」

「寝てる間に何かしたらハッ倒すからね」

「絶対しません」

「おやすみ」

「おやすみなさいませ」

入浴しながら懺悔。

チクシヨー、いつその事この残念スティック切り落としちゃうか。イヤイヤ、それなら普通に死にたい。ああ、エルメス怒ってたなあ。きつと嫌いになっただろうなあ。俺を殺さないのは、生きながら死にたいとか思わせる様に仕向けようとしてもしてんのか。

いや、でも罪は生きて償わないといけないのか。俺もう本当マジでエルメスに絶対服従しよう。そうしよう。マジでエルメスの忠犬になるう。いや、そういう乳製品の犬じゃなくて。

風呂から上がって寝室に入ったら、エルメスは既に寝てて、静かに寝息を立てていた。

今日は、さすがに一緒に寝るのはちよつとな。ソファで寝るか。そう思ってベッドの端に置いてあった暗幕を一枚取って、エルメスの寝顔を見てみた。その寝顔に思わず溜息が出る。

「ハア、エルメス、本当ゴメンな」

寝室を後にしてソファで暗幕に包まって再び反省会。何で俺男に生まれてきたんだらう。死ねばいいのに俺。明日あたり死ねばいいのに。ヒマラヤの山頂から落ちて死のうかな。

朝まで続いた反省会と自分の犯した暴挙のせいか、この日は悪夢

を見た。

俺とエルメスの旅行記

そう言えば俺気を付けようって思わなかったっけ。思ったよな。なんで気を付けないわけ？ 俺なんなの？ バカなの？ 死ぬの？ 死ぬか。

翌目目が覚めても、悪夢の為に寝ざめも悪く、相変わらずソファで暗幕に包まりながらウダウダと反省会。

ああ、絶対エルメスまだ怒ってるよなあ。嫌われたよなあ。つか顔合わせづれえ。できる事なら昨日の俺を切り刻んで、ヒマラヤ山中の獣たちの餌にしてやりたい。

溜息を吐きながら反省会をしていたら、寝室のドアを開く音がしてエルメスが起きてきたんだと気付いて、つい寝たふりをした。

あ、俺のバカ。今寝たふりしたら起きるタイミング逃すじゃねえ

か。あー、しまった。どうしよう。と、思ってたら、俺の前にエルメスがしゃがんだ雰囲気。

俺の顔の前で、エルメスは大きく溜息を吐く。

「カイのバーカ」

すみません。

「なんてことするのよ」

本当すみません。

「私にはクリシュナがいるのに」

そうでした！ すいません、本当すみません。

「カイには1000年早い」

そうですね、すみません。いや、1000年後ならいいのか？ 違うか。

「死ぬとか言っただけじゃないの」

ハイ、俺はどうしようもねえバカです。

「ハア、本当バカ」

ハイ、すみません。

「でも、まあいつか」

いいのかよ！

「カイがいなくなるくらいなら、許してあげるしかないよねえ」

マジですか！

「あ、でも初犯じゃないんだった」

そうだった！ 俺前科者！

「でも反省してたし、許してやるか」

エルメス優しい！ ありがとう！

「で、いつまで狸寝入りする気？」

思わぬ言葉に思わずパチッと目を開けると、目の前でエルメスがニヤリと笑っていた。

「お、おはようございます」

「おはよう」

「すみませんでした」

「反省してる？」

「猛省してます」

「私怖かったんだけど」

「誠に申し訳ありません」
「これは重大な背徳だよ。わかってる？」
「わかってます。申し訳ありません」
「そう、とりあえず今後私には絶対服従ね」
「勿論です」
「人に話したら爆破するよ」
「勿論です」
「ヤダって言ったらちゃんとやめてね」
「勿論です。エルメス様には今後指一本触れません」
「それを決めるのは私」
「はい、すいません」
「とりあえず家探しに行くから支度して」
「畏まりました」

俺の返事を聞いたエルメスは、立ち上がって洗面所に向かって行った。なんか今のやり取りが微妙に腑に落ちなかった。

俺がエルメスに触れるのがエルメスの裁量次第というのはどういうことだ。あ、もしかしてアレか。アーサーの調教による過剰なスキンスリップに慣れたせいで、不可触なのはさすがに寂しいとかそういう事か。

まああの合法ドラッグさえなければ今後こんなことは起きないはずだし、それでもいいか。

起きない、よな？ 一回こんなことがあってリミッター壊れてたりしねえよな？ いや、自分に自信を持って！ 俺はやればできる！
できる子だ！

起き上がった俺はテーブルの上に残っていたドマを握って、窓を

開けて思いつきりブン投げた。

諸悪の根源は絶った。クソー、やっぱ俺の恋人は煙草しかいねえ。でもこの国は禁煙だしなあ。エルメスの言う通り、禁煙にチャレンジするしかねえな。

エルメスと入れ違いで洗面所で顔洗って寝室のドアを開けると、エルメスは着替え中だった。それで慌てて「失礼いたしました！」とドアを閉めて溜息ついたら、寝室からも溜息が聞こえた。あ、溜息で起きてるってバレたのか。ウツカリしちゃった。

寝室のドアが開いて、着替えの終わったエルメスを見て俺は驚愕した。即寝室に入ってエルメスの荷物の中から小物を取り出してエルメスに差し出した。

「エルメス様、誠に申し訳ありませんが、こちらをお召ください」

「ストール？　なんで？」

「なんでもです。お願いします」

「別にいらな・・・あ、まさか！」

思いついたような顔をしたエルメスは、首元に手をやるとすぐに顔が赤くなって表情に怒りを表した。エルメスは俺をキッと睨みつける、ストールを奪い取って首に巻きつける。

「ホントもう、バカ！」

「申し訳ありません」

「なんでキスマークつけてんのよ!」

「いや、なんかノリで」

「もう! バカ!」

「申し訳ありません」

キャンキャンと俺を罵倒しながらキレるエルメスに謝罪しつつも、内心なんか嬉しくなった俺。

うわあ、なんか俺のモノって感じじゃね? ってイカンイカン!

ここで言ったら負け! イカンイカン、昨夜の件で異常性に拍車がかかった気がする。イカンイカン、これは本当にイカン。遺憾。

もう最低でも2次元の趣味を3次元に召喚しないように気を付けなければ。エルメスはきつと怒った以上に傷ついたよなあ。背徳、裏切りだもんなあ。怖かったって言うてたしなあ。ハア、俺って本当最低だ。

折角最近エルメスが元気になって来たと思ったのに、俺は本当取り返しのつかない事したなあ。何なの俺。本当なんなの。何がしたいの俺は。エルメスを幸せにしてあげたいんじゃないのかよ。

ハア、本当俺ってどこまでも役立たずだな。俺死ねばいいのに。もの凄く苦しい死に方して死ねばいいのに。

着替えながら反省会を通り越して、最早自己嫌悪会議だ。本来自信家の俺がここまで自分の死を望んだのは人生初だ。

自己嫌悪に陥っていたら、とんでもない事実を思い出した。

そうだ、そう言えばエルメスはアーサーの眷属じゃねえか。エル

メスの思考はアーサーには筒抜けだ。もし今回の件がアーサーにバレたらどうなってしまうんだ。

さすがに今回は見逃しちゃくれねえよな。絶対殺される！間違はなく殺される！いや、いいか。しょうがねえよな。それほどの事だ。本当しょうがねえわ。

案外すぐに諦めが付いた。つーか、今ならジユノ様に魂捧げてもいいな。何お願いしよっかな。あ、でもジユノ様に頼みごとするならインド戻らないと。でもそうなるエルメスが危険だしなあ。まあ、気が向いたらでいいか。

「もう、カイ遅いよ？ 着付けまだわかんない？」

「え、いえ。ただいま参ります」

考え事に夢中で手が動いてなかった。急いで支度を済ませると、ドアの前でエルメスが待ちくたびれた顔をして立っていた。

「申し訳ございません。お待たせいたしました」

「ハア、いこっか」

「はい。お荷物お持ちいたします」

「ありがと」

夕方の市内に繰り出して、不動産屋を探した。近頃急激に欧米化しているブータンは意外と首都は都市っぽい。すぐに不動産屋に入ると、その不動産屋のオヤジに驚愕。

「おう、この前の白人兄ちゃんと日本人の嬢ちゃんじゃないか」
「うお、オッサンこの人かよ！」

俺に悪魔のドラッグを教えやがったオッサンが、不動産屋のオヤジだった。なんだろう、これは嫌がらせか。

昨夜の暴挙など当然知らないオッサンは、ニコニコしながら例の話題を降りやがる。

「ドマ気に入ったかい？」

「え、い、いや、俺の口には合わなかったからな」

「そうか、そりゃ残念だね。でもその方がいいかもしれん」

「な、なんで」

「ありゃ依存性があるからな」

「マジかよ！ うあ、最悪だあ・・・」

てことはなんだ、俺はニコ中とドマ中に苛まれなきゃいけないって事か。最悪だ。本当最悪だ。最悪の天罰だ。インド帰ってえー！
煙草位吸わせろ！

よよよ、とドアにもたれ掛る俺にオッサンは相変わらずニコニコしながら不思議そうな視線を向けるが、エルメスの視線は純白だ。その視線に気づいてすぐに姿勢を正す。

「いえ、エルメス様、何も問題ありません」

「本当にいい？ 大丈夫なの？」
「勿論です！」

勿論ですよ、チクシヨウ！ チクシヨウ、何だって俺は常に苦悩を抱える羽目になるんだ。俺が一体何したって・・・したんだった！ チクシヨウ、マジ俺死ね、チクシヨウ。

再び自己嫌悪に陥る俺をよそに、オッサンとエルメスは順調に新居を選別しだす。

「希望は？」

「駐車スペースがあつて、とりあえず2LDK以上で地下室のある一戸建てで」

2LDK・・・俺と同室はもうイヤつてことか。以前から俺の方が望んでたことなのに、なぜか素直に喜べない。いや、その方が色々都合はいいんだけど。

「鍵の交換は？」

「全室バラバラのものをお願いします」

うわ、俺完全に信用失くしてる。当然だけど悲しいなあオイ。

「予算は？」

「改築が可能なら100万まで」

「それだけありゃ豪邸に住めるよ。ところで国籍は取得したかい？」

「・・・いえ」

「んじゃ無理だ」

がつくりとうなだれるエルメス。そう言えばイタリアの時はどうしたんだ。アーサーの不思議能力で何とかしたのか。

どの道俺らは国籍の取得は不可能だ。悩んだエルメスはなおもオッサンに縋る。

「実は私達難民なんです。国籍取得できなくても住める様なところってありません？」

「あるとしたら南部地区だね。あの辺は無国籍のネパール系が多いからね。昔それで暴動が起きて、難民が続出してるから空き家も多いはずだよ」

「本当ですか!？」

「でも治安は悪いよ」

「住めるなら治安の良し悪しなんかどうでもいいです！ ありがとうございます！」

「いえいえ、役に立てなくて悪かったね。気を付けるんだよ」

「ありがとうございます！ じゃ、カイ、早速チェックアウトして南部行こうか」

「畏まりました」

すぐにホテルに戻ってチェックアウトを済ませて南部へ向かった。ブータンは狭い国だ。ものの3時間で着いた。到着してビビった。これは、俺ら生活出来ねえぞ。

いや、人間なら生活できる。でも、俺らには不可能だ。家はまあ普通だ。だが公共施設が見当たらない。要するに病院が見当たらない。

いや、無いわけではないんだが、圧倒的に数が少ない。という事は輸血用血液を入手できる伝手が無いという事だ。俺らのせいで現地の人たちの血液を奪うわけにはいかない。

さて、どうしたもんかと考えていたら、エルメスも悩んでいた。

「エルメス様、いかがなさいますか？」

「うーん、まあまだ血は残ってるし、どの道この時間じゃ家を探すこともできないから、とりあえず宿を探そうか」

「そうですね。わかりました」

さすがに観光すら制限されてる地区なだけあって宿はすぐに見つかった。勿論部屋は別々だ。でもエルメスと別々の部屋なんてかなり久しぶりでむしろ違和感。そんな違和感の為なのか何なのか、今日も悪夢を見た。

翌日、慌てて飛び起きた俺の横にはいつの間にかエルメスがいて、不安そうな顔をしていた。

「カイ、どうしよう」

「もしかしてエルメス様もご覧になりましたか」

「うん、見ちゃった」

悪夢だった。夢を見た。

夢の中の俺は真つ暗な空間にいた。吸血鬼に暗闇なんてものは存在しないはずなのに、相当久しぶりに味わう暗闇に動揺した。

前も後ろもわからないその真つ暗な空間を歩いていると、目の前には人影。目を凝らしてみると、だんだんと輪郭がはっきりしてきて、突然暗闇にその姿が浮かんだ。

「ヤベツ！ ぐっ！」

「もうカイさんったら、何もそんなに力の限り逃げることはないでしょう？」

突然現れたジユノ様に背を向けて走り出した瞬間に、首元をロックされて止められた。

なんて力だ、どれだけ暴れてもピクリとも動かない。大暴れする俺とは対照的に背後からクスクスと笑う声が響く。

「ブータンっていいところですよね」

「は！？ な、何がですか！？」

「私にウソは通用しませんよ。どこに逃げても無駄な努力です。私にはお見通しです」

「チクシヨー！ 千里眼でも持ってんのか！」

「ご名答。なかなかやりますね」

「マジかよ・・・」

「冗談で言ったのにまさかの正解。千里眼あるなら確かにこの逃避行は最初から頓挫しているも同然だ。」

「でも流石に瞬間移動はできないでしょ。別に見つかっても逃げ続けてやりますよ」

「確かにできませんよ。でも私は悪魔ですから、あちらとこちらを行き来できるんですもの。どいう事かわかりますよね？」

「次元とか空間を渡れるとでも？」

「正解です。瞬間移動よりも効率的ですよ。いつかあなたにも教えてあげますね」

「じゃあ今教えて下さい。逃げますから」

「それはできません。それより、もうそろそろバカンスはお仕舞にしましょう。今まで黙って見逃してあげたんですから、自発的に戻ってきませんか？ 連れ戻しに来て構いませんが、私のプライドが許しません。ご自分の意志で戻ってくるなら、許してあげますよ」

「もう、仕方ありませんね。ではカイさんをバカにするしかありません。あの事、みんなにバラしちゃいますよ」

「あ、あの事って？」

「私は千里眼があると言いましたよね。勿論見えましたよ。昨夜の事」

「うわああ！ やめてください！」

「やめてほしい？ 本当に？」

「お願いします、黙っててください！」

「うふふ、カイさんの秘密、2つも握っちゃいましたね。黙ってほしいなら、私の言う通りにした方がいいんじゃないありませんか？」

「くっ、卑怯ですよ！」

「ありがとうございます。最高の褒め言葉です。あなたも煙草吸いたいでしょう？ あんなドラッグにまた翻弄されたいですか？ 戻ってきた方がお互いにメリットがあるのでは？」

「くそー……」

「うふ。待ってますからね」
「あ、待ってくだ・・・消えた」

ロツクされていた首が解放された瞬間に後ろを振り返っても、そこには闇が広がっているだけ。
まさか夢にまで出てくるとは。つーか夢の中で夢って自覚するこ
とってあるんだな、と軽く現実逃避な思考をした。

「クツソー・・・これって夢なんだよな。マジなんで俺いつも誰か
に見られてんだよ!」

「忘れてました、不動産屋の店主から伝言です」

「うおああ!」

暗闇の中でブツブツ独り言を言っていたら、急に目の前にジユノ
様の顔が現れて、思わず腰を抜かしそうになる俺。

「な、なんですか! え、不動産屋のオヤジ!？」

「あのですね、「俺がやった奴は特別強い処方だったから、依存性
が強いからリハビリ頑張れよ」だそうです」

「ちよ、ちよ、まさかジユノ様がオツサンになんかしたんですか!」

「うふ、なんてね。ま、兄ちゃん頑張れよ」

話ながらジユノ様は突然姿を変えたと思うと、不動産屋のオツサ
ンの姿になった。

「うおあああ! マジかよ!」

「じゃ、インドで待ってるよ、白人の兄ちゃん」
「チクシヨオオオ!!」

ジユノ様に嵌められたことに気付いたその瞬間に目が覚めた。

俺の夢の話聞いたエルメスはドン引きだ。それは当然の反応だ。まさかあの未遂事件がジユノ様の策略によるものだとは想定外にも程がある。

同時に溜息を吐いて、俺の話聞いたエルメスは悲しげに視線を向ける。

「カイのバカ」

「本当に申し訳ありません」

「カイは本当はインドに帰りたいかった？」

「いえ、そのようには考えておりませんでした。エルメス様は？」

「私も帰りたいとは思わなかったけど、夢のせいで今はどうしても帰りたい」

「どんな夢を？ 何を話されたんですか？」

「話はすぐに終わったよ。ジユノ様が一方的に話してただけ」

ジユノ様がエルメスに迫った脅迫は、2つ。

- ・ 勿論例の事件の暴露。
- ・ インドの屋敷の人間皆殺し。

「そんなの、帰らないわけにいかないじゃない」

「そうですね・・・帰りましょうか」

「うん・・・」

ジユノ様の言った通り、俺達は自発的に即帰ることになった。さすがは悪魔。痛い所突いてきやがる。

こうして俺らの幸せかと思いきやそうでもなかった旅は、最低な結末で終わった。

動報告

シュヴァリエの活動報告及びエルメス様の行

瞬間移動でインドの屋敷に戻り、玄関を開けた瞬間にシャンティがエルメスに抱き着いてきた。

「もー！ エルメス様もカイも！ 心配したんだから！」

「いきなり失踪したりしてゴメンね、シャンティ」

「どういふことがちゃんと説明しなさいよ！」

「う、うん」

シャンティと3人リビングに行くとき、ある程度想像してはいたものの、やっぱりビックリさせられる。

楽しそうに微笑むジュノ様と、大悪魔にデレデレと傳くシュヴァリエの姿。デジャヴなその光景にやっぱり荷物を取り落す俺ら。

「二人とも、おかえりなさい」

「くっ……ただ今戻りました」

「うふ。カイさん、顔色がよくありませんよ。大丈夫ですか？」

「余計なお世話です」

「オイオイ、副長。帰ってそうそう心配かけといて態度ワリいな」

「ジユノさんに感謝しろよ。副長とエルメス心配して、毎日の様に屋敷に様子伺いに来てくれてたんだぞ」

何が心配だ。そりゃ顔色も悪くするぜ。憎らしい、なんて憎らしいんだクソ悪魔。

悔しさでイライラする俺にっこり微笑んだジユノ様は、立ち上がって俺の前に来ると紙袋を差し出した。

「はい、カイさんにプレゼントです」

「は？」

「どござ」

差し出された紙袋を受け取って中を見ると、俺が吸ってた銘柄の煙草が2カートンと、別に小さな箱。

クソ、煙草とか嫌がらせかよ、と思いつながら小さい箱は何だろうと取り出そうとして、取り出す前にそれが何かわかって、窓を開けて紙袋を勢いよくブン投げた。

それを見てニヤニヤ笑うジユノ様はめっちゃ楽しそうだ。俺の傍まで顔を寄せると、ジユノ様はコッソリと耳打ちする。

「折角用意したのに。使っただけじゃないんですか？」

「絶対使いません！」

「うふ。避妊は大事ですよ？」
「心底余計なお世話です！」

チクシヨウ、なんて性悪だこの大悪魔。人の気も知らねえで、いや、わかっててやってんなコノヤロー。コイツのせいで、コイツのせいだつてのに！

イライラしすぎて血管がハチきれそうな俺に、エルメスは不思議そうに視線を送る。

「カイ？ 何が入ってたの？」

「いえ、なんでもありません」

「そんなに気に入らなかつたの？」

「ええ」

「でもジュノ様からのプレゼント投げ捨てちゃうなんて、後が怖いよ」

「・・・そうですね。それでも私には必要のないものです」

俺の苦々しい表情で余程嫌なものが入ってたと察してくれたのか、エルメスはそれ以上質問しては来なかつた。

その質問が終わった頃に、俺らの帰還を聞きつけたランスとガラードが笑顔で階段を下りてきた。

「副長ー！」

「エルメス様！ おかえりなさい！」

その様子に、ああ心配かけたんだな、とちよつと反省したが、エルメスに飛びつこうとするランスに対して、エルメスが若干ビクッとしてるのに気付いて、ランスがエルメスに到達する寸前に阻止。

「うう、オイ！ 何すんだよ！」

「黙れ、エルメス様に触れるな」

「なんで！？ ていうか、エルメス様？」

「うるせえ。シャンティ以外の奴がエルメス様に接触する事は許さない」

「なんで？」

「なんでもだ」

ランスとガラードは不思議そうかつ不服そうにしていたが、思いついたような顔をしてガラードが俺に向いた。

「でもさあ、副長はいいの？」

「例外はない」

「じゃあ部屋どうすんの？」

「！！ そーだった！！」

すっかり忘れてた・・・この屋敷は満室だったんだ。どうしよう、マジどうしよう。こうなった以上、エルメスは確実に一人部屋にする必要がある。俺とランスの居室を絶対確保する必要がある。

悩みに悩んだ俺は、選択肢は一つしかないと思ってエルメスに向

いた。

「エルメス様、お願いがございます」

「なに？」

「クリシユナ様の部屋を改修して、私とランスの居室として使用する許可を戴けませんか？」

「えー、僕カイと二人部屋なんてやだ」

「うっせえ！ テメーは黙ってる！ エルメス様、お願いします」

最早これしかない。エルメスには本当に申し訳ないけれども、クリシユナさんの部屋以外にももう選択肢がないのだ。

しばらく考え込んだエルメスは、わかった、と溜息を吐きながら許可してくれた。

「改修が完了するまでの間は、私はガルフ、ランスはガライドの居室に移動しますので、それでよろしいでしょうか？」

「うん、わかった」

「イヤイヤ副長？ 何勝手に決めてんの？」

「オイオイ、俺はお前と同室なんて嫌だぞ」

「うるせえ、短期間なんだから我慢しろ」

「ていうかカイ、なんで急にそんな執事っぽくなってんの？ どうしたの？」

「生まれつきだ」

「ウソにも程があるよ」

確かに程があるが、そこに突っ込まれたくない。古傷どころか真

新しい傷を抉られたら化膿してしまう。

とりあえずみんな集合してきたのを見計らって、勝手に逃亡したことをまず謝罪して、逃亡した理由を話すことにした。

なぜか当たり前のようにジユノ様が溶け込んでるのは気になったけども。

「や、実はな、ジユノ様は悪魔だ」

「え？ ジユノさん人間じゃなかったんだ」

「しかも聞いて驚けコノヤロー。地獄の大侯爵、ジユノ・アスタロト様だ」

「あ、あ、あ、アスタロトオオオ！？」

もしかしたら話すことを妨害されるかと思ったけど、そんなこともなくジユノ様は相変わらずニコニコしてやがる。

それが逆に怖い気もしたけど、驚愕して次の言葉を待つ面々からの視線が痛かったから話を続けた。

「で、俺とエルメス様はジユノ様にめでたく獲物と認定されて、逃げ回ってたわけだ」

「獲物つてまさか」

「ああ、いずれはジユノ様に魂抜かれて死ぬ運命だ」

「な、なるほど。そりゃ逃げもするよな」

「お前らを人質に取られなきゃ、戻ってくる予定はなかったんだけどな」

「俺達人質だったんだ・・・」

目の前で微笑む美女が大悪魔だと知ったみんなは戦々恐々だ。

とてもじゃねえが、俺らが束になっても敵うような相手じゃねえ。俺らはまさに蛇に睨まれた蛙だ。

でも、この件で1つ可能性を発見したから、はっきりさせておう。

「ジユノ様は俺達に嘘を吐きましたね」

「半分は真実ですよ」

「半分は真実というのは真っ赤な嘘ということです。ジユノ様、ホントはアーサーはエルメス様の魂を売ったりはしていませんね？」

「なぜそう思われたんです？」

「あなたがここにいるからですよ。願いも叶えていない、魂も得ていない状態でアーサーが消滅して、ジユノ様の千里眼を持ってしてもアーサーを見つけることはできなかつた。偶然俺達に遭遇したジユノ様は、アーサーに逃げられないように保険としてエルメス様を人質にとつた。俺達をすぐに連れ戻すことができたのにそうしなかつたのと、頻繁にこの屋敷に足を運んでいたのは、自分が空間転移している間に、帰ってきて状況を察したアーサーに再度逃亡されることを懸念したから。そうでしょう？」

恐らくアーサーがエルメスの魂を売つたと言つのは、真っ赤な嘘だ。でも、それ以外は確証も何もない完全な憶測。できることならジユノ様がそれを肯定して、エルメスが安心してくれさえすればいい。真実はアーサーから聞き出せば済むことだ。

俺の話聞いたジユノ様は嬉しそうに微笑む。

「うふ。だから私、あなたの魂がほしいんです」

「お褒めに預かり光栄です。それは俺の推論が正解だと解釈しても？」

「ええ、さすが異常者はなかなかやりますね」

「ありがとうございます」

やっぱり、あのアーサーがエルメスを陥れるはずがないんだ。これで満点とはいかないだろうが、恐らく80点くらいだろう。

つかやっぱり俺の魂が狙われてるのは別件だったか。チクシヨウ。

とにかくアーサーがエルメスの魂を売ったのが嘘だというのは間違いない。相手は悪魔だ。俺達に最初から真実を話す保証なんてどこにもない。

この話を聞いていたエルメスをはじめとしたみんなは驚いた顔をしていたが、次第に安堵の色が浮かんでくる。ここでランスが口を挟んできた。

「ねえ、でもカイは？　カイも死ななくていいんだろ？」

どこか心配そうなランスに嬉しいような悲しいような。思わず笑いそうになった。

「いや、俺はジュノ様に魂を捧げる」

「なんで！　カイが悪魔と契約しなきゃ済むことだろ！」

「そうしてでも、叶えたい願いがあるんだよ」

「なんでだよ！ カイは自分一人でもなんでもできるだろ！ 自分の願いなら自分で叶えろよ！」

「これは、俺にはどれほど願っても叶える事は出来ねえからな。俺にだって、出来ねえことくらいあんだよ」

「ウソだよ。カイは今までずっと自分で何でもやって来ただろ。隊長しながらジュリオ様の執事もして、僕やガロード様も育てて、ずっとエルメス様の事も支えて。僕ずっとカイみたいになりたいって思ってたのに。カイみたいに頭もよくて強くて、一人で何でもできる男になりたいと思ってたのに、なんでそんな事言うんだよ……なんでカイが死ななきゃいけないんだよ……ううっ……」

そう言ったランスは悔しそうに涙を零し始める。ランスの奴そんな風に思ってたのか。嬉しいな。そう思ってランスの頭を撫でると、大人しく撫でられている。

「何もすぐにつてわけじゃねえ。そうやすやすと叶う願いじゃねえし、お前が一人前のシュヴァリエになるのを見届けるまでは死なねえよ。ガキの成長見届けんのは、親の責任だからな」

「うるさい、いつまでもガキ扱いするな」

「俺から見たらお前はずっとガキだ」

「いつか絶対カイを超えてやるからな、クソ親父」

「そうだな。それが親孝行ってもんだぜ。せいぜい頑張れ、クソガキ」

本物の騎士が悪にすら手を染めると言うのなら、俺は悪魔にだって魂を売ってやる。願いは、絶対に叶えてもらう。でも、そうやす

やすとは死なねえぜ、クソ悪魔。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837w/>

契約の代価2 インモラリティコントロール -

2011年11月2日02時10分発行